



ベルビュー荘のべらぼうに  
愉快的な奴ら 2

---

---

ルシア

---



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

親友の紺野がタリバンに拘束されたと聞いた時、不思議と俺は驚かなかった。

いや、正しくはあまりに驚いてショックを受けるあまり——そのことがとても現実起きた出来事であるとは思えず、脳内で一瞬思考が停止した、といったほうが正しいかもしれない。

とにかく俺は、そのことをベルビュー荘で夕飯を食べている時にTVのニュースで知ったのだ。

真っ黒く日焼けして、眼鏡をかけた面長の親友の顔をTVで見るなり、俺はミドリさんと少しの間ただ呆然としていたと思う。

久臣さんは印刷所の夜勤、ミズキは自室で漫画描きに熱中、サクラとほたるはどっちかの部屋で例の脚本について話し合っている真っ最中……といった頃の話だ。

俺はベルビュー荘の居間にある電話から、紺野が所属しているNGO団体に電話してみることにしたが、生憎話中で、何度かけ直しても全然繋がらない。

「無理ないかもしれないわね。だって、これだけマスコミが騒いでるんですもの……コンちゃんがうちにいた頃、実家の電話番号を書いたメモがあったと思うけど、そちらに電話してみる？」

そう言ってミドリさんは、電話の横の棚から過去にベルビュー荘に住んでいた住人たちの連絡名簿を取りだしている。でも俺は、名簿を捲ろうとする彼女の手をとって、それをやめさせた。

「いや、今から直接ワールドボランティアセンターの事務局まで行ってみるよ。俺も一度だけとはいえ、ネパールへ行ったことがあるし……代表の沖永さんとか、事務スタッフの人とも、一応知りあいだから」

心配そうな顔のミドリさんに、「何かわかったらすぐ知らせる」と約束し、彼女から携帯電話を借りた。

それと、言うまでもないこととは思ったものの、一応紺野のことは俺とミドリさんと久臣さん

の三人だけの秘密ということにしておいたほうがいいと思い、念のため、俺はミドリさんにそうっておいた。

今のベルビュー荘の住人の中で、紺野道弘のことを直接知っているのは、俺とミドリさんと久臣さんの三人だけである。

彼は十七歳の頃、いわゆる暴走族のヘッドというのをやっており、校内でもかなり浮いたタイプの生徒だった。それというのも、俺が通っていたのは有名私立の進学校で――そもそも「ヤンキー」などと呼ばれる人間は及びでない環境だったからだ。

紺野の両親というのはかなりおかしい人たちで、どんなに手を尽くしても一人息子を更生させることが出来ないとわかるなり、一千万もするバイクを買い与え、「もうこれでおまえが死のうがどうしようが自分たちには一切関係ない」と言い放ったという。

「おまえの親、狂ってるんじゃないか？」

彼とはまた別の意味でクラスに馴染んでなかった俺は、昼休みなどに自然、紺野と話すことが多くなり、そんなふうにして俺たちは仲良くなった。

「狂ってるも何も、おまえならどう思う？もし自分の血の繋がった実の親から――本当の意味で愛情をもらえなかったら、好きなバイクでも買ってもらう以外、あいつらに一体何をしてもらってんだよ？」

「それにしても、あのハーレーが一千万か。俺だったら、バイクじゃなくキャッシュでもらって、それで事業でもはじめるけどな」

「こんなクソいまましい学校やめてか？」

「ああ、そうだな。頭に百回くらいクソのつくこんな学校、即やめてやるよ。もし俺の手元に一千万あったとしたらな」

「ふう～ん。俺はまだわかんね。親父みたいに事業家になんてなりたくないし。とにかく今俺が一番燃えてるのはバイクだ。レースで負けたくない奴がいるんだよ」

紺野は高速で、他の暴走族のグループとスピードを競ってレースをしていたらしい。

といっても、俺が奴とつきあいがあったのは校内だけだったので、あいつが外でどのくらい暴れまわっていたかというのは――怪我の数くらいでしか推し測ることはできなかった。

とにかく、当時の俺に紺野のことでわかっていたのは、次のことだけだったかもしれない。

あいつは早く死にたがっていて、実際近いうちにそうなるかもしれないにせよ、それは本人以外の誰も決して止めることはできないだろうということだ。

そしてあいつはとうとうバイクの事故で死にかかり、九死に一生を得たところで、不思議な縁から＜ベルビュー荘＞へ転がりこむことになったと俺は聞いている。

紺野が高校を中退した頃、俺は芸大へ入るためにかなり必死で勉強していた。

俺が入学を希望していたのは、一浪・二浪は当たり前といわれる大学だったが、何故か俺はその大学へ現役合格することにやたら拘っていた。

今にして思えば、何故そんなに拘っていたのか――思春期の七不思議としか思えないにしても、次のことだけははっきり言えたかもしれない。

俺の母親は中・高一貫の私立校を俺が受験する時、神社でお百度参りをしたという。

もちろん、俺は彼女にそんなことをしてくれと頼んだ覚えはまるでなく、もっと言うなら「生

んでくれ」と頼んだ覚えもなかった。

そしておふくろは俺が芸大を受験すると知るなり、今度は彼女の信仰する“スピリチュアルな存在”とやらに毎日祈りを捧げるようになった……ここまで聞いて、おわかりいただけるだろうか？

紺野の両親が愛情のかわりにコカインを買う金をくれる狂った親だったように――俺のおふくろもまた別の意味でおかしな母親だった。

つまり、俺はおふくろがヨガマットの上でクリスタル製の弁天様に祈ったから芸大に現役合格したのではなく、必死に努力をし、勉学に励んだことで己の目標を達成したということだ。

まあ、このことについてはまたあとで触れるにしても、俺は自転車でワールドボランティアセンターの事務局へ向かう途中、紺野の奴とその昔話した色々なことを思いだしていた。

バイクの事故で大怪我をし、「人間そう簡単に死ねるものではない」と悟った紺野は、死ねない以上は生きるしかないと思い定めるものの、かといって今度は何をどうしていいかわからなかったという。

そんな時、ベルビュー荘でミドリさんの温かい人柄に触れ、彼女が一人たったの二万ぼっちの下宿料で何故割に合わない仕事をずっと続けていられるのか――不思議になってそのことをミドリさんに聞いてみたらしい。

家賃・光熱費・食費、その他もろもろ差し引いたら、手元にお金なんてほとんど残らないんじゃないですか、と。

すると、ミドリさんはこう答えたという。自分の息子が死んで保険金が一千万手に入ったけれど、お金なんていくら手元にあってももう意味はない……それよりも、安い下宿料で何がしかの理由で生活に困っている人を助けるほうが、息子も喜ぶだろうし、そのことが今の自分にとっては何より一番の生き甲斐なのだ、と。

紺野はミドリさんのその言葉を聞いて以来、死ぬ気で変わることを決めたという。

まずはホームレスの人を支援する活動に携わり、やがてワールドボランティアセンターの代表者である、沖永さんと知りあいになり――カンボジアやシエラレオネ、パレスチナといった国や地域でボランティアスタッフとして働くようになった。

ちなみに、俺がある女性に骨抜きにされてすっかり腑抜けになっていた頃、俺にベルビュー荘の2号室を譲ってくれ、さらにネパールでの井戸堀りへ連れだしたというのが、他ならぬこの紺野道弘だった。

「おまえさ、こんな生活ばっか送ってたら、いつか絶対死ぬんじゃないか？」

パレスチナにいた時、泊まらせてもらった部屋に銃弾が撃ちこまれたという話を聞いて――俺はそう言ったことがある。あいつが今度はアフガニスタンへ行くと聞いた時も、「今度こそ死ぬなよ」と電話ごしに伝えた。

もちろん、「今度こそ死ぬなよ」なんて、変な日本語だ。

でも俺はそんなふうには、あいつに言ってやる事が出来なかった。

まさか、イスラム武装組織に身柄を拘束されて死ぬだなんていう最後は、紺野の脳裏にもまるでなかったことだろう……そもそもあいつがボランティアスタッフとして働いている場所は、か

なり辺鄙なところだと聞いている。

タリバンが支配権を握っている危険区域とも離れているし、それなのに何故そんなことになったのか、俺はまだTVのニュースにさえ流れていない情報を、沖永さんから直接聞きたいと思っていたけれど――事務所に何人ものスタッフが詰めかけ、電話の対応に追われている姿を見てしまっちは、もう言葉もなかった。

外ではマスコミが建物に張りつくように固まっているし、俺がその場において「何か手伝える」ということがあるわけでもなく……いてもただ邪魔なだけだと悟った俺が、ベルビュー荘へ戻ろうと思った時のことだった。

「ミズシマくん。今、向こうでイスラム教の聖職者が何人か、タリバンと交渉してくれてるらしいんだ。たぶん、道弘の奴は大丈夫だよ。どうも車に乗っていてホールドアップされた時に、ジャーナリストと間違われたらしい……でも、孤児院の運営スタッフだと証明されれば、向こうも無事釈放してくれると思う」

外務省と連絡を取り合っていたらしい、沖永さんが一旦受話器を置いた時にそう言った。

だが、一度置いた電話がまたすぐに鳴り、彼はすぐにそれを受けた……話の内容から察するに、今度はどこかの新聞記者が相手だったらしい。

この時、ほんの少しではあるが、俺がほっとしてベルビュー荘へ戻り、ミドリさんに沖永さんの言葉を話したのが、大体夜の十一時二十分頃のことだったろうか。

「そうよね。日本から来た孤児院のボランティアスタッフだっていうことさえわかれば――きっと大丈夫よね」

ミドリさんはそう言いながらも、嫌な予感がする、といったような顔の表情をしていた。

そしてある意味、その彼女の勘は当たったとっていい。

何故ならその後すぐに紺野は身柄を解放されたというわけではなく、日本政府や外務省が随分ややこしい駆け引き（結局は金だったらしいが）をしたあとで、ようやくのことでアフガニスタンから帰国していたからだ。

実際、彼はTVのニュース画像などで見るよりも遥かにやつれており、随分ひどい目に遭わされたといったような印象だった。

それでも病院のベッドの上で、いつもどおり減らず口を叩くことだけは忘れなかったが。

「やれやれ。なんてことだよ。一時的に騒がれて、すぐに消えるニュース報道のために、ケツの穴までじろじろ見られたような気分させられるとはな」

「そう言うなよ。間接的にしかおまえを知らない連中はともかくとして――紺野のことを本当に知ってる奴らは全員、本当におまえを心配してたんだからさ」

そのあとあいつは、俺が随分器用にリンゴの皮を剥くので、「女みたいでキモいぞ」と言うことから、事の顛末を俺に話してくれた。

車を走行中に、AK47ライフルを持った連中に取り囲まれたこと、車から下りて膝をつけと言われ素直にそうしたが、後頭部を銃床で殴られた上、手足を拘束されてどこかへ運ばれたこと……。

「目隠しをされてて自分がどこへ向かってるのか、皆目見当もつかなかったけど、一応意識はあったよ。まあ、これと似たパターンを辿って最後に死んだ人間がいるってことも知ってたし、そ

んなことも覚悟の上ではあったけどさ。やっぱ言語の壁ってのはキツイな。俺はあの連中が何を喋っているのかさっぱりわからず、拘束されて二週間くらいが過ぎた時――外へ出るとジェスチャーされて、「死ぬかもしれない」って覚悟した。そしてその瞬間のことを奴らはビデオテープに収めるだろうが、当然俺はその様子を見ることは出来ないんだと思った……その天幕へ連れてこられた時と同様、また目隠しをされて車に乗せられたんだが、俺はそれを単なる場所移動とは思わなかった。「自分はもう死ぬんだ」ってそう思ったら、目隠しごしに涙がでてきて止まらなくなったんだ。そしてあろうことか――下のズボンも涙で濡らしちまった。俺が車からなかなか下りようとしなくて、あいつらは笑ってたよ……この時ばかりは言葉がわからなくても、あいつらが何をしゃべってるのかはわかった。そしてたぶん、「勘違いするなよ、坊や」とか、何かそんなことを言ったんだと思う。以来、このザマさ」

紺野は俺が皮を剥いて四分割したリンゴを皿の上に置くと、オーバーテーブルの上からコップを手にとった。

手指が震え、やがてガラス製のコップを握っていらなくなり――あわやのところで、紺野はそれをテーブルに戻している。

「俺はさ、外務省のお偉いさんにも、拘束されてから何があったか聞かれたけど、このことは絶対言わなかったぜ。いや、医者というPTSDとやらで、コップもまともに握れなくなったってことじゃない。小便漏らしちまったって話のほう。タリバンの連中も、金のために日本の小僧の小さな名誉を守って、このことは誰にも言わずにおいてくれるだろうが――俺はこの話、おまえにだからするんだぜ、レン」

「ああ」と俺は頷いた。それ以上に言葉はいらなかった。

何故とってこれは、改造したバイクで高速を百キロ以上のスピードで走れる紺野が、死の絶望を前にして小便を漏らしたとか、そういう話ではなかったからだ。

「トラウマって奴はさ、前とまったく同じ状況を目の前にして、その状況に打ち克つことでしか克服されないっていうだろ？だから俺はそういう意味で――またもう一度アフガンへ戻りたいと思ってる。だけど、精神的には強い意志でそう思っているけど、体のほうがついて来れなくなってるらしいんだ。沖永さんもさ、マスコミがまだもう暫く騒ぐだろうから、そういうのが収まるまでは日本で大人しく療養してろっていう。ちなみに医者も同意見。それと、次に行く場所はアフガンじゃなくて、別のところにしろってさ。それから状況を見てアフガンへは二～三年後に戻ったほうがいいんじゃないかって」

そう言って、紺野の奴はがつつり歯型をつけながら、リンゴをしゃりしゃり齧っていた。

その時の紺野の様子から、彼がどのくらい悔しい思いをしているかがわかって――俺は文字どおり、言葉もなかった。

いや、言葉もなかったというよりは、胸を打たれたといったほうがいいのかもかもしれない。

「おまえは本当に、純粋で不器用な奴だよな、昔から」というのでは、俺の中では言葉として足りなかった。

だからただ黙って、もう一個青リンゴを剥き、それを持ってきたおろし金で下ろしてやった。

「ジジイみたいに手が震えるみたいだから、こっちのほうが食べやすくいいだろ」

俺がそう皮肉を言うと、あいつは個室の外に洩れるくらいの大声で笑っていた。

「それでこそ、まさに心の友ってやつだよ、本当におまえは。ジャイアン言うところの、偽りにまみれた友情ってやつだな」

「そうだな。俺はおまえがカラオケでミスチルしか歌わなくても——随分忍耐強く聞いてやるからな。いまだに俺はおまえの歌う歌詞の良さがさっぱりわかんないけどさ」

「レンってさ、脳内の言語体系がちょっとおかしいんじゃない？大体、カラオケで英語のナツメロしか歌えない男ってどうよ？70年代のディスコヒットソングとかさー、女にモテたいから歌ってると思えないもんな。『ボクって実はこんなに英語ができちゃうんです☆』的な？」

「しょうがないだろ。うちは育った環境がそれだったんだから……特に兄貴がさ、ビートルズが大好きっていう典型でさ。俺、いまだにビートルズの歌がトラウマなんだぜ？どんな名曲もガキの時から百万回も聞かされてりゃ飽きるって」

「ああ、♪イエスタデー、ふんふんふんふんふんふんファーラウエ～ってやつな」

「all my troubles seemed so far away……だろ？っていうかおまえ、その英語力でよく命知らずにも海外へ行こうっていう気になるよな。ペルシア語が出来るかどうかっていう以前の問題としてさ」

「うわっ！嫌味だね、この男は～。正確な発音で言い返してきやがりましたよ？つーかさ、そんなことよりもっと人間の世界では大事なことがあるの。たとえば、ボディランゲージとかさ」

紺野はそう言って茶化したけど、床頭台の上にはNHKの英語テキストやその下に隠すようにしてペルシア語のかなり古ぼけた語学の本があるのを、俺はもちろん見逃していたわけではない。

実際、紺野の奴は呪わしい日本の英語教育のためか、彼が海外へ飛びだしていった頃というのは、今以上に英語が話せず通訳に頼りっぱなしだったという。もちろん、ボランティアとして海外へ派遣されるためには、ある一定の研修を受ける必要があるのだが、紺野の場合は言語を越えて周囲の人たちに好かれるという状況がいつもあったようだ。

本人はそれを「コンノ☆マジック」とか「ミチヒロ☆マジック」と呼んでいるが、そんなことはまあどうでもいいとして——俺は奴を見舞った二ヶ月後、紺野のかわりにアフガニスタンへ行くことになった。

別に、俺は誰かにそれを強制されたというわけではない。自分としても何か強い義憤に燃えて砂漠の危険な国へ乗りこんでいこうとか、そういう強い意志や気概といったものがあったわけでもなく——俺はよくあるパターン、「アラビアのロレンス」に憧れて砂漠の国へ行ったら、蠍や蛇に噛まれる以上に痛い目にあったというような、そんな自分を想像していた。

その頃、ベルビュー荘では、川上サクラが中心となって『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的な奴ら』という演劇の脚本が書き進められており、俺はそろそろ自分もここから立ち去る潮時がやって来たのかもしれないと思うようになっていた。

俺はミズキのことは、かなり気長に——彼が自分の部屋から自分の意志で出てくるのを待っていたとは思ふ。

でも、一年以上もの間、少なくとも彼は俺には心を開いたことがなかった。あとから聞いた話によると、俺の描いている絵が専門的な教育を受けた人間のもので、その才能の違いが恥かしくて「漫画を描いている」とは言えなかったとミズキは言っていたけれど……なんにしても、彼は

誰かが何かをしたからというよりは、＜時が来たから＞自然と自分から繭のようなもの、あるいは卵の殻を破って外へ出てきたのだと、俺はそんなふうに思っていた。

そしてそうってみて初めて、俺は川上サクラといういけ好かない女の存在を認めないわけにはいかなかったというわけだ。

俺自身があの女に出会った時の最初の印象――それは自分の過去の記憶とも結びついた、＜生理的嫌悪＞に近いものだったとあっていい。

俺は芸大なんていうものを出て、絵なんぞを描いてしまっているがゆえに……どうやら知らない間に、随分自分の直感とか第一印象といったものを絶対視してしまっていたのかもしれない。

そして俺の人生において、第一印象が最悪だった女（あるいは男）をその後見直したとか、自分の考えのほうか実は間違っていたと反省したなんていうことは、生まれてこの方一度としてなかったのだ。

こんなふうを書くからといって、俺が普段から偏見に満ちた皮肉な目で物事や人を眺めているとは思わないでほしい。

むしろこれは、俺にとっては経験からずっとそう学んできたことだったとあっていい。

いくら「人は見た目が九割」という言葉があるからといって――俺は最初に出会った人間のことを、そう簡単に断罪したり、決めつけによって相手を不当に取り扱ったりしたことはない。

うまくいえないが、とにかくただ「わかる」のだ。そして次にこう思う……「いや、自分はわかったような気がするだけで、本当はわかってなどいないのではないか？」と。けれど結局、何かの拍子にその後必ず当たってしまうのだ。自分が最初に感じた第一印象やそのイメージに纏わることが、「ああ、やっぱりそうだったか」という形で。

そんなわけで、俺は特にこの川上サクラという女に関しては――自分の直感が正しいものと信じ続けていたし、そのことに拘り続けてもいたのだ。

（あんな女、そのうち自分から尻尾をだして、自業自得の破目に陥るだろう）とか、そんなふうに。

だが、このことも言葉でうまく説明出来ないのだが、どうもベルビュー荘に住んでいると思しき＜目に見えない存在＞は、俺のそんな高慢な心を見抜いたかのように、むしろ彼女のことを最初から恵み深く受け容れていたのだと思う。

こうしてベルビュー荘自身に自分の間違いを正された俺は、アフガニスタンへ発つ前にサクラにあやまることにしたというわけだ。

もっとも、あいつにはアフガンではなく、ネパールへ井戸を掘りにいくということにしておいたけれど……そうでなければ、「あんた頭おかしいんじゃないの!？」とかなんとか、グダグダ一時間は同じことを繰り返しそうな気がしたからだ。

でも、この時にサクラから受けたある印象のことで――俺はかなりのところ、この女のことを見直したとあっていいかもしれない。何故とあって、普通なら「あんたって最低な男なんじゃないの?」と軽蔑されても仕方ない場面で、あいつは泣いていたからだ。

俺は女が、というか女性が、自分のため以外のことで泣くという場면을、ほとんど見たことがない。



俺のおふくろは息子の成績が下がると、「俺のため」ではなく自分のためにさめざめと泣いたし、俺が絵のモデルにした女性たちも、絵が完成して彼女に対する興味が薄れた時、「こんなに尽くしたのに可哀想な自分」という感じで、時々涙を見せることがあった。

自己中心的で身勝手なのを承知の上で言わせてもらおうと、俺はその「感じ」が何故かとても嫌だった。

本当は自分のためなのに、「息子のため」という名目で泣くおふくろのことを連想してしまうからかどうなのか——とにかく俺は女の涙を見ても同情したいと思えない。「自分が悪いのはわかっているが、あやまっただろ」とか、そういう冷淡で突き放した感情しか持つことが出来ないのだ。

いってみれば、七津美さんとのことは、そういう俺自身の間違った生き方や考え方、感じ方などがこれ以上もないくらい極みまで高まったところで——一気に崩れ落ちてきたという、そういう出来事でもあったのかもしれない。

生まれて初めて手痛い失恋というものを経験した俺は、それまで絵のモデルになってくれた女性たちに対して、初めて本当に「すまない」という気持ちになったし、もう二度と誰かに対して同じような傷つけ方だけはすまいと、心に決めていた。

「それで、その人……ナツミさんと別れてからは、どうなの？」

サクラは足を組み、横向きになって煙草を吸っていたから、俺は彼女の頬に何か透明なものがあるのに気づいても、それがなんのためのものなのかが、最初よくわからなかった。

煙草の煙が目沁みたとか、そういうことではないとわかっていたが、こいつは他人の失恋話を聞いて泣くようなタイプの女ではないし、むしろ自分の好奇心が満たされたことで、嬉々として喜ぶのではないかとすら思っていた。

もちろん一応、表面上はその＜喜び＞を隠す礼儀くらいは持っていたかもしれないにせよ。

「どうっていうのは？」

手の甲で涙をぬぐうサクラのことを見て——俺の中で、間違いなくこの女に対して持っていた印象や偏見といったものは、完全に消えてなくなったとっていい。

というより、何かのフィルターが突如としてなくなり、相手の本当の姿が見えてくるといことがあがあるけれど、俺にとってはこの時がその瞬間だったのだと思う。

「だから、彼女と別れてからは誰か真剣におつきあいした人はいるのかってことっ！」

そう聞かれた時、俺は「七津美さんと別れてからは、暫く女はこりごりという感じだった」というようなことを話した記憶があるが——正確にはそれは嘘だ。彼女と別れてから、俺はまさしく＜墮ちるところまで墮ちた＞といったような感じの男に成り果てていたとっていい。

まるで悲劇のヒロインを気どる鬱陶しい女の男バージョンといったところで、「何故自分は仮面ライダーではなく、一ショッカーにすぎないのか」と、誰が聞いても相手にするのさえお断りといったことについて、いつまでもぐじぐじとナメクジのように悩み続けていた。

正確には、そんな＜可哀想なオレ＞を救ってくれたのが紺野の奴なのだ。

だから俺は、奇妙な話に聞こえるかもしれないけれど、アフガンには「あいつの仇をとる」ために行こうと思っていた。

あいつが母国へ戻ってからの、日本国民の反応及び、マスコミを含めた世論の動向といったも

のは、紺野に対して冷淡な感じのするものがあまりに多かったからだ。もちろん、「なんという素晴らしい立派な青年か」という意見もあるにはあったが、その反面彼が暴走族の元ヘッドだったことを暴く記事や、昔の友人が音声を変えて――「手のつけられない怖い奴でしたよ。逆らったらナイフで刺されるんじゃないかっていうくらい」とか、そんなことを言う場面はニュースの報道で何度も繰り返し流されていたのだ。

そして本当のあいつのことを知らない＜世間一般＞と呼ばれる人たちは、誤ったイメージが脳内にインプットされたためだろうか、「そんなことに国民の血税を無駄に使うな」と言うことさえしたのだ。

俺はその時のことを思うと、今でも腸が煮えくり返る思いがする。

だから、日本から見たら地球の裏側としか思えない砂漠に囲まれた貧しい国へ行って――いつか言ってやるつもりだったのだ。そんな過酷な環境で、紺野がどれだけ人から慕われ、必要とされる人間だったかということ。

でも、サクラが泣いているのを見た時……俺は初めてアフガンへ行くより、このままベルビュー一荘にいて彼女たちが夢中になっている演劇の舞台を見守りたいと思ってしまった。舞台の初演は十二月二十三日だ。俺はその時までに戻ってこれれば戻ってくると、一応サクラにそう言いはしたものの、現実には難しいだろうとその時点ですでにわかっていた。

何故とって、クリスマス時期というのは、誰だって自分の国へ帰って羽を伸ばして休みたいものだ……だが、実際にはそういう休暇願いをボランティアスタッフがクリスマスや正月といった時期に合わせてだすことはあまりない。

それを来て間もない俺がやってしまうというのは、流石に気の引けることだったといえるだろう。

にも関わらず、何故俺が十二月二十三日に帰国することが出来たかという――それは川上サクラが、俺が担当している＜アフガン孤児院運営ブログ＞に、丁寧というよりは懇懇な感じのする文章を何度か書き込んできたそのせいである。

一度、この演劇というのは、チャリティが目的で開催されるものなのかどうかという問い合わせが、日本の事務局のほうにあったのだそうだ。そこで、沖永さんは俺が更新を担当しているブログをチェックし、「とにかく一度帰ってこい」と別のスタッフをひとり手配してくれたのである。

もちろん、このことでサクラに何か責任があるというわけではないけれど……それでもあいつが俺に会うなり、「帰ってきて当たり前」といった態度でいるのには、多少驚いたかもしれない。

こちとら長いフライト時間に加えて（いくらその間寝ていたとはいえ）、気候の変化って奴にも耐えねばならなかったというのに――あいつは口にこそ出さないにせよ、「来るなら来るってなんでもっと早くにそう言わないのよ！」と心の中で思っているのが見え見えの態度だった。

といっても、そこはお互いに、お互いの顔を見てしまえばもうどうでもいい了解事項だったともいえる。

俺はアフガニスタンで随分この女のことを考えていた。

(恋?いや、まさか、それはありえねーだろ)といったように、日中の仕事を終えて子供たちが寝静まった頃、外の星を見上げては、サクラのことを思いだしたりしていたのだ。

もちろん、最初は「生理的嫌悪」すら感じた相手のことを、その後恋愛の対象として見るようになった.....というような経験は、俺のそれまでの人生の中で一度としてなかった。

それなのに、何故なのだろう——俺は彼女が泣いていた横顔のことを初めて美しいと思ったし、その時の顔の輪郭が、いつまでも心に残って消えてなくならないのだ。

そして、(いやいや、あんな女のことは忘れよう)と俺が思った時、あいつから孤児院のブログに書き込みがあったというわけだ。

正直俺はその文面を見て、参ったなと思う反面、とても嬉しくもあった。

SAKURAという名前の書き込みを見た時、俺はてっきりあいつが、ミドリさんにでも本当の行き先や目的を聞いたのだろうとばかり思っていたが、なんとあいつはわざわざNGOの日本事務局にまで問い合わせをしたらしい。

>>SAKURA

突然の書き込みを失礼致します。

こちらの孤児院のブログに、水嶋さんの顔写真と名前が載っているのを見て、大変驚きました。

その前に日本の事務局のほうへ問い合わせで、あなた様がアフガニスタンへ行っていると窺ってはおりましたが、あまり本当のことと思われませんでしたので.....ところで、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』は舞台の準備が着々と進んでおります。

初演は十二月二十三日ですが、一時帰国できそうでしょうか？

劇団員一同、水嶋さんの御帰国を非常に楽しみにしております。

また、お体には十分お気をつけになってお働きくださいますよう、心からお祈り申し上げます。

かしこ

元の本人の人となりを知っているだけに——俺はまったくあの女らしくない文面に、思わず吹きださずにはいられなかった。

同じ孤児院のスタッフが、暗い中でパソコンと向きあったまま笑い転げる俺を見て、「どうした?」と聞いてきたけれど「なんでもない」と言って、うまく誤魔化したくらいだ。

正直って、日中は四十人いる子供の世話の他に、新しく建物を造るとか、教師の育成事業であるとか、これからの雇用の創出をどうするかといったことを話しあったり、ワークショップに参加しているうちに、あっという間に一日が過ぎる。

今四十人いる子供たちは、いずれまた増える予定なので、建物を新設しなければならないという計画のことや、子供たちを教える教師を育成するプログラム、また子供が大きくなったら働く場所をどう確保するのかといったことを、地元の人たちを交えて話し合ったり、他にも色々な面

で互いに協力しあったりという、俺がしているのはそんな仕事だった。

そしてあまりにも当然のことながら——こうした事柄に常についてまわるのは、〈金〉の問題だといえよう。

そういう意味でブログの運営というのは、非常に重要だったといえるかもしれない。俺が使用する写真や書いた文章によって、もしかしたら寄付してもいいという人が増えるかもしれないし、あるいは減る可能性だってあるからだ。

日々の忙しさにかまけすぎるあまり、ブログの更新のほうはつい怠りがちになってしまうのだが、俺はサクラの書き込みを見て、かなりのところ元気が出たといっている。

何故といって、紺野の奴のことは別にしても——アフガン行きについて話した他の友人の反応というのは、少し距離のあるものだったからだ。「おまえ、スゲエな」とか「ガンバレよ」とか、彼らなりに心から励ましてくれているということは、俺にもよくわかっている。

けれど、孤児院のブログにまでわざわざ書き込みをしたような奴は、サクラしかいなかった。

俺は立場上、一応簡潔で素っ気ない文章を返信しておいたが、それでいて心の中ではあいつがもしまた書き込みしてくれたらいいなと期待してもいたのだ。

よくわからないが、そんなふうにして俺はサクラのことを考える時間が増えた。

そしてもう一度あいつに会った時——自分の今感じている気持ちが恋なのか、それとも恋に近い友情のようなものなのかなんなのかがはっきりするだろうと、そう思っていたのである。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイトFirst Moon様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「レンって、ナツミさんのこと以外で、何か他にトラウマとかってないの？」

久臣さん所蔵の日本酒コレクションのひとつ——【死神】の蓋を開け、それを氷で割って飲みながら、サクラが何かの拍子にそう聞いた。

正直いって、その日の夜から明け方まであいつと話したことのうち、サクラが一体どこまでのことを覚えていて、俺もまた一体どこまでのことを話したのかというのは、途中から記憶が定かでない。

翌朝、気がついたら俺はソファの上に寝ており、あいつは廊下で行き倒れたようにいびきをかいているのをミドリさんやほたる、そして久臣さんや小山内氏に見つけられていた。

そして、目が覚めてから俺が真っ先に思ったことというのは（まさかとは思いますが、あいつに何もしてないよな、俺？）ということだったかもしれない。

なんにしても、とにかくここで記憶を遡らせて、覚えているだけのことを一度思いだしてみようと思う。

「トラウマか。そういえば俺、おまえにおふくろの話ってしたことあったっけ？」

冷蔵庫にあったカニかまやきゅうりやちくわなどをマヨネーズで和えながら、俺は酒のつまみを作っていた。

テーブルの前であいつと隣あって座り、適当に酒を飲みながら。

「ああ、あれでしょ？おかーさんが初出産の時とっても大変だったから、もう二度と子供いらなと思って禁欲……じゃないや、ようするに避妊してたけど、ついうっかり出来たのがあんたなんだっけ？もしかしてそのこと？」

「まあ、トラウマっていうほど、大袈裟なことでもないんだけどさ」

俺は冷蔵庫から適当にとってきた食材をテーブルに並べていたが、今度はトマトの中身をくり

抜いて、そこにシーチキンを詰めることにする。

ちなみに、すでに酔っている人間に「おまえは一体何をしているのか？」などという愚問を投げかけてはいけない。第一、トマト×シーチキンというくらいなら、まだまだ理性が残っていた証拠といえるだろうから。

「そのことを聞いたのが俺、まだわりと小さい頃だったんだ。母親はもちろんただの軽い冗談みたいな感じで言ってたんだけど——あ、ちなみに俺に直接言ったってわけじゃなくて、誰か友達と電話で話してたんだよな。いわゆるママ友っていうのか？子育ての悩みについて語りあって、「もしついうっかりあの時あの子が出来なかったら、わたしも今こんな苦労してないんだけど」みたいにポロツと言っててさ。俺は母親のことを喜ばせようと思って、有名な私立中学を受験するのに結構必死で勉強してて……それからだな。俺があの人のことを軽蔑するようになったのは」

「軽蔑？」

それは流石にちょっと大袈裟なんじゃないの？といったようなニュアンスを感じて、酔っていたせいもあり、俺はこの時かなりムキになった。

「サクラはさ、俺のおふくろを知らないからそんなふうに見えるんだよ」

トングで氷をグラスにぶちこむと、俺はその上に【死神】をドブドブと注いだ。

「あの女は狂ってるんだ。朝起きたら、70年代のディスコヒットか80年代のそいつがかかって——アバとかドナ・サマーの曲に合わせてまずはエアロビだろ。それから瞑想のために部屋にこもるんだよ……家にはお手伝いさんがいたから、ごはんとかは彼女たちが作ってくれる。だから俺はおふくろの味ってのを知らない。何故ならあの女が料理なんてしようもんなら、それは天変地異の前触れみたいなもんだからな」

「ふう～ん。なかなか面白いお母さんじゃないの？」

料理をしないからと言って、それが悪い母親とは限らない——今度はそういうニュアンスをサクラの言葉から感じ、俺はカニかまときゅうりとちくわの和え物の真ん中に、グサリと箸を突き立てた。

そして、それを食べる。

「いいか、よく聞け。俺のおふくろは電話で友人とこう話してた……「もうひとり子供を産むなんて正直面倒だし、墮ろそうかとも思ったの。でも、その時ある種の予言が閃いたのよ。安物のコンドームがうっかり破けて妊娠したってことは、これはきっと宇宙の意志に違いないって！」どう思う？コンドームが破けたことが宇宙の意志だぜ？以来、おふくろの奴は——俺が何かの奇跡を起こす子供なんじゃないかと思って、ずっと待ってやがるんだ。こっちはおふくろの希望を叶えるために必死こいて勉強してるってだけなのに、テストでいい点とるたびに、俺には守護天使ガブリエルがついてるから100点とれたとかなんとか……もうウンザリなんだよ！！」

俺の語気が荒いものだったせいか、サクラは一瞬酔いから醒めたといったように、目をパチクリさせている。

そして俺はなんとはなし、決まりの悪い気持ちになって——日本酒を一気に飲みほすことになった。

「そうよね。親の期待って、大きすぎてもツライってことか。その点、あたしは逆かな。母親も

父親も姉のわたしには全っ然期待してなかったからね。川上家の期待の星は弟のアキラただひとりって感じ。で、この子がすごい出来る子なの。勉強のほうもよく出来たし、アイスホッケーの試合がテレビで流れる時は、親戚中の人間がうちに集まって応援すんの。あの子が高校受かった時は、お寿司とかケーキを頼んで親戚中が大騒ぎだったわ。あたしは三流と四流の真ん中くらいの高校にいったからね、いわばまあ3・5流の高校に受かった程度では、クリスマスの時みたいに喜んでもらえなかったってわけ」

「ああ、そうか」と、俺は不意にげっぷがでそうになるのを堪えて言った。「だから、なんだな。それであんたは早く家をでて、男の間を渡り歩き、ついには水商売をするようになったってわけだ」

「あら、まるで見てきたように簡単に言ってくれるのね」

今度はサクラのほうが、トマトのシーチキン詰めにグサリと箸を突き立てる番だった。

そして、それを食べる。

「一応いっておくと、あたしは弟のことが好きだったのよ。今だって、自慢の可愛い弟だって言ってもいいわ。だけどね、家には居づらかった。なんでかわからないし、言葉でもうまく説明できないけど、とにかくそうだったの。で、高校二年の時につきあってた先輩の家に転がりこむようになって……まあ、あたしが同棲みたいなことをするようになったのは、それからよ」

「先輩ってことは、高三だろ？家に他の家族はいなかったのか？」

俺は、何かの事情でその<彼>とやらが一人暮らしをしているのかと想像したが、そうではなかった。

「ええ、いたわよ、もちろん。彼……アツシっていうんだけど、彼は看護師やってるシングルマザーのお母さんとふたり暮らしだったの。で、そこにわたしが転がりこんだってというような形」

「ふう～ん。で、その将来の姑になるかもしれない女性は、寛容にもおまえの存在を許してたってことか？」

「うん、そう。ちょっとびっくりでしょ？それであたしのこと、すごく可愛い可愛いっていつも褒めてくれて……うちのアツシにはもったいないくらいだから、もし将来結婚するんなら、このまま家に住んでくれても構わないってそう言ってくれて」

「でも、現実にはあんた、結婚してないだろ？まさかとは思うが、バツイチなのか？」

ここでサクラの奴は俺のことを横から小突いた。

「まあね。確かにあたしは結婚したことは一度もないわよ。でも、しょうがないの——だってそれが、あたしの運命なんだもの。いつも、結婚しようかなって思うと、横から邪魔が入って……まあ、結局のところ自分が悪いっていうのは、わかってるつもりなんだけどね、これでも」

俺はこの時、なんとはなし、胸の底のほうに痛んだ。

俺が以前、絵のモデルになってくれた女の子を傷つけたのは、結局のところすべて自分が悪いのだとわかっていたから。

「で、この時もね——あたし、こう思ってたの。このお母さん……ルリ子さんっていうんだけど、彼女とならうまくやっていけそうだし、先輩もその時すでに就職先が決まってて、このまあい

わゆるヤンママっていうのになるのも悪くないかなあ～なんてね」

「それで、どうなった？第一、おまえの両親も少しおかしいんじゃないか？いくら弟にばっか期待してたとはいえ、娘がよそ様のお宅で世話になってるって状況、普通ならもっと憂えるものなんじゃないの？」

「あんたって時々、変な日本語使うのね」

そう言って、サクラの奴は微かに笑った。

その時に俺はふと（そういえばこいつ、俺より二歳年上だっけか）と思いだしたりしていた。「確かに、うちの両親はおおいに憂えていたみたいよ？弟の話によるとね。母さんはまず、ルリ子さんに電話してきて、「娘を家に帰してください」って言ったの。でもあたし、その時までに川上家が一見立派に見えながらもおかしい家だっていうことを彼女に話してたから——ルリ子さんはあたしのことを庇って、「本人か帰りたければ帰るんじゃないですか？だって、二本の立派な長い足があるんですから」ってそう言ったの」

サクラがくすくすと笑ったので、俺もつられてなんとなく笑った。

「でもね……そういう彼女の善意を何もかも台無しにしちゃったのよ、この馬鹿な女はね。アツシには実をいうと、レンの家と同じように年の離れたお兄さんがいて、六つだか七つだか忘れちゃったけど、とにかくそのくらい年の離れたフーテンの寅さんみたいなお兄さんがいたのよ」

こっから先は説明しなくてもわかるわね？というようにサクラが俺の顔を見たので——俺は意味がよくわからなくて、首をひねった。おそらく酔っていたためにいつもの勤が働かず、サクラは寅さんの妹だろう？といったようなことを考えていた。

もちろん、彼女が言いたかったのはそういうことではないのだが。

「このお兄さんね、普段は家にいないんだけど、ある日フラッと実家に帰ってくるんですって。正直、お母さんのルリ子さんも、彼がどうやって生計立ててるのかなんて、さっぱり知らないみたい。ただ、フラッと家に帰ってきて、またフラッと家を出ていくから——せめても帰ってきた時だけは、居心地よく過ごさせてあげようってそう思ってみたいで……わたしも一応、アツシからお兄さんのことは聞いてたのよ。そんなわけだから、ある日突然家に知らない男がいても、泥棒と間違えないでくれよなって。それで、あたしアツシにこう言ってやったわ。もしそれが本当に泥棒なのに、お兄さんと間違えたらどうするの？って……まあ、ここからの話は簡単よ。っていうか、世間には似たような話が掃いて捨てるほどたくさんあるに違いないわね。ある日、アツシのお兄さんがフラッと帰ってきて——で、弟の彼女がめっぼう可愛かった。それでふたりは恋に落ちたってわけ」

「めっぼう可愛いとか、自分で言うなよ。っていうより、それであんたどうしたんだ？そのお兄さんと駆け落ちでもしたのか？」

「流石にわたしもそこまで馬鹿じゃないっていうか……ううん、馬鹿にはバカだったけど、アツシのお兄さんは生活能力が本当にゼロって人だったの。一緒にいたら、リヤカーでも引いて物乞いするしかないっていうくらいね。そのかわり顔だけはめっちゃカッコいいのよ。アツシとは父親違いのお兄さんなんだけど、たぶんそっちの血を強く引いたのね。ルリ子さんも美人だったから、それがこううまくブレンドされて……」



「俺、あんたのそのDNAの講義には興味ないな。それより、お兄さんと弟を天秤にかけて、あんたはイケメンの兄のほうを選んだってことで、話は合ってるのか？」

「まあね。っていっても、具体的にどうこうってことじゃないのよ。お兄さんの登場で家の中の空気が微妙になったっていう、そういうこと。お兄さんは弟の可愛い彼女が好きだけど、当然弟の彼女だから手は出せない。あたしもお兄さんには心惹かれるものがあるけれど、道徳的っていうか倫理的に考えて、そういう関係にはなれないわけでしょ？そんでもってアツシって、通ってる高校も3・5流なら、顔のほうも3・5流でね……でも性格だけめっちゃいいって奴だったのよ。つまり、どういうことかっていうと、そういうお兄さんとあたしの間に流れる微妙な空気に全然気づかないくらい、鈍い奴だったの！だけど、ルリ子さんは勘の鋭い人だったから、ある日突然あたしにこう言ったわけ。「その二本の立派な長い足で、この家から出て行って欲しい」って」

「ま、当然だな。というより、あんたの口から道徳的とか倫理的って言葉がでてくるとは思わなかったぜ。意味わかってて使ってるんだろうな？」

サクラの奴はここでまた、俺のことを横から軽く小突いた。

「あたしだって――あたしなりに、その時々で色々あって結構大変だったのよ！あんたみたいな芸大に現役で入れるお坊ちゃまとは違ってね！それ以来、いつも結婚しようかなっていう一步前くらいのところで、別の違うタイプの男が現れて、それで駄目になっちゃうっていうことの繰り返しだったんだから！」

サクラが突然わっと泣きだしたのを見て、正直俺は狼狽した。

何故といえば、たぶん酔いが相当まわっていたそのせいだろう……サクラのことがちょっと前にこいつが自分で言っていたとおりに、やたら可愛く見えてきたからだ。

いつもの俺なら、自己憐憫の涙を流すような女はうざいとしか思えない。

考えてみれば、俺は坂道の途中にあるあのベンチに座っていた時から――こいつが目に夜景の光を宿らせているのを見て、一瞬ドキリとはしていたのだ。

でもその時はほんの束の間の目の錯覚だと思い込もうとし、今もまた、こいつがスーツスタイルなのを見て何故か安心していた。

たぶん、サクラが『ゼウスとプロメテウス』を見た時にしていたような格好、もし今あんな感じだったら、俺の理性も軽くやばかったのかもしれない。

このあとサクラは、それからつきあった男のことをひとりひとり上げて説明しだし、正直俺は彼女が話したことについては、ここ以降さっぱり思いだすことが出来ない。

ただ、全体的な印象として――もし仮に何かの間違いで俺が彼女と寝たとしても、それは長く続くような「何か」ではないということだけははっきりわかった。

俺はサクラの中を通りすぎていった何人もいる男のひとりにすぎず、そんな関係になるよりは<友達>でい続けたほうがずっといいのだと、俺はそう決断するに至っていたとっていい。

そして次に目を覚ました時、俺はテーブルの上を見回して啞然とした。

廊下からは、「ぎにゃ～！！」などという、意味不明の言葉が聞こえてきている。声から察するにサクラだというのはわかるのだが、一体何が「ぎにゃ～！！」なのかまではわからない。

「レンくん、きのうの夜はサクラちゃんと随分盛り上がったみたいね」

ミドリさんが若干呆れ顔で、テーブルの上の素敵なオードブル類を指差す。

えんどう豆と納豆の牛乳溺れ死に、野菜とマカロニのカルピス原液漬け、小エビとルッコラの酸っぱい匂いのするよくわからないもの……たぶん、作ったとしたら俺だろうが、何故こんなことになっているのかまでは、さっぱり思い出すことが出来ない。

サクラの昔の男語りにだんだん飽きてきて、それで何か無造作に手を動かし続けていた気もあるのだが、今の俺にあるのは、食べ物を粗末にしてしまったことに対する罪悪感だけだった。

「すみません、ミドリさん。俺……」

べつにいいのよ、といったように肩を竦めて、ミドリさんは居間のテーブルの上を片付けはじめていた。

床の上には久臣さん秘蔵の酒ビンが何本も転がっており、このことについてもあやまらなくてはならない……俺がそう思った時、藍染めののれんの前を、バタバタと見慣れない姿が通りすぎていくのが見えた。

「小山内さん、やめてくださいっ！！そのペン絶対油性でしょ！！？」

「いかにも。でも、右頬にだけヒゲが生えてるなんてバランスが悪いじゃないか。だから左頬にもチャーミングな三本線を入れてあげよう」

もしかして、あの人も酔っているのか……と、俺が重い頭で考えた時、のれんの向こう側からサクラが居間へ飛びこんできた。続いて突っこんでくる小山内氏。

俺にとって彼は、随分長い間憧れの存在だったはずなのだが——「べらぼうに愉快的」人につきあうというのは、もしかしたらそれはそれでとても疲れることなのかもしれないと、俺はズキズキと痛む頭の奥のほうで考えはじめていた。

サクラはその後、「あんたあの時のこと、どのくらい覚えてる？」と、やけに神妙な顔をして俺に聞いてきたことがある。

俺がアフガニスタンへ戻る一日前くらいのことだったと思うが、俺にとって小山内氏や他のベルビュー荘の住人たちと過ごしたこの年末年始というのは、忘れられないとても楽しい記憶として今も残っている。

いってみればまあ、俺にとっては＜青春の最後の思い出の一ページ＞といったところだ。

どうもサクラは、自分の過去の男関係についてすべてしゃべってしまったことを恥じている節があり、俺がいくら「途中からは完全に酔ってて記憶が飛んでるんだ。だから本当に全然覚えてない」と言っても、疑わしい目つきをしたままだった。

ある種の同情心や優しい気遣いといったものから、俺が「忘れたふり」をしてくれているのだと、どうやらそんなふうには思っていたらしい。

おそらく、俺自身もそうなのに違いないが、人間というのは大抵、思いこみが激しく、人を容易に信じることの出来ない性質を持っているのだろう。

サクラはその前にも（ちなみにこれはまるっきり酔ってない時の話だ）、俺が彼女の横顔を描いたその絵を、自分が部屋に忍びこんで覗き見することがレンにはわかっていたんでしょ？とい

ったようなことを自白していたことがある。

無論、俺はまさかサクラが自分のいない間に2号室へ忍びこみ、あの絵を見るなどとは想像もしていなかった。

だが、彼女の口調から察するに――俺がいくら「そんなことは思ってもみなかった」と言っても、サクラは絶対に信じないということがわかっていたので、「べつにどうでもいいことだろう」と俺は答えた。「それより、人の部屋に無断で入るなんて、それは不法侵入と呼ばれる犯罪なんじゃないのか」と。

「ねえ、あんたはなんであたしの絵なんか描いたのよ？あたしって、あんたにとってはそういう意味でそそられない女なんでしょ？」

「まあ、確かにな」と、今では少し違っていたが、俺は嘘をつくことにした。「いわゆる気まぐれってやつかな。あの時、なんであんたが泣いてるのか、俺にはさっぱりわからなかったから……その時の印象がなんとなく心に残っててさ。俺は自己憐憫以外で女が泣いてるところなんて、見たことがなかったから」

「ふうん、あっそ」

その話はそれきりになってしまったが、サクラの横顔を描いた絵を、実をいうと俺は今も持っている。

何故なのかはわからないが、途中まで描いたその絵は、続きを描いて着色することも出来ず、中途半端なところで描き終わっていながら、同時に完成されているようでもあり、俺にとっては捨てることも消すことも出来ない何かを持っている、不思議な絵だった。

結婚してから、まさか妻がそれを見つけてずっと心に引っかかるものを感じていたのだとは――俺は彼女の口から直接そうと聞くまで、わからないことだったけれど……。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

俺はアフガニスタンの孤児院へ戻ると、もうすっかり過去については振り返らない覚悟を決めた。

そして日本ではまず見られないだろう綺麗な星空を眺めながら――アフガニスタンの女性の地位向上を目指す、教員の女性と恋に落ちた。

彼女は日本で国語の教師をしており、最初はあまりボランティアといったことには興味がなかったという。

けれど、海外ボランティアの研修に友人から誘われ、気づいたら安定した教師の仕事を捨ててアフガニスタンまで来ていたと言って、ミチルは笑った。

いや、俺が彼女のことをミチルと名前と呼ぶようになったのは、正確には結婚してからのことかもしれない。

その前まではずっと、ミチルのことは苗字の飛鳥のほうで呼んでいたの、アフガンにいた間はずっと、俺は彼女のことをアスカと呼んでいたと思う。

孤児院を運営する日本人スタッフは、アスカと俺と横溝清二という三十代後半の男性の三人だけだった。それと、短期のボランティアスタッフが時々1～数名派遣されてくるという程度。

あとは日本人ではない、アメリカやロシア、あるいはヨーロッパ各国のボランティアスタッフと混合チームを組むような形で、孤児院は運営されている。もちろん、現地の人たちの助けの力もとても大きい。

たとえば、食事などは三食、近隣に住んでいる女性たちが集まって作ってくれるし、土地を孤児院建設のためにほとんどただで譲ってくれたり、新しく建物を建てる時には無償で手伝ってくれたり、俺はその「日本ではまずありえない環境」に徐々に慣れつつあった。

とはいえ、夏は気温が五十度にも達する環境での労働というのは、決して楽なものではなかつ

たし、毎日がとにかく、犠牲と奉仕の連続だったといえたかもしれない。

もちろんこれは、悪い意味でいっているのではなく――俺にとってそれは、1の犠牲や奉仕によってその十倍以上もの報酬の実や充実感を得られるといった種類のものだった。またそうでなければ、アフガニスタンに二年もいるということはおそらく出来なかったと思う。

正直このまま、アスカと一緒にずっとアフガンにいて、いっそのことここで結婚式も挙げてしまおうかとすら思っていた時……ある一本の連絡が日本から入ったのだ。

それは、俺が時々個展を開かせてもらっていた喫茶店のオーナーで、喫茶店の壁にかかっている俺の描いた絵を、二百万で買い取りたいと言っている人がいるがどうするかという話だった。

「二百万、ですか。その人、どんな人ですか？」

俺が嫌な予感とともにすぐ思いだしたのは、七津美さんの旦那のことだった。自分の絵をそんな高い金をだして買いたいだなんて、何かの陰謀が裏にあるとしか思えない。

「なんていうか、その人は出来れば君にも会ってみたいと言ってる。特に胡散臭い感じの人物でもないし、職業はスポーツのインストラクターをしていると言ってた。なんでもその、叔父さんが画廊を経営していたそうなんだが、経営が苦しくなって首吊り自殺したらしい。その叔父さんの遺言で何十枚もの絵が彼の手元には残ったけれど、どうしていいかわからず、暫くそのまま静かに保管していたという話だ。でもミズシマくんの絵を見て、何かこう……魂が揺さぶられる体験をしたということだったよ。電話ではどうも、彼の感動した様子を君に伝えるのは難しいな。短期間でも、もし帰国する予定があったら、こっちに顔を見せてくれないか」

わかりました、わざわざすみません、といったようなこと言って、俺は電話を切った。

実際、日本へは一度帰国する予定があった。ミチルの両親に会って挨拶したりといった予定もあったし、それと同時に子供たちが今では二年前の倍の八十名近くになっていたので――スタッフを増員すると同時に、入れ替えるかどうかの話し合いも日本の事務局ですることになっていた。

つまり、ミチルの両親とも話しあって、新婚のうちは暫く日本にいたほうがいいたろうとか、その話しあいによってスタッフ増員の人数が決められることになっていたのだ。

子供たちはみんな、俺やミチルが一生アフガンにいるものと思いこんでいるので、その信頼を裏切れることは、俺や彼女としてもとてもつらいことだった。

けれど俺は、自分の絵が売れそうだということは、日本へ戻るための何がしかのサインではないかと思ってしまったのだ。

それが本当に何か一種の啓示のようなものなのか、単なる俺自身の強い思いこみによるものかどうかはわからない。

そして俺はその見極めを、自分の描いた絵を二百万で買ってほしいという男との出会いに賭けてみることにしようと思ったのである。

日本へ戻ると、俺とミチルの両親は某高級ホテルのレストランで初めて互いに顔を合わせるということになった。

こうしたことのセッティングをすべてしてくれたのは、兄のタケルだった。

俺は先に言ったとおり、おふくろのことが苦手なので――彼女に直接「結婚したい相手がいるんだけど、会ってくれないか？」と頼んだりすることは出来なかった。

それは何故かといえば、答えは至極簡単だ。

おふくろはたぶん、ミチルと会う前に彼女の前情報を俺から欲しがるだろう……つまり、生年月日にはじまって、血液型など、前もって知れるだけのことを知って俺とミチルの相性を占うに違いない。

俺はおふくろのこの性格に、小さな頃からどれだけ苦しめられたことだろう。

父の毅と兄の尊は、母穂波のこの占い好きという性癖について、かなり達観した態度で臨んでいるのだが、俺はとうとう家を出るまで彼らと同じようにはなれなかった。

つまり、どういうことかというところ――毎年年末になると、家族全員の来年の運勢について母から「御託宣」があるのだ。

たとえば、父のタケシは八白土星人だから、今年前半の運気の流れはこうだとか、兄のタケルは六星占術で大殺界にあたっているから、今年一年は慎重に行動すべしとか、水瓶座の俺は六月にある皆既月食が過ぎるまで運気が落ちているけれども、その後は除々に上り調子になる……

まあ、そういったような具合だ。

その実にありがたい母の「御託宣」が下るたび、父と兄はともに、まったく同じ表情をして眼差しだけで会話を終える。

簡単にいえば、彼らはふたりともおふくろの異常な占い好きをただの習慣として受け容れ、「信じていないが、まあそう悪くもないもの」として扱っているということだった。

俺は小さな頃、母親が厄除けとしてくれたガラスの宝石玉を随分大切に持っていたことがある。

もっとも、そのラピスラズリのガラス玉に厄除けとしての効果があるとまでは信じていなかったけれど――「持っているといいことがある」くらいには、漠然と思っていた。

ところが、ある日俺はその深く碧い色の綺麗な宝石をなくしてしまった。

そのことが小さな子供にとってどのくらいショックなことか、言っても頭の固い大人たちには決してわからないだろう。

母はまた別のガラスの宝石玉をくれようとしたが、いくら同じラピスラズリでも、それはもう前に持っていたものとは違うのだ。

その時に俺が味わった喪失感、それはその後俺が占い全般を憎むようになる契機となる出来事だったといえた。

つまり、何か<形あるもの>に占星術的な力を与えるのは、実はとても危険なことなのだ。

俺はただ単に子供らしい無邪気な気持ちから、あのラピスラズリの宝石玉を大切にしていた……そう、「たったそれだけ」のことなのに、あれがないとこれから自分はろくな人生を歩まないとか、あの時あれをなくしたから今自分はこんな惨めな人生を送っている、などなど、占いは根拠のないことを信じさせる契機に十分なりうる。

そういう意味合いにおいて、俺は占いとか、占星術全般といったものを今も激しく嫌悪している。

昔、つきあっていて彼女が女性誌の占いコーナーを見て、「水瓶座の彼」とかいうところを読み上げた時、俺はその女とはすぐに別れた。だから、ミチルとは彼女にそっちの気がまったくないことを確かめてから、結婚を申し込んでいたとっていい。

まあ、大体そういったような事情から、俺はここ何年もおふくろとは電話ですらまともに話をしていなかった。

何故といえば、いちいち最後に「車の難には気をつけなさいね。タロットカードにそう出ていたから」などと言う女とは、話をするだけ時間の無駄というものだからだ。

もっというなら、母の穂波には日本語というものが通じない。だから俺は間に通訳者として兄を立て、おふくろと話をしていることがほとんどだった。

さて、ある意味俺にとって恐怖の両家初顔合わせの日、俺はわざと母穂波の目の前に座ることにした。

彼女がもしまずいことを言いだそうものなら、「殺すぞ」という目線で牽制するためだ。なんだったら、彼女の足の指が折れるくらい、テーブルの下でギュッとピンヒールの爪先を踏みつけてもいい。

俺が気迫みなぎる目つきで睨みを利かせていたためかどうか、おふくろは食事の中ごろまでは大人しくしていた。

そして懐石料理に舌鼓を打ちつつ、ミチルの見るからに「善良で平凡」と顔に書かれた両親と、父や兄が仕事のこと、定年後の生活の予定などを和やかに話していると（ちなみにミチルの両親はともに六十二歳、俺の両親は父が六十五で母が六十三である）、突然なんの脈絡もなしにおふくろはこう口火を切った。

それまでずっと、失礼なくらい黙りとおしていたにも関わらず、だ。

「ミチルさんは、何月生まれでいらっしゃるの？」

座席は、長方形のテーブルの右側手前から、俺、ミチル、ミチルの両親、そして左側手前からおふくろ、兄、父の順である。

おふくろは「そちらはそちらでお話なさって？」というように、魅惑的な視線を投げかけ、小さな声で話を続けた（どうでもいいようなことだが、フェイスリフトをしている彼女は、とても六十三という年齢には見えない）。

「えっと、四月生まれなんです、わたし」

ミチルには最初から、おふくろの占星術好きについては重々注意してある。

その話を振られたら、なんとかうまく逃げたほうがいい、俺もうまくフォローするから、と。

「四月生まれっていうことは、牡羊座かしら？それとも牡牛座？」

「えっと、牡羊座です」

トコを軽く炙って食べながら、ミチルはそう答えた。

彼女には、はっきりそうと聞かれるまでは、生まれた日にちまでは答えられないほうがいいと最初に忠告してある。

「なるほど、牡羊座ね……」

どこか天井の隅のほう、そこに守護天使が見えるといった顔の表情をおふくろがしているのを見て、俺は彼女の足をテーブルの下で踏んでやろうかと思った。だがおふくろは「そんなことは

お見通し」とばかり、サッと素早く足をよけている。

「残念ながら、水瓶座のレンとは相性がいいとも悪いともいえないわね。きっとあなたもわたしの占いのことはレンから聞いて、どうせ「馬鹿らしい」と思っているのでしょ？でも、これからわたしとあなたは仮に相性が合わなくても義理の母と娘としてやっていかなくちゃいけないわけよ。だったらわたしの戯言に、最後までつきあってくださるかしら？」

「はい。えっと、まあ……」

よろしい、といったようににっこり微笑むと、おふくろは客の前でタロットカードを広げる時とまったく同じことをはじめた。まずは深呼吸をし、そして陰と陽のバランスを整えてから、カードをめくるのだ（ちなみに彼女は“スピリチュアル・カウンセラー”を名乗って、小さな占いの館を気が向いた時にやっているのである）。

「牡羊座っていうのはね、後ろを振り返りながら歩く運命を背負っているの。こういって、牡羊座には後ろ向きの性格の人が多そうと思われてしまうかもしれないけど、そういう意味じゃないのよ。そうね、あなたはとっても優しい人。自分の後ろに弱い人がいたら、いつも気になって後ろを振り返らずにはいられないんじゃない？つまり、自分を犠牲にしても他の人を助けたいと思う気持ちが強いよ。ただし、同じ牡羊座でもB型の人は少し自己中心的なところもあるの。ミチルさん、あなた血液型は？」

「えっと、A型です」

ミチルが少し驚いたように（当たってる）という顔をしたので、俺はかなりのところイライラした。

こんなものはただのペテンにしか過ぎないのに――最初の入口のところで、「なんかちょっといいかも」と思う人間のなんと多いことか……だがそのカラクリについて熟知している俺は、ミチルがだんだんおふくろのペースに嵌まっていくのが見てられなくて、とうとうガタリと席を立っていた。

「おふくろ、ちょっといいかな」

いいかげんにしてくれよ！と叫びだしたくなる感情を抑えて、俺はなんとか大人の態度をとろうと懸命に努力した。

そして、すみませんというようにミチルの両親に会釈し、作り物の竹林が生えた廊下へと、おふくろのことを半ば強引に連れだした。

「兄貴から伝言、聞かなかったのかよ？せめて今日くらいは絶対、星占いの話はしてくれるなって、しつこいくらい兄貴に頼んでおいたのに」

「ふん、そういうことは自分の口で直接言いなさいよ。だから今、こういうことになってるのでしょ？」

おふくろは俺がつかんだ腕を、まるでペンチでつねられたとでもいうように、何度も撫でている。

「なんでもいいからさ、とにかく今日くらい＜普通＞にしてくれって俺は頼んでるだけだろ？もう占星術の話はなしにして、ミチルの両親とも普通に会話してくれよ……俺が頼んでることって、そんなに贅沢なことか？」



「ええ、そうよ。贅沢よ」と、おふくろは冷たい鬼のような顔をして言った。その顔の表情で、俺には彼女の言いたいことがすぐにわかった。（自分の親のことを、冷たい鬼みたいな目でも見てくれたわね）というわけだ。

「あたし、小さな頃からあんたに＜普通＞にしてろなんて言ったことある？あたしがあんたを育てるのにどんなに苦労したか、忘れてるようだから思いださせてあげるけど、レン、あんたが三歳の時に粘土遊びを教えたのはこのあたし。それからそっちの方面に才能があるみたいだって見抜いて、五歳の時にはお絵かき教室にも通わせたわ。つまりね、あんたが芸大なんてものにストレートで入れて、そのあと美術展に入賞できたのも、すべてはこのお母さまのお陰ってことよ。なのにあんたは、その母親のあたしになんの相談もなく、アフガニスタンなんか勝手に行って、危うく地雷を踏んで絵を描けない体になるところだったじゃないの！！」

俺はこの時、何故かふと川上サクラのことを思いだしていた。あいつならたぶん、俺のおふくろの饒舌な舌にも負けることなく、おそらくは同じくらいの勢いで、言い返せるに違いないと思ったからだ。

だが俺は、まるで尻尾をつかまれた犬みたいに大人しくなることしか出来なかった。

すぐ目の前を、ホテルの従業員が何人か通り過ぎていく……俺は陰と陽のバランスを整えるためではなく、深呼吸して、なんとか落ち着きを取り戻そうとした。

「悪かったよ。一応、兄貴には事情を全部説明しておいたから、おふくろもそれで納得してくれるかなと思ってさ」

「そう。で、今度は一体なに？結婚するからその両親と会ってほしいですって？レン、あんたがあたしに求めているのはとても贅沢なことよ。それも最上級にね。タケルは平凡なつままない子に育っちゃって、これまた平凡でつままない子とお見合い結婚しちゃったけど、あたしはあんたは違うと思ってた。茶髪にヘソピアスしたような、もうちょっとエキセントリックな子を連れてくるかと思ったけど、一体なんなの、あの子！？しかも、虫唾が走りそうなくらい、あの子の両親も凡庸そのものじゃないの。まったく、つまらないったら。言っておくけど、あの子とあんたの相性は最悪よ。あんたは水瓶座で、あの子は継母から殺されかかってた兄妹のうち、妹のほうを海に落っことした牡羊座。つまりね、あんたの才能がたぶん、これからじわじわあの気の毒な子を殺していくの。それはミチルさんの心にトラウマとして残るでしょうよ……まるで、ヘレーのことを海で死なせてしまったことを悲しむ金の牡羊のように」

「だからさ、俺はおふくろのそういうところが我慢できないんだって！」

ついカッとなって、俺はそう叫んでしまった。ミチルや彼女の両親、それに兄貴たちのいる座席から、レストランの入口はかなり離れているとはいえ——俺はなんとなく、のれんの向こうのほうを振り返ってしまった。

おふくろはといえば、俺のこの怒鳴り声にも動じる様子がほとんどない。

「つまりさ、そういう暗示にかけるようなことを言われるのがすごく嫌なんだよ。確かに、おふくろがミチルに対してさっき言ったことは結構当たってると思う……彼女は子供とか年寄りとか、あるいは弱い立場にある人とかを庇ったり守ったりするっていうタイプの人だよ。だから結婚したいんだ。これで、わかってもらえる？」

「そうね。たぶん今は恋愛感情が燃え上がってる時期なんだろうから、あたしが何を言っても

無駄でしょうよ。けどね、レン。馬鹿な羊に水瓶座の水のような奔放さや自由さは理解できないのよ。確かに彼女は浮気もしない、貞潔を守るいい奥さんになるでしょうね……でもあんたは、そういうことに長く価値を置けるタイプじゃない。今は一時的に人道支援とやらの熱中してるんでしょうけど、時期に星回りが変わったら——あんたは絶対別のものが欲しくなるはずよ。あたしには、そのことがわかるの。だって、あんたは他でもないこのあたしが作った、この世の最高傑作なんですからね」

俺はもう、何をどう言ってもいいかわからず、溜息をついて前髪をかき上げた。

今は良くても次期に物足りなくなる……その予感、確かにその当時から俺の中にあっただのだった。

それでも俺は、その部分についてさえ自分が目を閉じていられるなら、ミチルとの結婚は穏やかで静かな、とてもいいものになるだろうと思っていたのだ。

そして俺は、自分の欠点についてミチルが目を閉じてくれるように、彼女に対して同じようにしたいと考えていた。

「ふーっ。お互い、言いたいことを言ったら、少しスツとしたわね。本当はこのままここから抜けだして、自慢の息子とデートでもしたいところだけど、あんたはどうせそんなことしたくないっていうんでしょ？だから仕方なく、適当におべんちゃらでも振るまって、感じよくするわよ。でも、レン。言うておくけど、これは大きな貸しだからね。あとでちゃんと菓子折りでも持って、先日はありがとうございましたって、あたしと父さんにお礼を言いに来なさい。わかったわね？」

「あ～あ。ほんと、最悪な親……」

俺がのれんをくぐりながらそう呟くと、おふくろは俺のケツをクラッチバッグで叩いて、「何か言った！？」と怒鳴った。

そして俺はこの時、なんとはなし、また川上サクラのことを思いだしていたのだ。

おふくろの今日の格好は、シャネルのスーツにグッチの靴、それに手にはプラダのクラッチバッグといった装いだったが、どうしておふくろもあの女もこういったくだらないブランド物に価値を認めるのだろうと、不思議になって。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイトFirst Moon様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

俺と廊下で話し合ってからのおふくろというのは、先ほどとはまるで180度別人になったかのようにだった。

実は二重人格で、少し薬を服用したら、活発なほうの人格が戻ってきました.....とでもいうかのように。

あるいは、宇宙人に時々体を乗っ取られて、気分が塞ぎがちになるが、彼が意識の中で寝ている間はおふくろはまともでいられるんですよ、とでも説明すれば良かったらどうか？

なにせよ、おふくろは慈悲の必要な哀れな凡人たちに寛容にも話しかけてあげてるといった態度で、ミチルの両親はおそらく、おふくろのその態度の中に慙懃無礼な何かを感じたことだろう。

だが、おふくろ自身はどう思っているか知らないが、そういうおかしな人物のことでも極力理解し認めてあげようという姿勢がミチルの両親にはあり、彼らは本当に人格的によく出来た立派な人たちだと俺は思った。

もちろん俺は、このおかしな会食の席が終わったあとで、ミチルの両親におふくろの非礼についてよくよく詫びておくことを忘れはしなかった。

昔、精神病院に入院していて、今も薬を服用してるんです.....そういう可哀想な人なんですよ、と嘘をつきたいくらいだったが、残念ながらおふくろに精神病院に入院していた過去はない。俺は時々、何故そうじゃないのか不思議でならないことがしょっちゅうあるのだが。

まあ、そういった経緯によって俺は飛鳥ミチルと結婚した。

また、彼女の両親が娘に対し、結婚を機に日本へ戻ってきてくれることを強く希望していたこ

ともあって――アフガンへは、シエラレオネから戻ってきた紺野と、他に別のスタッフが数名派遣されることに決まっていた。

それにしても紺野は、つくづくすごい奴だなと思う。

あいつは結婚式は挙げないが、籍だけ入れるという俺のことを呼びだすと、こう言っていた。「ミチルちゃん、俺がアフガンの孤児院にいる時は「恋愛なんていう馬鹿馬鹿しいこと、あたし興味ないの」という態度だったのに、メンバーチェンジしておまえがいくと、なんでいきなり恋に落ちるかねえ。まったく、この俺の一体どこが不服なんだか……」

「紺野みたいな生き方をしてる男に、ついていける女は早々いないだろ。おまえは女に対して、「俺は四百キロでこの地上を駆け抜けてやるぜ！それでおまえは何キロだ！？」とかいうタイプだもんな。普通の人間はせいぜい、五十キロとか六十キロくらいで人生を歩んでるものなんだよ。それで調子のいい時でも七、八十キロってとこ。普通の女にスピード狂のおまえについていくのはまず不可能なんだよ」

ちなみに、紺野の奴は本当にミチルに対して気があったというわけではない。

彼はこの種の軽口を誰に対しても同様に叩くのだ。

「ふーん。でもま、おまえもよく決断したよな。だけどさ、なんでおまえ結婚式挙げないわけ？金ないのはわかるけど、女にとっちゃ結婚ってのは人生の一大イベントだろ？それとも、自分に見合わない容姿の女と結婚するから、式はべつにいいやって感じだったのか？」

「違うって。第一、そういう言い方は俺のワイフになる女に対して失礼だと思わないのか？俺は昔から結婚式とか葬式とか、なんとか式っていうのが嫌いだっていうそれだけの話。確かに心から喜んでたり哀しんでたりすることもあるだろうけど、偽善的に喜んだり哀しんだりっていうのが本当に駄目なんだよな、俺。だから結婚式はしない。それでももしミチルがどうしてもっていうんだったら、そういう偽善に耐えてもいいとは思うけどさ」

「あ～あ、俺は昔から思ってたんだよな――、レンみたいな男と結婚する女は不幸になるってさ。ま、ミチルちゃんが犠牲者第一号にならないことを祈るよ」

アーメン、と言って紺野の奴が十字を切ったので、俺は事務局の休憩室で、「誰が不幸にするか」と言い返してやった。

「だって、そうだろ？「俺、偽善的なのがダメだから、結婚式はナシな？それでいい？」っておまえみたいな男に聞かれて――自分に若干コンプレックスのある女が「それじゃイヤ」って言えると思うのか、おまえ」

「なんだ？話があるから事務局のほうに来れないかって言ったの、紺野のほうだろ。まさかとは思うけど、おまえミチルと結婚式挙げろなんていう話を、俺にしたかったのか？」

「のんのん」と、スノークの真似をしながら紺野は言った。長いつきあいの俺であればこそわかる微妙なジョークだ。

「単にさ、おまえがこれから日本にずっといることを決めたって聞いたから、たぶんちょっとした心の葛藤ってのがレンにはあるんじゃないかと思って――それで呼んだわけ」

俺は自販機からコーヒーを二本買うと、そのうちの一本を紺野に渡した。

こいつにはこれからも、絶対隠しごとが出来ないだろうなと、そう思う。

「日本に帰ってくると、風が又ルいな～ってレンも思うだろ？俺が昔レンの家でおふくろさん

に会った時——彼女がこう言ったの、覚えてるか？地球には国ごとに靈的なステージの違いがあるって。おまえはさ、「こんな気違いの言うこと、無視してくれ」って顔してたけど、俺にはなんかそれ、今はよくわかるんだ。日本は平和なかわりに帰ってくるとなんか空気が淀んでるのがわかる。もちろん、自分の母国だからさ、俺は誰がなんていおうと、地球の中でこの日本って国がいっちゃん好きさ。歴代の首相がクソみたいな奴ばかりでも、その愛着はこれからも変わらないと思う。でもさ、それとは別に、他の国へいくと空気がピリッとしてるかわりに妙に澄んでるってことがよくあるんだよな」

紺野の奴はプルリングを引いてプシュッとあけると、コーヒーをごくごく飲みほした。

真夏にクーラーのない部屋にいるのは、一種の拷問にも等しい。アフガンなんてもっと暑いぞ、などと過去を回想してみたところで——三十二度という温度計の針が呪わしいことに変化はない。

「だからさ、レンはたぶんこれから、そのヨドヨドした感じが嫌になるたびに、かつて魂の義務を放棄したことを思い出して……罪悪感を感じるんじゃないかって、俺はそのことが少し心配でさ」

「魂の義務？」と、俺はあえて紺野に聞き返した。もちろん本当は、彼が何を言いたいか、俺にはよくわかっていただけだ。

「目の前に二本の道があったら、俺もおまえも、薔薇とかハイビスカスの生えてるほうじゃなくて、イバラとかサボテンの生えてるほうを選ぶタイプだろ？で、俺はイバラロードとかサボテンロードを一生走ることに決めたわけだけど……おまえはさ、今薔薇とかハイビスカスのほうに行こうとしてんのかもしれない。で、一番大変なところに身を置き続けずに逃げたとか、考え方を間違っただけでほしくないわけよ。俺の言いたいこと、レンならわかるよな？」

「ああ」と、俺もまたコーヒーを飲みながら言った。実はそのことで悩んでいたとは、紺野にはわざわざ言う必要すらなかった。

「俺、レンがアフガンに行こうと思うって言ってくれた時、すごく嬉しかったよ。「ああ、コイツ。俺のためにそこまでしてくれちゃうんだ☆」みたいな感じでさ。もちろん俺はそんなこと、おまえに言わなかったけど……でも俺は、正直いってその時からレンはこっち向きの人間じゃないと思ってた。誤解のないように言っておくと、ボランティアとかそういうのに向いてる人間じゃないって意味じゃなく——レンって芸術家タイプじゃん？だからどっかの国で戦争が終わったら、平和の像を作ってそれを記念に進呈するとかさ、絶対そっちタイプだっていうの、最初からわかってたからな。だからまあ、レンはこれから日本でヨドヨドしてたらいいんじゃないかって、俺はそう思うわけ」

「ヨドヨドな。まあそのヨドヨドに飲みこまれないよう虚しく戦い続けるより……思いきってバサーッと海外へいったほうが意味楽かなって、たまに思わなくもないんだけどな。俺、吾味悟郎さんっていう人に、画廊で働かないかって誘われてるんだ。たま～に客がやって来たらうざくない程度に接客して、他は絵を描いたり彫刻したりする作業に当てていいって言われてるんだけど……どう思う？」

「吾味悟郎！？」紺野が最初に食いついたのはそこだった。「それ、マジで本名なのか！？小さ

い時、大変だっただろうな～。掃除のたんびに「ゴミだしとけよ、ゴミー☆」とか絶対言われそう……俺が小学生の時、安保って名前の同級生がいて……って、まあそりゃ関係ないな。なんかオイシソーな話だけど、もしかしてウラがありそうな感じなのか？」

「どうかな。本人はゲイだって言ってたけど。俺がそういう傾向にない人間だとか、これから結婚する予定だっていうことも、もちろん向こうは知ってる。あとは、その画廊で吾味さんの叔父さんが首吊って死んでるっていう、気になるのはそんなところかな」

「それで、月給は？」

普通なら遠慮して聞かないだろうことも、紺野はズバズバ聞いてくる。

まあ、いつものことではあったけれど。

「最低保証賃金が月十七万。画廊自体が結構広くてさ、二階は俺が自分の作品を飾る展示室にしたらいって言うてくれて……で、俺は自分の絵が売れた場合はそのお金を全部自分のものに出来る。けど、一枚でも絵が売れた場合は、十七万はそこにプラスされない。あとは、委託とかその死んだ叔父さんが所蔵してたコレクションが売れた場合は――そのうちの30%のお金と、十七万もらえるっていう感じかな。コレクションっていても、ほとんど有名画家のコピーとかリトグラフなんだ。だから、実質的な値打ちはないに等しかったりするんだけどね」

「ふう～ん。まあ、もしその画廊の経営者が女性だったとしたら、俺はここで極めてレッドカードに近いイエローカードをおまえに渡してるね。でも相手がゲイにしる男で、これからおまえを落として「男のセカイ☆」とかいうのに引きずりこもうっていう魂胆じゃないんなら……ま、悪くない話なんじゃないか？それでその吾味さんにどのくらい儲けがあるのかとか、そんなんで画廊続けていけんのかとか、そのへんが少し腑に落ちないけど」

「だよな」

休憩室に他の職員が入ってきたため、俺と紺野は缶コーヒーをゴミ箱に捨てると、なんとはなしそこから出ることにした。

「何よ！あたしの顔を見るなり出ていくって、あんたたちどういうこと！？」

と、事務長の宮坂さんが笑って言った。

「宮坂さん、そりゃヒガイ妄想☆ってやつですよ。俺たちはちょうど、話が終わって外へ出るところだったんすから」

「あら、だったらもう少しここにいればいいじゃないの。っていうか、あたしがここへ来たの、実はミズシマくんが話があったからなのよね。なんでミチルちゃんと結婚式挙げないのかな～って……」

やっぱりみんなそう思うのか、と俺が少し考え深い気持ちになっていると、紺野の奴が言った。

「宮坂さん、少し前にその話は俺がしたんすよ。ま、そのへんは色々事情があるってことで、女の気持ちを代弁するのはまた今度ってことにしてください。頼みます」

「ふう～ん。ま、あたしが言いたかったのは、借金してでも盛大にパーッと式を挙げて、そこまでののに別れるなんて恥かしいから、そこで離婚率下げとけって話だったんだけど。だって、ミズシマくんってモテそうだから、なーんか心配っていうかね～。おばさんとしてはね～」

宮坂さんと紺野の奴が軽口を叩きあっているのを聞きながら、外から見た場合、自分たちはそ

ういうカップルに見えるのかと、俺は少しがっかりしていた。

そして休憩室の時計を見、画廊で吾味さんに会う約束を思いだした俺は、紺野に「サンキューな」と言って事務局を出ることにしたのだった。

吾味悟郎の経営する、画廊のガロ……いや、ここで笑ってはいけない。

というより、その名称のとおり、自分でも少し出来すぎてる感じはするのだ。

もし仮に絵が一枚も売れなくても——最低十七万は必ず支払うだなんて、なんだかとてもおかしな話だ。

もちろん、吾味さんに例の喫茶店で会った時、想像していたより全然まともそうな人だとは思ったけれど。

「お会いできて、光栄です」

クールビズ仕様の半袖シャツに、クリーニング店で今朝受けとってきたばかりといった感じのする、白いズボン……靴はまるでこの日のために磨きあげてきたといったようにピカピカで、彼の歯のほうも真珠のようにピカッと光っていた。

たぶん彼は、吾味などという苗字の家に生まれてくるべきではなかったのだろう。

長い髪を一本に束ねている彼は、まるで銀座のホストのナンバーワンといった感じのする、それでいて清潔感の漂う人物だった。

「その、俺の描いた絵が欲しいっていうのは、本当ですか？」

（大丈夫かな、この人）という胡散臭い気持ちを拭えないまま、俺は窓際の席に座り、マスターにアイ스티ーを注文した。

「ええ。二百万では少し安すぎるとは思ったんですが……もしその金額でご納得いただければ、一千万だしても構いません」

「その……金額の問題じゃないんですよ。あれは俺が随分昔に描いた絵なんです。で、このマスターの好意でこれまで何度かただで個展を開かせてもらってて——あの絵はそのお礼としてマスターに差し上げたものなんです。だから、正確には今は俺が絵の所有者じゃない。どうしてもあの絵が欲しいなら、マスターに二百万払ってもらえませんか？」

「そのことは、すでにマスターの中川さんともお話しました」

俺がオーダーしたら、一緒に自分の注文の品も持ってきてくれるよう頼んでおいたのだろう、ウェイトレスの女性が、俺にはアイ스티ー、吾味さんにはストロベリーパフェを置いていく。

「今の彼女、どう思います？」

スプーンで生クリームをすくって食べながら、吾味さんが聞いた。

「……若くて、綺麗な人なんじゃないですか」

俺はあくまで一般論としてそう言った。

「そうですか。趣味が合わなくて実に残念です……僕、女性のことが好きになれない体質なんです。中川さんから聞いたかもしれませんが、僕は普段スポーツクラブでインストラクターをやっています。まあ、そこにはいわゆる僕目当ての女性っていうのが、何人かいるんですが…

...彼女たちに触られるたび、本当にゾッとします。そのかわり、男性の筋肉に触れていると、心底ホッとするんですけどね」

「ということは、つまり.....」

やはりちょっとオカシイ系の人なのかと思いながら、俺は吾味さんに先を促した。

「ええ、僕はゲイです。女性のあのブヨブヨした肉体には、一切何も感じるものを見出せません。ただ、先にこうしたことを申し上げるのは、あくまで誤解を避けるためです。僕には一緒に暮らしている恋人がいるんですが、カミングアウトすると大抵、エイズが移るんじゃないかとか、実は肉欲の対象として見られてるんじゃないかとか、色々なことを思う方がいるものですから」

「そうですか.....」

（その説明、俺に必要ですか？）と思いながら、俺はアイ스티ーにガムシロップを混ぜて飲んだ。

「ところで、絵のことに話を戻しましょう。マスターの中川さんは、あなたのお許しさえあれば、あの絵を外してもいいとおっしゃっています。ただ、お金のことはミズシマさんと交渉して決めてほしいと.....それで、いかがなものでしょうか？」

「どうして、あの絵にそんなに拘るんですか？」

俺はそう言って、喫茶店の中央にある飾り暖炉の上に置かれた、〈砂漠のカタストロフ〉という絵のほうに目をやった。

「そうですね.....そのお話がまだでした」

吾味さんはズボンのポケットからハンカチを取り出すと、それで額の汗を拭っていた。

そのきっちりとアイロンのかけられた木綿のハンカチを見て、たぶん彼はとても几帳面な、きちんとした人なのだろうと俺は想像した。けれども、その「几帳面できちんとした」彼が実はゲイであるとわかるなり——おそらく離れていった人というのも、これまでいたのだろうと思う。

それと、俺の友人にもスポーツクラブでインストラクターをしている人物がいるのだが、彼は〈人気インストラクター〉でい続けるために、毎日極限といってもいいくらいに体を鍛えていた。

吾味さんのどこか堅苦しいくらいの礼儀正しさも、もしかしたらそういうところから来ているのかもしれないと俺は思った。

「あの絵は.....」ぶるぶると手を震わせながら吾味さんは言った。「叔父の苦悩そのものなんです。叔父はあのカタストロフにやられたんです。いうなれば、心の——あるいは魂のカタストロフってやつです」

〈砂漠のカタストロフ〉という絵は、久臣さんの書いた同名の小説を読んで、俺が制作した絵である。

久臣さんが書いた小説の中で、実際そうしたことが取り扱われているので.....「核戦争が起きたあとの地球の風景か」と何度か人に聞かれたことがあったけれど、あれを俺は自分の心の中の風景として描いたのだ。

赤味ががった砂塵の中に埋もれる、廃墟の塔。塔自身も早く砂になってしまいたいと思っているのだが、そうなるまでにはまだ何十年も風に吹かれ続けなければならない。



あるいは、本当に核戦争というものが起きて、この世が終わるというその日まで。

「だったら、いいですよ」と、俺はアイスティーの中の氷を齧って言った。「あの絵は、ただで差し上げます。きちんと意味を理解してくれる人になら、俺は自分の絵に関してはいつもそういう気持ちでいるんです。まあ、これから結婚する予定があるので……お金はあるに越したことはないんですけど、あの絵はもう何年もあそこに飾ってあるのに、お金を出してでもいいなんていう人は、吾味さんが初めてでしたから。俺にはその気持ちだけで十分です」

「そんな……そういうわけにはいきませんよ。だったら、こういうのはどうですか？うちの画廊を再開して、そこでミズシマさんの作品を売るんです。まあ、近隣の人みんな、あそこで僕の叔父が首吊り自殺したって知ってますし、『呪われた画廊・ガロ』みたいな感じで、最初は人が寄りつかないかもしれませんが……でも、僕には自信あるんです。ミズシマさんの作品なら、きっとその良さを理解して、僕のようにいくら出しても構わないっていう人が、絶対現れるに違いないって」

褒めちぎってもらって実に申し訳ないのだが、残念ながら俺は吾味さんと同意見ではなかった。

世の中、また現実とはそう甘いものではない。

「その……失礼かもしれませんが、その叔父さんというのは……」

経営が苦しくなって自殺されたんですよね？と、ズバリ聞くのは憚れて、俺は遠まわしな感じでそう聞いた。

紺野ならこういう時でも（また相手が仮に初対面でも）、そうハッキリ聞けたらろうが、何分俺にはデリカシーってものがありすぎた。

「ええ。コレクションしてた絵の中に、どうも贋作が混ざっていたらしいんです。で、画廊の仕事っていうのは結構、信用が大事らしくて……叔父は鑑定士の人に頼んで見てもらいたらしいんですが、自分が何十万、あるいは何百万も出して買った絵が――実は数万以下の値打ちしかないってわかった時の衝撃って、想像できますか？ようするに叔父は騙されてたんですよ。絵のバイヤーをやってる人間に、偽の保証書を掴まされてね」

「それが自殺された原因ですか？」

ストロベリーパフェが溶けていくのを見て、俺は「食べたらどうですか」というように、吾味さんに目で促した。

「そうですね。おそらくはそうだったのだろうという、これはあくまで周囲の推測です。遺書というものもありませんでしたし、ただ遺言書には僕の名前だけがあって、警察の連中には随分不愉快なことを色々聞かれましたよ……何しろ、叔父は八人兄弟の一番末っ子で、甥とか姪なら十人以上もいるのに――遺産を残したのはこの僕ひとりだったんですから」

「奥さんとか子供さんは？」

「いません。叔父は僕と同じ傾向にある人間でしたから……ただ、自分ではあまりそのようには思ってなかったみたいです。むしろ女性を愛そうと努力してうまくいかず、一度離婚してるんですよ。叔父と僕の仲が良かったのは確かですが、彼が僕にだけ遺産を残そうとしたのは、そういう理由からだったんだと思います」

このあと、吾味さんがストロベリーパフェを食べ終わるまで話をしていたわかったことは――どうやら彼はいい家の生まれらしく、家族や親戚の多くが資産家で、吾味さんが自殺した叔父さんから受け継いだのは〈画廊・ガロ〉だけではないということだった。

叔父さんが所有していた土地や家屋は他にいくつもあり、すべて売ればスポーツインストラクターの職もやめて左うちわで暮らせるかもしれないけれど……もしそうしてしまったら、自分が豚以下の人間に成り下がりそうな気がして、少し怖い気がする」と吾味さんは言っていた。

「そんなわけで、二百万という金額を提示したのは――何も値切ろうと思ったからではないんです。僕にとって、額に汗して稼いだお金ですぐに出せそうな金額が二百万だったんですよ。でも、叔父は絵のためなら一千万・二千万だしても惜しくはないという人でしたから……才能のある絵描きさんにお金が渡るなら、叔父も許してくれると思うんです。ですから、遠慮なく受けとってください」

吾味さんがバッグの中からお金が入っていると思しき封筒を取り出すのを見て、俺は（参ったな）と思った。

昔は、好きな絵だけを描いて生きていけたらどんなにいいだろうと夢想していたこともある。だが、俺は今現実というものにしっかり二本の足をつけて生きていくべきだという認識でいた。

そしてそのことが、ミチルとの結婚を決めた理由でもあったのだ。

「その……とにかくそのお金は、俺には受け取れません」

何故ですか、という真摯な目で問い返されて、俺はまた少しの間言葉に詰まった。

それは俺の魂の問題です、などとはとても言えない気がしたからだ。

「うまく説明できませんが、あの絵は、俺の尊敬するある人が書いた小説からインスピレーションを得て描いたものなんです。その人はプロの作家っていうわけではなくて、普段は印刷会社で夜勤の仕事をしてるっていう人なんです。で、夜勤の仕事のはじまるのが大体夜の八時とかですか。電車で通勤するのに一時間くらいかかりますから、七時前には彼は下宿をでます。つまり、彼が小説を書くのに当てているのは、夜勤の仕事を終えてぐっすり眠ったそのあとといった感じですね。今時の携帯小説のような軽いものを書いているわけじゃないから、毎日二時間くらい、集中してようやく二枚書き上がるといった感じのものを、彼は書いています。そうやって〈本当のもの〉を一日二枚書くために、彼は出世も棒に振りました。夜勤だけではなく昼間の仕事もするなら、もっと上の部署に取り立ててやろうという話は前からあったそうなんですけど……彼は結局、今も変わらず夜勤の仕事をしています。まわりの人には、下宿暮らしのしがないただのおっさん、みたいに思われながらね。そういう彼の書いたものからインスピレーションを受けて描いたのがあの絵なのに――俺にはそれを金と引き換えにするってことは出来ません」

俺のこの説明というのは、吾味さんを相当驚かせたようだった。

あとから聞いた話によると、最初はもったいぶりつつも、最後はお金を受けとってもらえるだろうと、そんなふうに吾味さんは思っていたという。

そうして吾味さんはバッグの中にお金を引っこめると、どこか嘆息に近い溜息を着いていた。「あなたは、百パーセント完璧な答えを、僕に与えてくれた気がします。では、こういうのはどうでしょう？中川さんから、あなたはアフガン帰りでまだ就職先も特に決まっていな」と聞きま

した。ミズシマさん、僕もまたうまく言えませんが、僕にはあなたがとても――普通のサラリーマンになったりする人には見えないんですよ。また、普段は見るからに落ち着いた生活をしつつ、〈本当のもの〉のために絵を描く時間をどうにかこうにか二時間捻出するといったタイプの人にも思えないんです……あなたはもう少し破滅型の人間で、ゼロか百か、そのうちのどちらかを選ぶタイプというか、絵を描くなら描くでどっぴりそのための時間をとり、でなければ一切何も描かないかのどちらかという気がします。それなら、その両方を叶えるのがいいと、僕はそう思うのですが」

「どういうことですか？」

そんな、アリストテレスがいうところの〈中庸〉のような道はないだろうと俺は思いつつ、そう吾味さんに聞き返した。

そして彼の提案したのが、例の「画廊・ガロ」で働かないかという話だったというわけだ。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

画廊のガロは、近くに大きな美術館のある通りから、一本道の引っこんだ場所に位置している。

つまり、その美術館へいった帰りにちょっと他の画廊にも寄ってみてはどうだろうか……といった感じで、ガロ以外にも小さな画廊や古美術商、あるいは稀覯本を扱う古本屋などが並ぶ通りの一角にあるのだった。

俺は吾味さんと約束していたとおり、午後の二時にガロの入っているビルの四階——「ハワイアン」という名前の喫茶店までいったのだが、思っていたとおり、彼は約束の十分前に到着した俺よりも先にその場へ来ていた。

「なんでも好きなもの、注文してください。ここのおかみさん、家賃をもう半年くらい滞納していますから、そのかわりいつ何を食べてもただっていう、僕や叔父とはそういう関係なんです」

平日月曜の午後二時とはいえ、ハワイアンでは閑古鳥が鳴いていた。

この店の一体どこらへんが<ハワイアン>なのかさっぱりわからない、ハワイを連想させるものが一切ない喫茶店で、アンティークなイギリス家具が並んでいるというだけの、地味な店内。

メニューのほうもスパゲッティやドリア、ハヤシライスといった洋食の他に、パフェやコーヒーや紅茶、ケーキセットなどがあるだけの、これからも流行りそうな予感をあまり感じさせない品揃えだった。

「味のほうは、どれもなかなかイケるんですけどね、まあここは場所が悪いんだろうな。一本通りを向こうにいけば、美術館帰りの客がくるオサレな店っていうのがたくさんありますからね。」

そこからこぼれてくる昔ながらの客が前までは結構いたんですが、最近はなかなか……」

無愛想な顔つきのウェイトレスが注文をとりに来たので、俺はとりあえずアイスコーヒーを頼むことにした。

吾味さんはオムライスやボンゴレなんかも美味しいですよ、と勧めてくれたが、生憎あまり食欲のほうがない。

これも暑さのせいかもしれなかったけれど、喫茶店のハワイアンはしっかり冷房が効いているというだけでも、その時の俺には天国のような場所だった。

「それで、例の話、考えていただけましたか？」

吾味さんはすでにパエリアを注文してあるとのこと、俺のアイスコーヒーと一緒にすぐそれが運ばれてきた。

「ええ、まあ」

俺はアイスコーヒーを飲みながら頷いた。

吾味さんはシーフードのたっぷり入ったパエリアを、美味しそうにスプーンで掬って食べている。

「この喫茶店は、このビルが出来た当時からありましてね。僕は叔父の画廊へ遊びにいくたび、ここへ来るのが本当に楽しみでした。ここへ上がってくるまでにミズシマさんも見たかもしれませんが、このビルは七階建てで、一階と二階が画廊のガロ、三階には美容室、五階にはエステサロン、六階にブティックが入っています。前まで……というのは、叔父が自殺する前までということなんですけど、七階には歯科医院が入ってました。でも、そこを経営していた歯科医が叔父の自殺と同時に退去しましてね。それじゃなくても人の足が遠のいてるのに、これでもう誰も来なくなるだろうみたいに思って、別のビルへ引っ越していったんですよ。まあ、無理もないといえば、無理のない話ですよ」

そうですね、というように俺は頷くと、窓の外の風景を眺めた。

すぐ近くにマンションが建つ予定らしく、工事中の建設現場が目に入ってくる。

あのマンションに住む予定の人たちが、客として流れてきてくれれば、このハワイアンも少しは流行るだろうか、などと思いつつ。

「そこで、ですね。一枚も絵が売れなくても十七万支払うだなんて、ミズシマさんには聞くからに胡散臭い話のように思えたかもしれません。でも、僕がミズシマさんをお願いしたいのは——このビルの管理も含めて、ということなんです。ミズシマさんは以前、建物の内装美術であるとか、インテリア・コーディネーター的な仕事もされていたと聞きました。ですからわかっていただけだと思うのですが、こういう商業ビル施設などは維持管理が結構大変なんです。オーナーとしてビルを何軒も所有しているなんて聞くと、言葉の響きとしては聞こえがいいでしょうが、実際は揉めごとなんかもあって結構大変なんです。たとえば」

と言って、ここで吾味さんは声のトーンを落とした。

「あのカウンターにいるおかみさん、ミズシマさんにはどう見えますか？」

俺は吾味さんがチラッと視線を向けた先に、同じようにほんの数秒だけ、目線に向けた。

「とてもいい人そうに見えますね。身綺麗で髪型もきちっとしてて、人柄のあたたかそうな人に

見えますけど……」

そうでしょう、そうでしょう、といったように吾味さんは何度も頷いている。

「でもあのババアは実際、なかなかのやり手です。あの手この手を使って家賃を滞納し、今では半年分も溜まっていますが、オーナーの僕がやって来ても実に悠然としたもんですよ。こっちも「そろそろ家賃を……」と言いたいのはやまやまですが、何しろ叔父がああいう死に方をしているでしょう？そのせいで客足が遠のいたとか言われると、こちらは何も言えませんからね。今ではもしや二度と家賃を払う気がないようにさえ思えますが、この場所は特別中の特別だと思ってください。そのかわり、ミズシマさんも好きな時にただで色々食べて構いませんから」

いや、流石にそれはどうかなといったように俺が首を傾げていると、吾味さんはそのまま話を続けた。

「で、三階の美容室と五階のエステサロンについては、何も問題ありません。三階の美容室は月末までに必ずお金を持ってきてくれますし、そうしたらミズシマさんは領収証を切ってくれるだけで大丈夫ですから。五階のエステサロンと六階のブティックは銀行振込なので、何も問題ありません。トイレや廊下などの共用部分については、日曜以外毎日、掃除してくれるおばさんがいます。あとミズシマさんをお願いしたいのは、画廊の中の掃除と接客、それからガスや水道・電気メーターを見にくる人が来たら、一緒に立ち会うことくらいでしょうか。少し特殊な、鍵のかかった場所にあるものですから……あとはボイラーの点検とかエレベーターの点検時にも、鍵を貸したり書類に判を押したりすることがあるかなって思います。まあ、画廊の事務所のほうにそこらへんのビルのメンテナンスについてのマニュアルがあるので、軽く目を通しておいてください。それと、七階が今空室になっているので、時々中を見たいという人が来たら、案内してほしいんです。一応今、バーをやりたいという人がひとりいるんですけど、断ろうと思ってますから」

「どうしてですか？」と、何気なく俺は聞いた。

「飲食店とか、夜の商売っていうのは僕はどうもね」

吾味さんは、ごくごくと水を飲み干して言った。

「このハワイアンも料理自体はとても美味しいのに、これだけ流行ってないんですよ？それなのに、バーなんてやって流行ると思いますか？その人はどうしてもこの場所がいいって言うんですけど、もう二十年もイタリア料理店で修行して、その間に貯めたお金をすべて注ぎこんで商売をはじめると聞いてたら――やめておいたほうがいいって僕としては言いたくもなりますよ。もちろん、保証金というのがあるので、向こうが店を続けられなくなってテナント料を踏み倒したとしても、オーナーである僕自身の懐は少しも痛みません。でも、やっぱりこう、どうも良心が痛みますから……あと、他のビルを見ていると、バーとか夜の仕事をしている店って面倒を起こすことが多いんです。酔った客が共用部分にある何がしかの物を壊したとかなんとかね」

「吾味さん、お酒のほうは結構いける口ですか？」

俺は思うところあって、ふとそう聞いた。

「いえ、僕は酒なんてものは一滴も飲めません」

そう答えてから吾味さんは、アイスコーヒーか他の飲み物を追加で注文してはいかがですか、と俺に促した。どうせ何杯飲んでもただなのだから、と。

俺はイチゴサンデーを追加で注文している吾味さんのことを見ながら、（この人は信頼できる人だ）と確信するに至っていたかもしれない。

あとは、吾味さんがイチゴサンデーを食べ終わるまでの間、彼の恋人の話を聞いたのち、エレベーターで一階まで下りて、画廊のガ口のほうで細かい仕事話の続きをするということになった。

そして俺は、大理石をふんだんに使った画廊の一階で、受付のカウンターごしに自分が結局お金を受けとらなかった絵——〈砂漠のカタストロフ〉が飾られている壁を眺め、その絵にこう問いかけられている気がした。

『本当に、これで良かったのか？』と。

それは、吾味さんが事務所で書類の探しものをしている、ほんの五分ほどの間のことだった。『おまえの言いたいことが、俺にはわかっている』と、俺は自分の描いた絵に対して答えた。『ここはアフガンのような砂漠地帯じゃない。でもあそこにあったのとまったく同じものが、この世界にもあるとおまえは言いたいんだろう？銃を片手に殺し合いをしているわけじゃないが、巧妙に隠された形で人は血を流しながら生きている……目に見える形で大勢の人が死ぬという形のカタストロフも悲惨なものだが、こちらにはこちらの、目に見えない形で起きるがゆえに、誰にもどうにも出来ない種類のカタストロフがある。そのうちのどっちがいいかと聞かれて、俺はこちらを選んだ。もしかしたら、こっちの砂漠世界のカタストロフのほうが、よっぽど悲惨なのかもしれないのにな』

そのことをわかっていればいいと、自分の描いた絵に言われた気がして、俺は思わず溜息を着いた。

新しく借りたアパートの敷金や前家賃などは、ミチルが自分の貯金から出して支払ったものだ。

俺は以前と同じように内装美術の仕事などがあればいいと思いつつ、二年も日本を離れていたから——この不景気にそううまく事は運ばないだろうと思ってもいた。

もし自分ひとりなら、正直いって生活のことはどうにでもなる。

でもミチルには、来月以降の家賃のことで心配させたり、彼女の稼ぎを当てにするようなことは絶対したくなかった。

そして何より、俺には「絵を描きたい」という欲望があった。

二年の間、子供に絵を描くのを教える以外で、俺は絵筆を取ったことはない。その二年の間に創作意欲がマグマ溜まりのようになっていて、今にも爆発しそうなのを、俺は自分の身内に感じていた。

だから、もし月十七万というこの仕事が最終的にうまくいなくてもいい、自分がこれまでに描いた絵がいつまでたっても一枚も売れないままだったとしてもいい、とにかく俺は〈今〉絵が描きたくて仕方なかった。

それが吾味さんの申し出を受けた、俺にとって一番重要な動機だったかもしれない。

「あのさ、ミチルがもし結婚式を挙げたいなら……そう出来なくもないって思うんだけど、ミチルはどうしたい？」

ごはんとお味噌汁に魚、それに野菜という、実に質素でつましい食事をしながら、俺はTVのニュース報道を眺めつつ、何気なくそう聞いた。

タクシーの運転手が山奥まで走らされた揚げ句、そこで後ろから首を切られて殺されたというニュースだった。

盗まれた所持金は七千円ちょっと。

なんともいえない、虚しい犯罪だった。

「わたし、前にもレンに言わなかったっけ？友達にもさー、よく聞かれるんだ。結婚っていうのは一生に一度あるかどうかの、一世一代のイベントなんだよ！みたいに。でもあたし、小さい頃からそういうことに全然興味なかったの。結婚に興味ないなんて言ったら、「本当は興味あるくせに強がっちゃって！」とかって絶対思われるでしょ？でもね、本当にそういうの、あたしにとってはどうでもいいことよ。何より、レンみたいな自分には過ぎる格好いい人が一緒に住んでくれてるってだけでも――あたしには奇跡だもん。これでもしレンが「結婚みたいな古くさい制度に縛られたくないから、一緒に暮らすだけにしよう」って言ったとしても、あたしは満足だったと思う。どうせ宮坂さんあたりが何か言ったんでしょ？でも、気にしないで、本当に」

「そっか」

やはり以前聞いた時と同じく、ミチルが無理して嘘をついているようにも思えなかったので、俺は籍を入れただけで良かったのだらうと判断した。

正直なところを言って、ミチルは俺がこれまでつきあった女性のうちの、どの系統にも属さない女だったかもしれない。

真っ黒に日焼けした顔の、ブルカを被った彼女のことを初めて見た時――俺が思ったのは次のようなことだった。

彼女となら、変に恋愛云々ということ抜きにして、対等なパートナーとしてやっていけそうだし、向こうもクソ暑くクソ忙しい環境の中で、そんなことを思っている暇も余裕もないだろう、と。

まあ、その後結局そうなったのは、自然な流れだったと俺は思っている。

当然のことながら、ああした環境下では、自分のことをうまく取り繕ったりだとか、表面だけ綺麗に見せかけるとか、そういった社交術はほとんど効果を発揮しない。

もちろん、向こうのイスラム文化に対して敬意を払うといったことは極めて重要なことではある。けれど、そういう意味ではなくて――俺は下痢になった時ブリブリいうケツの音を彼女に聞かれたことがあったし、ミチルがゲロを吐いて倒れた時、そんな彼女を介抱したのは俺だった。

俺がミチルとの結婚を決めたのは、一言でいえば彼女の性格に裏・表がなかったそのせいだったかもしれない。

いや、もうお互いに裏も表も見せあう関係になったので、それが自然と恋愛に発展した……と言ったほうがよかっただらうか。

まあ、随分と先の話のことではあるけれど、俺はもしミチルが年をとって認知症になったとし



ても面倒を見れるだろうし、俺が脳梗塞で倒れた場合、ミチルは半身不随の俺を文句も言わずに面倒みてくれるだろう——といったようなことを思って俺は彼女にプロポーズした。

これが一時的な恋愛の火花であれば、いずれそれは消えてしまうだろう。

でもキャンプファイヤーのような激しい盛り上がりはなくても、俺はミチルのことが好きだったし、それは恋人というよりはもしかしたら＜同志＞に近い感覚だったかもしれない。

それと、ミチルに対して俺は、自分でも気づかないうちに何がしかの「救い」に近いものを彼女に求めていたらしいことに、俺は彼女と初めて寝たあとで気づいた。

「真に永遠で、女性的なるもの」という言葉を俺が初めて知ったのは、確かマーラーの交響曲を聴いていてだったと思う。つまり、俺にとってそれはおふくろの与えるゴッドマザー的なものとは正反対の意味での＜母性＞ということだった。

十七歳の頃、マーラーの交響曲を聴きながら、もしそんな「真に永遠で、女性的なるもの」を与えてくれる女がいたとしたら、自分は是非ともそんな女性と結婚したいと思っていたのだ。

もっとも、詩人がいい恋愛詩を書いているのは、大抵は架空の女性が相手である場合が多いので——仮にモデルとなる女性がいたとしても、そこには彼の理想像が塗りこめられている——そういう意味合いにおいて、俺はこの世に「真に永遠で、女性的」な本当の女など、実在しないと当時から思っていた。

現実に目に見えないものであればこそ、それをまるで天国のように慕い求める心理が男にはあるのだろう、と。

俺は小さな頃から漠然と、「いつか人を殺すかもしれない」と思っていて（実際には、ネズミー匹殺したことはなくても）、心の中でずっとある種の殺人劇を何度も繰り返していた時期がある。

ヒルコの神、というのをご存知だろうか？

ヒルコは古事記において、イザナミとイザナギの間に最初に生まれた神なのだが、不具の子であったがために、すぐ島流しにされてしまうのだ。

俺はこのヒルコの神とかいう不具の、手も足もない人間のなり損ないのような奴を——よく心の中で何度もナイフで刺し殺していた。何故そんなことをしていたのかというのは、俺自身にもよくわからない。

もちろんヒルコは神なので、人間にナイフで刺されたくらいでは死んだりしないし、忘れた頃に俺がもう一度こいつに会いに来ると、ヒルコの傷はみな癒えていた。

そして奴には手も足もないので、当然俺に逆らったりすることもできない。そこで俺は安心して復讐を恐れずヒルコいじめが出来るのだが、あいつはいつもただ「ピギャーピギャー」と赤ん坊のように泣き叫ぶというそれだけだった。

ヒルコは本当に可哀想な奴だ。受験勉強に苦しむ俺なんかより、ずっとずっと哀れな奴……何故なら実の親にさえその存在を認めてもらえなかったのだから……。

けれど、この俺の心の中におけるヒルコいじめは、マーラーの交響曲を聴いた時に、ある種の変化を迎えたといっている。

俺はヒルコの奴をいじめながらも、いつも渴いた心の奥底で＜救い＞を求めていた。

いつか、天使のような人が現れて——つまり、それこそが真に永遠で女性的なものの化身——ヒルコをいじめている俺のことを抱きしめてくれるのだ。

彼女は「なんていうひどいことを」と言って俺をぶつでもなく、「あなたのしていることは最初から最後まで見ていましたよ」と裁くことすらなく……ただ暖かく優しい胸に俺を包んでくれる。そして当然のことながらヒルコのことにも救ってくれるのだ。

俺が手も足もなく抵抗できない存在のことをいじめ尽くしていたと知っていて、そんな俺のことを彼女は赦し、さらには愛してさえくれるのである。

そして俺は、心の底から後悔の涙を流す。「ヒルコ、ごめんね。こんなにいっぱいひどいことして、ごめん」と。

うまく説明できないのだが、それこそが特に宗教を持たない俺の信じる〈救い〉と呼ばれるものだった。

ミチルと初めて寝た時、何故か俺は随分長い間忘れていた、そのヒルコのことを思いだしていた。

それから微かに唇の開いた彼女の寝顔を眺め——ほんの少しだけ、残酷な物思いに耽った。

つまりは、ミチルの中にこそ俺は「真に永遠なる、女性的なもの」があるのではないかと想像していたのだけれど、彼女の中にもそれはないということに、俺ははっきり気づいてしまったのだ。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

あたしが三十歳の時、弟の明良は二十六歳で結婚した。

そして二年が過ぎ、あたしが三十二歳になる頃――突然電話が鳴った。

母さんと嫁の間で板挟みになっていてとても苦しい、だから相談にのってもらえないかと弟のアキラは言った。

その頃、あたしは「嵐の中で抱きしめて」という陳腐なタイトルの（でも中身は面白い）ドラマの脚本を書いている最中で――「悪いけど、そんな暇ないわね」というのが本音ではあった。

ベルビュー荘をでたあと、二度ほど引っ越しをして、今あたしは昔の男が買ってくれたマンションと同じくらいの場所に住めていたとっていい。

今ではその頃と同じくらいの量の靴やブランド服に囲まれることが出来ている……違いといえば、男に買ってもらったか、自分で買ったかというそれだけのことだった。

そういえば、レンがアフガンから帰ってきて初めてうちへ来た時――こう言っていたことがあったっけ。

「まあ、自分で働いた金で優雅な暮らしをしてるんだらうから、何も言えないけどな」

呆れたような溜息を着き、何も言えないと言いながらもやはり奴はこう言った。

「犬は自分が吐いたゲロに再び戻るって言葉があるの、知ってるか？おまえ、ベルビュー荘でなんにも学ばなかったとか言わないよな？金もなく友もなく恋人もなく……でも、そこから夢を見つけたとか、俺の中じゃあそういう美しいストーリーが生まれていたんだけどな」

「べつに、いいじゃないの」

あたしはレンの毒舌にも気分を害することはなかった。

何故とって、結婚するためとはいえ、レンが日本へ戻ってきてくれたことがとても嬉しかったからだ。

「ボロは着てても心は錦って言うでしょ？あれはね、着る物も心の中も錦なのが本当はいいけれど、今の自分は超貧乏で錦なのは心だけ……みたいな意味なのよ、たぶん。ベルビュー荘にいた頃のあたしは、ちょうどそれだったわけ。でも今はお金も手に入って着る物も心も錦になりましたってこと。アフガンで砂にまみれて貧しい生活を送ってたあんたには、わかんないでしょうけどね」

「ああ、わっかんねーな」

レンの奴は巨大なクマのぬいぐるみを脇へのけると、白い革のソファに腰かけている。

「クマちゃん！」

あたしは即座にレンの奴がどけたクマのことを抱きしめに走った。

まるで、ここぞとばかりに。

「なんてことすんのよ、レン。あたしの大事な大事なクマちゃんに！！」

「なんだよ。クマのぬいぐるみ虐待防止命令とかいう法律が、俺のいない間に日本では可決されたのか？」

べーっと舌を出してやりながらあたしは続けた。

「このクマちゃんはね、あたしが今つきあってる彼がくれたものなの。彼のかわりに大切にしているんだから、いじめたりしないでちょうだい！」

「いじめっておまえ……邪魔だからちょっとよけただけだろーが。っていうかおまえ、また男変えたのかよ、このビッチめ」

「ふーんだ。あんたこそ、結婚するんでしょ？テニスコートでパンチラしない女と。その点あたしは違うわよ。クマちゃんとはね、スカッシュクラブで知りあったの。スカッシュって、有酸素運動としてすごくいいのよ。で、クマちゃんはスカッシュコートでバンビのようにすらっと足の長いあたしと恋に落ちたってわけなの」

「ふーん、あっそ。なんにしても可哀想なクマ公だな。こんなビッチなバンビになんの間違いから惚れたのかは知らないけど」

――レンとあたしの会話というのは、大体いつもこんな感じだ。

あいつがアフガンにいる二年の間にわたしは奴の言うとおりに何人か男を変えたり、事実ビッチと呼ばれても仕方ない人生だとも思う。

でもレンは知らないだろう。もしいつかレンが帰国して、その時あいつに恋人の影がなかったら、わたしが何を置いてもレンとそういう関係になりたいと思っていたことなんて。

なんにしてもあたしは、レンが結婚するという相手のことが気になって、かなり強引に奴の新婚家庭へ押しかけていったことがある。

その時にレンの結婚相手の飛鳥ミチルさんに対してわたしが感じた第一印象というのは――（あんまり美人じゃない。よかった、バンザーイ！！）というものだっただろうか。

もちろんこれは、相手があんまり美人じゃないから、これから自分にレンのことを向かせられる可能性があるとか何とか、そんなことじゃない。

単に、人道支援なんていうものを行っている上、非の打ちどころもない美人だったりしたら、わたしの心の中で何かがとても惨めだという、そういう話。

ミチルさんはわたしと会うなり、「出来れば三十秒で帰ってほしい」といったような、困惑し

た顔をしていたけれど、もしわたしが彼女の立場なら、ミチルさんとまったく同じことを思ったに違いない。

愛はあるけど、ボロいアパートの二間しかない狭い部屋、そこで「お客さんが来るってわかってたら、ちゃんとお茶菓子用意しておいたのに」などと言われつつ、ぼりぼりとせんべいを食べるわたし。

「レン、あんたって意外に甲斐性ないのね。まさかとは思うけど、これから生活保護でも受けて暮らしていくつもり？」

「馬鹿言え。就職先くらい決まってるって。ミチル、こんな奴に茶なんか出す必要ないぞ。というより、こいつが帰ったら、塩でもまいとけ」

「ひっどーい！！なんなの、あんた。せっかくオトモダチが心配して遊びにきたっていうのに！」

「嘘つけ。大体俺とあんたが友達だったことがあるか？」

「あら、あたしとあんたがもし友達じゃないなら、一体なんだっていうのよ？」

差し出された麦茶を飲みつつ、あたしはレンのことを軽く睨んでやった。

「たぶん、ただの知り合いだろ。それが昔同じ下宿で暮らしてたよしみってやつか？どっちにしろ、俺これから用があるから、さっさと帰ってくれ。駅までなら一緒に歩いていけるだろ」

「ふう〜ん、あっそ。なんかごめんなさいね、新婚家庭にお邪魔虫が突然やってきたみたいで... ..あたしって、あんたにとってはただの知りあいクラスってわけね、友達でもなんでもなく」

「わかったよ、友達ってことにしとけばいいんだろ。っていうか、人んちに来てせんべいの食べカス、そんなに大胆に飛ばすなって.....まあ、べつにどうでもいいけどな」

——この時のレンの態度というのは、ベルビュー荘の大事な住人たちを守ろうした時と、大体似たような反応だったとっていい。

ビッチの吐く腐臭に清らかな妻が感染したら大変だとか、そんなふうにいるのが見え見えの態度だった。

そして駅まで一緒に歩いていきがてら、あたしはレンに「ミチルさんは、真剣にテニスの試合に熱中するあまり、パンチラのことなんて考えてもみないんじゃない？」と言ってやることにした。

そしたらあいつ、なんて言ったと思う？

「ああ、だから好きなんだ」

だって！！まったく、ムカつくったらないわよねえ？

あたしは電車がやってくるまでの間（ちなみにレンとは乗る方向が逆だった）、自分には愛しのクマちゃんがいて、たぶん彼と結婚するかもしれない、なんていうことを奴に話していた。

そして、あいつと別れたあとで泣いた。

もうとっくに諦めたつもりでいたのに、あらためてこれが現実なのだ知り、それから二週間は感情的に浮上できないまま、自分の部屋で暗く過ごした。

といってもまあ、今ではすっかり立ち直ったとはいえ.....恋のボディブローはあとからじわじわ利いてくるぜ、お嬢ちゃん？てな具合で、その後もレンに会うたびに、奴の幸せそうな顔を見

るたび、あたしは顔は笑っていながらも心の中は微妙だということが、何度かあった。

そしてそのたびにあたしのことを救ってくれたのが、恋人のクマちゃんと、ドラマの脚本を書くという仕事だったかもしれない。

実際のところ、人間幸せなばかりでいると、ろくなものなど書けやしない。

そういう意味でレンに失恋したのは悪いことばかりとは言えなかったけれど、もしあいつがいつか「実は俺、離婚することになった」なんて言おうものなら――わたしは「サンクス、ジーザス！！」とばかり喜ぶに違いなかった。

一応、表面上はその＜喜び＞をひた隠す礼儀くらいはわきまえていたにせよ。

なんにしても、あのレンが結婚を決意したほどの女性なのだから、まあそんなことはありえないとわたしはよくわかっているつもりだ。

だから、そうした事情について何も知らず、とにかくひたすらわたしの元気ができるようにしてくれたクマちゃんと、結婚しようかとわたしは今かなり本気で考えている。

ちなみにこのクマちゃん、レンに見栄を張るためにあたしの脳みそが考えだした架空の人物ではない。

とりあえず、彼については後述することにして――今は弟と彼の抱える問題に一旦焦点を当てたいと思う。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「嵐の中で抱きしめて」は、ドラマの第一回目が放映になっているというのに――まだ八回目までしか、脚本が書き上がっていなかった。

まあ、視聴率があまりに悪かった場合は、そのくらいで打ち切りに近い感じになるとはいえ... ..あともう少して書き終わるといところで弟から電話が来、あたしはかなりのところイライラしていた。

クマちゃんにも、この種のことでかなり八つ当たりをしているが、童話に出てくる心温かいクマのように寛容なクマちゃんは、そのたびに優しく笑って許してくれる。

「うん、人気脚本家ってのは大変なもんさ。執筆中はナーバスになるのも無理ないよ。わかってる.....ホテルのスイートを予約しておいたから、仕事が終わったらそこで一緒にリラックスすることにしよう」

なんていうことが、これまで数えきれないくらいあった。

つまり、わたしが今目指しているのはその地点だった。クマちゃんとお風呂に入るバンビ、お礼に彼の背中を流してあげるの巻といったところ。

でも、弟から「助けてくれ、姉ちゃん」なんて言われてしまうと――父さんの葬式にも呼ばれなかったあたしに、今さらそんなこと言われてもねえ.....などと冷たく突き放すことも出来ない。

第一、弟のアキラがもしあの日、「底辺で這いつくばってる」発言をしなかったとしたら、あたしは今も彼のいう底辺社会とやらで男に頼って生きる生活をしていたかもしれないのだ。

そういうこともすべて考えあわせ、とりあえずあたしは弟から電話のあった一週間後、随分久しぶりに実家へ戻ることになった。

不動産業を営んでいる隣のハゲ親父は、ジュリエッタの死後、今度はチャウチャウを二匹飼っ

ていると聞いていたけれど——名前をなんていうのか、あたしはあとで弟に聞いておかなくちゃと、そんなことを思いながら実家の敷居を跨いだ。

「姉ちゃん、ありがとう。恩に着るよ」

「あんた、一応言っておくけど、これは大きな貸しよ。大体、あたしが帰ってきて、あの母さんがいい顔するはずないんだから」

「そんなことないよ。母さん、姉ちゃんが脚本したドラマ、毎週欠かさず見てるくらいなんだからさ」

弟からそんな言葉を聞かされても、あたしはちっとも嬉しくなくて、溜息がでるばかりだった。

母さんは昔から世間体といったものをとても気にする人で——父さんが亡くなった時、あたしはもうキャバ嬢ではなかったのに、弟からそういう関係の仕事をしていると聞いていたがゆえに、親戚の手前あたしを葬式へ呼ばなかった。

もともと、あたしはそのことで母さんのことを怨むつもりはない。

十八の時に完全に家を出て以来、ずっと実家へは寄りつかなかったのだから、当然の報いともいえよう。

いや、報いという言い方はおかしいだろうか。実をいうとあたしは、父さんが心筋梗塞で突然亡くなる一週間くらい前に、某高級デパートで偶然にも父に再会していた。

六十五歳で退職し、その後「え？それってもしかして天下りなんじゃ……」という某企業に嘱託社員として出向いていた父。

その頃あたしは「ロマンス通り113番地」という脚本を書き上げていて、今度それがTVで放映になると父に伝えることが出来て、本当に良かったと思う。そしてデパートの最上階にあるレストラン街で食事をし、あたしは父さんととてもいい時間を過ごしていた。

そうなのだ——あたしと父さんとの間の関係というのは、母さんが間に挟まるからおかしなことになるというだけで、彼とあたし自身の間には関係性として歪んだようなところは一切なかった。

それというのも、父さんは母さんとはまた別の意味で頭の古い人だったために、「女の子は成績悪くても幸せな結婚が出来ればそれでいいよ、うん」という考えの持ち主だったのだ。

今もよく覚えているが、偏差値の高いとてもいい高校に通うブスの姉妹に、あたしは紹介されたことがある。確かあたしが高校一年くらいの頃のことで、母さんならばわたしの通う高校名を人に言う時、実に微妙な顔の表情をするのだけれど——父さんは違った。

街で偶然ちょっと通りすぎた父の部下は、「こんにちは」と言い、それからブスの姉妹にも挨拶させ、意気揚々と偏差値の高い高校の名前を告げた。そして父もまた、わたしの通う3・5流の高校の名前を告げて、その家族連れと別れたのだけれど、父の顔はどこかとても誇らしげだった。

父さんはもしかしたら、いい高校に通うブスの娘よりも、3・5流の高校に通う美人の娘のほうが誇らしかったのかもしれない。もちろん彼はとても温厚な人なので、わざわざそんなことを口にだして言うような下品な人物でもなかったけれど。

ただ、わたしは嬉しかった。父が自慢に思えるような美貌が自分には備わっているのだという



、そのことが……。

さて、前もってあたしがやってくるとわかっているにも関わらず、ろくに玄関にも出迎えにこない、母さん&弟の嫁。

アキラに聞いたところによるとどうも、母さんとアキラのお嫁さんというのは、毎日のように冷たい戦争を繰り広げているのだそうだ。

いっそのこと、お互いにお互いを出刃包丁でグサッ！と刺しあえれば、決着がつくのに……と思うことすらあるとアキラが言うくらいだから、これは相当に凄まじいものがあるのだろうと、あたしはそう覚悟していた。

そして居間にあたしが入っていくと、母さんは意外にも敵意剥きだしといった顔の表情はしておらず、きのうもおとついても、あるいは十年以上昔からずっと、あたしはこの家にいたとでもいうような顔つきをしていた。

(やれやれ。一体これはどういうことなのかしらね?)

『母さん、キャバ嬢をしている娘を父さんの葬式に呼ぶのは恥かしかったんでしょ?』なんていうことをいつまでも根に持つほど、あたしは暗い人生を送っていない。さらに遡って、『高校の時、あたしの通ってる学校の名前を人に言うのが恥かしかったのよね、母さんは』などと恨みごとを言うつもりもなかった。

「えっと、遅くなっちゃってごめんなさいね。ちょっと車が渋滞に巻きこまれてしまったものだから……え〜っと、これは……」

あまりに雰囲気寡黙なので、あたしにしては珍しく、率先して機嫌のいい声をだしてしまったほどだ。

弟は、毎日この空気の中で食事をしている俺の苦しみを察してくれという目つきをしているし、弟の嫁の千鶴さんは、あたしに会っても挨拶するでもなく、つーんと澄ました顔をしている。そしてそういう彼女の顔を見て、あたしはあるひとつのことを察していた。

たぶん彼女は、すでにわたしが母さんから嫁の悪口をくさり聞いて、その言い分を全面的に信じているものと勘違いしているのだ。

とはいえ、弟の言っていたことは大袈裟でもなんでもなく、母さんが近所の人に嫁に対する不満を言い触らしてまわっているのは本当なのだろうと――あたしはその食卓の品を見て思った。

つまり、母が近所の人に言い触らして千鶴さんが怒っているというのは、次のようなことだ。

『わたしはそのうち、嫁に餓死させられる』

わたしが座った椅子の前には、ごはんと海草の味噌汁、それにほたての刺身が三切れ、それに大量のサラダがボールに入ったまま、どんと乗せられていた。

わたしにしてみれば、この時点で笑いたくて仕方ないくらいだったけれど――この現状が川上家の地獄、弟の苦しみの原因なのだと思います、なんとか真剣な顔で対応しようと必死に努力した。

「ねえ、これどう思うよ?今日は久しぶりに娘が来るから、せめても少しは見栄を張って、天麩

羅なんてどうだろうってあたしは言ったんだよ。でも千鶴さんときたら、「いつもの食事にして、お姉さんの意見を聞いてみたい」なんて言うんだから。それで、サクラ、あんたはどう思うの？」

「どうって……」

あたしはメチャメチャ薄く切られたほたての刺身を見て、笑いたいのを必死で堪えた。

食卓の上には、醤油やソース、味の素などの各種調味料の他に、わさびのふりかけや味付けのりなどが置いてある。ようするに、ほたての刺身だけで満足できなければふりかけでもかけると言うことなのだろう。

「まあ、ヘルシーな食卓でいいんじゃないの？野菜は一日ひとり350グラム食べる必要があるとかって、テレビのコマーシャルでやってたわよ？このボールの中にはそのくらい野菜が詰まってるっていいんじゃない？」

「信じられないね、この子は！！」

母さんは絶対に自分に味方してもらえると信じていたのだろう、今にも箸を投げださんばかりにして、手を震わせていた。

「アキラから一体どこまで聞いているのか知らないけど、うちは毎日コレなんだよ！ううん、毎日ほたての刺身が三切れって話じゃない。肉じゃがとか、魚が一尾なんていう日もある。でも肉じゃがと魚と一緒に出てくることはないの！母さんはね、肉が食べたいんだよ。そしたら野菜もたっぷり食べる。けどね、こんな野菜だけで一んと出されても、全然食は進まないの！常識的に考えたら、誰にでもわかることでしょ！？」

まあ、確かに母さんの言うことももっともだとは思う。

でもあたしは、母さんがどんな人かというのを、よく知っているので一々にどんな素晴らしい人がアキラの嫁になったところで、彼女は絶対文句を言うに違いないのだ。

むしろ、ちょうどよく運命にお灸を据えられたのだろうとしか、今のあたしには思えない。

「ま、食べ物があるだけ幸せって思えば？昔、母さんがあたしたちによく言ってたみたいにね。農家の人の苦労をよ〜く噛みしめてごはんを食べなさいって話。わたしだったら、毎日三食自動的にごはんが出てくるってだけでも感謝するな。それに満足できなかったら、自分で好きなものを買ってきたらいいんじゃない？」

流石にここまで言うのは、少し意地悪だったかもしれない。

何しろ母さんは、近ごろ足腰が弱って一あまり長い距離を歩けなくなってきたと聞いたからだ。

かといって、仲の悪い嫁の車に乗って買物するのも嫌だし、あれ買ってきてくれこれ買ってきてくれというたび、毎日年金からお金を出さなくてはならない。

そもそも最初から食費としてそれ相応の金額を毎月まとめて払っているにも関わらず、だ。

「ああ、まったくもう、娘なんて持つものじゃないよ！」

ついに母さんの口から本音が飛び出した。

「肉、肉、肉。母さんはね、お肉が食べたいの！！汁気たっぷりの、ジューシーなお肉！！ねえ、サクラ。おまえどっかレストランにでも連れていっておくれよ。なんだったら、ハンバーグだっていい。頼むからさ、ねえ……」

一瞬、母さんはもしかして認知症になりつつあるのかと思ってしまったけれど、そうではなかった。

何しろ、千鶴さんが川上家のキッチンに立つようになって以来――ステーキとかハンバーグといった肉類は、一度として食卓に上がったことがないというのだから。

「うん、わかったわよ、母さん。ほら、泣かないで……そんなことしたら、千鶴さんがまるで悪者みたいじゃないの。そうね、今度の日曜日にでも、迎えにくるわ。そしたら焼肉でもなんでも一緒に食べることにしましょう。よかったら、みんなで……」

ところが、ここまで言っても、千鶴さんのつーんと澄ました顔に変化はまるで生じなかった。(あーらら。この子もしかして、本当はかなり変わってる子なのかしら?)

アキラはといえば、言いたいことは山ほどあるけど、今は言えないといった顔をして、黙々とごはんを食べ、またボールの中の野菜を食べている……確かに毎日こんな調子で会話がなかったら、彼としてもつらいに違いなかった。

母さんは、あたしのことを「肉を食べさせてくれる救世主が現れた」といったような顔で見ると、その後、あたしのドラマのことに對して話を向けた。「あのドラマの主人公たちって、みんな不倫とか浮気をしてるだろ?あたしはああいう内容のドラマは関心しないねえ。もし父さんが母さんの知らない間に誰かと浮気なんてしてたら、母さん気が狂って、今ごろ自殺してるよ」とか、そんな話。

そしてここで、わたしは弟の嫁の千鶴さんに対して、あるひとつのことに對して少しばかり感心していた。

自分の夫の姉が、そこそこヒットしてるテレビドラマの脚本家だなんて知ったら――たぶん少しは顔の表情を変えて「芸能人のお知りあいなんているんですかあ〜?」みたいに聞いてくるかもしれないと思っていたのだ。

でも彼女は相変わらずつーんとした顔のまま、弟とさえ話をすることはなかった。(やれやれ。こんな調子でいつか、あたしは義理の妹と仲良くなったりなんて出来るのかしら?)

あたしは内心ではおかしくてたまらない気持ちのまま、その日の夕食後、久しぶりにやって来た実家をあとにすることにした。

そして帰ろうとするあたしのことを、アキラがカーポートまで追ってくる。

そこにあたしは自分の愛車のフェアレディZを駐車しておいたのだ。

「姉さん、今日は本当にありがと……その、さ。千鶴は菜食主義者ってわけじゃないんだけど、肉っていうものを一切口にしないんだ。で、俺は昼間に会社の外でハンバーガー食べたりしてるんだけど、母さんはそういうわけにもいかないからな」

「そうね。正直ちょっとびっくりしたわ。だって母さん、わたしが家にいた頃でもそんなに肉が好きってわけじゃなかったし……出ても週に二回くらいだったわよね?でもあたしも、もしかしたら肉を食べられない状態が一年以上も続いたら――母さんみたいになるかもしれないわ。ところであたし、千鶴さんのブログ読んだわよ」

そうなのだ。母さんが千鶴さんのことで怒っているのは、肉のことばかりではなかった。

彼女は何も、姑とのいざこざをブログに垂れ流しているわけではなく、＜電腦アイドル・綾坂千鶴＞として活動中なのだ。

「うん……なんかさ、近所の誰かにそれがわかって、ちょっと噂になったらしいんだよ。母さんはパソコンなんて電源がどこにあるのかもわからないような人だからさ、俺はずっと知られずに済むといいなって思ってたんだけど、よりによって隣の奥さんがさ」

と言って、アキラはどこか怨めしげに隣の立派な御殿を眺めやる。

「母さんに教えてくれちゃったんだよな。しかもノートパソコン持参でさ。で、母さんはそのことに対する怒りもあるし、肉が食べられないストレスもあるしで——つい思わずポロツと言っちゃったわけ。よくあるうちの嫁はあーだこーだっていう不満をさ。で、さらにその話を隣のお節介なババアが近所に広めちゃって……母さんと千鶴は今みたいに口も聞かない関係になってわけ。姉さんはさ、「くっだらない」って思うかもしれない。でもさ、俺の身にもなってくれよ。朝も夜もしーんとして、誰も口聞かないんだぜ？友達に相談したらさ、早く子供でも作れって言われたけど——その、俺……千鶴は不妊症か何かなんじゃないかって思うんだ」

「どういうこと？」

アキラは隣近所の耳がそこらじゅうに張りついているとばかり、声のトーンを落とした。

「俺たち、結婚してもうすぐ二年になるだろ。で、一般的に普通に夫婦生活を送って、二年子供が出来なければ不妊のカップルだって、昔何かで読んだ記憶があるんだ。でも俺、千鶴に病院へ行って調べてもらったらなんて言えないから、まずは恥を忍んで自分が検査してもらうことにした。本当にすごく嫌だったけどさ、たとえば無精子症とかそういうのだったら、俺のほうに子供が出来ない責任があるわけだろ。母さん時々、そのことで千鶴のこころをチクッと刺すようなこと言うんだよ。もし俺に原因があれば、「俺が悪い」ってことに出来るけど、結果はさ、俺の精子は至極正常ってことだったわけ」

「そっか。あんたもツライわね。そういえば昔、うちの店に来た時の悩みはどうしたの？もしかして会社でも生き地獄を味わい、家庭でも……なんていう話なんじゃないでしょうね？」

「違うよ」と、アキラは微かに笑った。「あのあと俺、本社から支社のほうに転勤になってさ。支社って言っても、本社からそんなに離れてない場所にあるんだけど。そこの雰囲気はすごく自分に合ってる、今は割合のんびり構えて自由に仕事させてもらってるよ。だから、そっこのほうは問題ないんだ。でもこっちが……」

そう言ってアキラは、自分の家のほうを振り返った。

「ひとつだけ聞きたいんだけど、あんた、千鶴さんのことは好きなんでしょ？」

「当たり前前だろ。じゃなきゃ誰が結婚するんだよ？」

「うん、それならいいのよ。だったらあんたは、最後は千鶴さんの味方してあげなさい。あんたがあんなほんのぼっちりの食事でも、文句言うでもなくずっと彼女と仲良くやってけるっていうんならね。まあ、あたしは彼女のごことはまだよくわからないわ。ブログを読んでも、ああいうのは全部＜電腦アイドル＞としての発言なんでしょうから、本音みたいのがよく見えてこないしね。もしあんたが母さんさえいなければ千鶴さんと仲良くやってけるのによって思うんなら、あんたたちがふたりで家を出るか、それか母さんをどっかの施設に入れるっていう手もあるわ」

「出来るわけないだろ、そんなこと！」

「ううん、出来るわよ。あたし前に、介護を題材にした二時間ドラマを書くことになった時――色々取材して、いくつかわかったことがあるのよ。一緒に暮らしていてお互い不幸なら、離れるのもひとつの手なのよ。もちろん、あたしは母さんとは一緒に暮らせない。面倒を見るのが嫌とかじゃなくて、本質的に無理っていうのは、あんたが一番よくわかってるでしょ？でも、介護付きマンションの四階と五階にそれぞれ暮らすとかっていうんなら、手を打たなくもないわ。もちろん母さんがこの家を離れるなんて言うはずもないけど、わたしが妥協できるのはそこまでだと思っておいて。実際ね、うちだけじゃなくて似たようなことで悩んでる家族はいっぱいいるわ。最初は見捨てたように思って罪悪感を感じたり、捨てられたと思って恨んだとしても……結局最後はそれで良かったっていうケースも多いのよ。まあ、暫くの間母さんのことは焼肉に連れていったりなんだり出来ると思うけど、わたしの忍耐にも限度があるからね。母さんが自分でそうと気づかないであたしの心の地雷を踏んだりしたら、うまくいくものもいなくなるって可能性は高いもの」

「うん、わかってる……」

それから弟は、あらためて「今日は本当にありがとう」と言ってあたしのことを見送ろうとした。

あたしは車の鍵を開け、運転席に乗りこもうとして――ふと弟にこう聞いた。

「そういえば、隣のババアとハゲ親父は今度、チャウチャウを飼うことにしたんですって？それで、名前はなんて言うの？」

「レノンとマッカートニーだよ」

あたしはさもありません、という顔をすると、微苦笑しているような顔の弟に手を振り、エンジンをかけた。

最後に挨拶代わりにビッと軽くクラクションを鳴らすと、そこここから犬の鳴き声が聞こえてくる……このへん一帯には、犬を飼っている家庭より、飼っていない家庭のほうが少ないのだろうと、あたしはなんとなく不思議な気持ちになりながら、今度はクマちゃんの住むマンションにまで車を走らせることにした。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

本当は、今書いている脚本を最後まで仕上げるまでは、クマちゃんには会わないでおこうと思っていた。

でも久しぶりに実家へ帰ったことで——クマちゃんに聞いてほしいことが、あまりにも増えてしまったのだ。

彼はわたしがいつどんな時に訪ねていっても最上級の歓迎をもって迎えてくれるという、実に心優しく、サービス精神に溢れた男だった。

そこでわたしは途中のコンビニで自分の食べたいものを色々買い（あんなぼっちりの夕食では、流石にお腹がすきすぎだった）、特に携帯で連絡するでもなく、不意打ちで彼の部屋のインターホンを押していた。

「くーまちゃんっ！！あたしよ、あなたのバンビがやって来たわよ～♪」

まあ、誰かがわたしのこの声を聞いたとしたら、99.9%くらいの確率で、「何がバンビだ！」と突っこんでくるに違いない。

でもいいのだ。わたしたちは今をときめくいい年をしたバカップル。

クマちゃんが鍵を開けてくれると、あたしは二十階にあるクマちゃんの部屋まで、エレベーターで上がっていくことにした。もちろん、すでに彼から鍵をもらっているのだから、自分で開けて入っていくことも出来たけど……それはわたしの場合、彼がいない時だけ使うことにしているものだった。

「O h , マイバンビーナ～♪」

パジャマを着たクマちゃんが、両手を広げてわたしのことを迎えてくれる。

クマちゃんは某インターネット企業でCEOをしている、四十二歳のクマに似たおっさんだった。

顔も三枚目だし、年収が億を超えているという以外、一見つきあうメリットがなさそうに見える相手でもある。

けれど、わたしはクマちゃんが大好きだった。

もっとも、彼の年収が億を超えていなかったら、結婚相手として考えたかどうかはわからないけれど。

「どうしたんだい？例の脚本を書き終わったのかい？もしそうなら、盛大にお祝いしないとな。それともヴーヴ・クリコの栓でも抜こうか？」

「ううん、残念ながらまだ脚本は書き終わってないのっ！！でもね、弟に呼びだされて、急遽実家へ行くことになったのよーう。そこで色々あったから、クマちゃんにすぐ報告しなくちゃと思ってやって来たのっ！！」

あたしが尻尾を振る猫のように甘えた声をだすと、クマちゃんはワインクーラーから早速とばかり、シャトー・マルゴーを一本取りだして、あたしに飲ませてくれた。

「これだから、バンビはクマちゃんが大好きなのよね〜♪」

「そうだよ。クマはバンビがぶどうジュースで酔ってるところを見るのが好きなんだ。何故ってとても可愛いからね」

あたしは自分がコンビニで買ってきたお菓子の中から、チーズとチョコレートケーキを取りだした。

バンビはクマと仲良く、なんでも半分ずつにするのが好きなのだ。

「なあに？DVD見てたの？もしかしてえっちなやつ？」

「う〜ん。どうかな.....一応恋愛もので、そういうシーンはあるけどね。そんなに激しい感じじゃないよ」

あたしはソファの上で、クマに抱っこしてもらうような感じで座ると、ふとあることを思いだした。

「ねえ、クマちゃん。パソコン貸してくれる？当たり前だけど、仕事のファイルとか、大事なところは一切触らないから！」

「ああ、いいよ。それに見られて困るようなこともないからね。仕事関係についてはすべて、バックアップを取ってあるし」

「さっすがクマちゃん！」

と言いながら、あたしはクマちゃんの寝室に入って行って、そこからデスクトップ型ではない、ノートパソコンを一台借りることにした。

そしてそれを居間にいるクマちゃんのテーブルまで持っていき、電源を入れる。

「どうしたの？もしかしてここで仕事の続きをするつもりなのかい？」

「ううん、チャウチャウ」

と言ってから、あたしはひとりで大笑いした。

「ねえ、クマちゃん。実家の隣でチャウチャウを二匹飼ってるんだけどー一名前がなんと、レノンとマッカートニーっていうのよ！瓜二つの茶色いチャウチャウの名前がレノンとマッカートニー。やっぱり死ぬとしたレノンのほうが先かしらね」

「ビートルズが大好きなお隣さんか。まあ、ビリーとジョエルとか、マイケルとジャクソン

とか……ボンとジョビーなんていうのもいまひとつだけど、レノンとマッカートニーはなんとなくしっくりくるね。なんでかわからないけど」

「そうねえ。あとはミックとジャガーとか、スティーブンとタイラーとか？確かにどれもいまひとつよね。なんでかわからないけど」

くすくす笑いながらそう言いつつ、あたしは<電腦アイドル・綾坂千鶴>で検索をかけた。

そして彼女のブログを開き、それをクマちゃんに見せることにする。

『電腦アイドル、綾坂千鶴のブログへようこそ！！』

あたしの今の恋人、愛称クマちゃんは、水着姿の可愛い女の子を目にするなり、少しだけ首を傾げた。彼女が一体どうかしたのかい？とでも言うように。

「なんと、この可愛い彼女が、わたしの弟のお嫁さんだったのれしゅよ！！」

綾坂千鶴こと、ちづちゃんがブログ内で使っている赤ちゃん言葉を真似て、あたしはそう言ってみた。

「でね、そのチャウチャウ飼ってる家のババアが、うちの母さんにこうチクったらしいの。お宅のお嫁さん、ちょっと変わったことをやってて、近所でも評判になってますよ、みたいだね」

「なるほどね。ええっと、>>ちづはお肉を食べましゅーん！！お野菜大好きで一しゅ、か。なんとなく、聞く前からもう、何がどうなってるのかわかる気がするな。ようするに、バンビーナのマミーはこのお嫁さんと気が合わないってことだろ？」

「さすが、クマちゃん！！大当たり！！」

どんどんどん、パフパフ♪と言うと、クマちゃんは若干呆れ気味に肩を竦めている。

「で、ほんとにあたしびっくりしちゃった。あたしが母さんと仲が悪いっていうのは前に話しておいたでしょ？べつに何も言わずに黙って結婚式挙げたってどうってことないんだって……でもこの母さんが、「お肉食べたい」って言って、あたしに泣きついてきたの！！もうほんと、びっくりんこよ！！」

「それで、バンビーナはどうするんだい？お母さんと仲直りして、一緒に肉をムシャムシャ食べるのいかい？」

「もう～っ。クマちゃんのその言い方好きだわっ！！大好きっ！！」

そう言ってあたしは、クマちゃんに抱きつくようにして、彼の隣に座った。そしてチュッと彼のほっぺにキスをする。

「でね、わたしこのお嫁さんのことは、今日会っただけじゃどうい子なのかよくわからないんだけど――もしかして、ある意味いい子なのかなって思ったりもしたわけ。わたしにとって一番最悪なのは、芸能人のサインもらってきてって体をクネらせながら頼むような子だもの。でもこの子、そういうタイプじゃないのよ。<電腦アイドル>なんて名乗ってるから、芸能界に興味あるのかな、なんて思うけど……これはあくまで趣味の一貫としてやってる害のないことみたいだしね」

「どうかなあ。俺にはちょっと、この子が病的に思えるね。ある意味、バンビーナのマミーが怒る気持ちもわかるよ。ほら、キリ番のリクエストとして『ちづちゃんの、ミニスカ姿が見たいで～す！！』なんていうのもあるし。で、写真とってアップロードしてプレゼント、だろ？どこの



家の誰かもわかんない奴が、それ見てニヤニヤしてるなんて、俺は気持ち悪くてたまらないね」  
「そうねえ。わたしもそういうのは思ったけど.....自己愛が強いのか、それとも家族の間に問題があって愛されなかったとか.....たぶん何かあるんだと思うわよ。一般大衆に愛されたいとか可愛いわって言われたい、思われたいとかっていう心理の裏にはね」

「それで、弟くんは奥さんがこういうことやってるって知ってるの？」

それまで何があったのか、さっぱりわからないフランス映画では、妻が夫のことを殴り殺していた。

どうも夫が結婚詐欺の常習犯で、他にも重婚している女性が複数いると判明したためらしい。  
「うん。わかってるみたいよ？でも、奥さんにもしサイト閉じろなんて言ったら——離婚されるかもしれないってくらい、彼女が怒り狂うってわかってるから、黙ってるみたい。まあ実際写真で見てのとおり、すごく可愛い子だから、弟が尻に敷かれる気持ちもわかんなくはないかな～なんてね」

「それで君は、一体いつ俺のことを尻に敷いてくれる？」

お望みなら、いつでもという意思表示のために、わたしは再びクマちゃんに抱っこされる形になった。

キスをして、それから彼が力強いクマのような腕によって、あたしのことをベッドまで運んでくれる。

「一体いつバンビーナの脚本が書き上がるか、そのことばかり考えて過ごしてたよ」

彼がパジャマの上着を脱ぐと、そこからは毛むくじゃらの胸毛があらわれる。

そう——クマちゃんの本名は佐々木凜太郎とって、名前のどこかに熊の字が入ってるからクマちゃんと呼んでるわけじゃない。

あたしは初めて彼とこれから寝ようという時、凜ちゃんがどこか恥かしそうにシャツを脱ぐ姿を見て、思った。正直、「その毛皮は最後に脱がなくていいの？」と.....

凜ちゃんがクマのように毛深かったので、あたしはその翌日から彼のことをクマちゃんという愛称で呼んでいた。

彼はそれまであまりに優しく、顔が三枚目という以外、これといった欠点が何もなかったの——（これは絶対何かある）、（いつか決定的な打撃を受けることになるのでは？）と思いつつバンビは種族を超えてクマちゃんにつきあっていた。

でも、目に見える欠点が本当にそれだけだとわかると、バンビはほっと一安心。彼が今までつきあってきた男のうち、誰より毛深くても、バンビーナはそんなことをいちいち気にしなくなっていたとっていい。

ちなみに、クマちゃんがあたしのことをバンビと呼んでいるのにも一応、理由がある。

スカッシュクラブで出会った時、あたしはストレス解消のために壁に向かってかなり強烈なサーブを打ちこんでいた。すると彼が「アルプスの少女ハイジ」に出てくるペーターのように、口笛を鳴らしたのだ。

「Hey, バンビーナ！ナイスサーブ！」

（うえっ、一体どこの寒い親父だろう）というのが、あたしのクマちゃんに対する第一印象だっただろうか。

そしてあたしは彼と試合をし、なんとなく食事をするような話の流れになって――今に至るといわけだった。もう二年も昔の話になるけれど。

まあ、ようするに彼はわたしのスラリと長い足を見て、「バンビみたいに可愛い子だ」と思ったというのが、わたしに対するクマちゃんの第一印象だったっていうこと。

「ねえ、DVDの続きは見なくていいの？」

バンビはクマの手首を縛ると、彼の上に跨りながら、クマの耳元へ囁いた。

「DVDはいつでも見れる……でも君は、忙しい時にはたまにしかうちへ来ない」

「そうね」

バンビに目隠しをされ、もはやなす術なく絶対絶命のクマ。

と思いきや、バンビはクマが一番して欲しいと思っていることをしてくれる。

これのせいでもう、クマはバンビがいないと生きていけないと思っているらしい。

そしてバンビがクマを好きな理由も――実はこのことが理由だった。

クマのあれが実に大きいというのも多少はある……でも本当にはそれは、精神面での問題が大きい。

女がこういうことをすると、大抵の男はこう思う。この女は好色で淫乱な好きものだから、自分から率先し望んで、こうしたプレイをするのが大好きなのだ。

でも、バンビがこれをするのは、正確にはクマのことをただ純粋に喜ばせたいからだ。

そしてクマはそこを他のよくいる阿呆男のように勘違いしたりしなかった――可愛いバンビは、自分を喜ばせることを色々してくれるが、それは彼女が好色で淫乱だからではなく、それは自分に対する純粋な愛情からしてくれることなのだ……。

そのようなわけで、バンビは賢いクマのことが大好きだった。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_ )m)

「あ〜っ！！やっと書き上がったわ〜！！」

あたしは、ドラマの放映が第三回目を迎えた頃、ようやく「嵐の中で抱きしめて」の最終回を書き上げていた。

あたしの脳裏に、クマちゃんがホテルのスイートで大きく手を広げ、にこやかにバンビを迎えてくれる光景が浮かぶ……ああ、そういえば何日か前に寝たあと、国内のホテルじゃなくて、どこか海外に小旅行へ行かないかと誘われていたんだっけ。

どこの国で式を挙げたいかとも聞かれたけど、果たしてどうしたものやらとあたしは思う。

実をいうとクマちゃんは、すでに三回の離婚歴がある——つまり、初婚のわたしとは違って、彼はこれが四度目の結婚ということだ。

だから、式のほうはお金はいくらでも出すし、バンビの好きなようにしたらいいとも言われている。

「でも、好きなようにって言われてもね〜……」

そう言われたら言われたで困っちゃうな、などと、贅沢この上ないことで悩みつつ、あたしは最上級に幸せな溜息を着いた。

「そういえば、レンはどうして結婚式って挙げなかったのかしらね？まあ、あいつらしいっちゃあいつらしいけど……もしあたしが奥さんの立場なら、周囲に借金してでも結婚式は挙げちゃうな。あいつがどんなに渋ろうと関係なく、出来るだけ盛大な式にするわよ」

もちろん、レンの奴が結婚したのはもう二年も昔の話になる。あいつは今、画廊のガ口とかい

うぶざけた名前の画廊で働いていて――自分の絵を二階のギャラリーで売って生計を立てているらしい。

この間会ったのは、春に桜の木公園で元ベルビュー荘の住人たちと花見をした時だっただろうか。

ミドリさんと久臣さん、ミズキくんやほたる、それにアメリカから小山内氏が帰ってきたということもあって――花見の席はなかなか賑やかなものになった。

というより、わたしは小山内氏が帰ってくるとミドリさんから聞いた時には、必ず足繁くベルビュー荘を訪れることにしている。何もこれは、わたしが小山内氏のことを面白い人物として慕っているからというわけではまったくない。目的はレンに会うためだ。

ベルビュー荘に小山内氏が帰ってくると、レンの奴は必ずベルビュー荘へ顔を見せるので、わたしは彼らの中に混じって過ごせる時間が本当に大好きだった。

もちろんわたしにとって何より大切なこの場所へ、レンが奥さんのことを同伴してきたとしたら、わたしも行ったかどうかはわからない。でも毎年恒例の花見であるとか、そうしたベルビュー荘に関する行事にレンは一度もミチルさんを連れてきたことがない……あたしはそのことが嬉しかった。

そういう時、まるで時間の螺子を遡らせたみたいに、あたしはレンと昔の古き良き関係性みたいなものを甦らせて、親密になることが出来る。

そういったような理由から、あたしはベルビュー荘へクマちゃんを連れていく気はなかった。

といっても、結婚式にはみんなに来てほしいので、一度顔を合わせてしまったらそのあとどうなるかはわからない。

なんにしてもこの時、あたしはテレビ局へドラマ最終回の脚本を手渡しにいった、打ち合わせを済ませたその足で――レンのいる〈画廊・ガロ〉へ行くことにした。

目的は、クマちゃんとの結婚を報告するためと、クマ自慢……じゃなくて、彼自慢をするためだったとっていい。

何故とって、レンは奴が結婚する時、あれほどのダメージをあたしに対して負わせた奴なのだ。

だから、逆の立場になっている今、今度はその報復をしてやろうと、あたしはそう思っていたのである。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイトFirst Moon様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「ふーっ。暑いわね。今日って一体何度あるのかしら？」

部屋に籠もってずっとクーラー快適生活なんていうのを送っていると、突然外へでた時、かなりのところ暑さに対する耐性が失われてしまっているように感じる。

『嵐の中で抱きしめて』は、第三回目までが放映になった現在、平均視聴率が19.8%とのことで、最終回の展開についてもあまりとやこう言われることはなかった。

とはいえ、視聴率なんていうものは水物なので、これからどうなるかなんてわからない。

しかも最悪なのは、最終回の脚本を持っていったにも関わらず——プロデューサーに次回作の構想についてまで色々聞かれたということだ。

まあ、とりあえずうまく逃げを打っておいたけど……わたしの中に次回作なんていうものに対する構想は実際のところまるでない。

今は『嵐の中で抱きしめて』をどうにかこうにか破綻なく終わらせたということで、創作能力を使い果たしてしまったような状況だ。うまくいえないけれど、グレープフルーツかレモンを絞り器で絞ってもう一滴も何も出てこないってというような、そんな状況。

だから、わたしがレンに会いたいと思ったのは、そのことが理由でもある。

もちろんクマ自慢ならぬ彼自慢をするというのが第一の目的ではあるけれど、あいつは一体どんなふうにしてそうした創作能力を保っているのか——その秘密を聞いてみたいような気がしたのだ。

「いらっしゃいま……って、なんだ。あんたか」

ドアを開けると、チリンチリンと頭上で鈴が鳴った。

画廊のガロは、クーラーがばっちり効いている環境の、なかなかモダンな感じのする、素敵なギャラリーだったと思う。

あちこちに観葉植物が置かれた大理石の床は、見た目にもとても涼しげだったし、全体としてアールヌーヴォー調の曲線があちこちに活かされた建物の造りをしていて。

そしてレンは、Informationと書かれたカウンターの内側で、何かの書類に目を通している最中だったらしく――あたしがチャンネルのサングラスを外して彼の手元を覗きこむと、彼は即座にそれを隠すそぶりを見せた。

「『なんだあんたか』とはご挨拶ね。仮にもお客さまに対して、その態度はないでしょ」

「あんたに芸術のなんたるかがわかるとは思えないけどな。第一、三十過ぎた女がそんな短いスカートはいてるなんて、見苦しいぜ。銀座のママみたいなケバイ化粧してきやがって」

流石のあたしも、珍しくここでグッと言葉に詰まった。

今日のあたしの格好というのは――確かに、これからホストを買いあさりにいくどっかのマダム風だったということは、自分でも認める。髪の毛は黒と茶とブロンド、それにプラチナのまだらに染まっていたし、グッチの黒の胸元見え見えドレスは、男を誘惑しているようにしか見えなかったかもしれない。

でも、そのくらい暑いのが仕方ないというのが、今のあたしの言い分だった。

「あ～あ、いつも思うけどあんたって、他の人にはわりと寛容な紳士ヅラで接するくせに、なんであたしにはいつまでたってもそう辛辣なのかしらね？」

「さあ、なんでだろうな。もしかしたらあんたが俺のおふくろに似てるからかもな」

「なあに、あんた。もしかしていい年して今もマザコンなわけ？」

今度はレンのほうがグッと言葉に詰まるのを見て、あたしはカウンターに肘をついてニッと笑ってやった。

勝利の笑みだ。

「とにかく、仕事の邪魔になるから――」

レンがそう言いかけた時、入口のドアがまたチリンチリンと鳴った。

そこでわたしはレンの仕事の邪魔にならないよう、ギャラリーの中を少しまわってみることにした。

ガラス製のドアが左右に大きく開かれた向こう側の空間には、大体四十万～二百万くらいの値札のかかった、有名画家の複製品がいくつも並んでいる。たとえばミュシャとかロートレックとか、あるいは印象派のゴッホのひまわりとか、そういった作品。

あたしはその中の、シスレーの絵が少し気に入って、（こういう絵が、クマちゃんとの新居の壁にかかっているのも悪くないかなあ）と思ったりする。

まあ、ただの複製品で十分満足できるあたり、レンの言うとおりにあたしには芸術の素養というか、ようするに見る目がないってことなんだろうけれど。

そしてあたしが隣の部屋にある、＜イラク・アフガン戦争展＞という写真の並んだ部屋に入ろうとした時――不意に、若い女性の笑い声が耳に届いた。

「そうなんですよお。わたしまだ新人でえ～。インターンなんです。だからお給料も安くてこき使われてる感じなんですけど、最近お客さんがあんまり来ないもんだから、チーフもイライラしてて……その、やっぱりあんなことがあった場所だからなんですかね」

「そうかもしれませんがね。なんにしても、そのうち客足が戻ってくるといいですけど」

それからレンは、領収証を切ってその美容室のインターンらしき女に手渡している。

彼女はどこかルンルン気分といった様子で、高く結い上げたポニーテールの髪を揺らしながらガ口から出ていった。

(あーあ、こいつも一体どこまで罪な男なのやら)

「なんだよ。言いたいことがあるんならハッキリ言えばいいだろ？そんな蛇がカエルを睨むような顔して黙ってられると、気持ち悪いぜ」

「あんた、指輪は？結婚指輪をしてないっていうのは、どういうことよ？」

ああ、といったように、レンはカウンターの引きだしの中から指輪を取りだすと、それを左の薬指にはめている。

プラチナ製のとてもシンプルな、見るからに安っぽそうな指輪。

「説明するのも面倒だけど――俺はあんたの考えてるような理由で、指輪をしてなかったわけじゃない。ただ、今はちょっと事務仕事があってここに座ってたけど、平日に客が来るのなんか数えるくらいだからな。俺はその間そっちのアトリエで絵を描いてて、絵を描くのに指輪が邪魔だから外してたっていう、それだけだ」

「ふう～ん。でもあんた今、モテてまんざらでもないみたいな顔してたわよ？あの子も下の画廊にいるミズシマさんって超カッコいいみたいに思ってるような感じだった。それで指輪してないって、変な誤解を招くと思わない？」

「くだらない」と言って、レンはあたしのことを蔑むように見返した。

「あんた、それで一体今日はここへ何しに来たんだ？まさかとは思うけど、俺の浮気調査ってわけじゃないんだろ？」

「その……まあ、今日は、あんたに聞きたいことが色々あってね」

それと自慢したいこともあるしね、とは言わず、あたしはレンが小さな金庫にお金をしまい、彼がアトリエと呼んだ場所へ入っていくことにした。

「うわあ～。中学校の時の、美術室の匂いがするわ！」

「どっかそのへん座っててくれ。今、アイスコーヒーかなんか、持ってくるから」

レンがアトリエと呼んだ部屋には、入って左側の壁にCDがこれでもかというくらい棚に並んでいた。

たぶん五百枚はあると思うけれど、今ギャラリーに流れているクラシック音楽も、この中の一枚なのかもしれない。

あとはレンが今製作中と思しき絵がイーゼルにかかっている――部屋の四隅には色々な画材がゴチャゴチャと置いてある。

レンが今描いているのは風景画で、あたしはその麦の穂がほたるのように光を放って夜空を彩る光景を、その昔見たことがあるような錯覚に陥っていた。郷愁というか、懐かしいと思う気持ちはたぶん、そこにかつてはいたのに、もう二度と同じ場所へは戻れないからこそ起こる感情なのだと思う。

わたしには絵のことはよくわからないけれど、そういう意味でレンの描く絵には確かに、人の心を捉える何かがあると思ってはいた。

「ほら、アイスコーヒーな」

氷のたくさん入ったタンブラーに、並々と注がれているアイスコーヒー。そこにストローをさすと、レンは椅子に座っているあたしの太ももの上に、ガムシロップをひとつ投げてよこした。

「それで、なんの話してたんだっけ？」

「あの……あらためてこういうことって、すごく聞きにくいんだけど」

(本当はクマちゃん自慢をするのが先だったはずなのに) と思いながら、あたしはレンが洗って乾かしておいたと思しき、絵筆を片付ける姿を見守った。棚の中を開けたり閉めたりし、何かを探している様子だけれど、彼が一体何を探そうとしているのかまではわからない。

「なんだよ？あんたの言い分によると、俺はあんたの友達なんだろう？だったら遠慮なくなんでも言えば？」

おまえらしくもない、と彼が暗に言っているのがわかって、わたしは深呼吸した。

レンには本物を見抜く力があるというか——<本当のもの>についてわかってしまう能力がある。

だからわたしは、ずっとレンに聞きたいと思って聞けなかったことを、今初めて聞こうとしていた。

「あの、ね。あんたわたしが脚本書いてるドラマって、どう思う？」

レンは目当てのものが見つからなかったのだろう、パステルや絵の具などが何色も詰まっている棚をパシンと閉めると、あたしと向き合うような形で、背もたれのない椅子に腰掛けていた。

「いや、どう思うって言われてもな……」

レンは髪をかきながら言った。

「俺、見てないからさ。一応誤解のないように言っておくと、あんたが脚本書いたドラマだからあえて見なかったとかそうことじゃなくて……俺、基本的にドラマってあんまり見ないんだ。それでもたぶん、誰か知ってる人間——まあ、友達か。友達が書いたものなら興味津々って感じで、普通の奴なら見るのかな。でも俺、そもそもTV自体をあんまり見ない奴だから、そのへんについてはあまり語れないかもれない」

「ほ、ほんとに！？」

あたしは、まるで中学生がこれから告白する時みたいに、声が裏返ってしまった。

レンがあたしのドラマを見ていない……不思議と少しがっかりする気持ちもあるけれど、それ以上に大きいのが安堵感だった。

「な～んだ～。だったらもっと早くにそのこと、聞いておいたら良かったな。てっきりあたし、あんたが心の中で『時流に乗ったクソつまんないもの書きやがって』とか思いつつ、あたしが脚本書いたドラマをこき下ろしてるのかと思ったわよ。ふう～ん、あっそ。見てなかったわけね」

「いや、見てほしいっていうんだったら、次から見よ。金曜夜の十時からだっけ？」

「ううん。月曜の九時。あんたはたぶん、月九なんて言葉を聞いても、さっぱりピンと来ないでしょうけどね」

てっきりあたしは、「いくらなんでも月九くらい知ってるさ」という言葉が返ってくるかと思ったけど——そうではなかった。おそらくレンは<月九>という単語自体を知らないのだ。

「べつにそんな、『見てなくてほんと悪かった』みたいな本気顔するのやめてよ。単にね、あた



しがレンに聞いたかったのはこういうことなの。あんたがアフガンにあって日本にいない間、あたしはいくつかドラマのヒット作をだしたんだけど、毎回、一作書き上げるごとにこっちはカツカツなわけ。もともと何かの運のよさみたいなもので今こうなってるけど、人間落ちる時っていうのはあつという間でしょ？「川上サクラ？ああ、なんか昔何作かそこそこ面白いドラマ書いてたよね。最近クレジットで名前見ないけど」みたいな。でもね、あたしは実際それでもいいなって思ったりもするわけ。クマちゃんと結婚するし、結婚したら当然仕事のペースも緩めたいし……でね、あたし少し不思議な感じがしたの。レンってそこらへんの創作意欲とか、どうコントロールしてるのかな～って」

「まあ、絵と文章の世界じゃ、かなり畑違いかもしれないけど」

レンはアイスコーヒーを飲みながら言った。

彼はいつもは軽口ばかりあたしとは叩いているけれど、こういう「本当のこと」についてはいつも直球で打ち返してくれる奴だ。

「そもそもコントロールできる創作意欲なんていうのは、本物じゃない。べつに俺も、これから先一枚も絵なんて描かなくても、それで死ぬってわけじゃないからな。でも確かに、俺の心の中では何かが死ぬと思う。アフガンへいってる間、俺は絵筆をとらなかったけど、結局その分の創作エネルギーっていうのが今頃でできて毎日キャンバスと向き合ってるけど……」

そう言ってレンは、自分の背後にある麦の穂畑の夜景を振り返った。

「だけどこれもまた、『こんなことをして一体なんになる？』っていう声を俺はたまに聞いたりするわけだ。ここの画廊のオーナーに運よく雇ってもらって、これまでに何点か自分の絵は確かに売れたよ。でもそうやって俺が感じた一番のことは、おかしなことに失望感だった。だって、自分の描いたものに自分で値段をつけて売るんだぜ？そういう魂の切り売りみたいなことに、俺は今もすごく抵抗を感じるけど――まあ、一応結婚もしてるし、好きな絵を描く時間も欲しいしで、なんか今、俺はすごく宙ぶらりんな感じだな。絵を描くことに対する情熱とか、描き上げた時の達成感はずいけど、そのあとそれに値段をつけて売るっていうのが嫌でたまらない。でもまあ、これも生活のためってことなんだろうな」

「そっか。レンにも画家として色々あるってことなんだ。少し意外っていうか……あたし、こういうこと、あんたともう少し前から話しておけば良かった」

ストローでちるるる、とアイスコーヒーを飲み、あたしはタンブラーから流れた水滴がスカートにこぼれるのを、手で払った。

「そうだな。でも、こういうことに関してはたぶん、久臣さんがエキスパートなんじゃないか？俺、自分の絵が初めて売れた時――久臣さんに相談しにいったよ。本当は、久臣さんみたいにしてもらえるのが一番いいんじゃないかと思ってさ。そういえば、小山内氏って久臣さんとめっちゃ仲悪いけど、その理由、サクラはミドリさんから聞いた？」

「うん、聞いた聞いた」と言って、あたしはくすくす笑った。

「ようするに小山内氏は、久臣さんの才能に嫉妬してるってことでしょ？わたし、最初はてっきりいつまでも久臣さんがベルビュー荘に居座ってるから――そういう意味で嫉妬してるのかと思ってたわ。でもミドリさんに話を聞いたらそうじゃなくて、昔っからあのふたりって仲悪かった

んですって。言うなれば、そのことが久臣さんが本当に才能あるっていうことの証明かもね。何しろ、他にもないあの変人の小山内氏が嫉妬を覚えるくらいなんだから」

それからあたしは、ほたるが某俳優と恋仲で、結婚を前提におつきあいしているらしいという話や、花見の時に久しぶりにミズキくんに出会った時、イメチェンしててすっかり驚いた、なんていう話をした。

ミズキくんは茶髪のロングで、眼鏡を外してコンタクトにしていた上、ピアスまでしているような感じだったからだ。

「まあ、確実に歳月は流れてることなんだろうな。俺は今年で三十だけど、自分が今も二十五か、それよりも若いくらいにしか思えない感じがする。というか、ちょうどアフガンへ行くためにベルビュー荘を出たあのあたりで、時間が止まってる気がして仕方ないんだ」

あたしもよ、と言いかけて、あたしは口を噤んだ。

うまく言えないけれど――レンといると、何故かいつも懐かしいような気持ちにさせられる。

今も、なんだかまるで、中学生が放課後に好きな男の子と美術室でこっそり内緒話をしているような、そんな感じだ。

三十二歳といえば、実際にはもっと大人になってるような気が昔はしていたけれど……こんなふうを感じるのには、わたしがまだ結婚していなくて、子供も産んだことがないからなのだろうか？

お互いに言葉もなく、ただ静かにクラシック音楽が流れる空間に、突然電話の音が響いた。

「ちょっと待っててくれ」

うん、というように頷くと、あたしはレンが事務所まで行って電話をとろうとする背中を見送った。

(いつまでもずっと、あいつとこのまま一緒にいたい) というのが、レンに会うたび、あたしが感じる感情だった。

でも――そんなことは当然のことながら出来ない。

だからあたしは、レンの口から「そろそろ帰れよ」なんていう憎まれ口が飛び出す前に、画廊のガロから出ていくことにしようと思った。

「ええ、そうですね。個展を開かれる場合は、一週間四万七千円という値段でギャラリーのほうをお貸ししていますが……」

じゃあね、というように、あたしはシャネルのクラッチバッグを、電話の対応をしているレンに向かって振ってみせた。

そんなあたしのことを、電話を切ったレンが、画廊の外まで追ってくる。

「あんた、本当に前にいったたなんとかいうクマ公と結婚するのか？ だったら今度、ここにでも連れてこいよ」

「うん、わかった」

手を振って見送ってくれるレンに、あたしもまた手を振る。

そうして笑顔でレンと別れてから――近くの駐車場まで歩く間、あたしはの心は何故か重かった。

こういう気持ちになるってわかっているから、レンとは本当はなるべく会わないでおくべきな

のに……結局クマ自慢も出来ないままで終わってしまった。

あいつは、わたしが結婚すると聞いても、微塵も嫉妬心が起きないくらい、〈女〉のわたしに対しては興味がないのだ。

そのことは、これまで何度も繰り返し思い知らされていたことではあったけれど……今、最後にレンがあたしに対して放った言葉は、トドメという奴にも近い。

あたしは胸元にかけてサングラスをとると、それをかけて車に乗りこんだ。

そして駐車場の隣にある公園から蝉の声が響いてくるのを聞いて――ふと思い出した。

今年もまた、レンと初めて会った季節が、再び巡ってきたのだということを……。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

俺はサクラが店から出ていったあと、再び棚のどこかにラピスラズリの岩絵の具がないかどうかと探しはじめた。

今描いている絵を制作するために、前もってかなりの分量を買っておいたはずなのだが——あと残り一瓶あったはずと思っていたのに、どこにもないことに気がついた。

ここから歩いて五分くらいのところに、今にも潰れそうな小さな画材店があるので、いつもそこで岩絵の具を俺は買うことにしている。ほんの十分程度ギャラリーを離れるだけだが、一応電話のほうは携帯に転送されるようセットし、店のドアのところに「すぐ戻ります」という札をかけておくことにする。

こうしたことというのは、吾味さんとの間ですでに取り決めがしてあった。

たとえば、誰かに個展のスペースを貸す場合、B5くらいの宣伝パンフレットのようなものを作って、それを近隣のお店に置いてもらうことにしている。そうした時に俺は短い時間とはいえ、ギャラリーに鍵をかけて離れなくてはならない。

どのみち、平時からそんなにたくさん人がくる画廊でないゆえに、短時間ならギャラリーを離れても何も問題はないと吾味さんには言われているのだ。

まあ、そんなわけで俺はラピスラズリの絵の具を買うために、暑い日差しの中を画材店に向かって歩いていった……そしてその途中、サクラの乗っている車と一瞬すれ違った。

あいつは俺の存在に気づかなかったようだが（気づいたらたぶん、あいつのことだからクラクションくらい鳴らすだろう）、フェアレディZに乗ったイケてるお姉さん風の女を見送って、俺はふとこう思った。

そういえば、まるであいつが自分のおふくろでもあるかのように、あいつが結婚することはないと自分が思いこんでいたのは何故なのだろう、と。

五時になり、ギャラリーを閉めると、俺はマーラーの交響曲を聴きながら、これでもう何者にも邪魔されることはないという安堵感を持って、創作活動に打ち込むことにした。

そして絵が完成するまで――深夜の二時半までアトリエにいて、それから妻の待つアパートへ戻った。

普通に考えたら、俺が浮気しているとミチルが勘違いしたとしてもまったくおかしくはない。

でも、実際のところ俺はこういう時間帯に帰ることがとても多かった。

本当は三時半、あるいは四時半、五時半まででも、ずっと絵を描いていたいと思うこともよくある。

たぶん俺がもし結婚していなかったら、ここに歯ブラシや髭剃りなどを持参して、泊まりこんで制作を続けることも出来たかもしれない。

けれども、一応ギャラリーに来た客が目の下にどす黒い隈のある男に驚かないためにも――俺はこのあたりが限界だろうと考えて、アパートへ戻ることにしていた。

ミチルには、先に寝ていていいと言ってあるけれど、彼女は俺が帰ってくると、必ず起きてきた。

「お仕事、ご苦労さま」

「ああ、いいよ、べつに。適当にお茶漬けでも食べるから」

というのが、俺たちの間で毎日のように交わされる会話だっただろうか。

正直なところを言って――俺は今、ミチルと話すことが何もない。

昼間訪ねてきたサクラとのように、＜本当のこと＞というのか、何か物事の本質に触れるようなことを話すでもなく……むしろ、そこに触れないように、差し障りのないことを見つけて会話をしているような感じだった。

「きのうは、命の電話のボランティアに行ってきたのか？」

「うん。いつもどおり二時間くらいの予定だったんだけど――最後に受けた電話の人と長く話しこむことになっちゃって。気づいたら三時間くらいになってたけど」

「そっか。大変だな」

命の電話で交わされた電話の内容は、守秘義務というものがあるので、当然それが身内の者であっても話すことは出来ない。

ゆえに、俺たちの会話というのは大体、ここらへんで終わってしまい……ミチルは「じゃあ、あたし寝るね」と言って、再びベッドに横になるのだった。

まだ結婚して二年にしかならないのに、俺とミチルとの間には会話がなくなるのと同時に、セックスもあまりしなくなった。

おそらくミチルもそう思っているに違いないが、どうしてこんなことになっているのか、俺にはよくわからない。もしかしたら、あのままアフガンに居続けたほうが、俺はミチルと夫婦としてうまくやっていけたのかもしれないとすら思う。

でも俺は――もうあの灼熱の砂漠の国へは戻れないと思っていた。

絵を描いていられるという今の恵まれた環境に、い続けられる限りい続けていたいとしか思えない。

そして、毎日俺は画廊のガロへ行くのが楽しみで仕方なかった。

ミチルが作ってくれる朝ごはんを特にありがたいとも思わず、どこか自動的に食べ、ギャラリーへ行くと「こここそが自分の生きるべき場所だ」という感じで生き生きと働いてしまう。

実際のところ、ガロでの仕事というのは月に最低保証金として十七万もらってもいいくらいの仕事であったかもしれない。

まず、ギャラリー内の清掃にはじまって、絵の売買やそれに伴う帳簿の管理についてなど、吾味さんは俺を信用しきってほとんど任せきりにしているので——そういう彼の期待に応えるためにも、俺は自分の絵の制作のことよりそちらを完璧にきちとこなすことに神経を使っていた。

正直なところ、絵筆のノリが実にいい時に限って来客があつたり電話がかかってきたりするので、俺が本当の意味で画業に打ちこめるのは、ギャラリーを閉めた夕方五時以降であったといえただろう。

そして普段土曜や日曜や祝日というのは、ガロの休業日なのだが——スペースを貸して個展を開いている期間は、土日祝日関係なくギャラリーを開くということになっている。

そんなわけで、俺はだんだんとミチルとすれ違っていくようになり、その溝がどんどん広がりつつあるのを自分でも止めることが出来ないままだった。

<絵を描く>という行為は、俺にとって圧倒的なまでの恍惚感の得られる作業だった。

その恍惚感とミチルのことを天秤にかけると、俺は正直彼女のことなどどうでもいいと思ってしまう。

そして深夜の二時半ごろに、どこか重い気持ちで自分のアパートへと帰宅するのだ……ひどい時には、何故俺はこの女と結婚したのだろうと、彼女の寝顔を見ながら思うことさえある。

でもおそらくは——こうしたことというのは、どこの家庭にも大なり小なり似たような形で存在している問題なのだと思う。

俺のまわりでも、早い奴で二十二、三くらいで結婚した奴がいて、彼らが一度飲み会でこんな話をしていたことがある。

「俺、もう女房と、飼ってる犬と子供のこと以外で、話すことなんか一んにもねえもんな」

「うちなんか、もっとひどいぞ。女房が子供と犬と結託して、俺のことを仲間外れにするんだ。おまえなんか、給料袋を持ってこなかったら、屁の役にも立たないみたいな感じでな」

「ひでえっ！！」

なんていう会話を聞きつつ俺が思ったのは——（自分だけはそんなことにはならない）ということだったのだろうか。

でも現実はやはり……そうになってしまうのだ。というか、今現在そうなっている。

セックスのことに关していえば、説明がもう少し複雑だ。

俺はいつも、女性の中にミューズ性のようなものを見出せない、その女と寝たいと思えない

。

つまり、それはどういうことかという、それは俺にとって一種の<憑依現象>なのだ。

これは随分あとになってから気づいたことだったけれど——たとえば、七津美さんがそうだった。

俺は彼女の中に何かミューズのようなものを見出し、繰り返し何度も彼女と寝た。

でもあとになって、彼女との失恋の痛手が癒えてからわかったことは、ミューズの憑依現象というのは、ひとりの女性にそう長く留まり続けることが出来ないものらしいということだった。

そういう意味において、俺はミチルをモデルにして絵を描きたいと思ったことが一度もない。

いや、正確には一度だけある……「シュネムの女」というタイトルで、ブルカを被った女性のことを、俺はミチルをモデルにして描いた。

でもその絵を描き上げて彼女と寝て以来——俺はミチルのことを本当に欲しいとは思っていないのだ。

だが、結婚した以上は＜義務＞があるというその責任から、俺はどこか習慣的にこのアパートの寝室へ戻ってきているのではないかという気がする。

俺がアフガンから帰ってきてから描いているのは、風景画が主だが、それはどこでも何故かミューズの憑依した女性を見かけなくなったからかもしれない。

俺に自制する気持ちがあるから、ある種のフィルターがかかって、誰のこともそう見えなくなったのか……それとも、女性は結婚するとある種の＜巫女性＞を失うとよく言われるように、俺も結婚したことでかつてあった何か大切なものを失ってしまったのだろうか？

奇妙な話に聞こえるかもしれないけれど、俺はもう一度それが来て欲しいと願っていた。

それとも結婚したことで、芸術の女神が臍を曲げて俺の元へはもう来てくれなくなったということなのか？

そして俺は思う……もう一度＜彼女＞が自分の元へ来てくれるそのためなら、どんな犠牲も厭わず払うということ。

それからもうひとつ不思議なのは——いつも感じていた＜彼女＞（言いかえるなら美の女神）は、今俺の元にはいないというのなら、一体どこへいつているのかということだった。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

クマちゃんと一週間ほど、カリブで羽を伸ばしてきた。

スキューバダイビングをしたり、イルカと戯れたり、砂浜で日がな一日寝そべったり.....それから、結婚式の場所はベタベタだとは思ったけど、海外としては比較的人を呼びやすい、ハワイということに決めた。

実をいうとこれから花嫁になるバンビには、心に秘密がある。

彼女は実は本当は、心の中で全然別の男性を愛しているのだ.....バンビーナはいくら心優しく頼り甲斐があっても、種族の違うクマちゃんより、同じ鹿のバンビーノと結ばれたいと思っている。

そのことを、バンビはカリブではっきりと自覚した。

というより、ずっと前からわかっていたことだった、そんなことは。

バンビはクマちゃんと一緒にプールで遊んだり、一日中ベッドで寝たあとでも一クマちゃんが寝ているのを確認すると、バルコニーにでてお姫さまが王子さまのことを思うようにバンビーノのことを考えた。

そう、言うまでもなくあたしが心に思い浮かべていたのはレンのことだった。

というか、その現象はかなり以前からあるもので、「今ここにもしレンがいてくれたら」という場面で、あたしはいつもレンの存在のことを思った。

たとえば、カリブ海を見渡せるバルコニーで、あたしはベッドに寝ているのは実はクマちゃんではなくレンだと想像したりする。

あるいは、突然後ろからあいつが抱きしめてくれて、「さっきはすごく良かった」などと言っ



てくれるという仮想：レンによる妄想だ。

でもあいつが結婚して以来、そういう現象は随分遠のいていたはずなのに、最近やたらあいつのことを考えてしまうのは何故なのだろうとあたしは考える。

カリブへ来る前に、ガロでレンに会ったのがいけなかったのだろうか？

(でも、いつかきっと忘れられるわよね？クマちゃんと結婚すれば、たぶん.....)

そんなわけで、帰国してからあたしがしようと思ったのは、クマちゃんとレンを会わせるということだった。

クマちゃんはああ見えて意外に、音楽とか絵画とか、芸術一般といったものに造詣の深い人だ。

本人曰く、自分が成り上がり者だから、そういうものに触れて「本物を装いたい」という気持ちが強いのかもかもしれないな、ということだった。

ところで、クマちゃんはあたしとで四度目の結婚になるというのは、先に述べたとおり。

たぶん、結婚したり別れたりといったことを四十二歳までに三度も行っていると聞いたとしたら――大抵の人はこう思うのではないだろうか？

その男は絶対に何かあるに違いない、と.....。

だが、この世界には間違いなく、「女運の悪い人」(or 男運の悪い人)というのが存在する。

クマちゃんが一番最初に結婚した女性との間に生じたトラブルというのが、「ネズミ講」というものだったらしい。

つまり、ある商品を買う人を多く集めれば集めるほど、割引のパーセンテージが高くなるという、例のアレである。

クマちゃんは奥さんが何か商売をしているとは知っていたけれど、違法なものを扱っている、また詐欺を働いているということまでは知らなかったので――ある日奥さんが離婚届を残してドロンと消えてしまうまで、彼女がその手の詐欺商法に長く携わっている女性であったとは、まるでわからなかったということだった。

そしてふたり目、最初の離婚の痛手を癒してくれた女性とクマちゃんは結婚した。

クマちゃんは彼女と子供に囲まれた幸せな家庭を夢見ていたけれど.....二年たっても子供が出来ないままでいた頃、奥さんがピルを服用していたことを偶然知ってしまう。

つまり、クマちゃんの二番目の奥さんは、表面的にはクマちゃんに「早く子供が欲しいわ」などと言いながら、その影でピルを服用していたということだ。

結局、財産目当てで自分は結婚されたのだろうか、奥さんに不信感を抱いたクマちゃんは離婚を決意したという。

そして三人目――結婚相談所に高い会員登録料を支払って、クマちゃんは三度目の結婚をした。

ところが、彼女が実はあるカルト宗教にのめりこんでいることが結婚後に発覚。

クマちゃんはある時から彼女の強い信仰心についていけないようになり、やはりここでも離婚してしまったということだった。

「まあ、こんなふうにしても、いかにも言い訳がましくしか聞こえないっていうのはわかっ

てる」

と、クマちゃんは「結婚を前提につきあってほしい」とわたしに言う前にそう切りだした。

「俺にも至らないところはたくさんあつただろうし、そのことについて言い訳はしない。でも――俺はサクラちゃんと、これが人生最後の結婚っていうのをしたいと思うんだ。同意してくれるかい？」

「ええ、もちろんよ」と、あたしは答えた。「というより、クマちゃんの言ったことを全面的に信じるわ。あたしがキャバクラで働いてたことがあるって、クマちゃんも知ってるでしょ？ああいうところに来る男の人の中には、クマちゃんと同じように女性に騙されたとか、色々な愚痴をこぼしにくる人も多いの。そういう話をたくさん聞いて知ってるから……クマちゃんは本当に、不幸にも女の人に対して運がなかったっていう、それだけなんだと思うわ」

そう答えながらわたしは――もしかして本当に、クマちゃんは信じられないくらい女運のない人なんじゃないかという気がして、彼のことがいたたまれなくなっていた。

何故とって他でもないこのあたしと、結婚を前提におつきあい？

どこまで女性を見る目がないのだろう……と自分でいうのもなんだけど、クマちゃんはあたしのことをちょっとばかり男性経験が豊富な、でも心は清らかな優しいバンビーナだと本気でそう信じているらしい。

だから、バンビはクマちゃんのことを絶対裏切るようなことは出来ないし、結婚したら彼のことをだけを愛し抜くつもりでもいる。

そして今さらながらレンへの気持ちを吹っ切るためにも――あたしはクマちゃんのことをレンに紹介しようと思っていた。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

バンビーナに紹介したい人がいると言われた時、クマちゃんは少し複雑な気持ちになった。昔、お世話になった下宿に住んでいた男性で、今は画廊で自分の描いた絵を売って生計を立てている人物だという。

(ようするに、芸術家肌の少しエキセントリックな感じの小僧なんだろうな)

そうクマちゃんは思った。

一応、バンビーナの前では鈍いクマ公を装ってはいるけれど、彼女に時々誰か男性の影らしきものがちらついているというのは、クマちゃんにもよくわかっていることだった。

「アフガニスタンに二年くらい行っててね、帰ってきてからは画業に専念しているの」

そうだろうとも、女っていうのは、そういうイラクとかアフガニスタンとか、危険地帯から無事帰ってきた男に、自然心が惹かれてしまうものなのに違いない。

ところがその水嶋蓮とかいう男が、帰国後すぐに結婚したと聞いてーバンビーナは相当落ち込んでいた。

バンビーナがそのために自分は落ち込んでいるわけじゃないというように、理由をひた隠しにしたから、クマ公もその件については特に深く聞くことはしなかったとはいえ……まさか、結婚する前に当のその男に会ってほしいなどと言われるとは思ってもみなかった。

「この間画廊で会ったら、なんか連れて来いって言うから」

(画廊で会ったらだって?) と、クマちゃんの心には、猜疑心の雲がもくもくと広がっていった

。

バンビーナとそのレンとかいう男は、普段どのくらいの頻度で会っているものなのだろう？

もしかして、俺に隠れてこっそり不倫を……いや、もしそうだとしたら、バンビーナが会ってほしいなどと言いだすはずがない。むしろやましいところなどまるでないから、一度会ってほし

いということなのだろう、とは思う。

でも何故かやはり、クマちゃんは気が進まなかった。

もし会ったら決定的な何かが起きてしまうのではないかという予感がした。

そう、たとえば――会って手を握った瞬間に、（こいつは俺のバンビーナと少なくとも一度は寝たことがある）と閃いてしまうといったようなことだ。

そんなわけで、クマちゃんはなんとか理由を思いついてその芸術男と会うのを辞退したいと思っていたけれど……バンビーナがどうしてもというのを断れず、その日曜日、やはり画廊のガロという場所まで彼女の運転で出かけていった。

クマちゃんはインターネット企業のCEOとして――これまで、数えきれないほど多くの人間と握手する機会に恵まれてきた。

そして握手というものは相手の第一印象をはっきり決めるものとして、とても大切な儀式だと考えるようになっていた。

今、自分はなんの偏見にも囚われず、バンビーナの元彼氏かもしれない男と対峙しようとしている……最初の握手、これがうまくいくかどうかで、今日一日の自分の運勢が決まりそうだと、そんなふうにクマちゃんは思った。

つまり、例のレンとかいう男が見るからにいけ好かない男だった場合――その後バンビーナがいくら気分を盛り上げるようなことを言ったりしたりしてくれたとしても、「いや、今日は真っ直ぐ帰るよ」と言う以外のことは何も出来ないだろうということだ。

せっかくこれから結婚して幸せになろうというのに……何か余計な事態が持ちあがらなければいいがという、今クマちゃんが願うのはそのことだけだった。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト First Moon 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

駐車場で車からおりると、駐車カードをズボンのポケットに忍ばせて、クマちゃんはバンビと腕を組んで歩いていった。

今日のバンビーナはとりわけ機嫌がいい.....ということは、レンという奴に会えるのがそれだけ嬉しいということなのだろうか？

クマちゃんはバンビがベッドの中でしてくれたあれやこれやのことを思いだし、それと同じ体験をしているかもしれない男とこれから会うかもしれないと思うと、やはり気分が沈みがちになった。

「レンって、すごくいい奴よ。あたしに対しては冷淡だけど、たぶんレンも、クマちゃんみたいな感じの人、すぐ好きになると思うな」

「そうかな」

クマちゃんはバンビのその一言を聞いて、ますます不安になった。

どうもそのレンとかいう男が――「ふ～ん。バンビ、おまえ結婚するのか。そいつがどんな男なのか見てやるから、画廊まで連れてこいよ」といったような、自分のことを嘲笑いたい魂胆があるのではないかという気がしてならない。

ドアを開けると、チリンチリン、と頭上で鈴が鳴った。

その音が妙に小気味良かったためだろうか、クマは思わず無様ともいえる格好で、ドアの上をじっと見上げてしまう.....。

「そんなに、珍しいものでもないですよ」

ハッとして前に視線を向けると、自分と同じく百八十センチはあろうかという身長、スラリと背の高い青年が目の前に立っていた。

(ま、負けた.....)

クマは、身長は同じでも、自分のように軽く太り気味でない青年を見て、そう悟った。  
しかもなんなのだろう、彼から漂う、この一種高貴とも受けとれるような清潔な雰囲気は……

。「今日は、そちらのほうで軽い立食パーティがあるので、ご招待したんです。このビッチが、いえ失礼。サクラさんが結婚すると聞いたものですから、相手は一体どんな人なのだろうと思わせて」

クマが外人並みに毛深い手を差し出すと、レンという青年はしっかり彼の手を握り返してきた

まるで、やましいところは何ひとつない、とでもいうように……。

「ビッチは余計よ！それにそんな言い方したら、クマちゃんが誤解するでしょ。あんたとあたしの間には何かあるんじゃないかって」

「そんなもの、逆立ちしたって何もできやしないだろうが。それよりおまえ……」

ここでレンという青年は、バンビの耳元に低い声でこう囁いた。

「こんな三流の絵がどうして二十七万もするのかしらとか、本当のこと言うなよ。一応うちにとっては大の得意客なんだからな」

「もう、あんたがあたしのことをどう思ってるのか、今の一言でよーっくわかったわ！どうせあたしには芸術に対する真の理解なんてものは持ち合わせがないわよ！それに、社会人として礼儀をわきまえた態度をとることだってちゃんと出来るんですからね！」

「本当にそうならいいんだけどな」

クマちゃんはこのやりとりを聞いていて、このふたりは本当に「ただの」友達なのだろうかと思いはじめた。何より、一番大きいのは彼がすでに結婚しているという点だ……それも、一緒にアフガニスタンで人道支援を行っていたという、立派な志の女性と。

クマちゃんは突然自信を取り戻すと、いつもどおり堂々とした態度で愛しのバンビーナをエスコートしようと思った。ダブルのスーツの袖口には、ブルガリのカフスポタンが見え隠れしているし、中に着ているのはドルガバのクールビズ仕様のワイシャツ……そうだ、一体何を恐れることがあるだろう？何より、自分の隣にいるバンビーナときたら、今日もとってもゴージャスな装いなのだから。

クマちゃんはバンビーナと腕を組みながら、立食台のあるギャラリーの一室へ足を踏み入れ、壁にかかっている絵を一枚一枚ゆっくり眺めていくことにした。入口のところには<鈴木一郎絵画展>という大きな札が立っている。

(鈴木一郎？たぶん彼と同姓同名の人間は、日本に百万人はいそうだな)

そう思いつつ、おそらくは旅行先でためたスケッチと思いき絵に彩色が施された絵画を、クマちゃんはなんの感慨もなく見ていくことにする……絵の下には一枚一枚、¥270,000だの¥480,000だのと結構いい値段が提示されているのだが、すぐ隣のバンビーナを振り返ると、彼女は何度も首を振っていた。

どうやら、バンビーナも自分とまったく同じことを感じているらしい。「この絵に、そこまでの値打ちはないわ」と……。

クマちゃんはバンビーナ以上に社会人としての良識的意識が強かったので、一枚一枚の絵の前

で立ち止まり、じっくり鑑賞している振りをしていただけ、バンビーナはどれもこれも似たりよったりの絵に飽きてしまったのだろう、立食台の上にあるワインやシャンパン、それにオーブなど手を伸ばしはじめている。

「どうも、初めまして。こんにちは」

不意に青いスーツ姿の年配の男性がすり寄ってくる気配がしたかと思うと――彼はおもむろにクマちゃんに対して握手を求めてきた。

「どうも」

そう言って握手し、クマちゃんをついついの習慣で、スーツの内ポケットから名刺を取りだしてしまう。

「おお、素晴らしいですね。あの有名な会社の社長さまですか。あ、今は社長ではなくCEOというんですっけ？」

「そうですね。まあ、ちょっとエライおじさんの略語みたいなもんですよ」

これまで、百万回はしてきたであろう、そんな社交辞令的会話を交わし――クマちゃんは鈴木一郎氏と笑いあった。

そして彼に張りつかれるような格好で、一枚一枚の絵について、色々と説明を聞くはめになる……ふと後ろを振り返り、バンビーナに助けを求めようとするが、彼女は先ほどのレンという青年だけでなく、もうひとり長い髪を束ねたホスト風の男に挟まれて、何か談笑しているところだった。

(一体なんなんだ、あの男は……)

クマちゃんの心にむらむらと嫉妬心がわき上がってくるが、隣で「この絵は、妻とヴェネチアへ旅した時にスケッチしたんです」などと説明してくれるアマチュア画家のことを、邪険にも出来ない。

そう、鈴木一郎氏は自分でも認めているとおり、プロではなくただのアマチュア画家だった。

定年後、以前から趣味だった絵に本腰を入れて取り組むようになり、今日来ているお客というのも、彼が定年前に色々つきあいのあった人々が大半だという。

クマちゃんは富士山が描かれた絵の前で、社交辞令的気持ちから鈴木氏に世辞を並べることにした。「やはり、なんといっても富士山は日本の心ですからねえ。その心の部分が実によく描写されていると思います」とかなんとか……そしてその¥550,000する絵は、すでに売約済みという札がかかっていたが、それが何故なのかもクマちゃんにはよくわかるような気がしていた。

少なくとも、鈴木一郎氏の描いた絵の中で、家のどこかに飾ってもいいと思えるのは、この富士山の絵くらいのものであったからだ。いや、絵それ自体はどれもそう悪いものではないが――どの角度から眺めても本当に素晴らしい！といったようなインパクトを受けるようなものは、残念ながら一枚もなかったといえる。

その後の会話で、鈴木氏が定年前は製剤会社の社長をしていたこと、ふたりいる息子のうち、ひとりには医者、もうひとりには彼のあとを継いで社長の椅子に収まっているということがわかり、クマちゃんはすぐにピンときた。

¥550,000とか¥320,000とかいう金額の絵に「売約済み」と札がかかっているのは、つまりこういうことなのだ。某大病院で医者をしているという鈴木氏の長男にコネが欲しい人物は、まず父親の彼とねんごろになろうとするかもしれないし、製剤会社の社長の椅子に収まっている次男に口を利いてほしいような場合も、同様だろう……クマちゃんは大屋政子にそっくりの鈴木氏のワイフに紹介される段になると、（もしや自分は嵌められたのか？）と、どこか恨めしい気持ちで立食台で給仕しているレンという青年のことを振り返った。

もちろん、この中の絵を一枚買うくらい、クマちゃんにとっては屁でもないことではあった。

実際、絵画展でなくても、この種のパーティにクマちゃんは参加することが多く、そういう場所でお義理的に寄付したり何がしかの物を購入する契約書にサインしたりといったようなことは――これまでに数え切れないほどあったことである。

だが今、クマちゃんは自分のビジネスと関係ないところに位置していそうな鈴木氏、その彼の描いた絵を買いたいと思えなかった。いや、いつか何かの形でそうしたことが役に立つという可能性がないとはいえないかもしれない。

でもクマちゃんは今日に限っては、何故かそんなふうにはまるで思えなかったのである。

ギャラリーの入口に、どうやら知り合いらしき年配の夫婦が現れると、「ちょっと失礼」と言って鈴木夫妻はそちらに去っていった。

「絵を買うまでは離しませんよ」といった感じのプレッシャーから解放されたクマちゃんは、ホスト風の男と話しこむバンビーナにチラと視線を送ってから、ひとり展示室の外へ出ることにする……画廊の中はエアコンが効いていてとても涼しいのに、脇の下にぐっしょりと汗をかいているのを感じた。

広いロビーにいくつかリヤドロが飾られているのに気づいたクマちゃんは、とりあえずそれを見ている振りをしようと思った。羽根の生えた妖精がヴァイオリンを弾いていたり、その音楽の音に合わせて花の精たちが踊っていたりという、なかなか心休まる美しい作品だった。

値段などは書かれていないので、おそらくこれはギャラリー・ガロが所有しているものなのだろうとクマちゃんはある。もしこれが本物のリヤドロなら、このクラスのものは結構な値段がするだろうとも、クマちゃんはケースの中を覗きこみながら思った。

そしてアールヌーヴォー調の曲線を描いた階段を上がり、二階へいってみたいとクマちゃんは考えたのだが（吹き抜けになっているので、そちらの廊下にも色々な彫刻品が並んでいるのが見える）、残念ながらそちらへはベルベットのロープがかかっている、＜立ち入り禁止＞となっていた。

『レンの奴はね、二階にあるギャラリーのほうで自分の作品を展示してるのよ！』――ここへ来る間に、バンビーナが車の中でそう言っていたのを思いだし、クマちゃんはベルベットのロープを跨いで上へ行ってみることに決めた。

（あの小僧が一体どんなものを描いているのか、見てやろうじゃないか）

というわけである。

もしあとで何か咎められたとしても、言い逃れる術ならいくらでもあると思った。

何しろ、ベルベットのロープは＜立ち入り禁止＞の意を表してはいるが、＜立ち入り禁止＞という札が立てかけられているというわけではなかったのだから――「自分は二階にあるミズシマくん



の絵のほうを見たくて今日は来たんだ」とでも言えば済むことだと思った。

二階の廊下には、ショーケースに入れられたエミール・ガレのランプやルネ・ラリックの香水瓶などが置いてあり、クマちゃんは一瞬（これは本当に本物なのだろうか？）と訝しみつつ、それらの美術品を眺めやった……（これはたぶんジャコメッティの作品だよな？もし本物なら、びっくりするくらいの値段がつくはずだが、サザビーのオークションでも落札したのだろうか？）——クマちゃんが二階の展示室へ入る前に、廊下で随分時間を取られていると、不意に階段を上がってくる人の気配があった。

（しまった！）と、クマちゃんは思い、狼狽する。

まるで、高価な美術品を盗みに入った泥棒のような気持ちだった。

「すみません、今日は別に絵を売りつけるつもりでお呼びしたわけじゃないんです」

レンという青年が、相変わらず気の利いた礼儀正しさをもってそう言った。

「ただ、サクラの奴が結婚するって聞いたので、あんなアバズレ……いえ、彼女のような女を乗りこなせる男はどんな人なのか、興味があったものですから」

「ははは」と、クマちゃんは愉快そうに笑った。演技ではなく、突然本当に愉快的な気持ちになった。

「バンビーナ……いや、彼女のような女性は、どんな男にも乗りこなせませんよ。彼女が馬に乗って走っていく後ろを、半馬身くらい離れたところからようやく俺は見ているといった感じですね。ところで、このジャコメッティの彫刻は、本物なんですか？」

レンという青年は、一瞬顔の表情を曇らせると、声のトーンを落として言った。

「残念ながら、偽物です。その、もしかしたらサクラから聞いているかもしれませんが、ここの画廊の前オーナーが首吊り自殺した原因がそれなんです。そちらにあるラリックの香水瓶もガレのランプも偽物なんです——彼は相当な金をだしてこれらの美術品を買ったそうです。でも騙されていたと知り、ショックを受けるあまり自殺したということでした」

「そうですか……」

クマちゃんはなんとなく居心地悪そうにズボンのポケットに手を突っこむと、吹き抜けの廊下から下のロビーを見下ろした。バンビーナが自分を探してうろちよろしているのが見える。

「Hey, バンビーナ！」

ついそう呼びかけてしまってから、クマちゃんはミズシマ青年を見返して赤面した。

彼女のことをバンビーナと呼ぶのは、公衆の場ではなるべく避けることにしているのに。

「クマちゃんにバンビーナですか。いいですね、なんだか微笑ましいです」

内心馬鹿にしているというのでもなく、侮蔑しているような感じでもなく——本心からそう言われた気がして、クマちゃんはこの時かなり上機嫌になった。

本当は、レンという青年の絵にどのくらいの値打ちがあるものなのか見定めて、彼の絵を一枚くらい買ってやろうかと思い、二階へ上がってきたのだけれど。

「ねえ、レン。あの吾味さんっていう人、本当にゲイなの！？あんな格好いい人が吾味悟郎なんていう名前でゲイだなんて——世の中狂ってるとしか思えないわね！」

（そうだったのか）と思い、クマちゃんは思わず大きな声で笑ってしまった。

レンという青年もまた、つられるように大笑いしている。

「サクラって、時々本当に面白いよな」

「いや、時々なんていうもんじゃない」と、クマちゃんは言った。「彼女はいつも、どこにいても何をやりだすかわからないくらい、面白い人ですよ」

「そこが良くて結婚を決めたんですか？」

「まあ、そういうことにしておこうかな。他にも色々、理由はあるにしても」

「なあに？まさかとは思うけど、男ふたりで秘密の話をしてたってわけ！？」

仲間外れにされたことを憤慨するように、バンビーナは腰に両手を当てている。

ゴールドとベージュの中間くらいの色合いをした、ミニスカドレスをバンビーナは着ていて、その服は彼女のスタイルのよさを際立たせていたとっていい。

「いや、俺はミズシマくんが美術の講義を受けていたっていう、それだけだよ。本物と贋作を見抜くにはどうしたらいいか、とかね」

「おまえ、そこにあるリックの香水瓶、本物だと思うか？」

レンという青年が話を合わせてくれる。

「んっと……」答えいかんによって馬鹿にされると思ったのか、バンビーナはどこか慎重な顔つきになっていた。「本物なんじゃないの？だって、わざわざショーケースに入ってるくらいだし」

「バカだな。偽物の作品ってのは、大体額とか入れ物のほうが中身より高価で値打ちがあるものなんだよ。そうすることで、本当は偽物だっていうことを少しでも誤魔化そうとするわけだ」

「何よ！あんたのこのギャラリーじゃ、わざわざ偽物をケースに入れて展示してるっていうの！？」

「そうだよ。おまえみたいに見抜けないバカのほうが世の中には多いからな」

「あんたのその言い方、超ムカつくわ！！」

そう言ってハイヒールの踵で、バンビーナがレンという青年の足を思いきり踏みつける。

「いって一な。それより、安心したよ。おまえの結婚相手が思っていた以上にまともそうな人で……紫のメッシュの髪をした、売れないロックバンドのギタリストとかだったらどうしようと思ってたけどな」

「あんたこそ、バカね、レン。クマちゃんはあたしの知るかぎり、最高にリッチで優しい、あんたと違ってレディファーストってもんをわきまえた大人の男なんだから！ほら、見なさい！あんたが逆立ちしても買えないようなこのロレックスの時計を！！」

バンビーナがクマちゃんの左手首を持ち上げる。

「ああ、眩しくて目が潰れそうだとでも言えればいいんだろ？そういえばさ、このビルの四階にハワイアンっていう喫茶店があって、なんでもただで食べれるんだけど――三人で食事しないか？俺、これから一時間くらい休憩時間だから。まあ、下流の味わかんない人間が舌鼓を打つ、三流の店に抵抗ないならってことだけだ」

バンビーナが愉快そうにくすくす笑ったので、クマちゃんは「もちろんいいとも」という顔の表情をして頷いた。

「何よ、このパスタ馬鹿うまじゃないの！」と言いながら、日曜の昼時だというのに閑古鳥の鳴

いている店で、その後バンビは色々なものを注文した。ピザ、チョコレートパフェ、ケーキセットなどなど……そして「お腹きつーい！！」などと言いながら、最後にずるるる、とアイスティーをストローで吸いとっている。

「これだけ食べてただってというのは、流石に申し訳ないよ」

バンビーナと違い、社会的良識意識の強いクマちゃんは、グッチの財布の中から壱万円札を抜きとろうとした。

「いえ、いいですよ」と、レンという青年が笑って言う。

「ここのおかみさん、もう二年も家賃を滞納してますから……たまにはこういうことでもない、もう二度とテナント料を払わないままだと思いますからね。だから、いいんです」

「ふう〜ん。普通二年もテナント料を滞納してたら、出てってくれって管理会社の人とかに言われるものなんじゃないの？」

「まあ、こここのビルのオーナーは吾味さんだからな。彼がそれでいいって言ってる以上は、出ていかせることもないんじゃないか？何しろ、このビルが建設された時からずっと、このハワイアンはあったってことだから……長いつきあいのよしみって感じなんだろうな」

「そういえば、ハワイで思いましたけど、あたしとクマちゃんはハワイで結婚するから、あんたも来てね！奥さんと一緒に！！」

ハワイアンという名前のわりに、レイレイとかウクレレとか、ハワイを連想させるものが何も無いと思いながら――クマちゃんはあらためて店内をきょろきょろと見返していた。

「ハワイか。まあ、旅費をふたり分出せるかどうかの問題だな。何分、こちとらオサレなセレブってわけじゃないからな」

「えっ！？あたし、あんたにだけは絶対来てほしいのに！！旅費のふたり分くらい、あたしが出してあげるわよ！」

「そういうわけにもいかないだろ」

クマちゃんはこの時になると、レンという絵描きの青年と自分の恋人・バンビーナが100%に近いくらい本当にただの友達なのだろうと思って――かなり寛容な気分になっていた。

そこで、こんな提案を試みることにする。

なるべく、金にものを言わせる成金親父といった感じにならないよう、気をつけながら。

「その、どうかな。俺はさっき危うく、三流アマチュア画家の作品を買わされそうになったけど……実をいうと、まあ一枚くらいなら義理で買ってかまわないと思ってたんだ。もし俺がミズシマくんの絵を買うことで、それがハワイ行きの旅費になるならってそう思うんだが……」

「クマちゃん、最高！！それめっちゃいい案よ！」

レンという青年は、アイスコーヒーを飲みほすと、少し複雑な顔の表情をしている。

「いや、俺はそういうのって嫌なんです。というか、鈴木さんみたいに縁故とか、そういう関係の人には絶対絵を売りたいくないんです。もし俺が描いた絵の中で佐々木さんの気に入ったのがあったら――ただで差し上げますよ。結婚祝いにね」

クマちゃんはレンという青年の高潔な精神性のようなものに打たれて、それ以上その話をしようとは思わなかった。

レンという青年は、安物のスーツにネクタイをしているという格好だったけれど、ブランド物の服に包まれている自分より、百倍ほども見栄えがいい感じがした。それは何も、彼の容貌が優れているというだけではなく――何か精神的なもののほうの影響が大きいような、そんな気がクマちゃんはしていた。

クマ公は、ほんの少しばかりではあるが、芸術といったものを理解する感性が自分に備わっていると信じている……だから、この青年の才能のためならパトロンのような存在になってもいいとさえ思いはじめていたが、そんなことを言うのはやはり、成金親父の卑しい根性からくる何物かと誤解されてしまうだろうか？

なんにしても、この時クマちゃんはミズシマレンという青年の描く絵に強い興味を覚えたので――食事のあと、二階にある彼専用の展示室へ案内してもらうことにした。一階では、縁故というのか義理というのか、何かそういう人たちが鈴木一郎氏の絵を買っており、カウンターで売買契約書のようなものが交わされている……レンという青年がそちらの仕事をオーナーと一緒に処理していたため、クマちゃんはバンビとふたりで階段を上っていった。

「レンって、ほんと不器用な奴よね」

溜息を着くように、バンビーナが言った。

ちょっと食べすぎたわ、と言って、お腹をさすったあとで。

「今日だって、あのエンコ連中を何かの機会に二階まで案内していれば――自分の絵だって何枚か売れたかもしれないのに……そういうのが嫌なんだって」

「なるほどね。でもまあ、そういう彼の純粋な気持ちも、わからなくはないけどね」

入口のところに電灯のスイッチがあるから、電気を点けて勝手に見ていいと言われたものの、クマちゃんはもう一度だけ階下のカウンターにいる絵描きの青年に目をやった。

大屋政子似の鈴木氏の奥さんが、「午前中だけでもう、十枚も売れたわ！」などとほくほく顔で吾味というゲイのイケメン男に話している。ああいうのを見てしまうと、ミズシマくんも心境として複雑なものがあるだろうなというのは、クマちゃんにもわかる気がする。

元製剤会社の社長で、引退後は趣味で絵を描いているという鈴木氏……彼は、高額な値段をつけて絵など売らなくても、年金だけで十分優雅に暮らしていけるはずである。にも関わらず、強欲に己の芸術作品をあっさり金と価値転換して売り飛ばしているわけだ。

いや、もしかしたら氏はこう誤解しているのだろうか？

みなはそこに何がしかの利用価値、付加価値があればこそ、鈴木氏の作品を買っていくのだが――これだけ売れるということは、俺にはピカソかマティス並みの才能があるぞ、とでもいうように……。

鈴木夫妻を見ていてクマちゃんが羨ましいと思ったのは唯一、彼らの夫婦仲がとても良いということだっただろうか。

一枚絵が売れるごとに、鈴木氏は「どうだい、おまえ？」といった具合に妻の顔を見、大屋政子似の妻は「やるわね、あなた！」といったように、夫に対してニコニコするのだ。

「う～んっと、電気ってこれでいいのよね？」

変なところを押して、おかしなことになったら大変とでもいうように、バンビーナが展示室の電灯を慎重に点けようとしている。

クマちゃんはミズシマ青年の手が空きそうにないのを見て、彼の案内は一旦諦めることにした。

あとで手が空いた時にでも、ミズシマ青年の芸術論を聞かせてもらえばいいと思いながら。「ギャラリーの中ってというのは、やっぱり絵の管理の関係からか、エアコンが思った以上に効いてて涼しいもんだね。たぶん、この展示室に窓がないのは、強い陽射しなんかのせいで絵が痛むとか、やっぱりそうしたことが考慮されているのかな」

「さあね。あたしはそういうことはよくわかんないけど……レンの奴の才能だけは、確かに本物だと思うわよ」

クマちゃんは、部屋の中央に白のスタインウェイのピアノがあるのを見て、絵よりもまずはそちらのほうへ歩み寄っていった。

「このピアノは、ミズシマくんの作品ってわけじゃないよな？」

「それは流石に違うんじゃない？」と、バンビーナは笑って言った。「前に来た時、わたしも似たようなことを聞いたら、前オーナーが買ったものだっていうことだったわ。なんかね、このオーナーっていう人がこのギャラリーで首吊り自殺してるんですって。首を吊ったのは事務室で、らしいんだけど——なんか近隣の人の噂によると、時々夜中に誰かがピアノを弾いてる音が聴こえるって話。本当かどうかはわからないけど」

「へえ……じゃあこれは、いわくつきのピアノってわけだ」

クマちゃんは実は、ちょっとばかりピアノを弾くことが出来るので、その腕前を披露したくもなかったのだが、もともと幽霊話に弱かったため、ピアノに触れるのはやめておくことにした。

そして、壁にかかったミズシマ青年の絵を順番に見てクマちゃんが最初に思ったのは——彼が二階に人が入って来ないよう、何故ベルベットのロープを引いておいたのかという、その理由についてかもしれない。

アマチュア画家の鈴木一郎氏とミズシマ青年とでは、お話にならないくらい、才能に違いがありすぎた。ゆえに、もしそんなことをすれば鼻につくくらい嫌味だったかもしれないということだ。

それに彼は、自分の描いた絵の一枚一枚に値段をつけるような下品な真似もしていない……これで一体どうやって顧客に売るのでろうとすら思うが、おそらく彼は、絵を見た相手の反応を見たり感想を聞いたりして、「この人になら」という人物にその人の出資できそうな金額内で絵を売っているのではないだろうか？

クマちゃんはそんな気がして、「この絵を五百万くらいで買うのなんか、わたしには屁でもないよ！わっはっはっ！！」という印象をミズシマ青年に与えずに彼から絵を買うにはどうしたらいいのかと、本気で考えはじめていた。

クマちゃんの経営しているインターネット関連会社は、二十七階建てビルの一階から七階、そして二十階から二十七階までを占めている（そしてそのビル自体が実質クマちゃんの持ち物である）、まずは会社のロビーにかかっているあってもなくてもどうでもいいような五流の絵を取り外し——ミズシマ青年の絵をかけてみたいと、クマちゃんはそう思った。

そうすれば、ミズシマ青年の絵の宣伝にもなるし、もしかしたら彼の他の絵も見たいとい

う芸術のわかる人の目に留まり、大口の制作依頼が来る可能性もある。いや、それとも彼はそうしたこと全般を唾棄すべき豚のように太った資本家の汚らわしい考え方として、軽蔑するような感じなのだろうか？

でも、もしそこまでじゃないなら……。

「この中でもし、気に入った絵があれば、一枚どれでもお譲りしますよ。結婚祝いに」

黄金の麦の穂が揺れる夜景の絵の前で、クマちゃんはハッと自分の考えごとから引き戻された

。

「いや、そういうわけにはいかないよ」

クマちゃんは何故かへどもどして言った。自分でも落ち着きを失っているのが、よくわかる。それがどうしてなのかも。

「その、君の絵は本当に――＜本当のもの＞だと思うよ。それに値段をつけて売ってくれとは、俺にはとても言えない気がする。ただで譲ってくれるなんて言われたら、尚更気が重い。出来ればこの絵を、うちの本社のロビーにある、どうでもいいような五流の絵と今すぐ掛け替えたいくらいだが、どうだろう。これは対等なビジネスとして、ミズシマくんに申し込みたいことなんだが、俺はこの絵を君の提示する本当の値段で買いたいと思う。もしこの俺の申し出が失礼なものじゃないなら……」

「そうね。レンが奥さんとふたりでハワイまで来れちゃうくらいの値段でクマちゃんが絵を買っていうんなら、問題ないでしょ？」

バンビーナがそう助け舟をだしても、ミズシマ青年はどこか気難しそうに眉をひそめている。

確かに、絵の価値などというものは、その良さがわかる人には一千万でも納得できても、わからない人には壹万円の値打ちもないものだ。

その昔、ある保険会社がゴッホのひまわりを五十三億円で落札したことがあったが、絵一枚に一企業がそこまで大金をはたくなど言語道断といったような批判があったことがある……ミズシマくんもおそらくは、売りにたくないと思う相手には、五十億積まれても自分の描いたものを売ったりはしないのだろう。

クマちゃんは目の前にいる青年がもしかしたら、将来的に予想以上の大物になるのではないかと予感して――彼が無名の今の内こそ、水嶋蓮の絵が何枚か欲しいように感じていた。

「考えさせてください。何より、妻の意向も聞いてみないとなりませんから……あと、ハワイまでいく旅費がふたりで何十万くらいかかるのかとか、そういうのも調べてみないと」

「あ～あ、馬鹿なレン」と、バンビーナがジャッキーバッグを空中に振り回す。

「クマちゃんは景気のいいインターネット会社の大金持ちだから、一千万くらいのお金、今すぐささーっと小切手で切れちゃうくらいなのに。それか、手が切れるような新札の詰まったジュエルミンケースを、部下に命じて今すぐ持ってこさせるっていうこともね。だから、遠慮することないのに」

「べつに、いいだろ。それよりこれは、俺と佐々木さんの問題なんだから」

「あ～らそ。でも、あたしにだって関係あるかもよ？だって、クマちゃんとの新居に、あんたの絵が飾られることになるかもしれないんだから」

ミズシマ青年が珍しくここで、ぐっと言葉に詰まる。

クマちゃんはそんな彼を助けるように、「いつか君が大物になる前に、まだ値段が安いうちに買っておきたい」といったようなことを真剣に話しはじめた。そして暫く、バンビーナのことを仲間外れにするような形で商談を押し進め――結局、五百万という値段で、麦の穂の揺れる夜景をクマちゃんは購入することが出来たのである。

一階のカウンターのところで顧客リストに住所や電話番号などを書きこみ、クマちゃんは惜しげもなく五百万円という小切手を切っていた。

「ありがとうございます」

ミズシマ青年がどこか無表情に頭を下げると、クマちゃんはそんな彼に対してこう答える。「いつか、水嶋蓮の絵を五百万で最初に買ったと聞いたら、人が驚く日があるんじゃないかな」と。それから、「そう思えば安い買物だと思うよ」とも……。

画廊のガ口を出て、近くの駐車場まで向かう途中、バンビーナはクマちゃんに開口一番こんな話をしていた。

「それにしても、反吐がでそうなほど俗っぽい夫婦だったわね、あの鈴木って人。絵の売上のうち、10%は慈善団体に寄付するんですって？だったら、10%どころか、70%くらい寄付したらどうって思ったわよ。息子ふたりもいいところに勤めてるんだから、お金の困ってるってわけじゃないんでしょ？レンの爪の垢でも煎じて飲んだらどうなのかしらね、あの夫婦は」

「そうだね。でも、普通に生きていくには、彼らみたいなほうがわかりやすくいいんじゃないかな。逆に、ミズシマくんみたいな生き方はきついと思うね。彼はたぶん、俺以外に彼の絵を五百万で買ってもしないなんていう人が現れても――むしろ素直に喜べないだろうから。鈴木夫妻みたいに「どうだね、おまえ？」、「やったわ、あなた！」みたいな感じのほうが、楽に人生を送っていけるんじゃないかな。彼ら自身、金メッキを磨き上げるような人生で、純金の存在には遠く及ばなかったとしても……むしろそれが世間じゃ＜普通＞と呼ばれることだから」

「ねえ、クマちゃん」

バンビーナは駐車場まで辿り着くと、クマちゃんの腕に絡めていた自分の手をほどいて、彼の太い首に両手をまわした。そして背伸びをすると、彼の唇にキスする。

「あたし、クマちゃんのそういうところ、大好きよ」

クマちゃんは、外の暑さのせいばかりでなく、自分の体感温度が二十度ほども一気に上がったような気がした。そしてバンビーナが運転する車の助手席に乗りこみ――暫くの間、彼にしかわからない考えごとに耽って、沈黙を守ったままでいた。

シャネルのサングラスをかけたバンビーナも、どうやら自分と同じような様子だとクマちゃんは思う。居心地のいい沈黙……バンビーナはバンビーナで、自分とはまた別に、思うこと、考えることがあるのだろうとクマちゃんは思う。

午前十一時頃、駐車場から出た時には、クマちゃんはこう思っていた。

画廊のガ口から戻って、もう一度この駐車場へ来た時、果たして世界は同じだろうか、と。

おそらく自分は嫉妬に腸が煮えくり返りそうになりながらも、顔だけは冷静を装おうと懸命な態度をとっているのではないかと想像していた……もっというなら、バンビーナが結婚前に「わたしには彼のような男性とも一緒になれる道があったことをお忘れなく」ということを見せつけ

るために――一種の女の策略から、昔の男と思しき人物に会わせようとしているのではないかとさえ、勘繰っていたのだ。

果たしてその結果は、どうだっただろう？

かねてより気になっていた水嶋蓮という青年は実に感じのいい好青年で、バンビーナとの関係も過去に数回寝たことがあるとかなんとか、そんな汚らわしいものではまったくなかったのだ！

しかも、立食台でバンビーナにシャンパンを勧めていた男――彼とバンビーナが話しているところを見て、クマちゃんはこう思った。バンビーナはもしかして「自分はいつも彼くらいの男に軽くモテるのよ」と自分にアピールしたいのだろうか、と。

だが、それもまたクマ公の被害妄想に過ぎなかった！

『あの吾味さんっていう人、本当にゲイなの！？あんな格好いい人が吾味悟郎なんていう名前でゲイだなんて――世の中狂ってるとしか思えないわね！』

クマちゃんはバンビーナが言っていたセリフを思いだし、軽く笑った。

「なあに、どうかしたの？」

信号待ちしている時だったので、バンビーナはクマちゃんを振り返ってそう聞いた。

「いや、なんでもないよ。ただ君は――俺にとって考えられうる限り、最高の女だなと思ってさ」

「やあね、もう。何よ、いまさら！」

プッと後ろからクラクションが鳴り、バンビーナは信号が青になっていることに、一瞬遅れて気づく。

「ムッカつくー。何よあの、スカイライン野郎！！」

バンビーナはバックミラーを見上げて言った。

「あたし、運転が下手な男って大っキライ。車のことですぐイライラする奴って、大体早漏なのよ。あと、運転が下手な奴って大概セックスが下手だしね。これはキャバ嬢やってた時、他のみんなも同じ意見だったわ」

「じゃあ、その基準でいくと、俺はどうなる？」

実をいうとこれからクマちゃんは、バンビーナの実家へ行くところなのである。

そしてそこからバンビーナの母親だけを連れだし、三人で焼肉を食べにいこうということになっていた。

「クマちゃんは、いつも運転手付きの車に乗ってるから、あまり関係ないんじゃない？だって、クマちゃんが自分で運転してて仮に事故った場合――色々面倒でしょ？下手したらTVのニュースになっちゃうかもしれないし……そしたら株式にも影響でちゃいそうだから、ペーパードライバーでも仕方ないわよ」

「まあね。昔、知り合いの政治家の車に乗ってて、事故に遭ったことがあるんだ。その政治家の後援会の帰り道で、彼の秘書が小学生の男の子を轢いてしまってたね。彼は両足とも二度と動かなくなかった。まだ小学四年生だったのに、だよ。この政治家はお金を山のように積んで謝罪した… …まあ、正確には土下座したのは秘書だけど、マスコミに漏らさないでおいてくれるよう、病院の床に頭をこすりつけたってわけさ。それ以来、自分で車を運転するのがひどく危険なことに思えて、お抱えのベテラン運転手を雇うことにしたってわけ」



「ま、今ももしかしたらすごく危険なのかもよ？」と、バンビーナは笑った。「あたしが軽い接触事故でも起こした場合――クマ印で有名な某インターネット企業の社長、美人脚本家と熱愛デートか！？なんて言われるかもね」

「俺はそういうタイプの有名人じゃないよ。というより、騒がれるとしたら君のほうじゃないかな。あの美人脚本家はあんなクマ公と本当につきあっているのか！？みたいな感じでね」

「それはだいじょーぶ！」と、バンビーナはけらけらと愉快そうに笑う。「だって、文筆業をやってる人間って、マスコミに叩かれにくいもん。なんでかっていうと、メディアって結局連動して動くでしょ？だから、どっかの週刊誌があたしのことを書いたら、そこの出版社にはわたし、一行も何も書かなくなるかもしれないじゃない？だから報道にも慎重になるってわけ。もしあたしが自分を何か物凄い存在だと勘違いして――テレビのゲストコメンテーターの仕事とかやってたら、また別でしょうけどね。でもわたし、そこまで馬鹿じゃないし」

「……君は、本当に賢い女性だな」

クマちゃんは「そーお？」などと言って笑う、バンビーナのことが突然、愛しくてたまらなくなかった。

出来ることなら、彼女の母親を交えた夕食会など放棄して、このままどこかホテルのスイートにでも駆けこみたいくらいだ。

でもクマちゃんは、そのかわり全然別のことをバンビーナにしてあげようと閃いた。

ホテルのスイートへクマがバンビをお姫さま抱っこして駆けこむのは、焼肉を食べたあとでもいい……そのかわり、次に会う時までにバンビーナの好きなシャネルかヴィトンのバッグでも一プレゼントしてあげたいと思ったのだ。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

飛鳥ミチルの両親は、ふたりとも教師だった。

父親が高校の英語教師で、母親が小学校で特殊学級を担当する教諭だった。

小さな頃から英語をなるべくネイティブに近い発音で話せるよう躡けられたミチルは、英語に関してはもともと、そう苦労なく話せる語学的才能があった。

そこに加えて、大学でフランス語を選択し、語学クラブに所属していたことで、ドイツ語もかなり話せるようになった。

そして教育大学を卒業後、両親と同じ教職に就き、最初に勤めることになった公立高校で担当したクラスを見送ったのち――中学時代の親友に言われた言葉がきっかけで、海外へボランティア活動をしにいくことになった。

『ミチルってさ、ほんとつまないよね。せっかく四ヶ国語も話せるのに、高校で国語とか教えてるんでしょ？それって、意味なくない？もっと自分の才能を活かして世界へ自由に羽ばたきたいとか思わないの？』

そうミチルに言った親友は、もし彼女がボランティア活動というものに携わっていなかったとしたら――彼女自身が人生の落伍者としか思えない人生を送っている人物だった。

高校を中退し、薬漬けになって道端に倒れていたところを、あるボランティア団体に拾われたのだ。以来、そこで働いているとはいえ、少しそのことを鼻にかけているような節があると、ミチルは随分前から思っていた。

でも、彼女がしているホームレスの人たちを支援する活動は確かに尊いものだし、それに引き換え自分は何もしていないとも思い、ミチルはずっと黙って彼女――渡邊エリカの話聞いていた。

中学では仲が良かったものの、高校は別々だったので、エリカがどんどんおかしくなっていっ

ても、ミチルにはどうすることも出来なかった。薬を買うためのお金が欲しいと言って、呂律のまわらない口で電話をしてきたことさえあったけれど、ミチルは彼女の言った嘘を信じた振りをして、お金を渡したことが何度かあった。

「普通さ、そんな奴に金渡しても返してもらえないって思わない？それにこのままずっと強請られるような感じでお金を渡すことになったらどうしよう……とか、そう思わなかった？」

――もちろん、ミチルはそう思った。

でも、高校時代、彼女にはエリカほど仲のいい友達が出来なかったので（というか、ミチルはクラスで完全に浮いていた）、ミチルにはミチルで必要だったのだ。

エリカにお金を渡すという行為が、何故かというのは言葉でうまく説明出来なかったとしても。

「あたし、ミチルのことは確かに羨ましいとは思うよ。両親がふたりとも教師なんていうクソつままない職業に就いてる人たちでも――少なくともうちの親よりは百万倍立派な人たちだもんね。でもさ、あたしミチルになりたいとは思わない。そんな安定志向の暮らし、あたしにはどう考えてもつままないとしか思えないもん」

ミチル自身、何故エリカに言いたい放題のことを言わせておくのだろう、といつも思ったものだった。

大学へ入ってから、ミチルにはエリカなどいなくても対等に話せるレベルの仲のいい友人が何人も出来た。生まれて初めてのボーイフレンドが出来たのも、この頃だった。

それでも、やはりミチルはエリカから呼びだされると彼女に会い、一方的な説教にも近いような、ボランティア活動の素晴らしさについて、耳を傾けることになったのだ。

「彼氏か～。なんかいいよね、彼氏って。それで、どこまでいってるの？」

薬を得るために売春行為を何度もしていたエリカは、特定の恋人が長くいなくても、その方面に自慢出来ることがたくさんあるとでも言いたげに、ミチルにそう聞いた。

「どこまでって？」

ミチルにはエリカの聞きたいことがよくわかっていたが、わざと誤魔化した。

「セックスのことに決まってるじゃん。ミチルって、結婚するまでは操を守るとかいうタイプでしょう？なんかいいよね。今時そんな子、滅多にいないもん」

一応念ために言っておくと、エリカは馬鹿にしてそう言ったわけではなかった。

そこには、「出来るなら自分もそうありたかった」という願望が言葉の中にこもっていた。

何故といえば、彼女の初めての相手は義理の父親だったのだから……。

「前から思ってたけど、ミチルって恋愛に関して意外とクールじゃない？わたしのまわりの他の子なんか、初キスして「わーっ！！」とか、初セックスで「キャーッ！！」とか、大体そんな感じよ？あとはフェラチオってどうしてもしなきゃダメかなとか、断ったら嫌われると思う？とか、そんな話ばっか。ミチルの大学の友達とか、そこらへんどう？」

「さあ……みんな、もう少し初々しい感じかな。合コンとかはあるけど、お持ち帰りされてホテルへ行ったとかいうのは、なんか都市伝説みたいな？そんな感じかも」

「都市伝説ねえ」

つままないあなたにしては、珍しく面白いこと言ったわね、というようにエリカは笑った。

そう——ミチルとエリカの関係というのは、大体いつもそんな感じだった。

エリカが親分で、ミチルが子分。そして子分は親分の言うことをなんでも聞かなければならない。まるでフリスビーを投げられた犬が、それをくわえて戻ってくるように。

正直、大学にいた頃から、ボランティア活動に参加してみたら、とは繰り返し言われていた。でもミチルはそれを断り続けた……それが何故だったのか、今ならミチルにもその理由がよくわかる。

ミチルはなんとなく<エリカ的世界の住人>になるのが怖いと無意識の内にも思っていたのだ。

だから、なんでもいうことを聞く子分でも、その点だけは譲れないと思って抵抗していたのかもしれない。

<エリカ的世界の住人>とはつまり——明日、所持金が仮にたったの五十円であったとしても、「なんとかなるさ！」と笑って生きていける人たちのことである。

もちろん、その点だけを強調するなら、<エリカ的世界の住人>たちは素晴らしかったともいえよう。

けれども彼女たちというか彼らは、保険証も持っておらず、厚生年金もかけていないような人たちである。

ミチルは両親から安定した職業に就くことの素晴らしさ、老後のために貯金することの素晴らしさ、また教職は実にやり甲斐のある仕事だと吹きこまれて育ったため、<エリカ的世界>のことを思っただけでも、無意識のうちにアレルギー反応がでたのかもしれない。

けれども教職に就いて初めてクラス担任となり、彼女は教師という仕事に失望しきってしまった。そして悩んでいた時にエリカから再び「なんでそんなつまらないことで悩むわけ？もっと広い世界へ目を向けなよ」と言われ——長期休暇をとってエリカと一緒にアフガニスタンへ行くことになったのだ。

それにしても何故アフガニスタンだったのだろうか……もっと他の国でも良さそうなものなのに。

ミチルはそう思ったが、子分としてエリカの言うことには逆らえない。

そしてそこで紺野道弘というカリスマ的ボランティア活動者と出会い、ミチルの人生は変わった。

誤解のないように説明しておく、ミチルは紺野青年に恋心など抱いたことは一度もない。

人間として彼のことは純粋に尊敬しているが、恋人とかなんとかいうことは一切考えられない……そうした意味合いにおいて、紺野青年は実に凄い人物だとミチルは思っていた。

世界中からあらゆる人種のボランティアが集まっている中で、彼はすぐにリーダーとして頭角を現しはじめた。ちなみにこの紺野青年、ろくに英語もまともに話せないにも関わらず、人とコミュニケーションをとるのだけは抜群にうまかった。

ミチルは通訳として彼と他の人間の間で挟まることが多かったけれど——紺野青年と同じく英語をあまり話せないエリカは、生まれて初めてミチルに嫉妬心を感じたらしい。

そうなのだ。エリカは紺野青年のことが好きだった。そしてミチルは紺野青年に対して、凄い

人だとは思ひ、尊敬もしているけれど、そんな感情は一切抱いたことがなかった。

けれど、エリカはミチルがどんどん親分のような存在になっていくのが耐えられなかったのかもしれない……結局、いくら否定しても、ミチルは紺野青年のことを心の奥深くで恋しているといった話の流れになり、エリカは三ヶ月もしないうちにアフガニスタンから帰国することになった。

そしてエリカのかわりに派遣されてきたのが溝口清二さんという、三十代半ばの、年以上に老けてみえるおじさんだった。

首都のカブールから孤児院まで戻ってくる途中で、彼もまた紺野青年と同様にさらわれたのだが、何故か彼だけすぐにタリバンの武装勢力から解放されていた。それが何故だったのか、理由のほうは判然としない……けれども、ミチルが思うには溝口さんは真っ黒に日焼けして相当現地人化していたので、そのせいだったのではないかと、なんとなくそんな気がしている。

苦勞の末にようやく孤児院の建物が建設され、これからさらに本格的な活動を……と思っていた矢先のことだただけに、紺野青年を失うということは、他の孤児院を運営するスタッフの誰にとってもつらい痛手といえることだった。

そして紺野青年の次にアフガニスタンの孤児院へやってきたのが――水嶋蓮という名前の、紺野道弘の高校時代からの親友だという青年だった。

ミチルは彼がアフガニスタン孤児院の、入口付近に立っていた時のことを、今もよく覚えている。

重いナップザックを三つほど背負い、汗だくになっている彼は、今にも倒れそうな顔色だった。

誰も紺野のかわりになれる奴などいない……そういう雰囲気が運営スタッフ全員の共通した意識だったけれど、ミズシマ青年は彼なりに多国籍スタッフのメンバーに馴染んでいき、彼にペルシア語を教えるのは、ミチルの役割ということになった。

正直なところをいって――ミチルのミズシマレンという青年に対する第一印象は、あまりいいものではなかった。

何故とって、他の国の女性スタッフメンバーがほぼ全員、色のついた感情で彼に接することが多かったからである。

スウェーデン人のセルマ・ヘイデンが、イタリア人のカテリーナ・ミデリにこう言っていたのを、ミチルは今もよく覚えているくらいだ。

「レンみたいな男にだったら、小指で撫でられただけでイっちゃうわよ」

「撫でられるって、一体どこをよ？」

くすくすとカテリーナが笑う。

「決まってるでしょ。体中どこでも、よ。東洋人って、意外に神秘的よねえ。ミチヒロは特に恋愛感情を抱くようなタイプじゃなかったけど、それでもリーダーとしてカリスマ性があったし。そして今度はレンってわけ」

「確かにね。キム・ソンヨンが言ってたけど、日本ってアジアの中の一国って感じじゃないんだってよ？つまり、経済大国とかなんとかいう意味じゃなくて――アジアの中の韓国とか中国っていう感覚じゃ捉えられない、＜日本＞っていう全然別のアジアに属さない感じの国なんですって

」

「ふうん。まあヨーロッパの中じゃイギリスみたいなもんかもね。イギリスって、絶対ヨーロッパって感じじゃないでしょ」

――そうした彼女たちの話を聞いたために、ミチルのレンに対する態度というのは最初、かなりのところ冷淡なものだった。

もちろん、スタッフとして協力すべきところは協力するが、壁を一枚隔てて接するような感じで、あなたがそれを壊さない限り、わたしからは絶対に歩みよることはない……といったような態度で、ミチルはミズシマ青年と接し続けた。

「俺、アスカに何か悪いことしたっけ？」

他の女性スタッフがみな好意的なのに――自分だけが距離をとっているから、そのことが気になったのかもしれないとミチルは思ったが、その手には乗らないとばかり、彼女は引き続きミズシマ青年とは壁を隔てて話すことにし、むしろ現地人と瓜ふたつといった感じの溝口氏と仲良くすることのほうを選んだ。

エリカもそうだけれど、こういう場所に＜恋愛感情＞などというものを持ちこむ浮ついた人間が、ミチルは許せなかった。

その点についてもやはり紺野青年は偉大だったとミチルは思ったが、それでも長く時を共に過ごすうちに――彼女にも、他の女性たちが何故そんなにレンのことを「いい」というのかが、わかってきたのである。

そして、レンから「俺、アスカのことが好きみたいだ」とストレートに告白される頃になると、ミチルも彼の魅力の前にすっかり陥落してしまったというわけだ。

アフガンから帰国するという時、ミチルは両親に「これからはレンと日本で暮らしたい」ということを噛んで含めるように話し、でもそのためには「自分はアフガンにいたいけれども、両親がどうしても日本にいてほしいと望むから……」といったような体裁が必要なのだと、うまく説明する必要があった。

「まあ、そりゃあね。孫の顔を見るのはやっぱり、安全な日本が一番だろうよ」

父はひとり娘の言葉に納得し、母が「だからといって演技までするのはやりすぎじゃないかしらねえ」と言う言葉を退けた。でも、随分あとになってから――この時の母の言葉は、実は正しいものではなかったかとミチルは思い当たる。

つまり、ミチルの母は「これから結婚するのに、本音で腹を割って話せないようでは、いつかどこかで何かがうまくいかなくなるよ」といったようなことを忠告したのだ。

そしてその母の言葉は結婚後、一年以上もたってから見事に的中したとっていい。

夫はたぶん、家にいるよりもギャラリー・ガロにいる時間のほうが長く、結婚して一年がたつ頃にはミチルに対してなんの関心も払わなくなった。

最初は、レンに限ってありえないと思いつつも、浮気を微かに疑って、真夜中に＜画廊・ガロ＞まで行ったこともある。もちろん、中には入らないし、こっそり外から様子を窺うだけではあった。

結果として、レンは決して浮気などしていないと信じることは出来たものの、それでも、夫

をギャラリー・ガロに取られているような、そうしたおかしな感覚はミチルの中で拭えなかった。

ミチルが生まれて初めてつきあった男性は、彼が海外研修でアメリカへいくまで一キスまでしか関係が進展しなかった。彼はとても真面目な人で、ミチル自身も彼女が自分でそうと信じているとおり、とても真面目な人間だった。

けれども、大学二年の頃からつきあっているその彼が、海外研修で一年ほどアメリカへ行くという時、どうしても関係を持ちたいと迫ってきた。向こうへいったら一年は帰ってこれないのだし、帰ってきたら結婚したいと思っているから、どうしても、と。

ミチルはあとになってから、どうして彼の要求を拒まなかったのだろうと、そう思った。

もちろん拒めば別れが待っていると予感したからそうしたのだけれど、結局のところ彼とは結婚しなかったのだから……。

一年の間、恋人同士として毎日のようにメールで連絡をしあったりはしたものの、彼が帰国した時、ふたりの間は何故か以前のようにうまくいかなかった。

もちろん、彼は浮気していなかったし、ミチルもそうしたことは一切なかった。

でもこのまま結婚してもうまくいきそうにないことがわかっていただけに、ミチルは彼と別れることを決断したのである。

そしてその時に学んだことがひとつある。

女には、男にはわからない絶対領域というものがあるということだ。

別れる時、彼は「あの時ああしておいて良かった」といったようなことを、どこかセンチメンタルな顔つきで語っていたのだが、ミチルの気持ちは正反対だった。

つまり、「結婚しないなら何故こんな男に自分の処女を捧げてしまったのか」ということだ。

このことを友人に話すと、「まあ、いい人生経験、恋愛経験の肥やしとでも思うしかないわね」と言われて終わりだったけれど……やはり自分がそう感じたことは正しかったのだと、レンに初めて抱かれてからミチルは確信していた。

もちろんそんなことを今さら後悔したところで、遅かったにしても。

エリカが言っていたとおり、ミチルは恋愛に関してはとてもクールな人間だった。

まわりの友人たちが初キスで「わーっ！！」とか初セックスで「キャーッ！！」とか言っている間、随分恋愛の自慢話を聞かされたけれど、ミチルは決して同じようにはならなかった。

そんなことをいちいち自慢するのは、低俗で馬鹿な女だけだと達観していたような節さえある。

けれど、レンに「俺、アスカのことが好きみたいだ」と言われて以来――ミチルの中で生まれて初めて固かった恋という名の蕾が開きはじめた。

そう――大学二年の時から三年つきあった初めての男のことなどは、ミチルにとっては今や過去の遺物と化していたとあっていい。今のミチルになら、何故セルマ・ヘイデンが「小指で触らただけでイっちゃいそう」と言っていたのか、その言葉の意味がよくわかる。

だから、レンが自分のことをあまり求めてこなくなった時、ミチルはとてもつらかった。

時々、そうしたことがあっても、それはどこか「たまにはこういうこともしないと、夫婦といえなくなる」といったような、かつての強い情熱には遠く及ばない、以前ほどじっくりこない行

為だったから……。

けれど、慎み深い性格のミチルとしては「どうして最近、してくれないの？」などということ、口が裂けても絶対に言えない。

女のプライドと見栄にかけて、絶対にそんなことを口に出してはいけなかった。

ミチルは、どうすればレンにかつてあった自分に対する情熱が戻ってくるのか、それを取り戻す術を知りたかった。

毎日豪華な食事を作って彼のことを待ってあげればいいのか、それともセックスレスで悩む女性に対して、カウンセラーがラジオで答えていたみたいに――セクシーな下着を身に着けて待ってあげればいいのか……もちろんこのうちの後者について、ミチルは実行しようなどとはまったく思わない。

そんなことをすれば、自分は娼婦と呼ばれる女性と同じだとミチルは思った。

今、ミチルが思うのは、次のことだけだった――それはつまり、もしあのままアフガンにい続けたとしたら、レンと自分の絆というのは、ずっと固く結ばれたままだったのではないかということだ。

そして今、ミチルはアフガンの孤児院にいた子供たちから届いたメッセージカードを読み……涙を流していた。「Back my home」、いつでも戻ってきてとか、レンやミチルがなくて寂しいとか、覚えてばかりのつたない英語で、そこには幼い文字が並んでいた。

(わたしはもしかして、この子供たちを見捨てて、自分の幸せのことだけを考えたから、今こんな目に合っているのだろうか?)

ミチルは特に自分に懐いていた、ムハンマドとその妹マリアムの写真を眺め、胸が痛くなった。

(今からでも遅くないなら、わたしはこの場所へ戻るのに……)

でも、レンにはもうそのつもりのないことが、ミチルにはよくわかっていて。

彼は、わたしではない何か別の存在と結婚していて、そちらに心を奪われているのだ。

ミチルはじっと、それでもいつか夫の心が戻ってくればよいと思い、待ち続けていた。

でももう無理なのではないかと思えること、そのうちに夫からもしかしたら離婚を切りだされるのではないかと思うと――そんな衝撃にはとても耐えられないと思った。

もしそんなことにでもなったら、ギャラリー・ガロの前オーナーのように、自分も自殺してしまうだろう。

それも、彼が今一番大切にしているあの場所で、あてつけがましい死に方をしてやろうと画策してしまうかもしれない。

また、別れたくないがゆえに、結婚して以来一度も見せたことのない自分の別の顔――相当に見苦しくて、彼が直視したくない面もさらけ出すことになるに違いなかった。

(でも、どうかそんなことになる前に)と、ミチルは近頃かなり本気で神さまに祈っている。

イスラム教の神、アッラーを彼女は信じていないが、自分の願いごとをもし彼が叶えてくれるというのなら、毎日メッカの方向へ五度祈ることを死ぬまで続けても構わない、とさえミチルは思う。



(どうか、レンの心がわたしに戻ってきますように……それから、彼がもう一度わたしのことを  
<本当の女>として見てくれるようになりますように……)

だが、その痛切な願いを、神が退けてよこそうとは、この時のミチルにはまだわからないことだった。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

上月数馬の俳優としてのキャリアは、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』という一作で終わってしまった。

この舞台は、ドラマ化と映画化が決定された時、ドラマのほうも映画のほうも、デューク・サイトウ役は上月数馬にしか務まらないと言われたほど、彼にとっては当たり役だったといえる。

けれどその後、ここを足がかりに一気にスターダムにのしあがってやろう！という数馬自身の野心は、木っ端微塵に砕かれて終わる結果となった。

ドラマのほうも回ってくるのは三流の脇役ばかりで、やがてその役も端役となり、さらには主演の決まっていたミュージカルを降板することになって以来——彼の役者人生は見るも無残なものとして終焉を迎えつつあった。

その時、数馬はかつて自分にチャンスを与えてくれた霧島幸太郎のことを思いだし、彼に会いに行った。

彼にとって、霧島はデューク・サイトウという役を与えてくれた恩師であり、彼がいたからこそ今の自分があるともいえる人物だった。そして、計画どおりまるでうまくいっていない今の自分の人生について洗いざらい話し、脚本家の川上サクラの住所と電話番号を彼から聞きだすことに成功した。

つまり、彼女に口を利いてもらうことで、なんとか俳優として再浮上のチャンスを得たいと思っていたのである。

正直なところを言って、川上サクラが住んでいるという、一等地に立つその瀟洒なマンションを見上げた時——数馬の中では憎しみが募った。

芸能界と呼ばれる場所には、裏に美味しい利益を吸い上げる黒幕のような存在がいて、数馬は彼女がそうしたうちの誰かと寝たから、今の人気脚本家と呼ばれる地位を得たのだろうとしか思

っていなかった。

『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』は、今も劇団レリックの人気演目のひとつとして定期的に上演されているが、そちらの舞台のほうには、川上サクラは一切タッチしていないという。

だが数馬は、上演のたびにおそらくは、彼女の元には結構なお金が転がりこんでいるのではないかと知っている……もしかしたら、舞台の上で必死に汗を流して演じる役者などより、何もしていない彼女のほうが多額の金を。

芸能界と呼ばれる場所にいる連中は、そもそもみんなそんな連中ばかりだ。

利用できる時に利用できるだけしておいて、旬な存在でなくなった途端にポイと捨てられる人間のなんと多いことだろう。

先ごろ自殺した芸能人が今、その名前でネット検索されるナンバーワンに輝いているが、いずれ彼の名前のことなど、誰も思いださなくなるに違いない。

「そーいやさ、昔△◇っていうドラマに出てた奴いるだろ？あ〜っ、なんだっけ。名前思いだせね。ほら、自殺した奴だよ。落ち目になってテレビでほとんど見かけなくなった頃に……」

その線でいったとすれば、たぶん自分は『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』一作で終わった人、とでもいうことになるのだろう。

数馬はずっと思っていた。いつか、チャンスを掴むことさえ出来れば、自分は役者としていつまでも人に覚えられるくらいの人間になれるだろう、と。

だが、薬物を使用していることがミュージカルの舞台監督にばれてからというもの、パツパツ仕事が回ってこなくなった。この舞台監督は<鬼>として知られる有名な人物で、幸い、マスコミにそのことを情報として洩らされるということはなかったものの――立ち直るまでは絶対に舞台へ上がるなど、そう強く数馬は警告されていた。

(くそっ！俺は薬をやったほうが、演技のキレもいいし、セリフの覚えも早いんだよ！！)

実をいうと数馬は、この鬼監督に自分の薬物使用をチクったのは、昔つきあっていた二階堂ほたるではないかと思っている。

彼女はこの鬼監督の洗礼を受けて以来、ドラマや映画に引っ張りだこになっている……そして先日、今をときめく某スター俳優との熱愛が報道されていた。

(昔のブタみたいに太ってた頃の写真を、ネットに流出してやろうか？ええ？)

そうすれば千年の恋も冷めるだろうよ、そう数馬は思うが、そこまで思った時に、流石に自分という存在が惨めになった。

ほたるは、とてもいい子だった。いや、いい俳優であり、いい人間であり、いい女性であった、というべきかもしれない。

彼女のような人間が幸せになるのは当然のことだと、そのことについては数馬にしても認めざるをえない。

それにそもそも――薬物に手をだすようになり、そのことが原因で彼女と別れて以来、自分はまったくツキに見放されているのではないか、という気さえする。

どうして自分は一度手に入れたと思った幸せの「青い鳥」を自分から手放してしまったのだろう……そしてもう一度そのラッキーバードを捕まえるにはどうしたらいいのだろうと数馬は思う。

そして二十階建てのマンションのてっぺんあたりを眺め、数馬は深呼吸して決意を新たにした。

(自分はまだ一度、てっぺんに行く。そしてそのためのきっかけが、今の自分にはどうしても必要なんだ)

数馬は1701号室のインターホンを押し、そして川上サクラが応答するのを待った。

もしいなくても、彼女が帰ってくるまでここで待っているくらいの気持ちで、彼は今日、ここへやって来た。

携帯の番号もメールのアドレスもわかっているが、こういうことはアポイントメントをとって先に「実は～」などと説明しておくより、ガチンコでいったほうが、絶対に自分の熱意が伝わるはずだと、そう数馬は思っている。

「はい？」と、高慢ちきな女の声がして、数馬は反吐がでそうになったが、グッと堪える。

この女とは、舞台以外のプライベートな部分での接点というのが、ほとんどなかった。

いつも上から見下したような物の言い方をし、人の欠点をあげつらう……「おまえこそ、人間のクズだ！」と言ってやりたい衝動を、数馬は何度このスパルタ・ビッチに対して感じたことだろう。

もし役者として成功していれば、それもまた「いい思い出」となっていたかもしれない。けれど、今はこんな女に頭を下げなければいけないほど、落ちぶれた自分に対して何より腹が立つ。

「あの、上月数馬です。昔、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』で、役者として鍛えてもらったデューク・サイトウ役の……」

数秒の間、沈黙が流れる。

「わかったわ。今オートロックを解除するから、ちょっと待ってて」

(やった!!!)

数馬は、まだ自分の要求を飲んでもらったわけでもないのに――これで99.9%、自分の願いは果たされたも同然だと思った。また、もし相手がこちらの言うことに応じなかった場合、数馬にはある覚悟があった。

クズのような人間のことは、クズのように扱っても何も問題はない……生きるも死ぬも、あの女自身の選択次第なのだと、数馬はそう思いながら、オートロックの解除された半透明のドアを歩いていった。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

あたしはその日の朝、ほとんど腑抜けになっているような感じで、目が覚めた。

クマちゃんからすでに、五件ほどメールが入っているけれど、読む気にすらなれない.....何故といえば、結婚を数ヶ月後に控えた花嫁が絶対にしてはいけないことをしてしまったからだ。

いや、わたしはここで他の男とついうっかり寝てしまったなんていう話を、告白したいわけではない。

それに、もし仮に酔っていてそんな事態になったのだとしても――わたしはその過ちをなかったこととして処理し、迷わずクマちゃんと結婚することが出来るくらいには、ツラの皮が厚い女だ。

でもレンにキスされてしまった今、それは見も知らぬ男三人を相手にセックスしたなどというより、遥かに罪深い行為であったように思われた。

――罪深いですって？

いや、実際には罪の意識さえ感じていない、といったほうが正しいだろう。

わたしに今ある感情は、ただ困惑と、痺れるような甘い感情、それからレンにあのまま体を貪られたかったという欲望だけだ。

あまりに突然のことで、突き放したのは意外なことに、自分自身のほうだった。

以前は、いつかそんな瞬間が訪れたらいいと思うことは度々あったけれど、何故よりもよって完全に諦めた今になって――レンはあたしにあんなことをしたのだろう。

例の鈴木一郎氏の絵画展にクマちゃんと行ってから、(もうあたしたちは一生何があっても友達なんだわ)という気安さから、あたしはハワイのパンフレットをレンの奴に届けに行くことにした。

うちの家族やベルビュー荘の人たち、それにクマちゃんの家関係の人含め、結婚式のため

のバックツアーのような感じで、金額のほうはかなり割安になっているコースがあるのだ。

レンと奥さんがふたりでそのコースに申しこむなら、返事の欲しい日時があるので、そのことを知らせにいこうと思っていた。

ちょうど、夕方の五時を少しまわった頃のこと、駐車場へ下りるなり突然夕立となり、雷まで鳴り始めたのには仰天した。

「えっ、マジ！？何これ、雹！？」

わたしが小さな頃、一度田舎のおばあちゃんの家に行った時に、雹に遭遇したことがある。

ぶつかると頭がとても痛くて、泣きじゃくるあたしのことを、おばあちゃんが懐に抱いて家まで連れ帰ってくれたという、そんな懐かしい思い出だ。

「こんなのに当たったら、ほんと大変よ……」

あたしは傘がもしや破れるのではないかと訝しみながら、天変地異に対する恐れに心をおののかせつつ、なんとか画廊のガロまで走り着いた。

「ちょっと、レンーッ！！いるのはわかってるんだから、早く開けてったら！！」

もはや、見栄も外聞もへったくれもない。

あたしは借金を取り立てにきたヤクザのように、鍵のかかったガロの扉を叩き続けた。

「レンーッ！！まさかあんた、あたしのこと、殺したいわけじゃないでしょうね！？」

そう叫んだ時、照明の消えたロビーに、突然パッと光が灯った。

奥にあるアトリエのほうから、ダサい緑のトレーナーを着た、レンの奴が顔を見せる。

「ああもうっ、死ぬかと思ったわよっ。あんたまさか、この画廊からふたりも死者をだしたかったわけ！？」

「来るなら来るって、連絡くらいすればいいだろ。ここは午後五時きっかりに鍵を閉めるから、そのあとに誰か来ても、奥のアトリエにいたらわからないからな」

「連絡ですって！？」あたしはほとんどキレ女になりながら言った。「はん！まさかそんな殊勝な言葉が、連絡嫌いのあんたの口から洩れるとはね！まさに天変地異の前触れだわ！メールもキライなら電話もキライ、そんな奴が何寝言いってるのよ！」

「いいから、とにかくこっち来いよ。なんか体を拭くもの探してくるから……」

そう言ってからレンは、一度雹の中を外に飛びだし、あたしのベージュ色の傘を拾い上げ、そして戻ってきた。そしてレンは、それを来客者用の傘立てのところに立てかけている。

――この一連の、レンの何気ない落ち着いた動作のお陰で、あたしの怒りはすぐ静まった。

それにこいつは、怒り口調のあたしに対して特に何も反論してこなかった。

いつもなら、同じくらいの怒鳴り声で応酬してくることも珍しくないのに。

「やれやれ。よりもよってこんな時に――なんだってこんなところへやって来たんだか」

「ハワイの格安ツアーパックのことで、話をしようと思って。そしたら、ずっと晴れてた空にどんどん分厚い雲がかかってきて……突然ドザーッ！よ。&雷ゴロゴロとゴツゴツ雹のオマケつき」

「ふうん。ま、なんにしてもこういう天気っていうのはそう長く続かないからな。あんたが用事を終えて帰る頃には雹もおさまってるだろ」

「そうね。ならいいけど……」

レンはあたしがくしゃみをすると、キャンバスにかかっていた布を外し、それであたしの体を覆った。

「何コレ？なんかカビくさい気がするんだけど？」

「しょうがないだろ。ホテルのロゴ入りバスタオルなんていう気が利いたもの、ここにはないんだから……とりあえずそれで我慢しとけ。あと今、コーヒー持ってくる。冷たいほうじゃなくて、あったかい奴な」

「ん。ありがと」

あたしがそう言った時、不意にレンの顔つきが変わった。

あとからしてみれば、確かにこの日、レンの様子はいつもとは何か違っていたと思う。

妙に人のことをじろじろ観察するような目つきで見ているというか……でもあたしは、奴のそんな視線を特にどうとも思わず、いつもどおりの口調で色々なことをぺちゃくちゃと喋っていた。

「でね、ここで鈴木一郎氏の絵画展があったあの日、クマちゃんとうちの母さんを会わせてわけよ！そしたら、うちの母さん、一目見るなりクマちゃんのことを気に入っちゃって……もともと、なんとか会社の社長とか重役とか、そういう肩書きに弱い人ではあったんだけど——うちの母さんはまさに、金メッキを磨くプロフェッショナルなんだと思ったわ。つくづくね」

「金メッキを磨くプロフェッショナル？」

あたしはここで、くすくすと笑い、一呼吸置くように、レンが入れてくれたコーヒーを飲んだ。

「つまりね、この言葉はクマちゃんが言ったことなんだけど——この間の日曜に会った、とっても凡庸な愛すべき鈴木夫妻ね、彼らは金メッキを磨くしか才能のない人たちなの。そしてその正反対なのが、レン、あんたよ。純金はわざわざ「我こそは純金なり」、なんて人に言い触らして歩いたりしないもので？才能の違いってというのは、まさにそういうことを言うのよ」

「あの人が——佐々木さんがそう言ったのか？」

何故なのかはわからないけれど、レンのその言い方はとても冷やかだった。

わたし自身、自分がとてもまずいことを言ってしまったらどうかと、一瞬不安になったくらい。

「えっと、言い方は少し違ったかな。でも意味としては、大体同じようなことをね」

「まあ、確かにあの人のはあんたみたいなアバズレにはもったいないくらいの、立派な人だからな。その幸福をとり逃がさないよう、大切にしろよ」

「う、うん……」

何故か急に背筋がゾクツとして、あたしは両方の手で自分自身を抱きしめる仕種をした。

そしてなんとなく、暗闇が切り取られたような形の、アトリエの入口を見つめて——この画廊の前オーナーが自殺したという話を思いだした。

「あのね、レン……あんた、午後五時にここを閉めて、いつも何時くらいまで絵を描いてるの？」

「そうだな。まあ、大体二時半くらいとかかな。で、家に帰ってメシ食って寝る。それから次の

日は九時までここにこへ来るってことの繰り返しだ」

「ふうん。奥さん、何も言わないの？あたしだったら絶対、芸術のためとか寝言いってないで、さっさと家に帰ってこーい！！ってしつこく喚いちゃうと思うけどな」

「ミチルは物分わりがいいから。なんでも自分の思いどおりにしないと気がすまない、あんたと違ってな」

「ま～ね～」と、あたしは悪びれるでもなく応じた。「それより、こんなシーンとしたところに二時半までいて、気持ち悪くないの？あたし、今はあんたがいるからいいけど、真夜中にこんな場所にひとりであるなんて、とても耐えられないわ。なんか、二階のピアノを幽霊が弾いたりするんでしょ？」

「ああ、あの話な。でも、実際にはさ、俺がこうやって」と言って、レンは小さく流れているクラシックのボリュームを一瞬大きくした。「音楽をどでかくして絵を描いてることがあるってわけ。それを聞いた誰かが、たぶんそんな話をしたんだろうよ」

それからレンは、キャンバスに向かって再び絵を描きはじめた。まだスケッチ段階だったので、よく見えなかったけれど――まさか彼があたしをモデルにして絵を描きはじめていたとは思わなかった。

「あの……あたし、邪魔になる？レンが絵を描くのに」

「＜今日は＞大丈夫じゃないか？」

レンはそう、何か気になる物の言い方をした。

でもあたしは、特に何も気にしなかった。

絵を描きながら話しているので、意識が半分そちらへ取られるあまり、彼自身自分の言ってることを深く気に留めてもないのだろう……あたしはそんなふうに思っていたから。

それからあたしは、例の弟のお嫁さんである＜電腦アイドル・綾坂千鶴＞について話しはじめたのだった。

「でね、レンはどう思う？このお嫁さんっていうのが、結構手ごわいというか――わたしにまったく心を開かないような感じなの。例えていうなら、コンクリートブロックを十枚あたしのほうが突き破ったら、ようやく一言しゃべってもいいみたいな感じ？そのくらい壁があるわけ、誰に対しても。もちろん、弟に対しては違うらしいけどね……あれじゃあ、母さんとも反りが合わないのもわかるな～って思う反面、母さんは母さんでさっきも言ったとおり、金メッキを磨くプロフェッショナルでしょ？嫁と姑の問題っていうのは、難しいわよね。その点あたしは、クマちゃんのお母さんってもう亡くなってるから――ある意味、楽なのかもしれない。お父さんのほうは、すでに介護付き高級マンションに入ってるっていう話だしね」

「まあ、俺がおまえの話を聞いていて、総合的に思うには……その千鶴さんっていう人、たぶん根が純粋なんだと思うよ。ミチルがちょうどそんな感じだった。最初は俺に対して、全然心を開かなかったけど、ようするにそれは俺が――他の女性スタッフにちょっと色目を使われてデレデレしてるように見えたかららしい。ああいう場所では、恋愛感情なんて持ちこまず、黙って働いてというような信条でいたからな、ミチルは。まあ、人から見たらお堅いつまんない人に見えるかもしれないけど、その千鶴さんっていう人も、理由がわかれば「なんだ、そうだったのか～」みたいになると思うよ。たぶんね」



「ふう〜ん。そんなものかしらね」

レンが自分の奥さんの美点について語るのを聞いて、あたしは少しイラっとした。

考えてみれば、レンが自分の奥さんのことを話したりしたのは、これまでほとんどなかった  
といていい。

もちろんあたしはそんな話、聞きたくもなかったけど——でもよく考えるとそれは、少し不自然なことのような気もした。

あたしのような汚れたビッチに、清らかな奥さんのことを話しても理解できまい、といったようにレンが思っているのかと、今までは思ってきたけれど。

「でもね、特定の人にしか心を開かない人っていうのは、実際世の中にいっぱいいるにしても、千鶴さんの精神構造で理解できないのは、なんといってもネットで<電腦アイドル>なんていうものをやってることかしらね。可愛い服を着て、グラビア風に自分で自分のことを撮影してるのよ。で、それをネットに流して、ファンの子たちから「可愛い〜♪」なんてコメントもらって、「ありがとうでしゅ！！」とか返事をしたり.....レンはあたしのこと、ブランド服で着飾ったバカ女みたいな目で時々見るけど、あの子のブログ見てると、もしかしたら自分は遥かにまともなんじゃないかっていう気がたまにするわ。なんでかっていうと、あたしはブランド服が確かに好きで、家を出る前にあらゆる角度から鏡でチェックもするけど——それをわざわざカメラで撮影して、他の多くの人も見るべきだとまでは思わないもの」

あたしがこう言うと、レンの奴は動かしていた手を止めて、突然笑いだした。

「何よ！？今の、べつに笑うとこじゃないでしょ！？」

「いやさ、サクラのその義理の妹さんって、面白い人だと思ってさ」

レンはキャンバスとあたしのことを交互に見やるようにしてから、話を続けた。

「ようするに、なんだかんだ言って結局、サクラは見てるわけだろ？その千鶴さんのブログをさ。それこそ彼女の魅力が気になってる証拠ってことなんじゃないのか？それともうひとつ、教えておいてやるよ。これがその義理の妹さんにも当てはまるかどうかはわからないけど——人間っていうのは、自分よりも純粋な動機で動く人間の思考回路については、理解できないように出来てる。たとえば、サクラが「あいつのことだけは絶対嫌いだ！」って思ってる奴がいたとするよな。一度そうなったら、相手がその後どんなに改心しようと、何かのカタストロフ的出来事でも起きない限り、サクラはそいつが嫌いなまんまだと思うな。その相手がもし身を削って稼いだ金をすべて、ユニセフに募金していようと、サクラはこう思うだろう。「何よ、この偽善者め！」ってね」

「なあに？あなたの言ってること、あたしよくわかんない。あたしにもわかるように説明してくれない？」

——ベルビュー荘で暮らしはじめた最初の頃、レンはこういう種類のよくわからない日本語をわたしに対して使っていたような気がする。

そのたびにまるで、頭の悪い生徒が先生を仰ぐみたいな感じで、その意味について聞き返していたあたし.....その頃はそういうレンの上から目線がうざくもあったけど、今ではそんなのもみんな、全部が全部、懐かしい思い出だ。

「つまりさ、カタストロフっていうのは、それまで信じていた価値体系がすべて根底からぶっ壊れるっていう終局的な意味の他に――若干、救いのようなニュアンスも含まれてるんだ。逆にいうと、すべてのものが根底からぶっ壊れるくらいのカタストロフがなければ、＜救い＞というものはやってこない。何故かといえば、その時に最後まで耐えきって残ったものだけが、＜本当に本当のもの＞ってことだからな。救いっていうのは、本来そういうことだ。で、俺はいつも頭の中からこのカタストロフって言葉が離れない……まあ、わかりやすく先にミズキのことを引き合いにだすとしてよ。嵐さんは、大谷家で起きるカタストロフを避けるために、ミズキのことを一時的に離してベルビュー荘へ連れてくることにした。ミズキに限ってありえないとは思って、もしカタストロフが悪いほうに流れたら、ミズキが両親を包丁で刺して刑務所行きていうシナリオもあったかもしれない。で、ミズキの場合はいいほうにカタストロフが流れて、ある日突然自分の部屋から出てくるようになった……そして俺はそれを見て思ったわけだ。この「いい流れ」を持ってきたのは、他でもない自分がそれまで軽蔑してた女が運んできたものだってね。そこで俺の心の中でもちょっとしたカタストロフって奴が起きて――俺はあんたにあやまろうと思ったわけだ。でもこのカタストロフってやつは、普段から意識するようになってないと、そう簡単に理解はできない。普通の人間っていうのは大体、毎日金メッキを磨くことに忙しくて、最後まで残る純金のことについては思ってもみないだろうから……もし俺が、そっちの金メッキ磨きに熱心なタイプだったら、俺はあんたにアバズレ・ビッチの烙印を押したまま、今も関わりを断っていたかもしれないな」

「ふう～ん。まあ、あんたの言いたいことはなんか、漠然とではあるけど、わかるわ。あんたのいうカタストロフって奴が起きた時に、たとえば、地震でも雹でも雷でもなんでもいいわね。あたしがそれまで信じてた人が自分から離れて行って、意外にも千鶴さんみたいな人がその時心を開いて助けてくれるかもしれないみたいな、そんな話？」

「まあ、大体そんなところかな。サクラは自分が最初から人に見た目で判断されるから、その千鶴さんのことも、理解したいと思ってるんだろ。とりあえず、金メッキ磨きに執着してない点についてだけは共感できそうな妹だけど、でも全然心を開いてくれないから、何を考えてるのかさっぱりわからない……そんなところか？」

「レン、あんたもしかして、人生カウンセラーにでもなったらいいんじゃないの？」

あたしは真剣な顔つきのまま、レンに向かってそう言ってやった。

「いや、俺はそういうのには絶対向かないな。向いてるとしたら久臣さんとかミドリさんみたいな人じゃないか？俺は絵描きであって、久臣さんみたいに＜言葉の人＞じゃないからな」

「ふう～ん。そんなもん？」

あたしがコーヒーをずずっとすすって飲んだ時――不意に、アトリエ入口の暗闇に、何か半透明な存在が横切っていくのが見えた気がした。

目をこすり、もう一度その暗闇に目を凝らすけど、やっぱり何も存在しない……。

あたしはまたゾクッと背筋におぞけのようなものを感じて、自分自身の体を抱きしめた。

「どうした？」

「ねえ、レン……あんたここにひとりできて、本当に平気なの？時々、なんか幽霊みたいな存在とか、ポルターガイスト現象があつたりするんじゃないの？」

「べつに、特に何も感じたことはないな」

レンは、いかにも馬鹿馬鹿しいといった顔つきをして、茶色のパステル鉛筆を動かし続けている。

「例のこの前オーナーだった叔父さんがここで首吊り自殺したなんて聞いているから——単に先入観からそう思うんだよ。昼間は風に木がそよぐ音を聞いてもなんとも思わないけど、これが夜になると幽霊のすすり泣きみたいに思える……そういうことだろ？」

あたしはまた背筋がゾクゾクしてきて、口元からマグカップを離すと、それを近くの棚へ置くことにした。

「レン、あたしもうそろそろ帰るわ。あたし、靈感とかなんかとかそういうのは全然ないし、そういう類のものに対して凄く懐疑的な人間よ。でも、やっぱりなんか変なの。もしかしたら、雨に濡れて、エアコンの効いた部屋に長くいたせいかもしれない。なんかさっきからやたら悪寒がするっていうか——」

「もう帰るのか？」

そう言って、レンはどこか名残惜しいような目つきをした。

彼は、あたしに対して「さっさと帰れ」という顔をしたことはあっても、何かの折に引き留めようとしたことなんて、これまでただの一度もない。

「もう少しいれば？今、エアコンの設定温度を上げてくるよ。各部屋の温度を調節するのは、事務室のほうにパネルがあるから……ちょっと待っててくれ。すぐ戻るから」

「レ、レン……」

一体今日の彼はどうしちゃったんだろうと思いつつ、あたしは少しだけ嬉しくもあって、背もたれのない木製の椅子に、もう一度腰かけ直した。

でも、やっぱりまた背筋がゾクっとしてきて——あたしはまるで、まわりに何か目に見えない存在がいるんじゃないかと疑うように、背後をきょろきょろ振り返ってみた。

しかも、レンの奴がなかなか戻ってこない。

あたしはなんだかだんだん怖くなってきて、バッグをつかむと、アトリエから出ることにした。

事務室にいるレンのところまで行って、「やっぱり帰るわ」と一言いえばいいだけだと思ったから……。

けれど、アトリエを出る前にふとレンがどんな絵を描いているのかとキャンバスのほうを振り返ってみて驚いた。

あいつは、あたしのことをモデルにして絵を描いていたのだ！

「遅くなって悪い。なんかボタンを押しても全然変化なくて……エアコンの説明書みたいの、引っくり返して見てたんだ。でもやっぱりよくわからなかった」

「……………」

あたしは、咄嗟に自分が絵のモデルにされているとは気づかない振りをして、部屋から出ようと思った。

どうしてかはわからないけど——この時あたしは、幽霊云々のことじゃなくて、ひどく狼狽し

ていた。

昔、自分の誕生日に暗闇の中で鏡をのぞくと、自分の死に際の顔が見える……なんていう話があったけど、何かそれに近いようなショックを受けた。

自分の〈本当の姿〉なんて、実は見てもあまり気持ちのいいものではない。

「レン、やっぱりわたし……」

帰るわね、なんて言わなくても、椅子の上にさっきまでくるまっていた布を置いて、バッグを手をしているのだ。

レンには当然そのことがすぐわかったはずだと思う。

すると奴は、何故かとてもショックを受けたという顔をして――アトリエの入口のところであたしの手を引くと、おもむろにキスをした。

「……………っ！！」

それがあんまり突然かつ、思いもかけないくらい情熱的なものだったので、あたしは暫くの間、ただレンのされるがままになっていた。

でも流石に壁に体を押しつけられて、首筋に彼の唇の存在を感じると、それ以上のことは続けられないと思った。

それであたしは、レンの奴のことを突き飛ばし――逃げるように走って、画廊のガロを飛び出してきたというわけだ。

外ではすでに雨はやんでおり、どこかひっそりとした夏の夜の清涼感が漂っていた。

このあと最悪だったのは、駐車場のフェアレディZが雹の大きな塊にやられて、フロントガラスにヒビが入っていたことかもしれないけれど――あたしはそんなことなんてどうでもよかった。

あのままもしレンに抱かれることさえ出来ていたら、こんな車、廃車にするしかなかったとしても、本当にどうでもよかったのだ。

……というのが、ほんのついきのうにあった出来事。

でももうあれから、二十万光年ほども時が過ぎたんじゃないかと思われる。

これでもしレンが本当に〈ただの男〉なら――直接顔を合わせるのをその後避けるとか、あるいは間接的な方法としては、メールで「ごめん。あの時はどうかしてた」とでも伝えてくるだろう。

けれど、あたしの知っている水嶋蓮という男は、そういうことは絶対にしない。

そういう部分の白・黒ははっきりつけたがるところは、性格があたしとおんなじなのだ。

だからこそ、あたしたちはしょっちゅう口喧嘩にも近いような軽口ばかり叩きあっているのかもしれないけれど……レンは近いうちに、直接あたしに会いにくるだろう。

そして自分の口で、どうしてあんなことをしたのか、説明してくれると思う。

わたしがきのうの夜、また今朝起きてから夕方の方の今に至るまで考え続けているのは、その時に自分がどう反応したらいいのかということだった。

理想としては、「恋愛の女王をナメんな。あの程度のこと、こちらとどうとも思っていない」――といった態度をとれることかもしれない。でも、それはたぶん無理だろうとわかっている。

むしろ、あたしの態度は落ち着こうとすればするほど、挙動不審者のそれになっていき、動揺しているのがバレバレといった感じになるに違いなかった。

まるで、思春期の女子高生みたいに……。

そしてあたしはこのことを無限ループ∞状態であんまり長く考えすぎてしまったのだろう、自分でもそんなことはありえないとわかっていながらも、あるひとつの可能性についてあたしは妄想しはじめていた。

それは、わたしがクマちゃんと別れ、レンもまたミチルさんと別れ、わたしと再婚してくれるといったような、夢のレインボーロード的な話ではなく――あの時、わたしにキスをしたのは、本当に本物のレンだったのかどうかということだ。

画廊のガ口を出ようとした時、ロビーは照明が落とされたまま、真っ暗な状態だった。

そして、カウンターから見て右側に位置する事務室からは、斜めに明かりが洩れていた……ちなみにアトリエがあるのは、そこから廊下を左に歩いていった突き当たりだ。

これはたぶん、わたしの気のせいに違いないのだけれど、あたしはその時事務室に、誰かがいたような気がするのだ。

もしこんなことを口に出して言ったとしたら、笑われるに違いなかったけれど――その時、もしまだ<本物のレン>がエアコンのことで説明書なんかを机に広げていたのだとしたら、わたしにキスをしたレンは、幽霊か何かだったのではないだろうか……。

つまり、あまりにも長くあたしはレンに片想いをしていて、その間に随分仮想レンと恋愛妄想ごっこを繰り広げてきたのだ。そのことをあたしの記憶から読みとった幽霊のような存在が、ちょっと悪戯をしてみたといったようなことだったらどうしよう……。

もしそうなら、レンのほうからわたしに連絡してくることはないだろう。

何故といって彼は<本物のレン>ではなく、その時彼は画廊の事務室でエアコンの温度設定について首をひねりながら調べているところだったのだから。そして、アトリエへ戻ってくるとわたしの姿はすでになく、帰ったあとだったというわけだ。

(でも、あの情熱的なキスは、本当に現実に起こったことよ)

そうあたしは、ベッドの上で自分の唇に指で触れながら思う。

もしあの感触が偽物なら、これまでわたしがしてきたセックスに纏わる行為はすべて、そもそも全部偽物だったということだ。

でも問題は――レンの奴が一体いつあたしに対して申し開きのようなものをしにくるかということだった。

レンの奴は結婚しているので、当然「どうかしてた。悪い。すまない」といったようなことをわたしに言ってくるだろう。その点についてはまず間違いがない。

まかり間違っても、「実は俺、あんたのことが……」なんていう展開だけはありえないし、絶対に期待してもいけないのだ。

わたしにしても、99.9%（毛深い以外）欠点がなく、もっとも完璧に近い結婚相手であるクマちゃんのことを、悲しませてはいけない。

何より一番最悪なのは、ついうっかり寝てしまって、その後数か月に渡って関係続けるも、

ある日恋愛の魔法がレンのほうに消えてなくなって、その頃にはあたしもクマちゃんを失っている……といったようなシナリオだ。

あたしはレンとは、これからもいい友達としてつきあっていきたいと思っている。

そしてそのことのほうが、一時的に恋愛関係なんていうものになるより、遥かに貴重なことなのだ、あたしはずっと自分に言い聞かせてきたではないか……。

あたしはレンが不意に突然やって来た場合に備えて、部屋を掃除しておこうかと思ったけれど、そんな気力は微塵もわいてこなかった。

冷蔵庫からミネラルウォーターとベーグルを持ってきて、それをほんの少しかじって食べたという、今日のあたしの食事はたったそれだけ。

そしてあたしが、（流石にこんなことじゃいけないわ）と思い、意を決してベッドから起き上がろうとした時――インターホンが鳴ったのだった。

（もしかして、レン！？）

あたしはライオンを発見した時のうさぎみたいに、ガバッと起き上がると、リビングにある電話のほうまで小走りに駆けていった。

こんなことなら、スッピンじゃなく化粧くらいしておくべきだったと思うけど、どのみちレンの奴には、そういう誤魔化しはきかないのだ。

あたしはTV電話のようにになっているわけでもないのに、髪の毛を整え、気合を入れるように両頬を叩いてから、とびきり上品な声で応じた。

これで宅配便が届いただけだったりしたら、気が抜けるあまり、暫く動けなくなるかもしれない……なんて思いながら。

「はい？」

「あの、上月数馬です。昔、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』で、役者として鍛えてもらったデューク・サイトウ役の……」

――え？もしかしてあの数馬？

あたしは相手があまりにも思いがけない人物ただだけに、拍子抜けするというよりは、突然真人間に戻ったような感じだった。

何しろ、相手が誰であれ、部屋に入ってもらうには汚すぎるし（レンには以前「おまえ、もしかしてADHDか？女のくせに信じられない散らかりようだな」と、お褒めの言葉をいただいている）、かといって、霧島さんから電話で聞いた話によると、数馬は今相当落ちこんでいるということだったから――そんな彼のことを、「また今度」などと言って追い返すわけにもいかないと思ったのだ。

「わかったわ。今オートロックを解除するから、ちょっと待ってて」

数馬が十七階にあるこの部屋へ上がってくるまでに、まあ最低五分はかかるだろう。

それまでに居間のほうを少し見られるような感じにしておいて……邪魔なものは全部、とりあえず寝室に放りこんでおこう、うん。

そんなわけで、あたしは大慌てでパジャマから部屋着に着替え、髪の毛をブラシでとかすと、テーブルの上のものやソファの上のものを片付けはじめた。

「川上さんて、化粧落としてスッピンになるとそんな顔なんですか」とか、「せっかくいいマ

ンションに住んでるのに、常時こんなに散らかっているんじゃないですね」とか、そういうニュアンスの読みとれる顔を数馬がしたとしても――まあ、しょうがない。

数馬はどうも、何かドラマの役が欲しくてあたしを訪ねにくるようだけれど、正直なところをいって、わたしが彼に対してどのくらい協力できるかというのは、限りなくあやしいものがある。

たとえば、わたしが今次のドラマの脚本をこれから書くところで、その打ち合わせにいった際に「△◇役は絶対上月数馬でお願いします！彼以外、役のイメージにあう俳優さんって、考えられませんから！」くらいのことなら、確かにわたしにも言えるけど……何分、今のあたしは次回作の構想すら思い浮かんでいない状態なのだ。

それに、都合よく数馬のイメージにぴったりな役のでてくる脚本も書けるかどうかわからない。

でも、『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』は、わたしに夢の持つ意味を教えてくれた、今も本当に大切な舞台だ。そしてその舞台が成功したのは一重に、主人公のデューク・サイトウを演じてくれた、上月数馬の功績が大きい。

そうした意味合いにおいて――わたしは彼に対して出来ることはなんでもしたいという気持ちはあったのだ、一応。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト First Moon様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

俺はきのう、初めて妻の待つ自分のアパートへ戻らなかった。

近くのコンビニで剃刀やタオル、歯ブラシなどを買ひ、ミチルには「今日は泊まりこんで絵を描きたいから帰らない」と連絡しておいた。

彼女はいつものように、どこか平坦な声で「うん、わかった」とだけ答え——そして俺は電話を切った。

エアコンのほうは、サクラの奴が帰ってから、何故か元どおり動くようになり、何も問題はなかったけれど……もしそのままなら、業者に頼んで点検がてら直してもらう必要があっただろう。

なにせよ、今大切なのはそういうことではない。

俺は何かに取り憑かれたように、サクラのことをモデルにした絵の続きを描いていた。

幸いなことに、サクラは俺があいつをモデルにしていると気づかなかったようだけれど——大体、絵のイメージ自体がビッチのあの女とは程遠い感じだったから、よく見ないかぎり他の誰かと思えないくらいだったに違いない。

サクラの奴はいつも、クチナシの香りのする香水をつけているが、俺が今描いているのはちょうど、そのクチナシの花の精のような女だった。

この間の日曜日、あいつが佐々木さんと一緒に画廊へやってきた時——サクラの奴は、まるで外人のような金髪をしていた。あれでたぶん、ブルーのコンタクトでもしていれば、外国のモデルか何かに見えたに違いない……正直なところをいって、そんな女と並ぶクマちゃんこと佐々木



凜太郎さんという人は、金と権力にものをいわせて若く綺麗な女とつきあっているスケベ親父といったようにしか見えなかった。

（まあ、世の中そんなものだよな）などと思いつつ、佐々木さんと俺は握手したわけだが、彼は思った以上にもものを見る目のある、まともな人のようだった。

自分の買った絵が本当に五百万もの値打ちがあると思っているかどうかについては、俺は今もあやしいものだと思っているけれど……おそらくはサクラの奴が、「レンは絶対将来大物になると思うの！そしたらクマちゃん、随分安い買物をしたなって過去を振り返って思うわよ！」とかなんとか、先に吹きこんでいたに違いない。

そして佐々木さんは佐々木さんで、十歳年下のこれから新妻となる女のことを喜ばせたいあまり一五百万という小切手を、軽やかに切って寄こしたというわけだ。

「絵、一枚売れたよ。五百万で」と言った時、ミチルは彼女らしくまるで動じていない様子だった。

鈴木氏のワイフとは違い、金銭的なものに対して、即喜びの表情を浮かべるような低俗な女ではないのだ、彼女は。

「良かったわね。でも五百万なんて一少し、アフガニスタンの孤児院のほうに送ってもいい？きのう、向こうから絵葉書が届いたのよ。レンも見るでしょう？」

もちろん、というように俺は頷いた。

かつて紺野が言っていた、＜魂の義務＞というのを放棄したような罪悪感が心にのしかかってくる……けれど、よく考えてみれば、五百万もあつたらミチルと一緒にアフガニスタンへ行って少し向こうへ滞在することも十分可能だと俺は思った。

そしてそのことのほうが一川上サクラのセレブ婚などをハワイで目撃するより、俺にはより重要なことのように思っていた。

この時俺は、ミチルと一緒に絵葉書を見て、二年前にアフガニスタンであった色々なことを話し、久しぶりに会話が弾んだ。それから俺は一度この部屋に来たことのあるサクラのハワイ婚について話すのはやめ、そのうち都合がいたら一緒にアフガンへいく約束をミチルとしたのだった。

たぶんそうすれば、切れてはいないが限りなく細くなっている、ミチルとの心の絆をもう一度取り戻せるかもしれないと思ったから……。

にも関わらず一俺はその四日後、これから年収億超え男と結婚しようという女と、なんの間違いからかキスしてしまった。

あえて聞き苦しい言い訳させてもらおうとすれば、その原因は匂いだ。

サクラのつけていた、クチナシの香水の香り……たぶんあれのせいで、脳の中の何かの感覚が一時的に麻痺してしまったのかもしれない。

あの匂いがアトリエから完全に消えてしまうとすると、せっかく久しぶりにいいインスピレーションがきたと思ったのに、それがなくなってしまうような気がした。

俺はこれまで、モデルになってくれた女性とひとり残らず寝ている一だから、つい昔の悪い癖が出てしまったのかもしれない。

けれど、何より俺にとってショックだったのは、サクラが体を押しつけてきた時、彼女が「あんただけは違うと思っていたのに」という眼差しで、俺のことを刺してきたことだろうか。

今の俺にあるのはただ、せつかくあった信頼関係を自分から裏切ってしまったことに対する罪悪感だけだった。

だから、俺はこれからサクラが住んでいるマンションまで出向いていき、一応表面上は忘れた傘を届けるという名目で、彼女に会いにいこうと思っていたのだ。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

エントランスでエレベーターが来るのを待っていた時、数馬はそこでレインコートを着たビジネスマン風の男と一緒にになった。

マンション内は冷房が効いていて涼しいが、このクソ暑い日にレインコートを着ているだなんて、正気の沙汰じゃないなと数馬は思う。しかも、手には黒のコウモリ傘まで持っている……数馬の記憶が正しければ、今朝ニュースでは降水確率が0%だったはずだ。

そして数馬はその昔自分が見た映画の中で――これと似た場面があったのを思いだしていた。

とても暑い日にレインコートを着ている男がいたとしたら、そいつはおそらく殺し屋で、仕事をはじめる前にコートを脱ぎ、それから血で汚れた衣服を隠すために、再びレインコートを羽織るのだ。

そして傘といえば、1978年にロンドンのウォータールー橋で起きた暗殺事件が思い起こされる。

ブルガリアの反体制作家ゲオルギー・マルコフは、亡命中、当局から派遣されてきたエージェントに傘で脚を刺されて絶命した。この傘というのが実は空気銃を偽装したものであり、そこからリシンを注入されて彼は毒殺されたのだ……数馬は、どこからどう見ても平凡に見えるビジネスマンのことを見やり、彼の持つ傘の突端が急に気になって仕方なかった。

もちろん、エレベーター内には監視カメラがあるので、何かおかしいことが起きるとは思えなかったものの――三基あるエレベーターのうちのひとつに乗りこんだ時、男が二十階を押すのを見て、数馬はなんとなく嫌な気持ちになった。

確率的に考えて、なんとなく、ビジネスマンは十七階以下の場所で下りるだろうと思っていたからである。

数馬はエレベーターから眺めのいい外の風景を眺め、自分もいつか、同じように人を見下ろせ

るような人間になりたいと、あらためて思った。一言でいうとすれば、それは〈睥睨〉ということだ。自分のように才能のある人間は、その他大勢の一般市民がその一挙手一投足を注目して当然なはずなのに……。

『だったら、何故今そうじゃないんだ？』

そう、心に重くのしかかる問いかけの音が響いて、数馬は顔を上げた。片面にある鏡に映るビジネスマンと、ふと目が合う。

『おまえの知ったことかよ』

そう心の中で吐き捨てるように答え、数馬は十七階で下りた。

この階に住んでいるのはどうやら、1701号室に住む川上サクラと、1702号室に住むお隣さんだけらしい。

もし何か騒ぎがあっても、あの川上サクラのことだから、すぐ隣の人物が訪ねにくるような、そんな近所づきあいはいはしてしまい……そう思い、数馬はスーツの内ポケットにしまいこんだ、ナイフの存在を手で確認した。

今日の彼の格好は濃いグレイのスーツ姿というものだったが――正直、この暑さだ。

上着は脱いできたいと彼も思った。けれど、このナイフを隠すために着てきたようなものだと、数馬はインターホンを押しながら、どこか不適な笑みを浮かべて思う。

そう、その昔見た映画の中で、殺し屋役の男が同じように不気味な顔をしていたように……。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

もう随分前の話になるけれど、ほたるから数馬と別れたと聞いた時——その理由を問いただそうとしたあたしに対して、彼女はなかなか本当のことを話そうとしなかった。

ほたるほどの大役でなくても、その頃はまだ数馬もちらほらテレビで姿を見かけるような感じだったから、別れた理由はてっきり、すれ違い的なことなのかとばかり思っていたけれど……そうではなく、数馬が薬に手を出していたことが本当の原因だったのだと、随分あとになってわたしは知った。

キャバ嬢をしていた頃、店にヤクザ系の人たちの出入りがあったので、あたしももしかしたら、そのうちの誰かと関係を持ったりしたような場合——ヤク中になっていた可能性というのは、100%絶対なかったとは言い切れないかもしれない。

何より、わたしの中でショックだったのは、レリックに来た頃の数馬というのは、実に初々しくて礼儀正しい青年であり、わたしが男に求める一番の要素——清潔感にあふれる男だったのだ。その彼が、だんだんにテレビ画面を通して汚れていったように見えたこと、あたしはそのことが今も残念でならなかった。

もともとの最初には、とてもいいものを持っていたのに、それが役者として落ちぶれるにつれ、どんどん駄目になっていくのが、透けて見えるような感じだったからだ。

けれどもおそらく本人は、(こんなに努力しているのに何故うまくいかないんだ)と思い、ずっともがいていたのだろう……そう思うと、もっと早くに自分のほうから数馬とは接触すべきだったのかもしれないと、あたしは反省する気持ちになっていた。

たとえば、今放映中のドラマの、主役四人のうちひとり——それが数馬でもべつに良かったような気がするのだ。脚本を書く前にすでにキャスティング候補が決まっていたため、わたしは彼らのことをイメージして今のドラマを書き上げた。

でももし数馬の来るのがもっと早かったら、なんとか彼に役を与えてほしいと、プロデューサーに頼むことも出来たのに……。

そんなことを思いつつ、あたしがサイドボードの中からフルートグラスを取りだしていると、インターホンが再び鳴った。

直接会うのは随分久しぶりになるけれど、数馬は最初に会った頃と同じく、とても礼儀正しい青年のままだった。

「今日は、突然お邪魔してすみませんでした」

「ああ、べつにいいのよ。霧島さんからは、一応話を聞いているし……それより、うちってすごく散らかってるの。呆れないでね」

呆れるだなんてとんでもないといったような顔の表情を、数馬は浮かべている。

白い革のソファの上ののっているクマちゃんを脇にどけ、そこに座るようあたしは彼に促した。

「いい年して、独身の女がなんでこんなどでかいクマを持ってるんだって笑うかもしれないわね。実はそれ、今つきあってる人が自分のかわりにってくれたものなの。顔が三枚目でどことなくクマに似てるもんだから」

「そうなんですか。たぶんきっと、お金持ちの人なんでしょうね……変な意味じゃなくて、このくらい大きなクマのぬいぐるみって、結構しますから」

べつにあたしは、数馬から嫌味な印象を受けたわけではないけれど——それでもやはり、彼に対して（変わったな）という印象は拭えなかった。

話し方自体は礼儀正しいし、昔とまったく変わっていないように思えるのに……何かこう、そこに中身がまるで伴っていないような、そんな感じなのだ。

「それで、今日はなんの用なんだっけ？」

いくら霧島さんから話を聞いているとはいえ、自分からそう決めつけて話すのもなんなので——わたしはいかにも自然な感じで、数馬に先を促した。

フルートグラスにシャンパンを注ぎ、電子レンジでチンしたピザを、彼に勧めながら。

すると、グラスを片手に数馬の隣に座ったあたしに対して——彼は膝の上の手をぶるぶる震わせはじめた。そして突然絨毯の上に身を投げだし、あたしに向かって土下座をしたのだった。

「お願いしますっ！！僕に再起のためのチャンスを与えてくださいっ！！僕は西園寺監督のミュージカルを降板になって以来——パツタリ仕事が来なくなりましたっ。そのために、どうか川上さんのお力をお貸しく下さいっ！！」

ホットパンツにTシャツといったラフな格好をしていたあたしは、自分もすっぴんで相当無様だけど、あんたまで同じようになる必要はないんじゃない？と、そう思って——彼が起き上がるのに手を貸すことにした。

「ほら、とにかくもう一度ここに座りなさいよ。確かにあたしも、力を貸したいのは山々だけど……ただの脚本家のあたしには、正直できることに限界があるのよ。人に思われてるほど交友関係も全然広くないし、そもそも脚本を渡しちゃったら、現場の人ともそんなに関わらないしね。必要最低限、礼を失しない程度につきあってるって感じだし、数馬が想像してるみたいに、大物の映画監督とかTVプロデューサーにあたしが何か頼んだところで——効果のほどは

あまり期待できないわ。だから、申し訳ないけど……」

「そんなこと、ないんじゃないですか!？」

突然ギョロリと、何かを取り憑いたように、数馬の顔つきというか、目つきが豹変して、あたしはその変わり身の早さに驚いた。

「この間、川上さんが梶監督と対談している映画雑誌の記事、僕読みました。ネットにも、ふたりは飲み友達だって書いてありましたよ。それに、今ドラマが放映中の『嵐の中で抱きしめて』のプロデューサーって、彼が手がけたものは必ずヒットするって言われてる人じゃないですか。川上さん、僕はもうあなたしか頼れそうな人がいないんだ。だからもし、あなたが僕の要求を拒むなら……」

その時の、あまりに突然すぎる、それこそドラマのような展開に――あたしはただ、目を見張る意外になかった。

そしてそれと同時に、何故か、おかしい記憶のデジャヴが起こった。

以前、これとまったく似た場面に自分は立ち会ったことがあるような気がするけれど、まさかそんなはずもない。

でもそれは紛れもなく、何かの不吉なサインだった。

人が死ぬ直前に記憶が走馬灯のように巡るというのにも似た、不吉なデジャヴ。

「僕はあなたに、こうするしかない……」

そう言って数馬は、スーツの内ポケットからナイフを取り出すと、それをあたしに向かって振りかざしたのだった。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

こんな晴れた日に女物のベージュの傘を持って歩くなんて——俺の人生でもしかしたら生まれて初めての経験だったかもしれない。

アフガニスタンから日本へ帰ってきた時、俺はまずベルビュー荘へ挨拶しにいったのだが、その時偶然サクラがそこにて、「自分は今めっさいいところに住んでるから、是非とも遊びにきなさい！！」と言ったのが、一等地に建つこの二十階建ての新築マンションだった。

そして遊びにいったのはいいのだが、部屋の中については「THE・悲惨な女の一人暮らし☆」といった感じだったかもしれない。

ソファの背もたれにはこれでもかというくらい衣服がかかり、奥の部屋のクローゼットからは、一体何十足あるのだろうと、数えるのも嫌なくらいの真新しい靴と、ブランド物のバッグがあちこちの棚からはみでているといったような按配だった。

「.....おまえ、あの靴が一体何足あるか、数えてみたことないだろ？」

「ないわね！」と、まるで勝ち誇ったようにサクラは答えた。

そして、部屋中に脱ぎ散らかした服などを寝室へ放りこみ——俺に白い革のソファへ座るよう勧めた。その際にどでかいクマのぬいぐるみを脇へどけると、あいつは「あたしのクマちゃんになんてことするのよ！」とか言って、怒っていたっけ。

俺は電車を下りてから、サクラの住むマンションの場所まで歩く十分ほどの間に、あいつになんて言ってあやまろうかと頭を悩ませていた。

今回のことは、誰がどう見ても100%自分が悪いと、よくわかっていた。

まあ、あいつがもし「あんなの、蚊に刺されたようなものだから」とでも言って笑って許してくれればいいのだが.....奇妙なことに、実のところ俺はあいつにあまり本気であやまりたいとは考えていなかった。



そしてそのことについて、何故なのだろうと考える。

最初に会った時、俺は確かにあの女に＜生理的嫌悪＞に近い何かを感じたはずだった。それはたぶん七津美さんに関する記憶と関わりがあるせいではないかと俺は分析していたけれど……どうも最近、実はそれは、あいつが俺のおふくろに似ているそのせいなのではないかという気がしてきたのだ。

もっとも、あいつはおふくろのように占いにも風水にも凝っていなかったし、いつだったか、テレビで星占いの番組が五分ほど流れていた時に――あいつはこう言っていたことがある。

「レンって、一月生まれの水瓶座でしょ？」

「ああ、そうだけど」と、反射的に身構えつつ、俺はっつけんどんな調子で答えた。

「あたし、あんたの目から見て、何座に見える？」

サクラの奴は、至極不機嫌そうに眉根を寄せて、そう聞いた。

「さあな。蠍座とかか？」

俺がいかにも軽蔑しきった様子で、当てずっぽうに答えると――あいつは、がっくりと肩を落として沈んだ顔をしていたっけ。

「なんで一発で当てるのよ！！大体、水瓶座と蠍座の相性って最悪らしいわよ。あたしとあんたの気が合わないのは、もしかしたらそのせいかもね」

「ふうん。おまえにピッタリじゃん、蠍座って。いかにも蠍の毒で男を殺しそうなタイプだもんな。美川ケンイチの歌でも歌って一生暮らせば？」

「シャラップ！！あたし、だから星占って嫌いなの！！あと、血液型占いもキライ！！なんでみんな、AB型には変人が多いって勝手に決めつけるわけ！？」

――あれはたぶん、俺が初めてサクラに対して好感を持った、最初の瞬間だったに違いない。

そしてお互いに言いたいことをズバズバ言いあえるってあたりが、俺にとってはあいつの一番の美点に思えることなんじゃないかっていう気がする。

つまり、自分のおふくろにいくらひどいことを言おうとも、相手は必ず底のほうでは自分を愛しているとわかっているから、好きなことを言いあえるみたいに……俺は知らない間にももしかしたら、あいつに随分甘えていたのかもしれない。

そして今、（なんにせよ、自分のおふくろにキスして嬉しい男がいると思うか？）と、阿呆なことを連想しつつ、なんとか俺はあいつを自分の性欲的な対象から外そうと必死だった。

日曜に画廊へ来た時には金髪だったあいつの髪は、今度は黒髪に戻っていて――正直なところ、画廊の入口で何か叫んでいる女の姿を見た時、それがサクラだとは、一瞬俺には思えないくらいだった。

たとえていうなら、物凄くいい女が理由はよくわからないにしても、自分の部屋のドアを叩いていて、自分は結婚して妻がいるにも関わらず、ついうっかり心の扉を開けてしまったような感じだ。

そう、本当はあの時点で、（比喩的な意味合いにおいて）俺はあいつのことを入れるべきではなかったのだと思う。

雨に濡れてブラウスから下着がすけて見えるとか、ぴったりした膝丈のスカートの曲線であるとか……あいつのそういう何かが、俺に対して効果を発揮したことはほとんどないはずなのに――

一唇に触れてしまったことで、俺の目は今多少、というかかなり狂いはじめている。

(よりもよって、あの女をモデルに絵を描いてしまうとは、俺の人生最大のミスイクだ)

なんていうことを無理に自分に信じこませようとしつつ、俺があいつの部屋番号を玄関口で押そうとした時――マンションの住人らしき人物が、半透明の扉をくぐっていくところだった。

(まあ、ついでだな)

オートロック付のマンションっていうのも、意外に無用心なもんだなと思いつつ、俺は自分より前にエレベーターへ乗りこんだ、赤いTシャツを着たおばあさんに続き、三基あるエレベーターのうちの二基へ乗りこんだ。

「あんた、ここのマンションの人じゃないね？」

ランニングをして帰ってきたといった感じのおばあさんは、十階のボタンを押した。

「で、一体何階に用があるの？」

「.....十七階です」

(なんでわかったんだろうな)と思いつつ、俺は彼女が十七階のボタンを押すのを見守った。

「お宅は、年のほうはいくつなの？」

白髪のひつつめ頭をしたおばあさんは、俺のほうは見ずにそう聞いた。

そして俺は、そんな彼女の姿を鏡越しに見やりながら答える。

「ちょうど三十歳ですが.....」

「ふうん、あっそう。それじゃあまあ、お達者でね」

エレベーターから下りる時、おばあさんはくるりと振り返ってそう言った。

そして「暑い暑い」と言いながら、首にまわしたタオルで額の汗を拭き拭き、廊下を歩いていたのだった。

(軽く痴呆症を患ってるのかな).....そんなことを思いつつ、俺は十七階で下り、それからインターホンを押した。

暫く待っても返事がなかったので――俺は、傘をドアノブのところにかけて帰ろうかと思った。

その時、ドアノブが不意に動いて、鍵がかかっていることに気づいたのだ。

「.....サクラ、いるのか？」

無用心にも、鍵もかけずにあいつが寝てるんじゃないかと思って、俺はそう呼びかけた。

続く、ガタン、という大きな物音。

「サクラ!？」

リビングに駆けこんでみると、そこでは誰か知らない男が――俺にはすぐに、彼が上月数馬だとはわからなかった――彼女のことを押し倒し、暴力を振るっているところだった。

「このっ.....!!」

男を強引にこちらへ振り返らせ、そいつのことを俺は力いっぱい殴ってやった。

床の上にナイフが転がっているのが目に入り、それを蹴って彼の手に届かないようにする。

「くそっ、もう少しだったのに!!」

何がもう少しなのかは、俺にはすぐわからなかったが――とにかく男は逃げるように廊下へ走

っていき、それから玄関の閉まる大きな音が続いた。

「おい、大丈夫か!？」

あとにして思うとたぶん、その時のサクラの顔というのは、スッピンの上、顔に痣が出来ているといったような状態で、相当ひどいものだったんじゃないかという気がする。

けれど、この時にはそんなことより何より、彼女が本当に生きているかどうかのほうが心配だった……首に、赤く絞められた痕があり、もし自分の来るのがもう少しでも遅れていたらと想像しただけで、俺は心底ゾツとした。

「ゲホッ。げほげほ!!」

「しっかりしろっ。救急車、呼ぶか!？」

いい、と掠れたような声で答え、この期に及んで、なおもサクラは冗談を言えるような女だった。

「あ〜、よかったあ。こんなTシャツにホットパンツなんていうダサい格好で死ななくて……しかも今、スッピンだし、首しめられたことで、顔もむくんでそう。どうせ死ぬなら、もう少し気の利いた死に方したいもんよね」

「バッカっ……おまえっ、こんな時に何言って……」

口では冗談を言っているけれど、彼女の俺の腕をつかむ手は震えていた。

「あたし、あいつに首しめられてる間、ずっと、レンのことだけ考えてたの……あたし、あの時キスされて嬉しかったのに、どうして拒むようなことしちゃったのかなって。どうせ死ぬんなら、自分の本当の気持ち、伝えておいたらよかったって、そう思って……」

——そのあとのことは、正直よく覚えていない。

正確には、覚えていないのは当然嘘だが、あえて説明したいとは思えないということだ。

俺は泣きじゃくりはじめたあいつのことを抱きしめると、彼女のことを寝室まで運んだ。

クローゼットから、ブランド物の靴やらバッグやらが、これでもかというくらいにはみでているあの部屋だ。それと、あの知り合いの男を部屋に通した時、慌ててリビングを片付けたのだろう、そのために寝室の入口はゴミためと化していたが、そんなことも今の俺にはどうでもいいことだった。

そしてサクラのことをベッドへ下ろした時、体を離そうとした俺の腕を、不意にあいつが掴んだ。

「ずっとじゃなくていい……でも、せめて今はそばにいてほしいの」

たぶんサクラのことがあんなに可愛く見えたのは——俺の人生史上はじめてのことなんじゃないかという気がする。

それから、あいつと初めて寝て俺が気づいたのは、実はあいつが相当にいい女で……俺はそのことに随分長く気づかなかった大馬鹿男だったということかもしれない。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「ねえ、あんた煙草持ってない？」

たぶん、この第一声というのは、ずっと寝たかった男にしてみれば、おそらく最低のものだったに違いない。

「.....持ってないな。というか、アトリエに置き忘れてきた」

でもレンにはあたしが何故そんなことを言ったのか——わかったみたいだった。

そう、煙草でも吸わないことには、お互い間が持たないのだ。

「ねえ、これからあたしたち、どうなると思う？」

「どうなるって.....おまえは、佐々木さんとセレブ婚するんだろ？」

あたしが聞きたいのはそこじゃないと思ったけれど、不思議と怒りはまるでわいてこなかった。

もうこのまま死んだとしても、あたしはそれで構わない。

「そうね。レンにはミチルさんがいるし.....あたしにはクマちゃんがいる。でもわたし.....たぶん、もう駄目だと思う。レンとこうなってしまったからには、いずれクマちゃんにも嘘がバレるってわかってるもん。もう、クマちゃんだけの無邪気なバンビーナっていうわけには、いかないと思う」

べつにわたしはこのセリフを——脅しとして使ったつもりはなかった。

わたしの心の中では、レンは正式に結婚している女性を裏切れるような男ではないと、わかっていたから。

だから、レンが隣のあたしのことをじっと見つめてこう言った時には、本当に驚いた。

「俺、ミチルと別れるよ」

あたしは思わずガバリと起き上がると、シーツで体を隠しながら、ベッドの背もたれにより

かかった。

「でも、サクラは俺と一緒にするのが嫌なら、佐々木さんと結婚しろ。俺が離婚する理由はたぶん.....おまえと一緒にだな。ミチルとは、もう随分前からうまくいってなかった。俺はガ口で夜中まで絵を描いて過ごしていて、彼女のことはないがしろにしてた。結局、そうしたほうがミチルのためにもいいだろうと思う。俺のような男に縛られて、不幸な結婚生活を続けるよりは、ずっと.....まあ、勝手なのはわかってるけど、俺には他にどうしようもない」

「あんた、本気！？自分が何しようとしてるか本当にわかってる！？」

嬉しい気持ちが強い反面、これが現実には起きていることだとはとても思えなくて、あたしは裏返った声で言った。

本当に、信じられない。

もしかして、わたしはあの時数馬に首を絞めて殺されて——そのあと、自分だけの精神世界のような場所で、都合のいい夢を見ているのではないだろうか？

「わかってるさ。ミチルがおそらく一時的にしても、ボロボロになるってこともね。そしてあんたは佐々木さんのことをズタズタに傷つける.....佐々木さんは確かに立派な大人の男だとは俺も思うよ。それに、ある程度の女性ならお金で手に入れられる財力もあるだろう。でもサクラのような女を手放すのは——相当な痛手だと思うんだ。俺にしたところで、ついこの間、ニコニコしながら握手したばかりだっていうのに、五百万で絵まで買わされて、このことがわかった時には彼は多分.....金で殺し屋でも雇って、俺を殺しかねないくらいの気持ちを持つと思う」

「クマちゃんは、誰もそんなふうに逆恨みしたりしないわ」

あたしは哀しみに胸を押しつぶされそうになりながら言った。

「でもだからこそ——つらいのよ。彼がおそらくは、すべてを自分の胸におさめて、こうしたことを全部乗り越えようとする強い人であることがね。ほんと、女運の悪い人.....また、悪い女に引っかかっちゃったんだわ」

あたしがぼろぼろと泣き、涙をシャツで拭いていると、レンが優しく、あたしの頬の涙を指で拭ってくれた。

「確かにな。でも、きっとあの人になら、またいい人が現れる。ミチルも、俺なんかよりずっといい男を捕まえられるって、そう思う」

「あんたは、クマちゃんの女運の悪さの歴史を知らないから.....」

そう言って泣きながら、あたしは微かに笑った。

「第一、ミチルさんにだって、あんた以上にいい男が現れるとは思えない。もしわたしが、レン——あんたと結婚したにも関わらず、他に女が出来たからって捨てられたら、その時のショックはクマちゃんが浮気した時の比じゃないのよ。あんたはそれをわかってない」

「どういう意味だ？」

レンもまた、起き上がってきて、ベッドの背もたれのところに上半身を預けた。

「あたしだって、もう三十二にもなるんだもの。カマトトぶるつもりはないわ。クマちゃんだって、確かに今はあたしに夢中でしょうよ。でもね、あれだけお金のある人って、まあ最低でも一回くらいは浮気する可能性大ね。あたしが彼との結婚を決めたのは、そういうことも含めてっということ。浮気はしないけど、365日仏頂面してる旦那より、浮気したけど、一年のうち三

百日以上は機嫌がいい……そういう旦那というほうが幸せだって納得するしかないもの。もっともあたしの場合、これはお金のある男限定の話よ。でもレン——あんたの価値はお金じゃはかれない。だから浮気なんてされたら絶対気が狂いそうになるし、それこそあんたがこの間言ったカラストロフってやつが起きるのよ。クマちゃんがもし、結婚するまでにあたしの何かが気に入らなくなって婚約を解消したとしたら、確かにそれはすごくショックよ。でもあんたとの別れはあたしにとって、心のカラストロフなの。この違いを、あんたはわかってない」

「……もう少し、わかりやすく言ってくれないか」

この間アトリエで話していた時は、あたしとレンの立場というのは、この逆だった。

あたしは深呼吸すると、説明をはじめた。

うまく説明できるかどうかはわからなかったけれど。

「つまりね、レンはミチルさんが物分かりいいとかなんとか言ってるけど……彼女にも彼女の言い分が当然あると思うの。あたし、レンと別れるなんていうことになったら、もう心がボロ雑巾状態になるわ。これ以上もないくらいにこき使われて、捨てるしかないくらいの惨めなボロ雑巾。あんたにとって——ナツミさんとのことはつらいことだったかもしれない。でも今度はそれとまったく同じものをあんたがミチルさんに与えるのよ。あたし、あんたのモデルになったっていう女の子って、絶対心のカラストロフだったと思う。レンみたいな男にモデルになってくれないかって言われて、超有頂天になってたら、もう関心が別の対象に移ったから別れよう……なんて言われたら、ピサの斜塔のてっぺんから落ちて、自殺したいような気持ちだったでしょうよ」

「……………」

だんだんあたしも、自分が何を言いたいのかわからなくなってきた。

確かに、レンにはミチルさんと別れてほしい——でも彼女は計算高いアバズレ女のあたしなどとは違う、レンが結婚しようと思ったくらいの、心の清らかな人だ。

矛盾した言い方になるけれど、あたしはレンがこれまでつきあって別れたであろう女性には、気持ちがわかるだけに同情したくなってしまった。

わたしにしたところで、いつか、同じ目に遭わないとはいえないのだから……。

「わかった」と、レンは深い溜息を着くようにして言った。

煙草が欲しいという顔をしているのがわかったけど、残念ながらあたしも、今ちょうど切らしてしまっている。

「そのくらいの痛手を覚悟してミチルには話を切りだせてことか。確かに、サクラの言うことは正しいよ。俺は実際物凄く自分本位な奴だし、そういう意味で自分のことを最低だとも思ってる。でも、どうしようもないんだ……たとえば、七津美さんに傷つけられたから、同じように誰か女性を傷つけてやろうと思ってたわけじゃないのに——むしろ彼女とのことがあったから、次は同じ過ちを繰り返さないようにしようと思ってたのに……俺は相当こっぴどいことをして、相手のことを傷つけた。ミチルとも、彼女のことなら一生大切にできるって思ってたのに、たったの二年くらいで——別れようとしてるってわけだ。サクラ、おまえはそういう男と、この先ずっとうまくやっていけるって、本当にそう思うか？」

「そんなこと、あたしにわかるわけじゃないの」

あたしはレンの肩に、自分の頬を寄せながら言った。

「あたしが思ってるのはね、こんなことよ。もしかしたら明日、首を絞め損なったあたしにトドメを刺すために、数馬がもう一度ここへやって来て、今度は確かに自分の仕事をやり遂げるかもしれないわ。それに、考えられないくらい大きな雹が頭にぶつかって、植物人間になるかもしれない……ねえ、レン。あたしたちが住んでるこの世界って、普段わたしたちが意識してる以上に、実は相当危険な場所なんだって、そう思わない？」

「そうだな。そう考えたら、せめて生きてる間くらい、自分の好きな女と一緒にいないとな」

レンは、あたしの髪を撫でながらそう言った。

「砂漠では、カタストロフが起きても何も変化はない……この言葉、サクラは覚えてるか？」

「久臣さんの、＜砂漠のカタストロフ＞でしょ？そういう意味で、砂漠にいるっていうことは、世界で一番安全なのよ。もちろんこれは、比喩的な意味でっていうことだけど」

「俺、なんでもっと早くに気づかなかったのかな。なんか、おまえといるとすごく楽な気がする……話してる言葉の意味も通じるし、言ってる言葉の意味がわかんない時は、お互い怒鳴りあってでも理解しようとするもんな」

「そうよ。あたしはそのことがすぐわかってたけど——どっかのマザコンの坊やは、あたしがもう死ぬっていう三秒前くらいにようやく気づいたってわけよね。ほんと、手遅れにならなくて良かったわ」

あたしがぐすくす笑ってそういうと、レンはおもむろに真剣な顔つきになって、「さっきの男のこと、どうする？」とあたしに聞いた。

「ああ、上月数馬ね。まあ、間違いなく週刊誌ネタになっちゃうと思うけど……警察に被害届けみたいの、出さないかね。もちろん、どうしてすぐに届け出なかったんですかとか、色々聞かれると思うし、レンも事情聴取されると思うけど……レン、そういうの大丈夫？」

「大丈夫も何も、仕方ないさ」

溜息を着いてレンは言った。

「『俺は、死にかかっている彼女のことを抱きしめて、その時初めて気づいたんです。彼女のことを愛しているということに……』とかなんとか、エミー賞ものの演技で言えばいいんだろ。で、そのあとはベッドへ直行することになって、それで警察を呼ぶのが遅れたって正直に話すさ」

レンがそう言った時、あたしは幸せのあまり、体が一瞬ぶると震えるのを感じた。

「どうした？寒いのか？」

そう言って、レンがシーツをかけてくれようとする。

この時、あたしは涙がでそうなくらい、嬉しくてたまらなかった。

「ねえ、今のちょっと前に言ったセリフ、もう一回言って」

「どうした？寒いのか？」

演技ぶってレンがそう言うのを聞いて、あたしは奴の体をつねってやった。

「そうじゃないでしょーが！エミー賞ものの演技を、もう一回しろってことよ！！」

「まあ、それはまた今度だ」

まるでペンチでつねられたとでもいうように、レンは腕をさすっている。

そして彼は、ベッドから抜け出し、服を身につけはじめた。

あたしも、シルクのパンティをはいて、ブラのホックをはめることにする。レンはそんなあたしのことを振り返ると一ふとこう聞いた。

「そういや、警察呼ぶ前におまえ、ばっちりメイクとかしておきたいって奴だっけ？」

「べつに、もうどうでもいいわよ」と、あたしは顔が数馬に殴られてひどいことになっているとわかってはいたけど、仕方ないと思って諦めの溜息を着いた。

「あんたの愛さえあれば、警察にスツピンの顔を撮られて事情聴取されるくらい、なんでもないもの」

レンの奴は、110番通報するために電話の受話器を持ち上げたあと、一度それを下ろして、もう一度あたしのところまで戻って来た。

そしてオスカーものの演技で一「愛している」と、あたしのことを抱きしめながら言ったのだった。





(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

ミチルの元へは結局、俺は丸四日戻らなかった。

一応、画廊のガロに泊まりこんで絵の制作に励んでいるということにしておいたけれど.....流石に彼女ももう、あやしみは始めているだろう。

その後、上月数馬はいきつけのバーで飲んでいるところをあっさり捕まり、自宅も搜索されてコカインがベッドの下にあるのが発見された。

このことを、サクラは本当に心から悲しんでいるようだった。<ベルビュー荘>にまつわることは、俺にとってももちろんそうだが、彼女にとっても何よりかけがえのない大事な思い出なのだ。

そこに消えない汚点を烙印されたようで、彼女は警察が取り調べを終えて帰る頃には、心底疲れきったような顔をしていた。

そして俺はそんな彼女のそばにいてやりたいあまり一妻に嘘を重ねたというわけだ。

ミチルはワイドショー関係のものはあまり見ない質の女なのだが、それでもこの二日ほどの間にこの報道のことを、テレビ、あるいはネットなどで目にしたかもしれない。

もちろん、ミチルがサクラに会ったのはただの一度きりのことだけれど、それでもミチルが彼女のことを覚えていたとすれば、ピンと来ている可能性はあると思う。

何故なら、ワイドショーでは、>>「川上サクラさんは自宅で俳優・上月数馬さんの相談に乗っていたところ、薬で錯乱している彼に首を絞められた」と言われており、彼女が助かったのは「偶然にも恋人が駆けつけてくれたため」ということになっているからだ。

たぶん今ごろ、佐々木さんもその<恋人>が自分ではないと気づき、サクラから連絡があるのを待っているだろう.....俺にしても、マンションの管理人に頼んで裏の出口からだしてもらったにも関わらず、マスコミにカメラを向けられていた。

もちろん、俺がサクラの恋人であるとすぐにわかる可能性は低いと思う。

けれど、もし何かの拍子に俺の映像が一瞬流れるのを佐々木さんかミチルが見たとしたら——  
——一体何がどうなっているのか、すぐ見当がついたに違いない。

そして俺はミチルに、その路線から別れ話を切りだすつもりはなかった。

偶然傘を届けにいったら、サクラが暴漢に襲われていて、震える彼女のことを抱きしめている  
うちに気づいたら寝てしまった？……我ながらなんとも嘘くさい言い訳だとしか思えない。

それに、三日前に浮気したからもう別れよう、などと言われて納得する女がいるわけがない。

だから俺は——アパートへ戻ると、明らかに寝不足でうろたえている様子のミチルに向かって  
、ただこう切り出したのだ。

「別れたい。そのためなら、なんでもする」

と……。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「別れたい。そのためなら、なんでもする」

そう夫から切りだされた時、ミチルは目の前が真っ暗になるのを感じた。

毎日、真夜中過ぎに帰ってくるのは仕方ない.....でもここ三日のレンの行動は異常だと、そうミチルは感じていた。

だから、次に夫が帰ってきたら、彼の態度いかんによって、ミチルは今度こそは問い詰めようと思っていたのだ。

『いくらわたしでも、ここまでないがしろにされて、黙ってなんかいられない』と。

それなのに、事態はすでに、それ以上悪いところへ来てしまっていたなんて、ミチルは想像してもいなかった。

「どうして！？レン、あなた何言ってるかわかってる！？あなた、結婚する時言ったわよね？わたしの両親に、一生必ず大切にすると。その誓いをこんなにあっさり破るつもりなのっ！？」

ミチルは、レンに対してこんなに声を荒げ、感情を剥きだしにして何かを言ったことは、これまで一度もない。

それというのも、彼が自分には過ぎるくらい的美男子で、ある程度のことまでなら自分が割を食っても十分耐えられると思ってきたからだ。

「とにかく、もう駄目なんだ」

夫はミチルに対して、ただ冷やかにそう言った。

もう決めてしまった、そしてこの最終決定について、どんな理由があっても変更を加えるつもりはない.....レンの感情のこもらない、冷たい横顔はそう語っていた。

「悪いのは、全部俺だ。三日前に、おまえと別の女と寝た。そんなことのために別れるだなんて、ミチルは冗談じゃないって思うと思う。でも俺たちの間には、随分前から本質的な会話なんて

何一つなかっただろ？つまりは、そういうことなんだ」

「よくも……そんなこと……っ。あたしが毎日、一体どんな気持ちでレンが帰ってくるのを待ってたかわかる！？あたしだって、本当はレンにもっと早く帰ってきてほしかった。ずっと我慢してきたけど、もう感情が爆発しそうだって思った時——レンは言ったわよね！？絵が五百万で売れたから、そのお金で一緒にアフガンへいこうって。わたし、出来ることならアフガニスタンの孤児院へ戻りたいわっ。そうしたら、レンだって前と同じふたりに戻れるってそう思うわよっ！！」

ここまで言っても、レンが冷ややかな態度をまるで変えないのを見て——ミチルは悟った。

自分がもし感情を露わにして取り乱せば、普段大人しく聞きわけがいいだけに、夫もやましい気持ちから、少しは動揺するだろうと。

けれど、彼はもう自分を愛していないということが、ミチルにははっきりとわかった。

もう二度と、愛する努力をしようという気持ちすらないのだと……。

「もし、俺を苦しめたいなら、慰謝料を請求するなりなんなり、好きなようにしてくれ。金だけでいいなら、借金をしてでも、ミチルの要求する分を払うよ。だから——」

流石のミチルも、ここで堪忍袋の緒が切れた。

怒りと屈辱のあまり、手がぶるぶると震えはじめる。

「ハッ！！お金ですって！？」

彼女自身、自分でも信じられないくらいに、声が裏返っている。

「そんなもの、どうだっていいわ！！むしろ、あたしが欲しいのはこのままあなたの妻でい続けるっていう地位と、立派な絵描きの男を夫に持ってるっていう世間体のほうよっ！！愛があろうとなかろうと、それだけは絶対守ってちょうだい！！なんでって、あたしはそのために——そのためにだけにレン、あんたと結婚したんだからっ！！」

ミチルはテーブルの上の急須を持ち上げると、レンに向かって投げつけた。

夫のためにお茶を淹れようと、そこには熱いお湯が入っていたので、レンは物理的な痛みのためというよりは、熱さのために顔をしかめていた。

腕が若干赤くなっているが、そう大したものではない。

むしろそれ以上にミチルのほうが傷ついているということを、もちろんレンは知っていた。

「どうして……っ！？どうしてなのっ。あたし、何も悪いことしてないじゃないっ。毎日、レンのためにごはん作って、この部屋だって毎日綺麗にお掃除して……ずっと家にいるつまらない女だと思われたくないから、いのちの電話でボランティアまでして……それなのに、どうしてなのよ！？」

（あなたと別れないでいられるためなら、なんでもする）、そう言っているミチルの心の声が、レンには聞こえた気がした。

そしてそんなにも痛々しい妻の姿を見て、レンも心が動かないわけではなかった。けれど、彼はもう決めてしまったのだ。どんな犠牲を払っても、川上サクラという女と一緒にいるほうの道。

「わたし、絶対別れないっ！！それに、浮気した女ってだれ！？まさかとは思うけど——」

そこで突然、ミチルはハッと似たような顔をした。

頬を流れる涙が突然とまり、彼女は寝室にある押入れに向かって駆けだした。

そこには、夫が過去に描いた作品の一部が保存されているのだが、彼女は随分前に一枚だけ、ある女の絵がスケッチされたキャンバスを見つけていた。

正直いってそれを見た時、ギタギタに破いて捨ててやりたいとは思った……何故夫は後生大事に自分以外の女の絵を持っているのだろうと思ったし、いうなればそれは、レンの昔の女の写真などを発見するより、ミチルにとって質の悪いことだった。

「レンが浮気してる人って、もしかしてこの人なんじゃないでしょうね!？」

ミチルが押入れの戸を思いきり開けると、スパアン!という小気味いいくらいの音が響いた。

彼女はその中にしまいこまれている、大小様々な大きさのキャンバスを取りだし――そして投げ捨てるように、順番に床へ叩きつけていく。

ようやく自分が欲しい作品を探しだす頃には、ミチルは息が切れているほどだった。

でも一度だけアパートのこの部屋まで来たことのある、この女のことは今もよく覚えていた……「あなた程度の女と、レンが結婚するだなんて」と、見下すように笑っていたあの女。

もしあの女が相手なのだとしたら、絶対に絶対に、許したりなんかしない!!

「わかったから、もうやめろ!」

ミチルが川上サクラの横顔が描かれた絵を破壊しようとするのを、レンはなんとかして止めようとした。

自分が過去に描いた芸術品を妻が粗末に扱っているからではなく――「この、このっ!!」と泣き叫びながら床にキャンバスを叩きつける、ミチルのことを見ていられなくなったからだ。

「なんでよおっ!! レンはあたしよりなんで、こんな女のほうがいいのよおっ!!」

ミチルは、棚の引き出しからカッターナイフを取り出すと、川上サクラの横顔をメチャクチャに切り裂きながら叫んだ。

「あたし、死んでやるからっ!! レンがどうしても別れるっていうんなら、死んでやるっ!! そしてあんたなんか、あんたたちなんか、呪われればいいんだっ!! こんなふうに誰かを不幸にして、本当の幸せなんか得られっこないんだからっ!!」

わあああっ、うわあああっ!! と号泣するミチルのことを、そのまま放っておいて、レンはアパートを静かに出ていく他はなかった。

手に負えない妻を見捨てて逃げようと思ったわけではなく、今はこれ以上何か話しあっても感情論になるだけだと、そうわかっていた。

とりあえずカッターナイフは拾いあげてそのまま持ってきたとはいえ――正直、自殺の方法なら他にも色々あるだろう。

けれど、レンはミチルが本当にそうするとは思わなかった。

ミチルは本当に強い女性で、アフガンですぐ隣に死があるという状況を経験している人間だった。

その彼女が命を粗末にするとは思えないし、何より、ミチルはボランティアで「今日死にたい」、「明日死にたい」という人間の相談まで受けているのだ。

レンは、その彼女が<自殺する>という選択肢を選ぶとは思わなかったし――いずれ、彼女が

今日見せた自分の失態のことを、後悔する日がくるだろうともわかっている。

（そのくらい、あたしはあんたのことを愛してるのっ！！）というミチルの悲痛な叫びは、もちろんレンにも伝わっていた。

でも、もう彼の中ではすでに、彼女との関係は終わりを迎えていた。

なんという冷たい、卑怯なずるい人間だろうと、レンはあらためて自分に対してそう感じる。

そして自己嫌悪に陥りもするが、これもまたそう長く続く重苦しい感情ではないとわかっていた……『こんなふうには誰かを不幸にして、本当の幸せなんか得られっこないんだからっ！！』というミチルの言葉の正しさを、レンはあらためて噛みしめる。

でも、どんなに不幸になったとしてもいい、今のレンには川上サクラという女と墮ちるところまで墮ちてみたいという誘惑に、勝てるだけの理由を並べることが出来なかった。

彼女の体に手を伸ばし、その快樂の実を味わってしまったあとでは……。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイトF i r s t M o o n様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「そろそろ一度、家に戻るよ」

レンがそう言った時、あたしはなんとなく別れの予感が胸をよぎって、もう二度と彼には会えないのではないかという、そんな不安な気持ちに駆られた。

もう随分昔のことになるけれど、レンが「ネパールへ井戸を掘りにいく」（本当はそれはアフガニスタンだったわけだが）、と言った時に、彼とはもう二度と会えないのではないかと感じたのと、まったく同じ気持ちだった……第一、あたしは男が「妻とは（いつか）別れるよ」と言った言葉を、これまでただの一度として信じたことがない。

「そんな顔、するな。必ずすぐにまた戻ってくるから」

「あんたは、あたしにとって期待と希望の星だってこと、忘れないでよ」

あたしは、わざと無理に笑ってレンにそう言った。

「そこらへんにいる普通の男が浮気して、愛人に嘘をつき続けるような話、腐るほどあるでしょ？あたしはあんたにはそんな男でいて欲しくない。レンがもしそんなどこにでもいるような陳腐な男だってことがわかるくらいなら――あたしたちは最初からこんなふうになるべきじゃなかったのよ。あたしの言いたいこと、わかる？」

「ああ、わかってる」

レンはそう言って、（誓いの）キスをしてから、あたしのマンションを出ていったけど……あいつが本当に「わかってる」のかどうか、また「わかってる」にしても、どこまでわかってるのかというのは、限りなくあやしいものがあるとあたしは思っている。

たとえば、最初は別れ話を切りだすつもりでいたけれど、情に流されるあまり結局切りだせ

なかったとか、あとになってから「今は時期が悪い」なんて言われたとしたら――あたしにとってこれ以上に打撃となることはない。

（レン、あたしはあんたに、そこらへんの陳腐な＜普通の男＞に成り下がって欲しくないのよ）  
わたしがレンに別れ際に言った言葉というのは、本当は嘘だ。

そのことはあいつもわかっていると思う……。「最初からこんなふうになるべきじゃなかった」なんて、今もあたしはまったく思わない。むしろ、最初から今みたいになるべきだったのに――何かの運命の悪戯から、ひどく遠回りをしてしまったのだと思っていた。

この三日というもの、レンがあたしのことを紛れもなく愛してくれているという以外、あたしには何ひとつとしていいことがなかった。

一応、TV局とかメディアに関連した仕事をしているとはいえ――あたしはマスコミに追いまわされたことなどないし、ほたるにそうしたことを漏れ聞いて「有名人は大変ね」と、ひたすら同情するだけの立場だった。

何かウィンドブレーカーのようなものを頭に被せたまま、行きつけのバーから警察車両へ乗りこんだ数馬には、おそらく理解できないに違いないけれど……あたしはとっくに、彼のことを許していた。

彼の取調べをする予定の刑事にでも、「川上サクラさんはあなたのことを許すと言っていましたよ。だから、がんばって更生してくださいとも彼女は言っていました」――そう伝えてもらおうかと思ったくらい、あたしは自分が死んでいたかもしれないにも関わらず（そしてレンがあの時偶然にもやって来なければそうになっていたにも関わらず）、数馬に対しては同情的な気持ちしか持っていなかった。

そう――たとえば人生をあたしのように三十二年やってきて、一度も「死にたい」と思ったことがない人間がいたとしたら、わたしはそんな人間のことは尊敬するというよりは軽蔑してしまうだろう。「運がよくてお羨ましい」とでも言って侮蔑的に褒めちぎるか、「随分薄っぺらな金メッキ的的人生を送っておられるんですね。素晴らしい！」とでもいうしかないというか、何かそうした気持ちにしかたない。

もちろん、そうした人というのはたぶん……ある幸運な条件がいくつも重なってそうなのか、あるいは本人の魂の性質が善良で、自分が人生というものに対して払った対価をバランスよく＜運命＞から押し戻してもらえる、その循環がうまく回っている人なのかもしれない。

わたしが何故こうもあっさり、殺されかかったにも関わらず、その殺そうとした相手のことを許せるのかといえ――それには理由がある。そしてこのことについては、レンにもすでに説明しておいた。

電話線を引き抜き、携帯電話もオフにしてから、ようやく静かになった部屋の中で。

「ねえ、レン。『ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら』の初演が終わった日の夜――あたしがあんたに話したこと、今も覚えてる？」

「ああ、昔の男の話だろ」

その件についてはもう蒸し返して欲しくないという顔をレンがしたので、あたしはもしや彼が今ごろになって嫉妬を覚えはじめたのだろうかと思ったけれど――そうではなかった。



「あのね、あとからあたしがあの日の話をどこまで覚えてるかって聞いたら、レンは言ったわよね？酔ってて途中から自分が何をしていたのか覚えてないって……あたし、あんたが優しい気持ちから忘れた振りをしてくれてるのかなって思ったんだけど、実際のところ、本当はどこまで覚えてるわけ？」

「あのな」と、ダイニングでテーブルに肘をつき、あたしと向き合うような格好でレンは笑った。

「おまえがすっかりそう思いこんでるみたいだったから、それ以上何も言わなかったけど——俺、おまえの昔の男語りなんて、半分以上まともに聞いちゃいなかった。記憶としてはっきり覚えているのは、家になんとか居づらくて、ボーイフレンドの……アツシさんとかいう人の家に転がりこんだっていう、そこまでだな。そこへフーテンの寅さんを格好よくしたみたいなお兄さんが帰ってきて、おまえがルリ子さんっていうアツシさんのお母さんに「その立派な二本の足で出ていってくれ」って言われたっていう、そんなところまでだ」

「ねえ、それって本当に絶対そうなの？」

あたしは疑わしい目でレンのことを見返した。

「嘘ついたってしょうがないだろ。もちろん、そのあともおまえが何かしゃべってたってことは覚えてるよ。それで途中、たぶん酒の力のせいでそう見えただと思うけど、俺はサクラのことがちょっと可愛いなと思って……手をだしそうになったことは漠然と覚えてる。それで、「頭を冷やしてくる」とか言って、トイレに行ったんだ」

「ええっ！？あんた、どうしてそれをもっと早くに言わないのよ！？」

「その時は、酒の力による目の錯覚としか思わなかったからな」

——とはいえ、かくいうわたしも、レンの奴が「頭を冷やしてくる」なんて言って、席を立ったことはまるで記憶にないあたり……実際あたしも、どこまでレンに自分の過去話をしたのか、今さらながらわからなくなっていた。

そうなのだ。正直、わたしは今もアツシの家を出てからのことは、人に話して聞かせたいとはあまり思っていない。ルリ子さんに出て行ってほしいと言われた時、あたしは物凄くショックだった……今も、ショックだったのはアツシと別れることではなく、彼女との関係を断ち切られたことのほうがショックだったのだと、あたしはそう思っている。

その時のあたしはまだ若く、たったの十七歳で、路頭に迷った白い子羊のような女の子だった。

つまり、その可愛そうな子羊のことを連れ帰ってくれるなら、そうした他人の善意や好意に甘えることに、なんの遠慮も感じないくらい、純粹で初心な娘だったといえる。

一流どころか二流、また三流ですらない高校へ通う長女を恥かしいと思う母とは違い——ルリ子さんはあたしのそういう状態を＜ありのまま＞受け容れてくれた女性だった。

「ただし、避妊には気をつけないとね」と、一緒に暮らしはじめた最初の頃、ルリ子さんはあたしにそう言った。

あたしが今まで何人もの男の間を渡り歩いてきたにも関わらず、一度も墮胎の経験がないのは、この時のルリ子さんの助言によるところが大きい。彼女はその時、評判のいい整形外科病院で看護師をしていたけれど、それまでに内科・外科・精神科・脳神経外科など、色々なところで働

いた経験のあるベテラン看護師で――まだ看護学生だった頃、産婦人科で「墮胎手術」の現場に立ち会ったことがあったという。

「今の子どもたぶん、五ヶ月くらいまでならなんとか墮ろせると思ってるだろうけど……五ヶ月にもなったら、それはもう立派な命として息づいてるのよ。あたしがその時見たのは、医者先生が何かバキュームみたいなもので、緑色の命の元みたいのを吸いとってるってところだったの。アツシの兄がお腹に出来た時、あたしは今よりずっと若かったから、もちろん墮ろうそうかとも思ったけど――あの緑色の命の元みたいのが頭にちらついてね、どうしてもそう出来なかったわ。第一、墮胎っていうのは妊婦の体をボロボロにすることでもあるから……相手は妻子のある人で、認知してもらえないってわかってたけど、生んだの。それからアツシも、父親は医者なのに、ふたりとも頭のいい父親のDNAをさっぱり受け継がなかったみたい。もちろん、あたしの育て方が悪かったのかもしれないけどね」

ルリ子さんがその時に言った、＜緑色の命の元みたいなもの＞という言葉は、その後、あたしの頭を離れなかった。もし彼女からこの言葉を聞いていなかったとしたら――あたしは墮胎というのは、何か子供を墮ろす薬を飲んで、あとはおしっこと一緒に何かが流れてきて終わり……くらいにしか思っていなかったかもしれない。

そんな馬鹿など笑う人もいるかもしれないけれど、学校では避妊については授業で教えてくれるけど、墮胎についてはそんなに詳しく教えていない。だからほんのたまに、公衆トイレで赤ん坊を産み落とし、そのまま公共のゴミ箱に捨てた未成年の少女……なんていう話がでてきたりするのだ。

あるいは赤ちゃんポストに子供を捨てる女性に対して、世間はとても冷ややかな視線を浴びせる。

肉欲の結果として、避妊もせず性交した罪の結果がそれだ、とでもいうように。

でもわたしが思うに――十代、あるいは二十代前半くらいの女性というのは、本当に初心で男とのつきあい方がわかっていない場合がとて多いと思う。

相手の要求にこたえなければ嫌われてしまうと思いこんでいたり、どうしていいかわからなくて相手の言うなりになってしまう女というのはいまだに多いし、しかもそれを「愛」だとか錯覚してる場合が極めて多いような気さえする。

「それはあんたのただの性欲であって、愛じゃないわ」――ということ、わたしは口にだして男に言ったことはないけれど、正直そう思ったことは何度もあった。

何故わたしが自分を殺そうとさえした数馬のことを「許した」のか、また「許せる」のか、その部分をわかりやすく説明するには、わたしにとってとても長い言葉が必要になる……だから、アツシの家を出てから一度実家へ戻った、そのあとからさらに長い話を続けなければならない。

実家へ戻ったその後も、空中椅子で腹筋を鍛えているような居心地の悪さと緊張感があったため、わたしはまた家出を繰り返すようになっていた。わたしが通っていた3・5流の高校では、誰もまともに授業など受けている生徒はいなかったの（あたしは男の同級生と、授業中はいつも花札かトランプをしていた。先生はあたしたちのほうを見ない振りをしながら、架空の生徒を相手に授業を続けるといったような按配）、放課後はもう気力が余っているといった状

態だった。

そんなわけではあたしは、友達の家を転々としながら、今度はアルバイトをはじめることにしたのだ。

お金をためて自分ひとりの力でやっていくためにはそれしかないと思ったし、実際自分は接客の仕事に向いているとさえ思った……金メッキを磨きあげるように、表面だけ笑って客と接していればお金をもらえるだなんて、本当に素晴らしい仕事だとも思った。

そして特にこれといって何事もなく、喫茶店のマスターや他の従業員たちともうまくやっていた時――いわゆる暴走族というのか、その時代でさえとっくに死に絶えたと思われていた種族が、しょっちゅううちの店へくるようになったのだ。

ライダースーツを着こんだ、偽のラモーンズのような連中がドカドカ入ってきて、二十席ほど座席を占めると、当然他の善良な一般客はそそくさと逃げ帰っていった。

そんなことが五、六度繰り返されたあとで、ヘッドの右腕とかいうポジションにいると思しき男が、会計の後あたしにこう言ったのだ。「仕事が終わるまで待ってる。そのあとバイクでどこかへ行かないか」と……。

その男が声をかけてくるまで、この連中が帰ったあとに他のウェイトレスが言っていたのは、大体次のような言葉だったかもしれない。

「一体なんなのあの連中!？」

「今時あんなの流行らないわよね～。っていうかダサすぎww」

「そもそも、自分たちが社会の害悪、ゴキブリかダニ以下の人間だっていうの、わかってないんじゃない？」

――ご想像のとおり、わたしはこの社会の害悪、ゴキブリかダニ以下の連中と次第につきあいを深めていくようになった。

結局この時勤めていた喫茶店もやめざるをえず、あたしは暴走族グループのマスコットガールといったような存在になり……自分のことを最初に誘った男と一緒に暮らすようになっていた。

彼は名前を赤石五郎といい、あたしは彼のことを「ゴロちゃん」と猫のように呼んだ。

わたしは彼らのグループを暴走族といったけれど、それは世間一般が彼らのことをわかりやすくそう呼んでいただけであり、彼ら自身は自分たちのことをあまりそう思っていなかった節がある。

つまり、どういうことかということ、彼らはただのライダー仲間のようなものであり、確かに群れてバイクを走らせてはいるけれど、それ以外ではまったく硬派な男気のある連中だったということだ。

ちなみに、会の規則のようなもので、通常彼らの仲間に女性は加えてもらえないということだったけれど……わたしの場合はまあ、奥手でシャイなゴロちゃんが初めて惚れた女ということで、特別に仲間に入れてもらったのだ。

ゴロちゃんと暮らしたのは大体二年くらいだっただろうか。

彼は高校を卒業後、自動車整備工場で働いており、収入のほうもふたりに暮らしていけるくらいにはなんとかギリギリあったと思う。

でもあたしはもう少し自分の物を自由にお金で買えるお金が欲しかったので――バーでホステスとし

て働きはじめることにしたのだ。

そう。これもまたありがちな話だが、わたしはホステスとして着飾るために、次第にブランド物の服やバッグを買い漁るようになり、ゴロちゃんとは喧嘩の絶えない関係となっていった。そして、他に男が出来たのが原因で、別れることになったのである。

あとはもう、わたしの人生は「普通の人」の目から見たとすれば、〈転落の人生〉として映ったとしてもまったく不思議はなかったと思う。

あたしはこの頃にはすっかり学んでいた――男に効率よく金を貢がせるにはどうすればいいかを。

また、仮に相手の男がデブで禿げているような男でも、彼にお金さえあれば、そうした男と寝たり愛人になったりすることに、なんの抵抗も感じなくなっていた。

ただし、わたしのことをふたりの男とシェアしたい（ようするに俗っぽい言い方をすれば3Pとかいう関係）という男と、あたしに子宮内避妊器具をつけてはどうかと提案した男だけは金を持っていても断った。

それというのも、わたしはどの男に対してもこの「避妊」ということに対してはうるさかったからだ。

あたしはいつも彼らにこう言った――「ねえ、あたしに〈緑の命の塊〉を吸いとらせるような手術、受けさせたいってわけじゃないでしょうね？」と。すると大抵の男はすぐに押し黙った。正確には、ルリ子さんから聞いた時には〈緑の命の元〉だったと思うけど、あたしは彼らにその話をする時には必ず「塊」という言葉を使った。

でもレンにはこんな話、当然していない。

何故ならわたしは彼を愛しているので、愛の行為の結果として子供が出来るのなら――わたしにとってそれは、彼のことを繋ぎとめることの出来る、とても嬉しい重要な要素だったから。

いや、レンとのことはわたしにとって本当に特別なことなので、彼とのことはまたあとで述べるにしても……何故わたしが自分を殺そうとした数馬のことを許せるのかという、今はその話を先にしたいと思う。

正直って、本当には愛していない男に抱かれる影で、あたしは泣いていた。

表面的には、自分の欲しいもの――ブランド物の服やバッグ――を買い与えられ、暮らしになんの不自由もない生活をあたしは送っていたが、当然それはあたしが本当に欲しいもの、欲しい生活ではなく、「本当に欲しい」ものを得られない代わりに代替品のようなものだったといえる。

わたしにはその頃、レンのように自分の思っている感情を言葉で言い表したり、あるいは絵で表現する芸術的センスといったものも持ち合わせがなかったので、ただこう思った。「死にたい」と。「こんな死んだような生活、これ以上続けてなんになるの？」と何度も思った――わたしが愛人になった男の中にも、あたしの首を絞めて殺してもいいというくらい愛情のある男がひとりでもいたら、あたしは今この世に存在していなかったかもしれない。

そう……わたしが数馬のことをすぐに許すことが出来たのは、何よりもその点だ。

言葉で説明しても、人にはなかなかわかってもらえないかもしれない。でも、あたしは十八く

らいまでは本当に、無知であるがゆえに汚れがなく、もし本当にその頃のあたしに「人生で一番大切なこと」を教えてくれるような人が身近にいたら、その時点ですでに人生は180度変わっていたかもしれないのだ。

うまくいえないけれど、あたしはそうしたことを他でもない〈ベルビュー荘〉で学んだ。

ゆえに、数馬の気持ちもわかる気がする……最初は汚れなく清らかな志を持って舞台上上がった青年が、やり方次第で大金がいくらでも手に入る裏の世界を知ってしまった時――何かが狂ってしまったのかもしれないという、そのことは。

数馬が何故他の人間のところへではなく、よりによってあたしの元へやって来て、自分の人生がうまくいかない憂さを晴らしにきたのか、その理由はあたしにもわからない。

ただ、彼には近いうちに必ず、あたしは会いにいくつもりだ。

そして彼のことを許していることを伝え、何か援助できることがあったら、遠慮なく助けの手を差し伸べるつもり……あたしはこうしたことを、実は心密かに〈ベルビュー荘のやり方〉と呼んでいるけれど、何よりそのことをあたしに教えてくれたのが、他でもないレンの奴なのだ。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

最愛の婚約者である川上サクラに呼びだされた時、クマちゃんはバンビーナとの別れを予感した。

本来なら――まずは表面的にでも「大丈夫かい？」とか、「体のほうはすっかりいいのかい？」といったようなことを、婚約者であれば先に聞いてしかるべきではあったろう。

「凜太郎さん、話があるの」と電話で言われた時、そこには別れを決意した女性特有の、どこか厳かで凜とした声の響きがあった。

そして「うん、わかったよ。それじゃあ……」と言って電話を切った時、クマちゃんは彼女が自分と同じ種族の男――バンビーノと一緒にいるつもりなのだろうと直感した。

正直なところを言って、こここのところ連日報道されている、美人脚本家川上サクラと落ち目俳優上月数馬の話というのは、そもそもクマちゃんにとって合点のいかない点が多かった。

このネタはクマちゃんの運営するインターネットサイトのトップで、現在検索率がナンバーワンとなっている事件だ……もちろん、ほんの二週間も過ぎれば、検索率はトップテン以下になると思われるものの、ニュースで報道されているとおり「川上サクラの恋人」が上月数馬の暴力を止めに入ったというのなら――それは当然、婚約者の自分ではないということになる。

もちろん、この<婚約>というのは、クマちゃんとバンビーナの間でカルティエの指輪を交わしただけの、今のところ極一部の人が知らない、公の事実とはなっていないことではある……そういう意味でこれから彼の顔に社会的に泥が塗られるとか、そういった事態はあまり心配しなくていいだろうとは、クマちゃんにもよくわかっている。

ただ、クマちゃんはテレビの報道で見てしまった。

マンションの裏口からリポーターに追い迫られ、「何かご存知ありませんか!？」などと言われつつ――何も答えずに黙って出ていく一住人といった男の姿を。もちろん、友達のことを心配

してかけつけたのが、いつの間にか恋人として報道されたという可能性もなくはない。そしてバンビーナの話というのも、「クマちゃん、ごめんね。ほんっとーに違うから、誤解しないでっ！！」という話である可能性も、まったくないとは言い切れないだろう。

けれども、クマちゃんももう四十二歳にもなる、離婚歴が三度もある大人の男であり、バンビーナが電話してきた時の決然とした声から察するに――自分は次に彼女と会う時、「やっぱり種族の違う人とは結婚できない」といったことを切りだされるに違いないとわかっていた。

つきあいはじめてまだ間もない頃、バンビーナはクマちゃんに対してこう言っていたことがある。

「クマちゃんの最初に結婚した女がネズミ女で、二番目の奥さんがピル女でしょ？それで三番目のワイフがカルト女だとしたら、あたしはクマちゃんにとって何女なのかしらね？」

クマちゃんが初めてスカッシュコートで出会った時、バンビーナはとても生命力にあふれていて、エネルギッシュかつパワフルな女性だった。

でもそれをうまく「～女」と名づけることが出来なかったので、クマちゃんはただ彼女に対してこう言った。

「バンビーナはバンビーナだよ。俺だけの可愛いバンビーナ。それでいいじゃないか」と。

クマちゃんは今あらためて思う……自分はそもそも彼女のどんな点に惹かれ、心から愛するようになっていったのかと。

正直なところをいって、クマちゃんのまわりにも、エネルギッシュかつパワフルなワーキングウーマンといったタイプの女性はたくさんいる。でも彼女たちはすでに結婚しているか、あるいは結婚していない場合でも、クマちゃんは特に強く惹かれるものを感じたことがない。

クマちゃんは先日、秘書に頼んでバンビーナ好みのエルメスのバッグを買っておいたもらった……それは社長室の片隅に置いてあり、仕事の合間に時々そちらへ目をやっては、クマちゃんは次にバンビーナと会える瞬間のことを楽しみに心に思い描いていた。

彼女と出会ってからこの二年、クマちゃんはどんなにバンビーナの存在を支えにしてきたことだろう。クマちゃんが今現在得ているくらいの地位や成功、名声や財力といったものを得てしまうと、実はもうそれ以上に大きな仕事をするという以外、何もなすべきことがない。

本来なら、三回結婚したうちの一度くらいの中に、子供がひとりくらい出来ていてよさそうなものなのに――その点はまだクマちゃんにとって未知の領域だったため、これから最愛のバンビーナとその新しい世界を開拓出来るとばかり思っていただけに……正直、バンビーナとの別れというのは、クマちゃんにとって換えのきかないつらい痛手となる出来事だった。

もちろん、お金にものをいわせるなら、バンビーナほどの女性でなくても、ある程度の容姿の女性をクマちゃんは再び手に入れることが出来るだろう。けれど、今のクマちゃんは自分と同じクマ族の女性は目にも入らないといった精神状態であり、バンビーナと会えない週末がこれから永遠に続くのだと想像しただけで――その寂しさをどう紛らわしたらいいのか、まるで見当もつかなかった。

(いや、まだあの水嶋蓮という青年にバンビーナを奪われたとは限らないぞ)

クマちゃんは社長室の壁にかかっている、画家・水嶋蓮の作品を見上げながら、そう思った。

結局クマちゃんはこの麦の穂の揺れる夜景を見れば見るほど気に入ってしまい、社長室の壁に

飾るということにしたのだ。そしてあらためて、一階のロビーに飾るための絵をミズシマ青年に制作依頼しようと思っていた。それが、一転してこんなことになってしまうだなんて……。

無論、クマちゃんにとってミズシマ青年にバンビーナを横から突然奪われるなどという事態は、まるで想定していないことだった。ほんのついこの間、彼の働いている画廊を訪ね、お互い敵対的でないあたたかい握手を交わしたばかりだというのに、バンビーナの気が急遽変わってクマからバンビーナを寝とったなどとも思えない。

(なんにしてもとりあえず、会って事情を聞くしかない、か)

クマちゃんは、バンビーナの命を助けたのがもしミズシマ青年でないなら、今報道で言われている「恋人」というのは一体どこの誰なのだろうと想像する……そもそも、一部の記事が盛んに書き立てているとおり、脚本家の川上サクラは女優の二階堂ほたるから上月数馬を寝とった過去があり、それ以来ふたりの間にあった女の友情は終わりを迎えたとかなんとか、クマちゃんは何が本当で真実なのかを一刻も早く知りたいと思った。

それで午前十一時からあったミーティング——ニューヨークやロンドン、中国などのソフト開発に関わる社員たちと、パソコンで同時中継しながらの会議を終えると、クマちゃんはバンビーナが来てほしいと言っていた喫茶店まで、出かけてゆくことにしたのだった。

エルメスのバッグは、とりあえず一旦、持っていかないことにした。





(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」 <<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

これまであたしは、愛人契約が切れた時含め、随分多くの男との別れを経験してきた気がする。

でもクマちゃんとの別れは、ゴロちゃんとの別れ以来の、あたしにとって本当に久方ぶりの、つらい心の痛手となる出来事だった。

ゴロちゃんは、その頃からすでにビッチの萌芽が見られていたあたしにとって、もったいなすぎるくらいの純な相手だったと思う。当時は今より若かったため、彼の言っていることに素直に聞き従うことが出来なかったけれど.....今にして思えば、彼の言っていたことはすべて正しかったのだ。

「ホステスなんて、なんでそんなところで働くんだよ。俺、サクラのことを他の男がそういう目で見ると、絶対嫌だ」

「馬鹿ねえ。べつにキスしたりそれ以上のことをするわけじゃないのよ。ちょっと楽しいお酒をお互い飲んで、それでお金を稼ぐってだけなんだから、そんなに深く考えないの」

それからあたしは、家計簿をつけて新作のビデオを借りるのを控えるようにするとかなんとか、そんな生活はもう嫌なのだとゴロちゃんに説明した。この手のことをあたしが言うと、ゴロちゃんは大抵押し黙り、あたしの言い分を認めてくれたものだった。

また、彼とは子供のことで意見に相違があった。彼とのセックスの際には必ずコンドームが用いられており、ゴロちゃんはそれをととても嫌がっていた。

「べつにいいだろ。生のままで出してもさ.....もし子供が出来たら、結婚すればいいじゃん。俺

、見たいなあ。サクラの花嫁姿」

ゴロちゃんは何度もこの種のことを言ったが、あたしは決して気を緩めなかった。

＜緑の命の塊＞のことを思うとゾツとしたし、何よりこんな若い年で結婚するだなんて――冗談じゃないとその頃には思いはじめていた。アツシとつきあっていた頃は、このままヤンママになるのも悪くないかなと思っていただけ、その後考えが変わったのだ。

そして子供――子供を産んで育てるには、ゴロちゃんの収入ではとても足りなかった。

いや、産んでしまえばそのあとのことはなんとかなる、愛さえあれば……とかいう人が多いのは知っている。でもわたしは裕福であるにも関わらず不幸な子供として成長したので、よくわかる。

子育てには絶対、保険が必要なのだと。

だからゴロちゃんと別れてからは、あたしはいつも潤沢な子育て資金のある男と結婚したいと思っていた。そしてクマちゃんと結婚しようと思ったのは、彼がそういうあたしの考えを理解してくれる人でもあったからなのだ。

「ねえ、クマちゃん」と、ある週末を高級ホテルのスイートで過ごしている時にあたしは言った。クマちゃんの胸毛を引っ張ったりして、くすくす笑いながら。

「うん、なんだい？」

彼は望みのものを十分与えてもらって、とても満足といった様子だった。

「わたしとクマちゃんとの間に、もし子供が生まれたとして――その子が仮に男の子だったとするでしょ？そして、不幸にもクマちゃんのこの毛深いDNAを受け継いでしまった場合、いつごろエステに連れていけばいいかしらね？」

わたしは至極真面目な気持ちでそう聞いたのだけれど、クマちゃんはただの面白い冗談だと思ったらしく、ただ笑っただけだった。

「笑いごとじゃないのよ、クマちゃん」と、あたしは少し拗ねたような振りをして言った。「小学生の時って確か、プールの授業とかあるでしょ？その時にもし普通じゃありえないくらい体がもじゃら～っとしてたら、いじめにあたりするんだから！あたしたちの子が「モジャモジャくん」なんて呼ばれて、いじめられてもいいの！？」

「参ったな」

そう言って、クマちゃんはあたしの長い髪を愛しそうに撫でた。

「もちろん、その不幸な遺伝子は俺から受け継いだものなんだから、当然俺に責任があるってことだよな。でも俺はそんなこと、考えもしなかったよ。自分がこの体のせいでいじめにあたりしなかったせいかもしれないけど――女の子ならともなく、男の子はね、まあ多少毛深くてもそんなものだろうというふうにしか思ってなかった。君は案外……そんな真っ赤な爪をしている割に、いい母親になるかもしれないな」

「そう？」

と言ってあたしは、そのあと彼の胸に軽く爪を立てたりして遊んだ。

つまり、わたしが何を言いたいかということ――わたしが先に言った子育てにおける保険とは、そういう意味あいのものだということ。

今のあたしを知っている人は、てっきりあたしが小さい頃からズバズバものをいう、我儘な子供だったと想像するに違いない。でもそんなことは決してなく、むしろわたしは自分の言いたいことをなかなか表現できないような控え目な子だった。

そして母親に対していつもこう思っていた……何も言わなくても、娘が何を一番欲しいと思っているかを察してほしいと。

でも彼女は全然見当違いのものをたくさん娘に与えたあと、こう思ったようだった（少なくとも、娘のあたしの目にはそう映った、ということ）。

こんなに長い年月をかけて、お洋服とかおもちゃとか食べるものとか色々、アフリカの難民の子がびっくりするくらいたくさん与えたにも関わらず——この子はさっぱり自分の思ったとおりに育たなかったわ、と。

まあ、流石にアフリカの難民のくだりは表現としてどうかと思うけど……でも、それに近いものがあったのは確かだ。そして子供というのは、親の経済状況というものをよくわかっている。わたしが実の母親から本当に与えられたかったのは、物とか金によって交換できない種類のものであったけれど、もし自分の子供が本当に欲しいものが、お金のかかるものだったとしたら——あたしはそのために子供に不自由をさせたくないと思っていた。

あたしのこの考え方を、随分贅沢なものと思う人は多いかもしれない。第一、いちいちそんな保険が必要だったら、もう誰も子供なんて生めなくなるだろう、とも。

でも、今の世の中狂ってるので、あたしは子供が何かの拍子に学校へ行きたくない、行けば毎日ゲロを吐きそうな気分になるし、いじめられるから嫌だと言ったとしたら——たとえば家庭教師をつけるとか、何がしかの方法を子供にとってあげたいと思っている。

自分が3・5流の高校をでているので、学歴がないと生きていくのが大変だということもよくわかっているし、そのためにはやっぱり保険としてお金が必要なのだ……金の力というのは、＜正しい使い方＞さえすれば、実に偉大なものだということをあたしはよく知っている。

「うなるほど金が欲しい」なんて聞くと、大抵の人はその言葉に下品さを感じて、眉をひそめるかもしれない。もし心の中では喉から手がでるほど金が欲しかったとしても、言葉にだして言う人間のことは、大概の人が軽蔑する。

でも、あたしはお金に保証された幸せな結婚が欲しかった……どうしても。

そしてそれを叶えるのに、クマちゃんは考えられうる最高の男だとあたしは思っていた。

それなのに——あたしはレンが相手なら、彼がもし仮に貧乏画家でも、何をおいても絶対に彼と一緒にいたいと思うのだ。

たとえば、レンがもしヒモのような存在でも彼自身がそれで構わないなら、あたしはない脳みそをしぼって、なんとかこれからも脚本を書き続けて、お金を稼ぎだしたいと思っただろう。仮に中には「どうしようもない駄作」の烙印を押されるドラマがあったとしても、レンには「絶対見ないで」と言っておけばすむことだという十分な言い訳が成立する。

（クマちゃん、ごめんね。本当にごめんなさい……こんなに愚かで馬鹿なバンビを許して）

そしてあたしが、別れ話を切りだす前から足が震え、泣きそうになっていると——中央に、イギリスにあるような赤い電話ボックスの置かれた店内に、クマちゃんが入ってきたのだった。

（絶対に、涙を流してクマちゃんの同情を引くような真似だけはすまい）

そう決意をあらたにしなが、あたしはなんでもない振りを装って、アイスコーヒーを飲んだ。

良心の呵責からか、（おまえたちのことはもう何もかも知っている）とクマちゃんの厳しい横顔が語っている気がしたけれど――クマちゃんは愛想のいいウェイトレスにコーヒーを注文すると、いつもの優しい笑顔に戻ってこう聞いた。

「それで、話っているのはなんだい？」



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「それで、話っていうのはなんだい？」

店内には、ビートルズの L E T I T B E が流れている……クマちゃんは（これは明らかによくない兆候だ）と感じたけれど、そんなものはただの偶然の一致だと思おうとした。

「そういえば、その前に体の具合を聞くのが先だったね。この三日ほどのあのニュースの報道はどれも——どこまでが本当で、どこまでが真実でないのか、俺にはよくわからなくて。連絡をとろうにも、君とは携帯も繋がらないし。でも、ひとつだけわかってることがあるよ。テレビで言ってる脚本家川上サクラの恋人がどうも、俺以外の誰からしいって言うことはね」

クマちゃんのその言い方は、ビジネスライクな、とても中立な立場に立ったものの言い方だった。

サクラは、恋人としてではない、実業家としてのクマちゃんのもうひとつの顔を知っている。最近、とあるインターネット関連企業の子会社が、クマちゃん会社に吸収合併されることになり——その様子がテレビのニュースで流れていたけれど、そうした場でインタビューを受ける時、クマちゃんは今とまったく似た種類の顔の表情をしていた。

「そう、よね。その相手って、わたしが浮気してしまった人なの。相手が誰かっていうのは、聞かないでね。ただ、わたしが凛太郎さんと結婚するのに相応しくない相手であることは確か。だから、今日は別れ話をするために、あなたを呼んだの」

そう言ってあたしは、ビロードのケースに入ったカルティエの婚約指輪を、クマちゃんの手元にゆっくり押し出した。

その時、コーヒーが運ばれてきて、伝票をウェイトレスが置いていく。

あたしはそれを、手の震えをなんとか堪えて取ることにした。

「話は、それだけ。最低な女だと思ってくれてかまわない。でも、ほんの四日前までは——こん

なことになるだなんて、思ってもみなかったの」

バンビーナが震える声音でそう言うと、その声の中にある種の真実さを感じて、クマちゃんはバンビの手から伝票を奪い返すことにした。

「これまで散々、君には色々なものを貢いできたから、今さらこのくらいのはした金を払ってもらったところで、嬉しくもなんともないよ。それより、どうせ別れるのなら……嘘をつかずに、全部本当のことを話してほしい。君の部屋に偶然やってきた男っていうのは、あの画廊で会った水嶋蓮くんなんだろう？違うのか？」

「……………」

バンビーナが即座に否定しなかったことから、クマちゃんにはそれだけですぐ、彼女の浮気相手が誰なのかがわかった。

四日前——そう、もしその時ミスシマ青年が来なかったら、バンビーナは落ち目の俳優に首を絞められ、窒息死するところだったという。そして彼がそれを助け、泣きじゃくる彼女を支え、励まし、ふたりはベッドで愛しあった……そんなところかとクマちゃんは今のバンビの様子から察しをつける。

「相手が誰かなんて、もうこの際どうでもいいでしょ？それより……」

「いや、よくない」と、クマちゃんは厳しく追及した。「俺は最終的に結婚できない女性のために、二年もの時間を無駄にしたんだ。俺は君との関係がこれで最後の恋愛になるだろうっていうくらい、君にのめりこんでいた。それなのに、たった四日前に他の男と寝たくらいのことで——今さら関係を御破算にするだなんて、随分勝手な言い草だと、君自身もわかっているだろう。いいから、最初から最後まで説明するんだ。その居心地の悪さに耐えきったら、あの才能あふれる画家と結婚でもなんでもするといい」

クマちゃんには、相手の名前をバンビーナが言明しないのが何故なのか、よくわかっていた。

自分には、あのちっぽけな画廊の入ったビルを潰すくらい、わけないくらいの財力がある……だから、バンビーナはそのことを心配しているのだろうと彼は思った。

(やれやれ。君にとって俺は、そんなに器の小さい男として映っているのか?)

そう思うとクマちゃんは、溜息を着きたくなってきた。

「その、ね……レンとあたしは本当に——信じてもらえないかもしれないけど、クマちゃんと一緒に彼の画廊へいった時には、なんでもないただの友達だったの。でも、わたしがレンのことをずっと前から、出会った時から狙ってたっていうのは確か。だけど、彼がアフガンの孤児院と一緒にボランティアやってた女性と結婚してからは、本当にただの友達で……それまでに何かの間違いで一度寝たとかっていうことすらないの。でも、あの日——数馬がうちにやってきて、偶然レンがそこへ駆けつけて、危うく殺されそうになったあたしのことを、救ってくれたの。あたし、本当にもう死ぬかもしれないと思ったから……レンに言ったの。本当はずっと好きだった、みたいなこと。そしたら、その、そういうことになってしまっ……」

「水嶋くんの奥さんはなんて言ってるんだい？」

クマちゃんは、コーヒーではなく、水で喉を湿らせてから、そう聞いた。

画家が本妻と愛人に二股をかけてその両方を苦しめたなんていう話は、歴史上、聞き飽きているほどたくさんある話だとクマちゃんは思っていた。

「まだ、離婚調停中っていったところみたい。でも、彼がはっきり別れるって言うてくれただけでも、あたしは満足してるの。これでレンがもし、なんだかんだ言って「やっぱり言いだせなかった」とか言ったら.....あたしは今日、クマちゃんのことを呼びだしてない。あたしはあなたが思ってる以上に計算高くてずる賢い女よ。でも、レンが離婚調停してでも別れるって言うてくれたから.....あたしは今日、あなたに電話することを決意したの」

「そうか。その話についてはまあ、信じることにしよう」

クマちゃんはコーヒーを飲み、話すべきかどうかと迷ったあとで一々やはり言いだすことにした。

バンビーナと過ごせる週末が、自分にとって二度とない以上、あとから後悔したくないと、彼はそう思ったのだ。

「正直いって、普通に考えたら出来すぎた話だとは思う。今君の言ったことを別れ話として説明されて、どれだけの男が納得するか、あやしいものだという気もするよ。でも、君が死にかかっていた時に、俺はその場になかった。そしてミズシマくんがそれを助けたというのは、とても大きいことだと思う。何より、俺は危うく婚約者を失った不幸な花婿とかいうのになるところだったけど.....死体安置所で君に会うよりは、生きている君に別れ話を切りだされた今のほうが、遙かにずっといい。そのことを思うと一々俺は、サクラ、君にはもう何も言えない気がするよ」

バンビーナの長い睫毛の間から、みるみる涙がもり上がってくるのを、クマちゃんはじっと見つめていた。

目蓋にきっちりアイライナーの入った、マスカラで彩られたバンビーナの茶色い瞳。

自分はこの瞳を見るたびに、何度彼女のことを愛していると思ったことだろう。

「処分に困るだろうから、この指輪は一応受けとっておくよ。本当は、質屋にでもいれてくれて、全然構わなかったけど.....この二年、本当に楽しかった。むしろ、君のようないい女とつきあえて、俺はラッキーだったと思うべきなんだろうな。本当は今日、別れを予感しながらも、まだ何か打つ手立てがあるかもしれないと俺は思ってた。でも君の顔を見たら一々もう無理なんだっていうことがよくわかったよ。それなら、見苦しく嫌味なことをあれこれ言うより.....俺はメルヘンの世界の、優しいクマちゃんのままにしようと思ったんだ。ミズシマくんにも言うておいてくれ。五百万っていう金を返す必要はないってね。バンビーナは金のかかる女だから、それは君がとっておいてくれって、そう伝えてほしい」

クマちゃんは、バンビーナが顔を覆って静かに泣いているのを見て一々そのままそっと、席を外すことにした。今はまだ、決定的打撃といったような形では、胸のほうは痛まない。

でも、バンビーナのいない世界を現実としてじわじわ実感するうちに、クマちゃんは苦い思いを噛みしめるだろうとわかっていた.....もう少し見苦しいところを見せてでも、バンビーナを引き留める努力をすべきだったろうかと後悔している自分の姿が今からすでに目に浮かぶ。

いや、これでよかったのだ、とクマちゃんは無理に自分を納得させながら、運転手の待つメルセデスへと乗りこんだ。

「お早いお帰りでしたね」

もう十年ばかりも自分のお抱え運転手をしている比嘉が、クマちゃんのことを振り返ってそ

う言った。

比嘉はその昔バスの運転手をしていたけれど、不況のあおりで首を切られ、ホームレスをしていた時にクマちゃんに拾われた。彼は家族も子供もない孤独な人間で、クマちゃんは仕事の悩みやプライベートなことなどすべて、彼には気兼ねなくなんでも話することが出来ていたといっ

「振られたよ。他に男が出来たと、そう言われてね」

「さようございましたか。あの方は最初にこの車にお乗りになられた時から、悪女だと思っておりましたよ、わたしは」

これは比嘉得意の、彼一流の物の言い方で、本当は彼は、クマちゃんがどのくらいバンビーナに入れあげていたか、よく知っている……社まで戻るまでの間、クマちゃんはとりとめもなく色々なことを自分より十歳年上の男に相談することにしていた。

「比嘉、おまえの年で家族も子供もないっていうのは、どんなものだろうね？正直いって俺はおそろしいよ……金だけは唸るほどあるのに、もしかしたら自分は孤独な老後ってやつを迎えるのかなと思うとね」

「大丈夫でございますよ、凜太郎さまは」

比嘉はバックミラーごしにニコッと笑って言った。

「わたしを含め、人望がおありでございますからね。なあと、凜太郎さまが七十の時、わたしはまだ八十です。わたしの出身地の沖縄は、日本で一番平均寿命の高いところですからね……足腰が丈夫なうちは、わたしが面倒をみさせていただきますよ。それに、もっと良い方とのご縁がきっとあるはずですよ。この間、どっかの国の破廉恥な大富豪が、七十五歳で二十五歳の女性と結婚したとお聞きしました。五十歳も年が離れているそうですが、ふたりはこれから子作りに励まれるのだそうです……それを聞いたら、凜太郎さまなどはまだまだといったところですよ」

比嘉のこの物言いにすっかり気をよくしたクマちゃんは、少しだけ元気がでてきた。

そして、ビルの二十七階にある社長室へ戻ると、ふと思いついて、エルメスのバッグを秘書にプレゼントしようと思った。

黄金の麦の穂の夜景も、絵を取り外して、どこか別の階に飾るよう、指示しておく……その絵は今のクマちゃんにとって、バンビーナとバンビーノを連想させる、見ていて胸が苦しくなる絵に変わってしまった。とはいえ、その絵の芸術的価値にクマちゃんはとやこう文句をつけようとは思わない。

それから、秘書が電話があった人物のリストを告げたり、来週のスケジュールのことを確認するのを聞きながら――クマちゃんはふと思った。クマちゃんくらいの大企業の社長は、大抵美人の秘書を持っていて、テレビドラマなどではよく愛人関係になったりしていることが多い。

けれどもクマちゃんは、秘書とどうしたらそうなれるのか、これまで模索しようと思ったことは一度もなかった。というより、彼氏がいるかどうかと聞いただけでも、それはセクハラに当たると思われるのではないかと思い――これまでクマちゃんと秘書の間にはいつも、どこかピリピリとしたような、張りつめた緊張感があった。

つまり、これまでクマちゃんは秘書を何度も変えているけれど（彼女たちはみな適齢期を過ぎる前に、必ず寿退社した）、彼女たちと比嘉のように何故さつくばらんに打ちとけられないのか



、その理由が突然わかったような気がしたのだ。

「たった少し前に、彼女に振られてね」と、突然クマちゃんは彼の元で二年ほど働いている秘書の日向ひとみに向かって言った。

クマちゃんが自分の秘書に求めるのは、ただひとつプロフェッショナルとしての仕事だったが、たまには自分から弱さを見せたほうがいいのだろうと、クマちゃんはふとそう思ったのだ。

「まあ……」

と日向秘書は、（いつもは仕事の話しかなさらないのに）という顔をして驚いている。

慰める言葉もないと思ったのか、それ以上彼女は何も言わなかったけれど、クマちゃんは気にせず続けた。

「そのうち、まあ半年とか一年先のこともかもしれないけど、もしその彼女から結婚式の招待状が送られてきたら——一緒に出席してくれないかな。時間外で給料はだすからさ」

「でも、何故そんな人の結婚式にお出になる必要があるんですか？べつに欠席なさればよろしいのでは？」

「なんていうか、バンビがクマじゃなく、自分と同じバンビを選んだっていうような、メルヘンチックな話なんだよ。だから、彼らが結婚してめでたしめでたしっていうところで物語はしめ括られなければならない……クマは彼女を横どりされて悲しかったけど、そこはそれ、何しろメルヘンな世界のお話なもんだから——クマは花飾りを作ってバンビにおめでとうと言いにいくんだね。涙がでそうなほど、微笑ましい話だろ？」

「じゃあ、あのエルメスのバッグは手付け金としていただいておりますね。こう見えてわたし、結構高いんですよ」

クマちゃんは、たまには若い子と話すのも悪くないなと思いつつ、ひとり社長室にこもることにした。もしかしたら心の中では（何がバンビだか）と思われる可能性も高いのだが、まあそんなことはどうでもいいとして……クマちゃんは社長室の革の椅子に腰かけると、深い溜息を着いた。

>>ある日バンビーナは怪我をして、森の中でクマに助けられました。

怪我が治ってからも、二年ほどバンビーナはクマの元で暮らしていましたが、ある日、バンビーナは自分と同じ種族のバンビーノに恋をして、彼の元を去っていきました。

その二年の間に、クマはバンビーナの魅力にすっかりめろめろにさせられましたが、彼女の幸せを思い、野原へ駆け去っていくバンビーナのことをただ黙って見送ることにしたのです。

ひとり孤独な生活を送るクマの元に、一年ほどして、結婚式の招待状が届きます。

それは他でもないバンビーナとバンビーノの結婚式の招待状でした。

お人好しのクマは、ふたりの元へ駆けつけて、森の幸やら山の幸やらをいっぱい届けましたとき。

おしまい

といったようなことをクマちゃんは考え、自然、頬に涙が伝わっていることに気づいた。

そして、随分長い間、自分は幸福な夢を見ていたのだとあらためて感じる……自分はたぶん、今すぐは無理でも、また心の傷が癒えた頃にでも恋をするだろう。

けれど、それはバンビーナこと川上サクラとの間にあったものほどの幸福感を自分にもたらしはしないと、クマちゃんにはよくわかっていた。そして自分は次につきあう女性にもまた、何故自分がこれまで三回も離婚しているのかを説明しなくてはならないだろう……ひとり目はネズミ女、ふたり目はピル女、三人目はカルト女だったと説明するかもしれない。

でも、バンビーナとの恋に触れることだけは、決してない。

何故なら、クマちゃんにとって、彼女との間にあったことは——メルヘンチックなファンタジーの世界で起きた恋、夢の中で見た愛の物語なのだから、わざわざ人に話して聞かせるなんていうことは、とても出来ない。

クマちゃんは今、社長室の窓から外の夕景色を眺め、こう思う。

バンビーナこそは、彼の人生におけるミューズと呼んで差しかえない、本当に素晴らしい女性だったということを……。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

「それで、そっちはどうだったわけ？」

あたしは、レンの奴がミチルさんの元から戻ってくると一時間髪入れず、すぐそう聞いた。彼が二度目に彼女の元へ行って話し合いの場を持った、そのあとのことだった。

「おまえこそ、どうだったんだよ？」

「ふふーん。聞きたい～？」

あたしはパスタを茹でている最中だったので、それをざるにあけた。

そしてそれに水をぶっかけるなり一レンが呆れたように、怒鳴りはじめる。

「おまえ、一体どこまでヴァカなんだよ？普通、パスタは冷水にさらさねーだろ？まったく、何考えてるんだか……いや、これでおまえの家事能力がどの程度のものかってのは、よくわかった。佐々木さんはたぶん、サクラみたいな家事能力ゼロ女と結婚するより一婚約破棄して正解だったんだろうな。まず、間違いない」

「ヴァカって巻き舌使いで言われなきゃなんないほど、あたしはヴァカじゃありませんよーっだ！！」

あたしはレンの奴に舌を突きだしてそう言った。

「大体クマちゃんはねえ、あたしに掃除も料理もしなくていい、俺のそばにさえいてくれればっていう、懐のおっかい男だったんだから！！クマちゃんならたぶん、パスタに冷水ぶっかけてたくらいで、レンみたいに怒ったりしないもんね～。あんたみたいに心狭くすぐ怒鳴ったりもしないんだからっ！！」

「あ～、もう、うっせえな。だったらおまえ二度と料理なんかすんな。俺が作るから」

「マジすか！？やったあ～！！でもそれを理由に浮気とかされたら、なんかヤかも。だからそのうち、ミドリさんにでも料理習いにいこうかな、うん」

「グループホームの職員に、迷惑になるからやめとけよ……それより真面目な話、どうなった？佐々木さんと」

「ムキーッ！！あたしより先に、そっちの話してよ！！今までのあたしの物言いで、大体あたしのほうは見当つくでしょ！？クマちゃんがいい人すぎて、こっちはマスカラがとけるまでナイアガラの滝のように泣いて終わりっていう展開よ！！それで、レンは！？」

あたしは鼻息あらく、パスタを齧っているレンのことを横からじっと見つめた。

「かって……なんだ、コレ。冷水浴びせたとかいう以前に、何分茹でたんだ、おまえ。最初からやり直すしかないな」

「いいじゃん、べつに！！アルデンテだと思えば！！」

「おまえなあ。アルデンテっていうのは……って、まあもうこっちには口出しすんな。それよりミースソースの缶あけた時、Tシャツにソース飛んだんじゃねえの？まったく、何やってんだか」

「あ、ほんとだ！！まあ、いいや。どうせこれ、四千元くらいだから」

「おまえのその金銭感覚、ほんと最悪だな……まあ、ミチルは、今日いったらわりと落ち着いてたよ。そのうち離婚届に判押してだすっていうことに、同意してくれた」

「ほんとに！？ねえ、レン。こんなに色々うまく行って、あたしなんか怖いよ……もしかしてあたし、ある段階から夢を見てるんじゃないでしょうね！？」

「そんなに心配なら、ペンチでおまえのケツの肉でもつねってやるよ。そうすれば、これが夢じゃないってわかるんじゃないか？」

そう言ってレンは、鍋に水を満たすと、沸騰するまで待ち、パスタを茹ではじめる前にそこへ塩を入れていた。

「あ、あたし塩すら入れてないや。てへっ！！」

「てへっ！！はいいから、少しは部屋の中でも片付けろって……まあ、どうでもいいけどな。どうせ俺はクマちゃんみたいに、家政婦を雇う余裕もない、甲斐性なしの貧乏画家なんだから」

「ん～、部屋はねー、片付けようとは思ったのよ。レンが帰ってくる前に！！でもレンがミチルさんに出刃包丁で刺されてたらどうしようと思うと、もう落ち着かなくて……」

「ミチルはそんな女じゃないよ」

レンは時計の針をチラと眺め、一本さいばしでパスタをすくい、それを齧っていた。

「あたしにもちょーらい！！もぐもぐ……まあ、大体いいんじゃない？」

「大体いいんじゃない、か。パスタもまともに茹でられない女に、上から目線で言われてもな。さてと、まあ話の続きは、ミートソースでも食いながらするか」

「はあ～い！！」

あたしは幼稚園児のように頷くと、フォークを棚から取りだして、テーブルの上に置いた。

レンはフライパンの上にバターをのせると、その上にパスタを入れて炒め、それを皿の上のせている。そしてあたためたミートソースをパスタの上にかけて。

「見てると簡単そうなのに、なんでわたしにはレンみたいにチャチャッとできねいのかしらね？」

「できねいのかしらって、おまえ、千鶴語使ってんのか……まあ、どうでもいいけどさ。その

うち、なんとかでございまちゅ、とかいうだけはやめろよ。反射的にイラッときて、流石の俺もDV男になるかもしれないからな」

「あ～、そうね～。で、警察に捕まって、こういうのね。『千鶴語を使う妻に無性に腹が立って』とかなんとか。そういえば、ここのマンションの管理人、実は前まですごくいけ好かない人でさ～。今回のマスコミ騒ぎで、また嫌味を言われるかと思いきや、急にコロッと態度が変わってびっくりんこよ！！前までゴミの分別のこととかで色々うるさかったの。こう見えて、あたしゴミだけはちゃんと分別して捨ててんのに、そういう赤い爪をした女の中に、およそゴミをまともに分別できる奴がいた試しはないって感じで、最初から疑ってかかってんの！！ムカつかない！？」

「どうせ、おまえが朝の決められた時間までにゴミだしてないのが原因なんじゃないのか？」

「ちがうもーんっ！！」

あたしはそう否定して、グラスにエビアンを注いだ。

「んっ、このゲッティスパ、超おいしいわ！！えっと、それでね……」

「ガキみたいに慌てて食わないで、食べるかしゃべるかのどっちかにしろよ。どのみち、時間はもう逃げてかないんだから」

「そりゃそーだけど、あたしはこの話をしたくてレンが帰ってくるのをずっと待ってたの！！あの管理人の親父、明らかにあたしを敵視してたんだけど、あたしが死にかかったって聞いたら、急にあたしのことが気の毒になったのか、部屋の前までやってくるマスコミのことも全部追っ払ってくれて……なんか急に『ありがとう、おっちゃん！！』って感じよ。そのうち騒ぎが収まったら、なんか菓子折りでも持ってこうかなって思うの。あと、レン。このマンションは所定のゴミ置き場があって、そこになら一日前の夜とかに生ゴミ置いといてもいいのよ。プラゴミとか資源ゴミなら、そこにいつでも捨てとけば、管理人のおっちゃんがゴミ屋さんが来るって時に、全部だしといてくれるの」

「まあ、確かにあの人、俺にも随分親切だったぜ？なんか、おまえの命を救った英雄みたいな感じでさ。裏口の一番目立たないドアを教えてくれたり……なんにしてもほんと、芸能人ってやつは大変なんだなと思ったよ、つくづく」

「そうよね～。ほたるってこういう苦労してるんだって、しみじみ思っちゃった」

あたしはミートソースをずるずる食べると、ごくごくミネラルウォーターを飲み、一呼吸おいたあとで、彼にこう聞いた。

「それで、レン。今ミチルさんが住んでるアパートってどうするの？」

「そうだな……まあ、暫くはミチルがひとりで使うことになるかなって思う。そのうち荷物を取りにいこうとは思ってるけど……やっぱり、完全に別れるってなると、切なかったな。ミチルは何も悪くないのに、今日会ったらなんか、「自分がすべて悪い」みたいな顔、彼女がしてたから。本当は、悪いのは全部俺なのに」

「そうよね。悪いの全部、あんたとあたし。そういえばクマちゃん、絵の金を返すとか、そういうことはしなくていいってあんたに言ってたわよ。金のかかるバンビーナのために貯えておけて」

「マジか。いい人すぎるな、佐々木さん……でも、やっぱりそういうわけにはいかないだろ」

「それがそういうわけにいちやうんだな～、クマちゃんは。かえってレンからお金返されたりしたら、むしろ嫌味な感じよ、そういうのは。だからあんたも、クマちゃんの大きな胸に甘えたほうがいいと思う」

「そうか……俺は、ミチルにほんと、ひどいことしたっていう、そればかりだけど。俺のおふくろが占い気違いだって話、サクラにしたことあったっけ？」

「ああ、なんだっけ？あんたが芸大受ける時に、お百度参りしたとかっていう話は聞いた気がするけど」

レンはミートソースを食べ終わると、皿の上にフォークを置いた。

そしてティッシュで口元をぬぐってから、続きを話しはじめる。

「そのおふくろがさ、うちに時々電話してきて、ミチルに色々いってたっていうのが今日わかったんだ。で、俺は芸大を受験する時、おふくろがくれたお守りをギッタギタに引き裂いてから受験に望んだってくらい、そういう類のものがキライなんだけど……だからおふくろの言うことは基本的にまるで信じてない。それでミチルも、話半分くらいに聞いてたらしいんだけど——今日いったら、「お母さんの言ったこと、結構当たってた」って言ってて」

「どういうこと？」

あたしもスパゲッティを食べ終わり、フォークを皿の上ののせた。

そしてミネラルウォーターを飲みほす。

「ミチルのみちるって名前は、メーテルリンクの「青い鳥」からとったものなんだって、前に話してくれたことがあるんだけど……主人公の兄妹のチルチルとミチルのミチルのほうな。それで、うちのおふくろってのが、姓名判断にも凝ってて、飛鳥みちるっていうのはそもそも、運を逃す名前だから改名したほうがいって言ったっていうんだ。たとえば、役所に届けだされてる名前は変えられないにしても、普段どこかに名前を書く時には必ず「飛鳥満」って書くとかすれば、運が留まる名前に変わるってわけだ。まあ、ミチルはああいう性格だからさ、一応社交辞令的に「そうですね。そうします」とかって受け流してたみたいなんだけど……さらにおふくろが言うには、ミチルの名前は、たくさんの鳥が羽を休めにくるっていう、そういう名前なんだって。多くの人生に疲れた人が、ミチルの元に来て羽を休めて、また飛びたっていく……そういう宿命にある名前だっていうんだ。だから、誰か他人じゃなくて、自分自身が満たされるために、「飛鳥満」って改名したほうがいっていうわけだ。でも、ミチルは別れる時に言ってたよ。「これからは改名はしないって、お母さんにそう言っておいて」って」

「本当に、強い人ね、ミチルさんって。レン、あんたも彼女に会ってからこの四年くらいの間、ずっと——ミチルさんの元で羽を休めていたってことじゃない？あたしがクマちゃんの大きな広い胸に甘えてたみたいに」

「そうだな。ミチルの話を聞いてて……つくづくほんとに俺は、どうしようもない駄目人間だってそう思ったよ」

「ふう～ん。レンでも、自分のこと駄目人間だって思ったりすることあるの？」

あたしはわざと茶化して、彼にそう聞いた。

「そりゃあるさ。っていうか、誰にでもあるだろ？おまえだって、佐々木さんと別れ話する時、

その毛の生えた心臓が、流石に少しは痛んだだろーが」

「毛が生えてるは余計よ！！」

そう言って、あたしは爪でテーブルを叩いた。

「でも、やっぱりあたし、今でも夢を見てるみたいな気持ちでいっぱいよ。クマちゃんはともかくとしても、あんたとミチルさんは、そう簡単に別れられないと思ってたし……それでねえ、レン。あんた、あたしと今すぐじゃなくていいから、結婚式挙げてくれる気ある？」

「あ～、俺そういうの無理。絶対パス」

げっぷをひとつして、レンは話を続けた。

「あんなケーキ入刀だのなんだの、恥かしいことは死んでもしたくない。大体、俺たちはふたりの人間を不幸にして、その上にあぐらをかきような形で幸せになろうとしてるんだぞ？普通に考えたら、もっと慎み深く静かに暮らそうっていうのが、一番自然なんじゃねえの？」

「やだ～。そんなの、絶対いや～！！」

あたしは駄々をこねるように、両手をバタバタさせて言った。

「べつに呼ぶのは、ほんの少しの本当に親しい内々の人だけでいいの。でも絶対ウェディングドレスは着たいし、お色直しもしたいし……結婚は人生の一大イベント！！それにレン、あんたもあんな恥かしい思いまでして式を挙げたのに、もう今さら別れられないとか思ってあたしと一緒にいるためにも――したほうがいいわよ～。前もって離婚率を下げるために！！」

「……どうせおまえ、俺がいくら抵抗しても、自分がしたいようにするんだろ？じゃあ勝手にしろ。俺は結婚式当日に姿を消していなくなるから」

「そんなの、らめえ～！！絶対結婚式するによ～！！」

あたしはぷう、と頬を膨らませて言った。

「あ～、千鶴語は本当にもういい……っていうか俺、暫くしたらおまえの家族に会ったりなんだりしなきゃなんないんだろうな。俺もおまえをおふくろに会わせたり……考えただけでうんざりするけど、サクラ、俺のおふくろがおまえの考えてる以上にぶっ跳んでる人でも、喧嘩だけはするなよ。あの人、気に入らない嫁を祟り殺しかねないからな。夜中に近くの神社で五寸釘ごっことか、マジでやりそうな人だし」

「ふう～ん。もしかしてさ、レンって母性とかに飢えてたりするほう？」

「なんだ、それ？おまえ一体いつから俺の分析医になった？」

「なーんかさ、思うんだ。レンってたぶん母性本能とかをくすぐるってタイプなんじゃない？お母さんからそゆのを与えてもらえなくて、大きくなってから、他の女性にそれを求めて――でもそれって、やっぱりちょっと違うわけでしょ？それで相手の女の人を無意識の内にもひどい形で傷つけちゃうみたいな……無意識って結構怖いわよね。だって、自分じゃコントロールできないんだもの。それとも、刷り込みだったかな……えっと、よくわかんない……」

あたしが顔をしかめて何かを思いだそうとしていると、不意にレンが笑いだした。

「サクラって、面白いよな、ほんと。確かに、俺のおふくろはそういうのに欠けた人だったかもしれない。あの人飯作ってるところなんか、一度も見たことないし、掃除も全部家政婦がやってくれるんだ。だから俺はサクラにも、そういうものははっきり言って大して求めないと思う。」

それより、なんだっけ？おまえが前に言ってた、佐々木さんに言ったとかいう言葉……」

「ああ、料理・掃除はしないけど、その他の点ではパーフェクトな妻ってやつ？三百六十五日、毎日家事でへとへのすり切れ状態になってる平凡な妻より——あたしなら非日常な夢を毎日見せてあげられるとかって言ったの。まあ、実際は結婚しちゃったら、そんなことわかんないわよね～。第一、非日常な夢とかってなに？って感じ。てへっ！！」

「おまえって、たぶん結婚詐欺の素質とかありそうだよな……もしかしたら、俺も今おまえに騙されてたりすんのかな」

「何をおっしゃいますやら、水嶋蓮画伯！！あなたはわたしがこの世界で唯一本当に愛している男でございまする～！！」

「あ～あ、そろそろ食器でも洗うか。それにしても俺、ここからガ口までどうやって通うかな。これからは絵筆がどんなにのってても、終電がある時間までには帰ってこいってことか」

レンは立ち上がると、食器を片付けはじめた。

キッチンには、それまでにあたしが使ってたマグカップとか色々、洗いものがたまっている。

「そういうことはわたくしめがやるでござえますよ、大画伯！！」

あたしはレンのことをお尻で押しのけると、至極上機嫌なまま、スポンジに洗剤をつけて食器類を洗いはじめた。

「大画伯ねえ……おまえ、もしかして俺のことバカにしてる？」

「誰もヴァカにしてなんかおりませんよ。ええ、ヴァカにしてなんか……」

あたしがそう言ってプレートの上のミートソースの汚れを落としていると——不意にレンが首筋にキスしてきた。

「あの、ちょっと今、そういうのは……」

「ああ、そっか。おまえ単細胞だから、一度にふたつ以上のこと、出来ないんだっけ？」

レンがそんなことを言ってきたので、あたしは思わず彼に、スポンジを投げつける振りをしてやった。それに対して、あははと笑うレン。

——あたしたちは夕食を食べてる間、テレビなんてつけてなかったけど、話題はそのあとも全然途切れなかった。

もちろん今は結ばれたばかりで幸せいっぱいだっていう、そのせいかもしれない。

でもあたしはたぶん、これからもレンとはずっと今みたいな調子でやっていけそうな気がしている。

そして、もしいつか子供ができたとしたら——今のふたりで話してる以上に、ずっと賑やかな感じになるだろう。

それとも、その頃にはあたしも面やつれして、育児ノイローゼってやつにでもなってるかしらね？





(☆挿絵イラストは「幻想素材サイトFirst Moon様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

俺は結局、サクラの陰謀にはめられるような形で、結婚式を挙げるというか、挙げさせられることになった。そしてその報告をベルビュー荘のミドリさんや久臣さんにしにいった時、彼らが言っていたことで、俺は心底驚かされることになる。

ミドリさんなどは、

「いつか絶対こうなると思ってたわ」

と、少女のように目を輝かせながら言い、

久臣さんは、

「いやあ～、人生っていうのは、小説よりも奇なりっていうけど、本当だねえ」

さらに、たまたま遊びにきていたミズキまでが、

「それを言ったら、真実はですよ、久臣さん」

と訂正したあとで、

「もしかして、偶然DVDを借りるか何かして、知ったんですか？サクラさんの本当の気持ち」などと言いだす始末。

俺はミズキの言っている言葉の意味がわからず、首を傾げるばかりだった。

「『ロマンス通り113番地』のことですよ。あのドラマが放映中、レンさんはアフガンにいましたけど、あれを見たらサクラさんの恋心がもう、モロバレっていうか」

「ドラマの視聴率、すごかったのよ～」

そう言って、ミドリさんが俺に麦茶を勧めた。

場所は、改装したベルビュー荘の二階、歓談室でのことだった。

一階に職員の人が数名いて、お年寄りの世話は今、彼らがしてくれている。

そこでミドリさんは休憩時間を取り、俺やミズキ、久臣さんと一緒に話をしていたというわ

けだ。

「脅威の三十パーセントごえ！！今は見逃してもネットとかで色々見られるし、視聴率なんてたぶん、二十パーセントも超えれば、御の字なんだと思いますけど.....久臣さんはその時、サクラさんの脚本読んで先に知ってたんですね？」

「うん、一応はね。やっぱりこの子はレンくんのことが好きなんだな〜って、そう思ったよ」

「.....あの、話見えてないのって、マジで俺だけですか？」

ミドリさんが勧めてくれたせんべいに手を伸ばしつつ、俺はそう聞いた。

三人はそれぞれ、いかにも意味ありげに目配せしたり、顔を見合わせたりしている。

「えっ！？じゃあべつに、『ロマンス通り113番地』は関係ないんですか！？」

「じゃあ、どうやってレンくんはサクラちゃんの気持ちを知ったの！？」

「ほほーう。こりゃ興味深いねえ。次の俺の小説のネタに、ちょっと詳しい経緯を教えてもらえないかね？」

「あ、僕も漫画のネタにしちゃおっかな〜なんて.....」

俺は意味がわからないあまり、頭が軽く混乱状態に陥りつつあった。

「なんで、そうなるんですか。第一、俺あいつのドラマなんて見たことないですよ。本人も今さら見るな、見たらぶっ殺す！！とか言ってるし」

俺はせんべいの袋を破ると、それにボリボリかじりついた。

サクラの奴がよくそうするみたいに、豪快に食べカスが歯の間から飛ぶ。

「そりゃまあ、確かに僕ですら見てて少し恥かしかったですもん。それが知ってる人の恋愛だからそういう気持ちになったんだとは思いますがーぶっちゃけ、僕が好きな人に漫画とおして告白しちゃうみたいなの、そんな感じのことですよ」

「だよなあ。『お願い、いかないでえ、レン！！』って、アフガンに旅立つ恋人のことを駅のプラットフォームで追っていくんだよ。でも主人公は途中で無様にもすっ転んじやって、顔はもう涙でぐしゃぐしゃで.....この女の子がほんと、演技がうまくてさ。当時はまだ新人だったけど、あれでもう若い女性の人気鷲掴みみたいなの？」

「本当にねえ」と、ミドリさんも頷く。「あたしたちもこれで結構、気を遣ってたつもりなのにね。レンくんがサクラちゃんの気持ちに気づいてくれるといいなと思って」

「.....」

ー俺はこの時、物凄くショックを受けた。

実際、サクラが一体いつごろから俺をそう思っていたのかというのは、曖昧なままで.....『ロマンス通り113番地』というシナリオは、あいつが初めて書いたテレビドラマの脚本だということくらいは知っていたけれど、まさかそんなストーリーだとはまるで知らなかった。

「まあ、今さらあれ見られたら、俺なら間違いなく恥かしさのあまり憤死しちゃうな。だから、レンくんも知らない振りしといたほうがいいと思うよ。で、何十年後かにもし、夫婦の危機っていうのを迎えたらー泣きながら見るといいよ、あのドラマ。あいつって、本当は昔、俺のことがこんなに好きだったんだ〜うっうっとか、そんな感じでさ」

「そうねえ。サクラちゃんとレンくんがもし、六十歳くらいになってから見たり、あるいは金婚式とか銀婚式を迎える頃にでも見たらいいかもしれないわねえ」

「ですよええ」と、ミドリさんに同意するミズキ。「羨ましいなあ、ほんと。僕も誰か、いい人見つけなきゃ。毎日家に籠もって原稿ばかりガリガリやってないで」

そのあと俺は、ミズキの漫画のことや彼のプライベートなことに話を振ったりしていたけれど……頭の中からは、『ロマンス通り113番地』のことがずっと離れなかった。

それでサクラのマンションへ戻ってから——あいつに思いきってそのことを聞いてみようと思ったのだ。

「レン、今日巻き寿司にするから、ごはん扇いでてくれない？」

ふたりでそんなに食べられるか？と言いたくなるくらいの大量のごはんを、サクラはしゃもじでかきまわし、そこに酢を振りかけている。

「具のほうは、適当に買ってきたから、自分でノリ→ごはん→具をのっける→巻いて食べるって感じで食べて。ん～、寿司酢ってほんと、ごはんと混ぜるといい匂い。あっ、あとおいなりさんの袋も買ってきたんだ！それにもごはん詰めて食べっこしよう！！」

「食べっこっておまえ、ガキじゃないんだからさ」と、俺は笑った。そしてつやを出すためにうちわでごはんを扇ぎながら、サクラの奴にこう聞いてみた。

「今日、ベルビュー荘へ行ってきたら——みんなに言われたよ。『ロマンス通り113番地』を見て、おまえの気持ちに気づいたのかって」

すると、ごはんから立ちのぼる熱気のせいばかりでなく、サクラの顔がみるみる赤くなっていくのがわかった。

「でさ、俺、おまえが脚本書いたドラマって全然見たことないだろ？久臣さんは、これから夫婦の危機ってやつを迎えたら、俺がそれを見るのがいいっていうんだけど——サクラはどう思う？」

「どうって……」

手のほうがすっかりお留守になったあいつに代わって、俺は寿司酢を足してごはんをかきまぜた。

「まあ、こんなもんかな。あと、具はシーチキンとか納豆とかカニカマサラダにマグロなんかか。なんとなくいいな、こういうの。うちは高級な寿司とかは食わせてもらえるんだけど、こういう家庭の味みたいのって、なかったからさ」

「ねえ、レン。本当のこと言って」

サクラの奴があんまり真剣な顔をしてるので、俺は久臣さんが言ったたとおり——もしやサクラの心の地雷原に踏み込もうとしているのかもしれないと、そう直感した。

「見たんでしょ！？ミドリさん、あたしが脚本書いたドラマは全部、DVD持ってるって言ったもん！！それで、みんなでDVD鑑賞してあたしのこと、笑ってたんでしょ！？」

「違うよ、そうじゃなくて……」

俺は寿司酢を混ぜたごはんをすくって食べると、それをサクラの口元にも持っていった。

でも、彼女はプイと顔を背けたままにいる。

「知らないっ！！もうレンなんて大っキライッ！！」

——俺はこのあと、サクラに「本当に見ていない」ことを納得させるのに、物凄く無駄な労力

を費やしたような気がする。

そんなわけで、俺は見るとサクラの切ない恋心がわかるという『ロマンス通り113番地』は  
いまだに見ていないのだ。

その内容については今も、物凄く気になってはいるのだが.....。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイトFirst Moon様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

――あたしとレンは、その後無事結婚式を挙げた。

その日に至るまでは実際、実に色々なことがあったような気もするのだけれど.....ベルビュー荘であったこと同様、今ではそんなこともわたしにとって、みんな大切な思い出だ。

まず、レンとミチルさんの離婚が正式なものになってから、あたしはレンのことを実家の家族に紹介しにいった。レンが自分のおふくろは実に強烈なキャラクターなので、水嶋家を訪問するのはあとまわしにしたほうが良いと言い張ったためだ。

そしてここで、あたしにとって少しばかりショックだったことがある。

母さんが、「クマちゃんのほうが良かった.....」と、ボソリとレンの前でリアルなつぶやきを洩らしたことでなく――初対面のはずのレンと千鶴さんの間に、言葉はなくても何か心通じるものが流れていることに、あたしは軽いショックを受けたのだ。

しかも千鶴さんは千鶴さんで、あたしがコンクリートブロックを十枚破ったら一言二言しゃべる感じだったにも関わらず、レンに対しては割合素直にべらべらものを喋るのだ。

(このアマッ.....!!) と思い、わたしはキレそうになったが、そんなことがあった彼女とも、今ではすっかり和解し、仲良くすることが出来ている。

とはいえ、彼女がちょっと(かなり?)変わった人だということに、変わりはないけれど。

千鶴さんはわたしが自分のブログを見て、心の中で「馬鹿じゃないの?」とせせら笑っているに違いないと思ったから――それでいつまでも溶けない永久凍土の氷みたいな態度をとっていたらしい。

でもレンはたぶん、自分のブログのことなんて知らないだろうから(千鶴さんはわたしが彼女のブログを彼に見せるとは思いもしなかった)、それで普通にお話したというのである。

なんにしても、レンと弟アキラも気が合うようで、これで川上家のほうはなんの心配もないとあたしは思ったけれど……問題は、水嶋家のほうだったかもしれない。

レンがその昔、「今時髪のを七三に分けた、折り目正しい銀行員をやってる」とか言っていたお兄さんは、確かに七三ではあったけれど、それは普通でいうダサい感じの七三分けではなかった。大体のところ前髪が自然と七三に分かれているというだけで、彼はレンのお兄さんだけあって、なかなか感じのいい三枚目キャラだった。

そしてお父さんは古美術が趣味とかで、退屈な盆栽や花瓶のコレクションの話なんかを、立ったまま寝れるくらい長々と続けていた……まあ、このお父さんは実害がないという意味で、いい人だとは思う。

でも、レンのお母さんは彼の言っていたとおり、かなり跳んでる人だった。

「あらあ～。あなた～が、サックラちゃん!？」

ええ、わたしがサックラでございます……とでも言って返せば良かったのだろうか。

でも隣でレンが「相手にすんな」という怖い顔をしてたから、あたしは礼儀正しく会釈するに留めておいた。

「あなたの運命はまあ、一言でいえば毒婦って感じね。自分でも思い当たる節があるでしょ？」

「母さん、そんなことを言うのはやめなよ。彼女に失礼だろ」

柔和な笑顔で、お兄さんが助け舟をだしてくれたけれど、お父さんのほうはといえば、耳が聞こえないのかなんのか、「銀食器が曇っている」だのと言いだし、それをお手伝いのおばさんらしき人によく磨くよう注意している。

レンの実家というのは、大きな西洋の城にも似たような瀟洒な洋館で、部屋が全部で七十七室あるらしい。そして食堂のほうも、たまにドラマで見かける中世風な感じだった。

つまり、家長が細長――いテーブルの一番上座に座り、その右隣がお母さん、左隣がお兄さん、そしてお兄さんの隣がレン、そしてお母さんの隣があたしといった具合だ。

この座席はお母さんが決めたものらしく、レンは何かあってもあたしを隣で助けられないと思ったのだろう、食事の間中、ずっとしかめっ面をしたままだった。

「あたし、ドラマ見ましたよ。サクラさんが脚本を手がけたものはぜーんぶ。それで、なんていうのかしらねえ。ネットであなたのプロフィールなんかを検索していて思うに――レンとあなたは相性があんまりよくないみたいなの。あなたが太陽なら、レンは月。あなたが昼間輝いている間は、月のレンは輝けないし、レンが夜輝いている間は、あなたは沈んでいるといったような星回りね。だから、結婚するのはどうかと思うわ。だって最悪のカップルなんですよ」

ねえ、あなた?というように、彼女は夫に同意を求めていたが、彼は今度は「子牛の肉が少し硬い気がする」とか言いだし――それを給仕係のような女性に下げさせている。

ちなみに、この子牛のクリーム煮とかいうのは、超馬鹿うまだった。

「ようするに、おふくろはさ」と、レンが不機嫌な声で言った。「俺がどんな子を連れてきても、気に入らないんだろ。ミチルと別れた時も「ほれ見たことか」って威張り散らすし、だったら俺にどうして欲しいんだよ？」

「そうね。水瓶座は魚座とか蟹座、そういう水に縁のある女性と結婚するといいと思うのよ。レンはO型だから、A型の人でもB型の人でも、性格は合うと思うの。でもAB型の方は、ちょっ

とねえ」

「お義母さんは、何座で血液型はなんですか？」

あたしは思わず、そう聞いてやった。

もちろんあたしは、占星術なんて全然詳しくはない——でも、一応参考までに聞いておこうと思ったのだ。彼女がもしかしたら、自分の息子と実は最悪の相性だったりしたら、面白いと思ったから。

「あたしは、蟹座のB型ですよ。強い母性愛のある星です。そしてお父さんはレンと同じ水瓶座なの。それから、タケルは魚座だし……お父さんとタケルとレンは、三人ともO型なのよ。あたし、昔から何故かO型の人とはとっても気が合うの」

「そうですか？レンに聞く限り、三人ともお義母さんの占星術にうんざりしてるっていうことでしたけど」

流石にこのあたしのセリフは、聞いていない振りを出来なかったのだろう——食事に夢中になっている振りをしていたお父さんは、スープ皿にスプーンを落としていた。けれど、それをどうかしろとは、お手伝いさんに命じなかった。

「大体、占星術のことなんて信じていたら、なんにも出来ないと思いませんか？明日は南東の方角に凶と出ているから、その方角にあるスーパーマーケットにはいかないとか、馬鹿げていると思います。瞑想とかヨガとか、確かに精神や体にいいかもしれませんが。でもある部分は結局自己満足なんじゃないでしょうか？それよりは、外に出てミチルさんみたいにボランティア活動をするとか——そういうことのほうがもっと有意義なことのような気がします」

隣で、お母さんの血の気が引いているのがわかったけれど、もう後の祭りだった。

でもあたしにはわかった……水嶋家の男三人が、心の中で密かな勝利にわいているのが。

「よくもあたしにそんな口……ッ。許しませんよ、レンっ！！こんな子と結婚するのだけは、他でもないこのわたしが断じて許しませんっ！！」

「しょうがないよ、母さん」と、お兄さんのタケルさんがまた助け舟をだしてくれた。「そんな口って言ったって、母さんだってサクラさんに毒婦だって言ったんだ。これでおあいこだよ」

「実の息子まで味方してくれないなんて、この家はまったくどうなってるのっ！！」

そう言ってプリプリ怒ったまま、お母さんは広い食堂から出ていった。

ナプキンで口元を拭い、それをメイドのような服を着た女性に押しつけながら……。

「やれやれ、しょうがない。わたしが言って、ちょっとなだめてくるか」

そう言って、お父さんはあたしに対して「ごゆっくり」という意味の笑顔を浮かべたあと、食堂から出ていった。

そしてその場には、あたしとお兄さんのタケルさんとレンの三人が残されたわけだけど——ずっとそばにお手伝いさんが控えていて食事をするというのは、なんだかあたしにはとても落ち着かない感じのすることだった。

「ねえ、あたしちょっと言いすぎちゃったかしら？」

「おまえ、毒婦っていわれたの、忘れたのか？いくら本当のことでも、言っていることと悪いことがあるだろ」

レンが運ばれてきた温野菜に手をつけながら、いつもの調子でそう言った。

「本当のことってというのは余計よ！！あ～あ、でもこれでもう完璧に嫌われちゃった。お母さん、蠍座の隣で弓を構えるケンタウロスみたいに、これからもずっとわたしを矢で刺してやろうと思って、弓を引き続けるに違いないわ」

「そのたとえばは面白いね」と、タケルさんが言った。「でも、俺は母さんみたいに占星術にかぶれてるってわけじゃないけど——精神医学には結構興味があるんだ。何しろうちがこんな一般家庭とは違う、特殊な環境にあるだろ？だから俺は俺なりに＜どうしたらあの母さんに勝てるか＞っていうことを考えて、まずは彼女の一番嫌いな職業に就いて、着々と出世していくことにしたんだ。それと、結婚相手のほうは、仮にどんなに素晴らしい女性を連れてきても、「そんな非の打ちどころのない素晴らしい女性であればこそ」母さんは気に入らないだろうってわかったから、それなりの人とお見合い結婚することにしたっていうね。今日、妻の涼子はここに来てないけど、それというのも彼女と母さんは相性が悪くて、蛇蝎の如く嫌いあってるからなんだ……でもきっと、涼子はサクラさんとは気があうんじゃないかな。だから、今度ふたりだけであらためて、うちへ遊びに来るといいよ」

いかにも小さな頃から手慣れているといった感じでフォークとナイフを操りながら——レンのお兄さんはそう言った。レンほど容姿のほうに女性を惹きつける何かがあるっていうわけではないけれど、まるでバレーボール選手のように背が高く（百九十二センチある）、どこか洗練された物腰で人を惹きつける話し方をする人だなとあたしは思った。

食事のあと、レンは説教のためかどうか、メイドさんを通してお母さんの部屋へ呼びつけられたので、あたしは屋敷の中を案内してもらいがてら、タケルさんと色々な話をした。

そして風林火山の掛け軸のかかった畳敷きの茶室までやってくると、そこに用意された和菓子を勧めながら、彼はこう言ったのだった。

「うちの親父さんってというのはさ、今日サクラさんが見てのとおりって感じの人なわけ。母さんはホロスコープで詳しく調べて、「この男こそ自分の運命の相手」と思って父さんにアタックし、それで彼を婿養子にしたんだ。母さんの若い頃の写真を見ると、びっくりするくらい美人でね……まあ、そんな女性がある日気違いじみた剣幕でやってきたら、激しい恋に落ちるのが男の本能っていうものだろうなって、俺もそう思うよ」

「えっ！？じゃあ、お父さんって水嶋家の養子なんですか？」

驚いた拍子に、おまんじゅうのうぐいす餡が、ぼとりと畳の上へ落ちた。

でも彼が「気にすることないよ」という目で見てくれたので、あたしは慌ててあんこを皿の上へ戻した。

「ああ。だから、母さんに頭が上がりなくても仕方ないわけ。実際父さんってというのは、その昔学生運動のリーダーをやったって人で、ようするにその種の思想にかぶれてた貧乏学生だったんだ。でも浅間山荘事件があって以降、だんだんそういうことから身を引くようになってらしい。で、アメリカに渡って向こうのヒッピーたちに混じり、彼らのコミュニオンで暮らしていた時に、母さんと知りあったってわけ。俺とレンの祖父母ってというのが、実はアメリカで結構名の知れた夫婦デュオで、レイ＝ミズシマ、アラン＝ミズシマっていうんだ。もちろん日本人で、日本名は水嶋礼、水嶋亜蘭っていうんだけど……聞いたことないかな？」



「えっと、ごめんなさい。あんまり向こうの音楽って詳しくなくて……」

あたしはみたらし団子を馬鹿みたいにずっとぶら下げたまま、お兄さんのことを見返していた

。レンのあの、まったく日本人らしくない物の考え方とか立ち居振る舞いとか、そうしたものは全部、水嶋家の特殊なDNAから来ているのではないかと、そんな気がして。

「まあ、カントリーミュージシャンとしていくら知られてても、ピンと来ないのが普通だよ。涼子にこのことを初めて話した時、彼女もサクラさんと同じようなことを言ってたよ」

タケルさんはここで、少し笑ってからお茶を飲んだ。

「なんにしてもまあ、この母さんの両親っていうのが、わりと名の知れたミュージシャンに自分たちの作詞作曲した歌を結構提供してるんだよ。作詞するのがおばあちゃん、作曲担当がおじいちゃんって感じでね。ふたりともレンが生まれる前に亡くなってらんだけど、そこから生じる印税っていうのが莫大なものでね……この家もまあ、おじいちゃんおばあちゃんの遺産によって誕生した、印税御殿といったところだな。でも母さんは、そういう方面にまるで才能がなかったみたいなんだ。アメリカ式に「おまえだって出来ることが何かひとつくらいあるさ！」みたいに育てられたらしいけど、残念ながら母さんは容姿が美しい以外、これといって何も取り得のない女性だった。わかるかな？そういう子が、少しずつヒッピー文化に触れておかしくなっていくみたいな過程って……」

「わかるような気がします」

あたしもまた、タケルさんと同じくあたたかいウーロン茶を飲みながら頷いた。

「でね、これは父さんから聞いた話なんだけど――母さんの両親は作詞家・作曲家としては才能のある素晴らしい人たちだったけど、子供に対しては愛着が薄いように見えたっていうんだ。つまり、作詞家・作曲家として、公私ともにめちゃくちゃ夫婦仲がいいっていう、極めて珍しい人たちだったんだけど、その＜ふたりだけの世界＞に一人娘を入れるっていうことをしなかったらしい。必要なだけの教育と金は与えたから、あとは自分の才覚だけで生きていけっていう、そんな感じっていうか……だから、母さんは両親に愛されなかったと感じて成長した人だから、子供の愛し方がわかってないんじゃないかって俺は思う。まあ、俺はね、それでも比較的まともに成長できてラッキーだったけど、レンの奴は生まれた時から母さんの期待とプレッシャーっていうのが半端じゃなかった。何分、俺たちって八つも年が離れてるだろ？レンが八つの時、俺はもう十六だった。母さんは俺のほうに芸術面における才能がまるでないとわかると、俺のほうにはほとんど目もくれず、レンひとりだけに集中して愛情を注いでるって感じで……レンの奴が何かすごく苦しんでるっていうのは、俺の目から見てもよくわかったけど――俺はレンを助けるようなことはあえて何もしなかった。母親の愛情を独占してるレンのことが内心では羨ましかったし、何より、そうした母さんの嫉妬心をあおる策略にのるものかと思ったんだ。つまり、俺とレンの母さんっていうのは、何よりその点で間違ってたんだろ？」

ふと庭のほうに目をやると、そこに二羽のアゲハチョウが戯れるように飛んでいくところだった。

たぶん、オスとメスの蝶なのだろう、メスはオスから逃げようとし、オスはそんなメスのこと

を追っていくといった様子だった。

タケルさんはそれを見て、何かとても美しいものを見たように目を細めたあとで話を続けた。「つまりね、母さんは俺やレンが母さんよりも父さんに懐こうとするのを邪魔するし、俺やレンが母さんよりも仲の良い兄弟の絆を持つとうとするのも邪魔するんだ。しかも、そのやり方が実に巧妙でね……俺がそうした精神的カラクリみたいなものに気づいたのは、もう成人して二十歳を過ぎた頃だった。レンはその頃十三とか十四だったと思うけど——俺は自分の母親に〈異常〉の烙印を押すと、楽しく自由な大学生活を送ることで、そうした母さんの呪縛からは完全に逃げられたんだ。でも可哀想なのは残されたレンの奴だよな。実際、俺たち兄弟が本当に腹を割って色々なことを話しあうようになったのって、お互いかなりいい年になってからなんだよ。この家にいると、いつも邪魔な間仕切りみたいに母さんが間に入ってくるからおかしなことになるんだけど……そういう意味で俺たちが正常な兄弟仲を取り戻したのは、ここ十年くらいの間ってところ」

「その、失礼かもしれませんが……そういう時、お父さんってどうされてるんですか？」

あたしは素朴な疑問を口にした。

出されたお団子やおまんじゅうを中途半端に食い散らしたような状態になっているけれど——あたしはタケルさんの話すことに、すっかり神経というか心のほうを奪われていた。

「どうもしないよ」と、最中に手を伸ばして食べながら、タケルさんは溜息を着くように言った。

「つまり、何もしないんだ。父さんはどうも、学生運動のほうがすっかり駄目になって以来、かつてあった革命家の魂っていうのを忘れてしまったらしい。「何をやってもどうせ無駄」といった感じの自堕落な人間になり、ヒッピーのコミューンでマリファナをふかしながらその日暮らしをするって感じだった時に——母さんと出会って、今の働かなくてもなんの不自由もない生活を手に入れたんだ。今も朝は早起きして、庭の畑を耕したり、自分の好きな盆栽とか古美術の世界に入りこんで午後の時間いっぱいを過ごしたり……なんだろうな。俺も学校とかで父さんの職業を書く時は本当に困ったことがあるよ。母さんは〈骨董品鑑定家〉だって言い張るけど、俺の目にはとてもそうは見えないし、むしろ反面教師として「ああなっちゃおしまいだな」と俺は親父に対して思い、真面目に働くことを考えるようになったってわけだ」

水嶋家の実情が、どこの家庭には当てはまらないような特殊なものだったので——あたしはそれ以上、何をどう言っているのかわからなかった。

確かに、お父さんの毅さんを見ていて、自分の趣味のこと以外について「本当に何もしない人だな」という印象は強く受けた。あとはただ、お母さんの異常な占星術の世界について黙認し、子育てについても何も口出しせず、彼女の自由にさせておけば、彼は働くでもなく、自分の好きなことだけをしていられるのだ。

逆にいえば、もしこのお父さんが家庭に革命の嵐を吹かせることの出来るような人だったらよかったのだろう。

つまり、お母さんが何をどう言おうと、彼女の子供への関わり方を「異常なものである」と断定し、お父さんにもし〈普通に〉働いてふたりの息子を育てるくらいの気概があれば——レンも苦しむことなく、比較的他の子供と同じように成長できたのかもしれない。

でも、わたしがレンの絵を見ていて思うに、またこの彼が育ったという家を一通り見せてもらって思うに……そのうちのどの要素が欠けても、レンの絵は今のようには芸術的に完成されたものではなかったのではないか、という気もするのだ。

だから、わかったようなことは何も言えないと思い、わたしが押し黙ったまましていると、タケルさんは外に通じる襖をしめ、振り返ってこう言った。

「夕方にもなると、流石にだんだん涼しくなってきたね。これはレンや母さんには秘密だけど――俺、サクラさんが水嶋家の一員になってくれて本当に嬉しいよ。もちろん、ミチルさんもとても素敵な素晴らしい女性ではあった。でも会った瞬間に思ったよ……うちの涼子と同じく、彼女もまた平凡すぎるあまり、母さんの圧倒的なオーラというか、パワーみたいなものには勝てる人じゃないなって。でもサクラさんには会った瞬間、すぐこう思ったんだ。この人がこの先もレンと手を繋いでいたら、母さんはもうこのふたりには絶対勝てないだろうなって」

あたしがなんて言っていかわからなくて、微かに微笑むような顔の表情をしていると、外見が洋館である屋敷には似つかわしくない和室に、メイドのひとりがやってきて告げた。

「そろそろ帰る旨、サクラさまにお伝えするよう、レンお坊ちゃまから言付けがございました」

「ああ、ありがとう」

タケルさんがメイドにそう答えて、立ち上がる。

「まあ、これから色々大変だと思うけど……つまり、これはあの母さんを最初から敵にまわした以上は大変だと思うけどっていう意味なんだけどね。俺と涼子はサクラさんを応援するから、何かあったらすぐ相談しにくるといいよ」

あたしはタケルさんと握手をして別れ、屋敷の玄関口にある広いホールで、仏頂面のレンと再会した。

これからもう一度茶室までひとりで行けと言われても、迷子になってしまいそうな特殊な建物の構造なので、あたしはレンの顔を見た時、まさに迷路で迷ったあげく、最後に最愛の男と再び出会ったといったような気持ちになっていた。

「兄貴は？」

「なんか、メイドさんのひとりに用があるみたいで、どっか行っちゃった。でもレンによろしくって言ってたわよ」

何故かここでレンは、呆れたように重い溜息を着いている。

「どうせ、また和歌子さんだろ。まったく、しょうがないな……」

あたしはレンの奴が手を差しだしたので、ジャッキーバッグの中から車のキィを取り出した。

レンの奴は「俺はまだ死ぬ気はない」と言って、絶対にあたしに車の運転をさせてくれないのだ。

お手伝いさんのひとりがドアを開けてくれて、玉砂利の敷かれた駐車場までの道をレンと一緒に歩いていた時――やっぱりあたしは、好奇心を抑えきれずに彼にこう聞いていた。

「レン、もしかして……あのメイドさんって、つまりその……」

「兄貴の愛人なのかって？」

運転席に乗りこみ、イグニッションにキィを差しこみながら、レンがズバリそう答えた。

「綺麗な人だなあとは思ったけど、その……はっきり言って年が上すぎて、ちょっとびっくりっていうか……」

レンは「こんな家の敷居、二度と跨ぐか！」というような勢いで、玉砂利を弾き飛ばしながら車を発進させた。ここから、あたしのマンションまで戻るには約一時間くらいかかる。

でもその間、レンの運転の仕方というのは優良ドライバーとはとても言えないものだったような気がする。

「あの、たぶんもう二十数年もうちで働いてるんじゃないかな。兄貴とは、兄貴が十四くらいの頃からそういう関係を持ってるらしくて……正直いって、かなり気持ち悪いよな」

そう言ってレンは、サングラス越しにもわかるくらい、思いきり眉をしかめて見せた。

「レン……なんだかとっても聞きにくいんだけど……」

レンの不機嫌オーラが、初めて出会ってからこんなにマックスだったことは、かつて一度もない。

たぶんお母さんの部屋に呼びつけられ、侃々諤々のやりとりがあったのだろうっていうことは、容易に想像がつくにしても——あたしが今気になってるのは実は他のことだった。

「俺も、兄貴みたいにメイドのひとりとやったことがあるのかって聞きたいんだろ？それはないよ。というより、俺のトラウマは少し別で……物心着いた時に、ひとり凄く懐いてるメイドのおばさんがいてさ。でもおふくろは、俺が彼女を母親の自分より愛してるって理由ですぐクビにした。それ以来、俺はお手伝いさんのことは、色々面倒を見てくれる人格のない人形みたいなもんだと思うようになったけど——おふくろにはそれで良かったんだろ。それが上流の人間の作法だとか、そんなふうにしてるみたいだったからな」

「でもあたし、レンがこんなにお坊ちゃまだなんて全然思ってなくて、すごくびっくりしたわ」

メイドのひとりが最初に「レン坊ちゃま」と言った時、レンはあたしの前で、穴があったら入りたいといったように赤面していたっけ。

「それに、徹底した個人主義の家で育てられたんだなっていうことも、お屋敷の中を見てわかったし……」

「歪んだ個人主義の間違いだろ」と、レンは訂正した。「サクラも兄貴から色々聞いたかもしれないけど——うちはまあ、ああいう家だから、これから結婚するとなると色々大変なんだ。親戚に水嶋建設の社長とか、デザイナーのシン・ミズシマとか、水嶋総合病院の理事長がいたりするからな。まあ、ミチルの時は良かった。彼女はアフガン帰りの聖女のように控え目な女性で、自分の結婚式を挙げる金があったら、それを寄付する女だっていうことが出来たからな。でもサクラがおふくろを敵に回した以上、これからどうなるか俺には何も保証できないぞ。俺たちが帰った五秒後にでもおふくろはたぶん、親戚中に触れまわってるかもしれん。自分の息子がとんでもないアバズレと再婚しようとしてるって泣きの演技で吹聴してるかもな」

「ちょっと——っ！！あんた、なんでそれを先にあたしに言わないのよっ！！」

レンの不機嫌オーラがあまりに強いため、あたしはそれまで控え目な感じでしゃべってたけど、突然いつもの調子に戻って怒鳴った。

ちょうど、高速の入口を通過するところのことだ。

「俺は今日、今度は結婚式を挙げるけど、親戚中に変な噂をウィルスみたいにバラまくのはやめ

てくれっておふくろに頼むつもりだった。でも、サクラがこんなに速攻、おふくろと敵対関係になるとは思わなかったからな.....せいぜいが冷たい腹の探りあいってところで終わるかと思ったけど、こうなっちゃもう終わりだ。式を挙げるのは諦めろ」

「冗談じゃないわよっ!!!」

高速にのるなり、軽く百キロ超えでスピードを上げるレンに対し、あたしは助手席からじっと彼のことを睨みつけてやった。

「大体ねえ、あんたが最初からちゃんとそこらへんのことを説明してくれていたら——あたしも、毒婦なんて言われてもグッと堪えて黙ってたわよっ!! 第一、親戚にそんな豪華な金持ち連中がいるだなんて、あんたあたしに一言も言わなかったじゃない!!」

「ああ、確かにな。でも俺は最初にサクラに言ったと思うぜ。おふくろとは喧嘩するなって」

——それは確かにそのとおりだった。

それで、あたしは酸欠になった鳩みみたいにグッと押し黙り、不機嫌な顔で助手席のシートに身を沈めた。でも、恐ろしい速さで変わっていく車窓の風景を眺めながら、ふとあるひとつのことに気づいてもいたのだ。

レンとの結婚は、クマちゃんと挙げる予定だったセレブ婚とは違うと思っていたけれど.....もしかして、レンとの結婚のほうが実は、本当に本物のセレブ婚と呼ばれるものなのではないか、ということに。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイトFirst Moon様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

結婚式の当日、俺は少し大袈裟な言い方をしたとすれば、恐怖と不安におののきながら式場へ向かったといえるだろう。

今のところ、おふくろとサクラの戦いというのは、0対1といったところ.....このままおふくろが黙っているはずがないのに――特にこれといった妨害工作もなく、当日を迎えていたからだ。

結婚式専用のチャペルに牧師の大谷さんを招き、式を執り行ってもらったところまでは良かった。

だが披露宴のある約二時間ばかりの時間が何事もなく無事過ぎるものなのかどうか、俺は心配なあまり、途中でサクラに何度も「花婿なんだから、もっと嬉しそうな顔しなさいよ！」と小声で注意されなくてはならなかった。

正直、ケーキ入刀とかなんとか、俺は内心では「何故こんな虚飾的儀式に参加することになったんだろうな」と思いつつ、それを行っていた。まあ、横にいるサクラがあまりに綺麗で、彼女がかつて見たことがないほど光輝いているように見えたから——今日の俺のポジションというのはまあ、男のバレエダンサーがプリマバレリーナをくるくる回すといったような役どころでいいのだろうと思ってはいたけれど。

結婚式当日に至るまで、ウェディング・プランナーとの打ち合わせといったようなことはすべて、俺はほとんどサクラひとりに任せきりにしていたとっていい。

どんなにサクラが頑張ったところで、最後にそうした彼女の努力を打ち壊す出来事が待ち受けているだろうとわかっていたため、あまり積極的に関わりたいと思えなかったのだ。

それでも彼女のほうに目に見えてストレスが溜まっていっていることがわかったため——せめて、引き出物くらいは自分が作ると申しでることにした。もともと、「こんなどうでもいいもの、貰っても始末に困る」と招待客全員が思う可能性の高い、それは縦三十センチ、横五十センチくらいの彫刻作品だったけれど。

何しろ、水嶋家にいわゆるセレブと呼ばれる人たちが多かったため、サクラも見栄を張ったのだろう……俺としては、あくまでも内々に親戚とベルビュー荘の人たちくらいを呼んで、ごんまりとした心のあたたまる式を挙げるとするのが理想だったのだが、結局披露宴には四百名近い招待客を呼ぶという結果になっていた。

「ねえ、レン。なんだかあたし、金メッキ（世間体）のために結婚するのか、それとも純金（本物の愛）のために結婚するのか、だんだんわかんなくなってきたわ」

サクラは夜眠る前に、溜息を着きながらよくそう言っていたっけ。

「まあ、その違いがわかっているれば、大丈夫だろ」

「そーお？でもこの調子でいったら、金メッキを最高に磨き上げた結婚式ってことになりそう——なんだか怖いよ。レンのいうカタストロフって奴が、近いうちに起きるんじゃないかって、そんな気がして……」

——そしてある意味、サクラのこの予感は的中した。

けれどもまあ、それは俺が思ったほど大きなカタストロフではなく、言ってみれば比較的小規模なカタストロフではあった。

おふくろがスピーチの時に、マイクを片手にこんなことを言いはじめたのだ。

「レンは本当に素晴らしい、わたしにとって自慢の、最高の息子でした。それなのに、こんな男性経験豊富な女性と結婚することになって、とても悲しく思っています。彼女は十六歳の時に初体験を持ち、十七歳で男と同棲、十八歳でまた別の男と二年ほどそのような関係にあったようです。その後、バーでホステスをし、何人もの既婚男性の愛人になるという、転落の人生を送ってきた女性なのです。わたしは今ここで、息子にこう呼びかけたいと思います……今からでも遅くないわ。目を覚まして、お母さんの元へ戻っていらっしやいと！！」

会場内は一瞬ざわついたが、おそらく「何もなかった、聞かなかった」ことにするのが社会人としての礼儀と思ったのだろう。やがて儀礼的な拍手さえ起こり、次に新婦側の親族がスピーチする番になったのだが、サクラのお母さんはいたたまれない思いになったのだろう（のちに彼女はあんなに恥かしい思いをしたことはないと言ってこの時のことを述懐している）、司会進行役

のアナウンサーの女性が名前を呼んでも、席から微動だにしなかった。

俺は隣のサクラもまた、この時ばかりは流石に実の母と同じ態度だったため（つまり、下を向いたまま青ざめている）、しょうがないなと思って立ち上がることにした。

「え〜と、今俺のおふくろ……いえ、母が言ったようなことは、まったく根拠のないデタラメとは言いませんが、大体のところ俺も彼女から聞いて知っていることです。というより、そんなことを言ったら、俺は幼い頃から母に精神的虐待を受けて育ったといっても過言ではないでしょう……」

ここで、おふくろが「そんなこと、デタラメよ！！」と叫んだが、当然俺は無視した。

「なんにしても、事情はこういうことなんです。おふくろは俺が彼女と結婚するのが気に入らなかった。いえ、仮に俺がどんな非の打ちどころのない素晴らしい女性を連れてきたとしても、いつでもそうなんです。でもだからこそ俺は、彼女のような女性に惹かれたのかもしれませんが…披露宴のほうが実際の予定にない順序で進むことになってすみませんが、次のスピーチは兄貴が担当してくれてことで頼む」

何しろ兄貴の奴は、こういう場所に腐るほど出席していて、場慣れしている――兄貴は、会場が俺の言葉で笑いに包まれていると、マイクを片手にうまいこと切り抜けてくれた。

「えーと、川上サクラさんは、義理の兄である僕から見ても、実に素晴らしい女性です。最初に出会った時から僕はそう思っていました……」

続いて、新婦のことを褒めちぎる数々の言葉が兄貴の口から十分ほども洩れでたあと、何故かここで突然、佐々木凜太郎さんが前に進みでてきて、マイクスタンドの前に立っていた。

「サクラちゃんは、わたしが結婚しようと考えたほどの、本当に素晴らしい女性です。みなさんもおそらくはご存知でしょうが――彼女は一年ほど前、さる俳優の男に首を絞められて殺されそうになりました。その時、恋人として報道されたのがこの水嶋くんなのです。実は当時わたしはサクラさんとおつきあいをしていて、本当なら今彼女の横にいるのは自分だったのにと、先ほどまで思っていました。でも、彼女の命を助けたのは他でもないこの水嶋くんなのです。ふたりはその時から恋仲になり、わたしは彼女と別れることになったのですが……わたしはそのあとも水嶋くんが殺人鬼に殴られて死ぬといった不慮の事故に遭った場合――サクラさんとよりを戻したいとすら思っていました。ようするに彼女は、そのくらい男の気を惹きつけることの出来る、魅力的な女性なのです」

この時になってようやく、サクラは顔を上げ、佐々木さんのほうを涙の盛り上がった眼差しで見つめていた。

本当に、一体彼はどこまで人が好いのか……あるいはどこまでサクラの奴に惚れていたのか、と俺はあらためて思った。

サクラが謝意を伝えるように、強い眼差しで彼のほうをじっと見つめると、佐々木さんは「いいんだよ」というように、彼女に向かって手を振り、円形のテーブルのほうへ戻っていった。

俺は座席表の中に彼の名前があるのを見た時――正直いって、彼はなんのために来るのだろうとすら思っていたけれど……というより、隣に若い美人の秘書がいたため、自分は「君よりも若くていい女と今つきあっている」と暗に言いたいのだろうかとかさえ思っていた。



でも、そうしたことがすべて自分の勘違いであったことがわかり、俺はその時サクラとはまったく別の意味で己の器の小ささが恥かしくなっていたといっている。

佐々木さんのスピーチがすんだあとは、何故かベルビュー荘の人たちが順にマイクを握ることになり――ミドリさんは俺とサクラの馴れ初めのことを話し、ミズキの奴は『ロマンス通り113番地』に出てくるレンという青年は俺がモデルなのだと言った。それからさらに久臣さん、ほたとスピーチが続いて、場はすっかり和やかなムードになっていたといっているだろう。

こうして俺とサクラは、多くの人の善意……金メッキのお飾りの招待客でない、純金の心意気を持つ人たちに助けられ、無事披露宴を終えることが出来たというわけだ。

最後には、サクラが自分の母に対し、「本当に馬鹿な娘で、恥かしい思いをさせてごめんなさい」と素直にあやまり――ふたりは泣きながら互いに互いの体を抱きあっていた。

あとになってからサクラは、もし俺のおふくろの一言がなかったら、自分の母親に対して冷たい気持ちを持ち続けたままだったかもしれないと言っていたことがある。

「だから、あれはあれで良かったんでしょうね」と。「お義母さんのスピーチがあった時は、これで世界は終わったっていうくらいのカタストロフがあたりの中であつたけど……それに、あれだけ苦労して完璧にしつらえた結婚式が、これでもうすべておじゃんだとも思ったわ。こんなことなら、見栄を張って仕事関係で付き合いのある人まで呼ぶんじゃなかったとも思ったけど……あとでみんな、「あれはあれで良かったよ。というか、ああいうハプニングでもないことには、みんな座席で半分寝たままだただろう」とか言っていて。本当に、人の善意って大切よね。ほとんど義理で出席したような人までが、披露宴を盛り上げるために予定になかった芸を披露してくれたり、物真似をしてくれたり……といっても、あたしはみんなが引き出物を受けとって帰るまで、生きた心地がしなかったけどね」

――そうなのだ。そういう意味で、真に哀れなのは俺のおふくろのほうだったに違いない。

おふくろの奴は式がどこかでメチャクチャになるといいと、彼女の信仰対象の「スピリチュアルな神」とやらに終始祈っていたに違いないが、おふくろの崇める偶像神は、心あたたかい人々の善意に完膚なきまでに敗北していた。

そして生まれて初めて心の底から「実の母親を許せた」と感じたサクラとは違い、俺は自分のおふくろのことを、これで生涯許すことは出来ないだろうとすら思いはじめていた。

父は金銭的なことで母に尻尾を握られているため、浮気すらできない小心な人物に成り果てているし、兄貴は兄貴で、メイドの和歌子さんとのことを涼子さんにバラしてもいいの？といった具合に、おふくろのコントロールを受けている……おふくろは式場から立ち去り際、「覚えておきなさいよ！」と捨てゼリフを吐き、引き出物を受け取ることにせず帰っていたけれど――幸いなことに、父や兄貴のように、俺はおふくろに対して弱味が何もなかった。

だからその日の夜、ホテルのスイートで花嫁と初夜を過ごしたあと、俺はサクラにこう言った。

「俺、結婚式なんて最初はくだらないと思ったけど、実際には金メッキ的的事业に参加するのも、たまには悪くないみたいだな」

もちろん、結果として人々の善意に溢れた良い式になったからということもある。

でもそれ以上に――おふくろの一言があつてからのサクラというのが、その後俺にとって一生

忘れられないくらいのインパクトを残す美しさを持っていたからかもしれない。

その前までの彼女は、「自分はどこからどう見ても完璧にビューティフル！！」とでも言いたげに、どこかその笑顔には傲慢なところさえあったけれど……サクラの、どこか恥じらいを残しつつ、そして遠慮がちに微笑むその後の姿というのは、図らずも俺にとって「これ以上もない最高の女と自分は結婚した」という印象を残した。

そして、彼女に対してなら大谷牧師の前で誓ったこと、例の「病める時も健やかなる時も彼女のことを生涯愛しぬくことを誓います」という言葉を守れそうな気がしたのだ……もちろん俺は、そんなことをサクラにあらためて口にだして言うほど、サービス精神に溢れた口の軽い男というわけではなかったけれど。



(☆挿絵イラストは「幻想素材サイト F i r s t M o o n 様」<<http://www.first-moon.com/>>のものですm(\_ \_)m)

――レンと結婚してからというもの、あたしは彼と一緒に画廊の入った<第一吾味ビル>で暮らしている。

それにしても、この第一吾味ビルというビル名は一体どうしたもんだろうとあたしはいまだに思っている。

実際、人に手紙をだす時などに、わたしは人から<ゴミビル>などという場所に住んでいると思われたくないために……わざとビル名は書かず、番地まで書いたあとにただ<7F>とだけ記すことにしていた。

そう、吾味ビルの7Fはずっと空いていて、一時期英語塾をやりたいという人に貸していたこともあったらしいのだけれど、あまり受講生が集まらず借主が退出したあと――ある経緯からあたしとレンに「ただで」吾味さんが貸してくれることになったのだ。

一応、わたしが前まで住んでいたマンションはまだ支払いも残っているし、当然わたしが所有したままになっているのだけれど、何しろレンの奴の帰りが毎日遅いため、そのことが原因で喧嘩になりそうだと予感したあたしは、一計を案じることにしたのだ。

つまり、吾味さんに頼んで、お給料はいらぬから、画廊で案内係兼事務員として働かせてもらえないだろうか頼むことにしたのである。そうすれば、レンは事務的な仕事から解放され、彼の芸術的事業に専念できていいだろうと……。

吾味さんはふたつ返事でOKしてくれ、あたしはその翌日から画廊のカウンターに座る美人学芸員といった風情で、気どった顔でノートパソコンを叩いていた。

画廊の案内や事務仕事などがまったくない時は、あたしは脚本の執筆をしており、お昼ごはんやおやつを彼と一緒に食べ、マンションまで帰る時間も当然一緒だった。

レンはこんな四六時中一緒にいたら、そのうちサクラは俺に飽きるだろうし、俺もおまえに飽

きるかもしれないから、こういう生活はやめたほうが良いと言って反対した……対するわたしの一言は、もっともらしくかつ説得力のあるものだったといえよう。

「だって、毎日あんなに帰りが遅かったら、心配になるじゃない？あんなに奥さんがいながらあたしと結婚したみたいに一―また第三の女って奴が現れるかもしれないから、四六時中張りついて見張っていたいのよ」

対するレンの返答というのは、「勝手にしろ」というものだった。

「ただし、オーナーの吾味さんの許可が下りたら話だからな」と。

そこで、吾味さんからオーケーの認証をもらおうと、レンは絵のことを聞かれたらなんでも答えられるくらいじゃなきゃ駄目だと言って一―わたしに美術図鑑のような本を手渡し、最低でも付箋の貼ってあるところは全部読めと言って寄こした。

あとの事務的なことやビルの管理・メンテナンスでわからないことがあれば、なんでも自分に聞けと言って、彼は自分のアトリエに閉じこもった。

この日、早速、四階の喫茶店で電球が切れたという訴えがあり、レンに「電球も換えられないのか」と呆れられたくなかったあたしは、ビルの真横にある物置まで行って脚立を取りだすと、換えの電球をひとつ持って四階まで上がっていった。

「あら、いつものお兄ちゃんは？」

おかみさんのサツキさんは、あたしの顔を見るなりさもがっかりしたという顔をした。

ちなみに、連絡を受けたのは内線電話でのことだったので、彼女はたぶん電球を換えにくるのはレンだとばかり思いこんでいたのだろう。

「レンは……というか夫は、今アトリエで仕事をしています。紹介が遅くなりましたが、わたし、水嶋蓮の妻で、今度から一階や二階の画廊だけでなく、このビルの管理も担当することになりました。よろしくお願いします」

「ふう～ん。随分気どったカミさんだこと！」

そう言って、サツキさんはプイと顔を背けた。

「あたしはもっとざっくばらんな人間のほうが好きなんだよ。あのお兄ちゃんともすっかり打ち解けた仲って奴になったのに、こんな上品なカミさんが今度からこのビルの雑用係とはね！実際、あたしはどうも、女の管理人っていうのは好かないんだよ。水の流れが悪いとか言っても、あたふたして馬鹿みたいに時間をかけた揚げ句ようやく業者を呼ぶとか、そういうのはナシにしてもらいたいもんだね」

(クソっ！このババア！！家賃もろくに払ってないくせに！！)

あたしは内心そう思ったけれど、とりあえず一旦大人しく引き下がることにした。

つまり、簡単にいえばそれはこういうことだった。あたしは今レンと一緒にいて、幸せいっぱい毎日を送っている。時々、こんなに幸せでいいのかしらと思うあまり、ペンチで自分の腕をつねりたいほどだ……だから、たまに意地の悪いババアに美貌を嫉妬されるようなことがあっても仕方がないのだ。

まあ、最初の挨拶の場面でこそ最悪な感じだったけれど、その後わたしはサツキさんと「打ち解けた関係」というのになった。それというのも、時々ここで仕事の打ち合わせをすることがあるので一―新しい客を連れて来てくれたということで、サツキさんがわたしに対する態度をコロ

ッと変えたためだ。

雑誌編集者の女性は、「こんなに美味しい店だったら、いわゆる汚ミシュラン的方向で、うちの雑誌でも紹介したいです！」と言い、数日後に本当に取材をしに来た。以来、ハワイアンには若干客が増えるようになり、「そのうち家賃を払っても元を取れるようになったら溜まった分を返済する」とサツキさんは言っているけれど……吾味さんもあたしもレンも、やり手婆の彼女の言葉を、まったく信用していないとっていい。

さて、そういったような話の流れから、四階のハワイアンは特に問題ない。

あたしにとって問題なのは、三階の美容院の女と、五階のエステサロンの女、そして六階のブティックに勤める女たちだっただろうか。

このビルには、月曜から土曜日まで、ある清掃会社から六十代くらいのおばさんがひとり、掃除をしにくるのだけれど――彼女はあたしが「これからよろしくお願いします」と挨拶するなり、紫色のゴム手袋を脱ぎ、あたしを画廊の外までくるよう手招きした……たぶん、レンには聞かれないことなのだろうと思い、あたしは画廊の前で掃除のおばさんである彼女と立ち話をした。

「そうしておいて、懸命ですよお～、奥さん」と、市原悦子に軽く似ている彼女は、妙に甲高い声のトーンで言った。「若い娘ってのはまあ、掃除のババアなんかいないも同然と思って、トイレで色んなことをくっちゃべるんですわ。で、わたし何度か聞いたことがあるんですけどね、お宅の旦那さん、最低でも三人くらいの娘っ子に狙われてますよ」

「……狙われている？」

まあ、なんのことをおっしゃっているかまるでわかりませんわ、という振りをしながら、あたしは市原悦子……もとい、清掃員の大原さんに聞き返した。

「奥さんの旦那さん、絵描きなんでしたっけ？わたしみたいなババアでも、ちょっとポツとなりそうない男だものね。このビルの従業員はほとんど女の人ばかりだから、よっくよく目を光らして、注意しなきゃあ……あのイケメンの旦那さんがこの画廊を閉めてる時にでも、フラッとやって来て、抱きつくとも限らないからね。今の若い子はモラルがないってゆーか、なんてゆーか、相手が結婚してても関係ないっていいますからね。むしろ、奥さんみたいな美人な女房がいるってわかったら、闘争心が燃え上がるっていうじゃないですか！」

それから大原さんは、自分も旦那の浮気でどれほど苦労したかをとうとうと語ってから、ようやくあたしのことを解放してくれた。そしてあたしは――頭痛に近いようなめまいを覚えながら、画廊の中へ戻ったのだった。

その日、マンションへ戻るまで、あたしのテンションがあまりにも低かったためだろう、レンは不審に思い、とうとう夕食時に爆発するような感じであたしにこう問いただした。

「俺さ、そういう蛇がじわじわカエルの首しめるような気配、大ッキライなんだよ！言いたいことがあるならハッキリ言えばいいだろ！！」

食卓の上に並んでいるのは、帰りにスーパーで買ってきた惣菜が主だ。しかも、味噌汁を作ったのはレン……あたしは自分が浮気されても仕方ない女なのではないかと思え、なんだかとても惨めだった。

「ねえ、レン。ミチルさんと結婚してる間、そういう関係になったのって、本当にあたしだけなの？」

この質問を聞くと、思っていたとおり、レンはさらに不機嫌な顔になった。

「くっだらない。おまえ、やっぱり画廊の仕事なんてやめれば？四六時中一緒にいてそれでもまだ浮気を疑うんなら、ずっといる意味なんてないだろうからな」

「違うのよ。そういう意味じゃなくて……掃除のおばさんの大原さんが変なこと言うから」

あたしは、茄子の天麩羅に手を伸ばしながら、なるべく何気ない風を装って言った。

「なんかね、あのビルに入ってるブティックとか、エステサロンの女の人だかが、レンのことを狙ってるんですって。だからその……あたしの言いたいこと、わかるでしょ？」

「ああ、確かにな」と、レンはごはんをかきこむように食べて、言った。「たま～に彼女たちはギャラリーの絵を見にくるよ。でも俺が結婚してるってちゃんと知ってる。もっとも、ミチルと離婚したことは知らないだろうから——サクラが二番目の女房だってことは、知らないかもな。なんにしても、おまえがいつも画廊に張りついてれば、なんの問題もないだろ。俺は携帯嫌いだから普通の女が自分の旦那を疑うようには、おまえに対してなんの秘密もないと思うけどな。サクラはこれまでに何回も「携帯くらい持ったら？」って言ったけど——そこまで疑い深いんなら、やっぱり俺はあんなもの、持ってなくて正解だってことなんじゃねーの？」

「うん、そうね」

なんか急に元気が出てきて、あたしは心からいい笑顔で笑った。

そして思った。これからは、もう少し夫にマシなものを食べてもらえるように、休みの日に料理を練習しようと……もっとも、レンにそのことを言ったら、「無駄な努力」と皮肉られただけだったけど。

大原さんから例の「夫が狙われている」という話を聞いてから、一週間後くらいのこと、前に一度会ったことのある美容室のポニーテール女が家賃を払いにきた。

彼女はあたしと目が合うなりハッとしたようだった——たぶんいつもどおり、レンが領収証を切ってくれるとばかり思っていただろうから、ちょっとがっかりした様子だった。

そしてあたしは家賃の金額をどこか華麗な筆跡で書きこむと、収入印紙を貼って<吾味>の割印を押した。さらにそれを優雅な手つきで切りとり、ポニーテール女に手渡す。

「夫狙いで、二度とこの場所へ来ないでね」という意味の笑顔を、にっこりと浮かべながら……

。

さらにその翌日、エステサロンのミニスカートををはいたエロい美女が画廊を訪れた。なんでも「自分は絵が好き」で、「水嶋さんにはいつも色々なことを教えてもらっている」とかなんとか。

あたしは、自分の左手薬指に輝く、結婚指輪をわざと見せつけるようにしながら彼女と画廊の中を歩きまわった。そして、あたしの仕種があまりに作為的だと流石に彼女も見抜いたのだろう、とうとう仕方ないといった調子で、こんなことを彼女は切りだしていた。

「この画廊で平日午後五時まで働いて、家に帰ったら旦那さんのお守りをする生活って、大変でしょうね」

——この時、あたしは心の中に稲妻が閃くような勝利の喜びを感じた！！

なんと、この女はわたしの夫が水嶋蓮だとは知らないのだ。たぶん、彼が画業に専念するために案内係の秘書のような女を雇ったとでも思っているのだろう……。

(クッククック。それならそれで、こちとら構やしないわよ)

あたしはエステサロンのエロ女が哀れになるあまり、わざわざ自分の身分を明かす気にすらならなかった。

そう……いつまでも、「もしかしたらいつかあるかもしれない瞬間」のことを胸に描いて、客の顔の角質除去とか、脂肪吸引とか永久脱毛の仕事をし続けているがいいと、あたしはそう思った。

しかもこの女、わたしが実際はあまり絵に関する知識がないと見抜き、自分の芸術を見抜く感性とか美術に関する審美眼のことなどを披露してから、ようやくギャラリーを立ち去っていた。たぶん、なるべく話を長引かせることで、レンが姿を現しはしないかと、ずっと待ち構えていたのかもしれない。

(あの女は確かに、大原さんが言ってたとおり<危険な女>だわ)と、あたしはそう直感した。

かつて、レンがあたしに「男っていうのはファンタジーに弱い」と言っていたことがあるけれど——この世にはドラマのようなシチュエーションを一瞬だけ演じるのが好きといったタイプの女が、確かに存在する。

あのエステサロンの女が絶対そうだとは言えないものの、わたしはあの女からそれに近い匂いを嗅ぎとっていた。

たとえば、レンが午後の五時にこの画廊を閉める直前にでもギャラリーへ滑りこみ、「あたし、水嶋さんのことが……っ！！」とか言いながら、彼の背中に抱きつくのだ。

あたしはエステサロンのエロ女がFカップくらいありそうなのを思いだし、心の中で「うっ！！」と舌をだした。そんなことになる前に、レンがあたしを選んでくれた幸運を神に感謝しつつ、小さなキッチンから塩をとりだすと、これでもかというくらい、外にまいておくことにする。

二度とレンにどんな女も近づくな！！という意味の願いをこめて……。

そして、結婚後一年ほどしてあたしが妊娠した時——レンは画廊の仕事は自分に任せて、家で安静にしてろとあたしに言った。でもあたしは上記のような事情があったため、ガロの壁に爪を立てても、ここから出ていくつもりはなかった。

あたしはてっきりレンが「じゃあ勝手にしろ」とでも言うかと思ったけれど、彼はどこか微妙な顔つきをして、黙りこくったままだった。そして「あんまり無理するな」と優しいことさえ言い、それどころか何かにつけてあたしのことを気遣い、労わってくれるのである。

「ねえ、レン。もしかしてあんた、あたしに隠れて浮気してるんじゃないでしょうね？」

もちろん、彼がそんなことはしていないとあたしは重々わかっている——でも、レンの優しさは不自然すぎた。何故とって、あたしが妊娠したと知って以来、彼は必ずといってもいいほど五時ぴったりに絵を描くのをやめ、さらには健康のバランスを考えた食事というのを作ってくれ

るのだ。

しかも、あたしが手伝おうとすると、「いいから、おまえは座ってろ」なんていう。

確かにあたしは嬉しかったし、幸せなあまり卒倒しそうなほどでもあったけど……ここまできると、流石に＜何か裏があるのでは？＞と疑いたくもなろうというものだ。

「あーあ、またその話か」

レンはあたしが＜浮気＞の二文字を持ちだすと、決まってそう言って溜息を着く。

「まあ、疑いたければ死ぬまでそうやって被害妄想的に疑ってろ。でもまあ、確かに俺がおまえに優しくするのは……良心の呵責が関係しているとは言えるかもな」

「どういうこと？」

肉体上は浮気してないが、心の中で浮気をしたとか言われたら、あたしは黙ってられないだろう——そう思いつつ、あたしは詮索好きな猫のように、全身のアンテナをピンと張り巡らせた。

「えーと、まあ、このことを説明するのは難しいんだけどさ」

レンは肉汁したたるステーキを焼き、それを皿にのっけると、野菜をてんこもりにして、あたしの前に置いた。「今日は絶対お肉がいいによ〜！！」とスーパーでねだったのだ。彼はそのかわり「野菜もたくさん食べよ」と言い、川上家で毎食あがるサラダなみに野菜をたくさん切り刻んでいた。

「とってもジューシー、アイラブお肉♪」

そう言ってあたしは、いただきまーすも言わずに、早速軟らかいお肉をナイフで切り、フォークでそれを口元へ運んだ。毎日思うことだけど、レンは男のくせに本当に料理がうまい。

「それで、レンの良心が呵責してる理由ってなに？」

「まあ、つまりさ……おまえ、ヒルコの神って知ってる？」

「ヒルコの神？」と言って、あたしは首をかなり無理な位置まで傾けた。「なんだっけ？ジブリアニメの『もののけ姫』に、そんなのがいたよーな……」

「おまえが言いたいので、もしかしてコダマじゃねーか？」

「あ、そうかも！！でもなんとなくヒルコってあたしの中じゃそんなイメージよ」

レンは大根のお味噌汁に口をつけると、ジューシーな軟らかお肉にナイフを入れて、味付けバッチリなそれをもぐもぐと食べている。

「そのヒルコっていうのは、古事記でイザナミとイザナギの間に最初に生まれた子なんだ。でも母親の手違いというか、まあそんなことがあって、不具の子として生まれてきてしまう。俺が最初にそれを知ったのが大体十歳くらいの頃かな。その後俺は何年にも渡って、そのヒルコの神ってのを心の中でいじめ続けた……手足がなくて、抵抗できないそいつのことを、何度も何度もナイフで刺して、ヒルコがびぎゃーびぎゃーと痛みに泣き叫ぶのを聞き、喜ぶわけだ。で、暫くしてまたやって来ると、ヒルコの怪我っていうのは全部癒えてるんだけど、俺は再びヒルコの奴をいじめるってことを半永久的に繰り返すわけ」

「うっわー！！意外にレンって陰湿なガキだったのね。小さい頃の写真見た時には、天使みたいって思ったけど」

「放っとけよ」とレンは言って、野菜にドレッシングをかけて食べている。「だから、その……」



俺自身もなんでそんなことしてたのかとか、今もよくわからないんだけど……なんかサクラが妊娠したって聞いてから、ずっと忘れてたヒルコのことを思いだしてさ。俺に対する罰として、サクラの身に何かあったらと思って……」

あたしは、あんまりおかしくて、またレンがあまりに可愛いあまり——思わずプツと吹きだした瞬間、ごはんの粒がレンの皿まで長距離で飛んだ。

「きったねーな。ま、笑いたきゃ笑えよ。なんにしても、俺がもしおまえに優しいとしたら、そういう理由からってことだ。先天的に何かの異常があったりしたらどうしようっていうか、その他色々、サクラが車に轢かれそうになって流産とか、すごく心配なわけ。わかったら、浮気がどーのなんて今後一切疑うなよ。いいか？」

「はあ〜い。レン先生、わかりました〜！！」

あたしはそうおどけたように答えたけれど、実際レンがあのお母さんから受けた打撃というのは、そのくらい大きなものだったんだろうと思う。

正直いって、自分の家が中途半端に個人主義な家庭だったため、レンの家のように徹底した個人主義を貫いている環境のほうが、子供というのは突出した芸術家として育ちうるのだろうか……と、あたしは思わないでもない。

でも、その後レンの心配をよそに元気な男の子が生まれて以来、あたしの心境というのは親として少し複雑だった。つまり、レンのように芸術的才能を持っているとか、あるいは彼の祖父母のように作詞家・作曲家としての才能に恵まれていて欲しいと思う反面——人間というのは結局、金メッキ50%、純金50%くらいの感じで生きていけるのが、一番幸せなのではないだろうか、そんな気もして。

ちなみにわたしは結婚・出産を経験した今も、脚本家として活動している。

何故といえば、夫の財産に頼るようになってしまえば、レンとの<対等な関係>というのが崩れてしまう気がして……実際、臨月になるまでずっと、あたしはとあるホラー映画の脚本を書いていた。

たぶんその内容を知ったら、レンはお腹の子によくないと思ったに違いない。

でもあたしはこの画廊で働くようになってから、ほんの少しだけ不思議な体験をしていた。

もちろんそれは、本当にどうということもないような、ちょっとした不思議ではあるのだけれど——レンがアトリエのドアを閉めて閉じこもりきりになってしまうと、まるで画廊にいるのはわたしひとりだけといった感じになる。

絵を描いている時のレンの集中力というのは相当すごいもので、彼はトイレなどへいく際にわたしの顔を見ても、まるで透明人間のように誰もいない振りをしている……あたしはそのことがなんとなく寂しくて、また彼がアトリエにいる間、あまりにその室内がしーんとしているように思えて、ドアのところに耳をつけると、中の物音を聞こうとしたことが何度もある。

すると、何人かの人間が囁き声でしゃべっているというか、何かそんな声のしたことが数回あった。そして、あたしはそのたびに「レン！！」と叫んでドアを開けるのだけれど、そこでは彼ひとりだけがキャンバスに向かっており、やはり他に誰もいはしないのだ。

それから、こんなこともあった。

画廊の中にはいつも、クラシック音楽が流れているのだけれど、二階からそれとはまた別の旋律が聞こえてきたような気がして――間違いないと確信の思いをもってレンの絵の飾られたギャラリーを覗くのと同時に、パチンと電気をつけた途端にピアノの演奏が途切れるのだ。

あたしはこうしたこと、またレンの奴が何を思ったのか、あたしに突然キスした日のことなどを思いだして、ホラー映画の着想を得たというわけだった。ちなみにこのホラー映画、日本の映画としてはなかなかヒットして、その後2と3が作られることになった（わたしはそのうち、どちらの脚本にも関わっていないけれど）。

そしてわたしは本当に何気なく、オーナーの吾味さんにこう聞いてみることにしたのだ。

「この画廊には何かいるんじゃないか」と。「最初、わたしはそれを自殺した前オーナーの吾味さんの叔父さんじゃないかと思ったけれど、その前からたぶん何かそうした幽霊的存在がいて――そのせいで吾味さんの叔父さんは亡くなったのではないかと……」。

「う～ん、どうだろうねえ」

画廊の様子を極たまに見にくる吾味さんは、カウンターのところで腕組みをして言った。

「叔父は、その存在をミューズと呼んでましたよ。作品のひとつひとつにそうした芸術の精のようなものが住んでいるのだとね。しかも、自分にはそれが見えるとも僕に言っていたな……だから僕は――その、こんなことを言ったら笑われそうだけど、叔父が今は「そちらの世界」へ行ってるような気がするんだな。なんとなく」

「えっと、そっちの世界って？」

この頃あたしは妊娠六ヶ月で、その時お腹の中の子が蹴ったのを感じた。

「つまり、キリスト教の教えでは、人間は死んだら天国か地獄へ行くってことになってるわけですよ。でも一般に自殺した人間は天国へ行くのを阻まれるっていうのでしょうか？実際にはそんなこと、聖書のどこにも書いてなくても――伝統的な教理としては、そういうことになっているらしい。そして、その理論でいくとしたら、叔父の魂は今どこにいて何をしているのかってことになる。僕は、ミズシマさんのことを見ていて思うんだけど……彼は絵を描いている間、完全に「精神だけあっちへ行ってる」人みたいに思えるんですよ。で、叔父は死んだあと、そういう芸術家にインスピレーションを与える第三の世界みたいなところへいったんじゃないかって――生前叔父が語っていたことも合わせて、時々思うことがあるんですよ。もちろん、馬鹿みたいな気慰めかもしれないけどね」

お腹の中の子がまた蹴ってきたので、あたしがお腹を押さえていると、吾味さんが全然別のことに話題を変えた。

「そういえば、そろそろ六ヶ月くらいだっけ？もうこっちのギャラリーの仕事は一時休業したほうがいいんじゃないかな」

でもあたしが吾味さんのこの親切な申し出に対して、「エステサロンのエロ女」とか、その他ブティックにいる従業員もレンのことを意味ありげに見ているというのと、彼はあたしが被害妄想を深める気の毒な妊婦に思えたのだろう、突然こんなことを言いだした。

「じゃあ、今日からこのビルの七階に住むといいよ。家賃のほうはハイアンと同じく、ただで構わないから。それに、こう見えて僕も一応気を使って――他のフロアの人たちの耳に、ミズシマさんが結婚してることとか、奥さんは美人だなんていうことは、何かの折に触れてまわったん

だけどね。まあ、そうすると「一夜限りでもいいから抱かれない」って女性に思わせるような何か、ミズシマさんにはあるってことになるのかなあ」

その昔、あたしは一夜限りの関係というのは、恋愛のうちに入らないと豪語していたことがある。

でもやっぱり、レンだけは別だ。

エステサロンのエロ女とか、ブティックのロリコン顔の若い小娘だのが、気の利いた小洒落たバーなんかだと例えば一緒にいて……「ただ飲んでただけで、何もしていないだろ？」とレンが言っているところを想像しただけでも、腹が立って仕方がない。

これは、わたしの嫉妬心が異常なのか、それともレンの持つ存在感自体が異常というか、何か特殊なものだということなんだろうか？あたしにはよくわからない。

なんにしても、こういった経緯により、あたしたちは吾味ビルの7Fに住むことになった。そしてだんだんにマンションに帰る時間が減っていくと、いっそのこと自分たちで費用をだして住みやすいよう改装して住むことにしようということになったのだ。

もちろん、その段になると、流石に「家賃は払います」ということをあたしとレンは吾味さんに申し出た。

すると彼は「そうだなあ。もしいつか、ハワイアンのババアが毎月テナント料を払うようになったら、ミズシマさんたちにも家賃を払ってもらおうかな」と笑っていたっけ。

そして最後にこう付け加えた。

「たぶんそんな日、二度と来ないだろうと僕は思ってるけどね」

そういったわけで、あたしとレンと息子の三人は今、吾味ビルの7Fに住んでいる。

もちろん、子供がもう少し大きくなったら、やはりマンションのほうが暮らしやすいということになるとは思う……そして実際子供が生まれてみると、あたしはまるで憑き物が落ちたように、レンの浮気のことにはまるで考えなくなった。

毎日赤ん坊の世話を見るのが大変で、そんなことを考える余裕すらないから、というのも理由のひとつかもしれない。

でもそれ以上に――あたしにはその理由がよくわからないのだけれど、レンにとってあたしは彼の子供を生んだ「特別な女」であり、あたし以外の女はその他大勢といった感じであるらしいことに、あたしは出産後に気づいていた。

正直いって、出産したことで間違いなくあたしは体のラインが崩れたし（そのために吾味ビル五階にあるエステに行かなければならなかった）、なんていうか、赤ん坊の世話を焼いているあたしというのは、間違いなく所帯じみていると自分でもそう強く自覚している。

たぶん、男はそういう妻の姿を見て、他の若い女に目移りするのだろう……とすら思うのだけれど、どうもレンの奴は違うらしい。

うまく言えないけれど、「その感じ」がどうしてなのかがあたしには不思議で、レンにそのことを聞いてみたことがある。

すると彼は、マーラーの交響曲をあたしに聴けと言った。

正直、「はあ？」といった感じ。そしてレンの奴は息子の葵をあやししながら、歌詞カードをわたしに手渡してこう言ったのだ。

「それを読んでもわからなければ、いつまでも永遠にわからないままでいい」と。

でもやっぱりあたしにはよくわからなくて、その後もしつこくそのことを彼に聞き続けた。

「そうだな。もし俺が今後、『ロマンス通り113番地』を見るようなことがあったら——その理由を教えてやるよ」

というのがレンの答え。

「それってなんか、ずるーい！！」とあたしは言ったけれど、なんにしてもレンの奴は結構いい父親になりそうだと思う。

正直、レンがアトリエに籠もっている時というのは、あたしには決して突き破れない冷たい壁のようなものを、彼に対してよく感じるがあった。そしてレンがこれまでつきあってきた女性たちはみな、肉体関係を持ってその冷たい壁を破れるほどには親密になれないというある段階を経験しているのではないかとあたしは思っている。

たぶん、あたしのようにレンに対してなんでも言葉で説明しろと迫れるような女というのは、今までにいなかったのではないだろうか（唯一ナツミとかいう女は別として）。

でも、子供が出来てから、また実際に生まれてからのレンというのは、いい意味でその壁がなくなったような気がしていた。

それがどうしてなのかというのは、眠くなるマーラーの交響曲なんて何度聴いてもあたしにはわからなかったけれど……ただひとつわかっているのは、それがどうも「いいことらしい」と感じるという、それだけだろうか。

なんにしても、今あたしは——というか、あたしとレンと息子の葵は、「ゴミビル」とかいう場所で親子三人、とても仲良く暮らしている……そして、あたしはいつも思う。自分にとっての人生の転換点はどこにあったかもし誰かに訊かれたとしたら、迷うことなく「ベルビュー荘で暮らすことになってから」と答えるだろうと。

来年の春もまた、ベルビュー荘では花見大会があるので、あたしはそこにレンと息子の葵と一緒に連れて参加するつもりだ。そしてサクラの花を背景にした写真が、息子の成長とともに一枚一枚年ごとに増えていくだろう……昔は、そうやって年をとって「普通の人」のようになっていくのが、なんとなく怖かったけれど、今は「普通に幸せな生活」が一番大切なものだと思う自分がある。

「ねえ、レン。この七階の部屋から見える景色って、めっちゃベルビューだと思わない？」

「めっちゃベルビューね」と、レンが子供を抱っこしたままで笑っている。「そうだな。なんだかいつの間にか、この<ゴミビル>がベルビュー荘みたいな場所に思えてきたっていうのは、確かにサクラの言うとおりがちな」

それからあたしは、七階のベランダで葵のことを間に挟んだまま、レンとキスをした。

この大切なかけがえのない一瞬よ、いつまでもという願いをこめて……。

終わり

ベルビュー荘のべらぼうに愉快的奴ら 2

<http://p.booklog.jp/book/30646>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30646>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30646>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.